行 田 市

北大竹遺跡

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業 埋蔵文化財発掘調査報告 (第1分冊)

2022

埼 玉 県 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 子持勾玉・勾玉形集合



1 金属製品集合



1 第1号遺物集中 須恵器甕出土状況



2 第1号遺物集中 須恵器甕集合



1 第2号遺物集中 須恵器甕等出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器甕集合



1 第2号遺物集中 須恵器脚付長頸壺出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器脚付長頸壺集合



1 第2号遺物集中遺物出土状況



2 第2号遺物集中 須恵器集合



1 第2号遺物集中 土器集合



2 第2号遺物集中 土師器高坏集合



1 第3号遺物集中遺物出土状況



2 第3号遺物集中 須恵器甕集合

首都圏中央連絡自動車道の埼玉県・茨城県区間の全線開通により、県内を走る 関越自動車道や東北自動車道を含め、東京から放射状に延びる東名高速道路から 東関東自動車道までの区間が結ばれました。この開通効果により、各高速道路インターチェンジ周辺への企業立地のニーズが高まっています。そのため、埼玉県 では、平成29年から「埼玉県5か年計画」に基づき「第3次田園都市産業ゾーン 基本方針」を定め、圏央道以北地域においても、産業基盤づくりを積極的に進め ています。東北自動車道羽生インターチェンジから約9kmに位置する行田富士見 工業団地拡張地区産業団地整備事業もその一環です。

本事業地のある行田市内には、東日本有数の大規模古墳群として有名な特別史 跡埼玉古墳群をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、 発掘調査を行った北大竹遺跡もそのひとつです。発掘調査は同事業に伴う事前調 査であり、埼玉県企業局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

北大竹遺跡は、これまでにも行田富士見工業団地の開発に伴う事前調査で多くの成果が挙がっていた遺跡です。今回の調査では、古墳時代後期に執り行われた祭祀に関わる遺物が大量に出土し、埼玉古墳群との関わりなど、この地域の歴史を紐解くための大きな成果を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに 普及・活用の資料として、また、学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用 していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の調整に御尽力いただきました埼玉県 企業局をはじめ、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、行田市教育委員会並び に地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団理 事 長 依 田 英 樹

例 言

- 1 本書は行田市若小玉に所在する、北大竹遺跡 第18次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
 北大竹遺跡(No.68-048)第18次調査行田市大字若小玉字枳1900-1他令和元年10月14日付け教文資第2-31号
- 3 発掘調査は、行田富士見工業団地拡張地区産 業団地整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のた めの事前調査である。埼玉県教育局市町村支援 部文化資源課が調整し、埼玉県企業局地域整備 課の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化 財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。 発掘調査事業(令和元年度・令和2年度) 「元行田-5号北大竹遺跡埋蔵文化財発掘調査 業務委託

整理・報告書作成事業(令和2年度・令和3年度) 「2行田-8号北大竹遺跡報告書作成業務委託」 「3行田-11号北大竹遺跡報告書作成その2業 務委託

5 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3に 示した組織により実施した。発掘調査期間と担 当者は以下のとおりである。

発掘調査は、令和元年10月15日から令和2年 10月31日まで実施し、令和元年10月15日から12 月31日まで大谷徹、令和元年10月15日から令和 2年9月30日まで渡邊理伊知と赤熊浩一、令和 元年10月15日から令和2年8月31日まで砂生智 江、令和2年1月1日から3月31日まで鈴木知 怜、令和2年4月1日から8月31日まで桑原安 須美、令和2年10月1日から10月31日を栗岡潤 が担当した。

整理報告書作成事業は、令和2年10月1日から令和4年3月29日まで実施し、令和2年10月1日から令和4年3月29日まで渡邊が、令和2年10月1日から令和3年9月30日まで赤熊が担当した。

- 6 報告書は、令和4年3月23日に埼玉県埋蔵文 化財調査事業団報告書第477集として印刷・刊 行した。
- 7 発掘調査における基準点測量は、令和元年度 は株式会社ソレイユ、令和2年度は中央航業株 式会社に委託した。
- 8 空中写真撮影は、令和元年度は中央航業株式 会社、令和2年度はシン技術コンサルに委託し た。
- 9 自然科学分析は、令和2年度にパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 10 口絵の遺物写真の撮影は令和3年度に小川忠 博氏に委託した。
- 11 環頭大刀柄頭のX線3D測定は、埼玉県埋蔵 文化財調査事業団研究助成Bにより、東京都埋 蔵文化財センターの長佐古慎也氏、佐藤悠登氏 の協力を得て実施した。
- 12 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は渡邊が行った。
- 13 出土品の整理・図版作成は渡邊、赤熊が行った

土器については福田聖、大谷徹、砂生智江、 滝澤誠、金属製品については瀧瀬芳之、堀内紀 明、井上真帆、古間果那子の協力を得た。

- 14 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村 支援部文化資源課、VIを赤熊、その他を渡邊が 行った。
- 15 本書の編集は渡邊が行った。
- 16 本書にかかる諸資料は令和4年4月以降、埼 玉県教育委員会が管理・保管する。
- 17 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、関係機関から御教示・御協力を賜りました。記して感謝いたします。(敬称略五十音順)池上 悟 井上尚明 ト部行弘 酒井清治 坂本和俊 佐藤悠登 篠原祐一 菅谷浩之 椙山林継 瀧音 大 瀧音能之 橘 泉 續伸一郎 長佐古慎也 西井幸雄 久永雅弘 藤野一之

行田市教育委員会 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 埼玉県立さきたま史跡の博物館 堺市博物館 堺市文化観光局文化部文化財課 奈良県立橿原考古学研究所

凡例

1 北大竹遺跡第18次調査におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″) に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

A区のAU -24グリッド北西杭の座標は、X=16330.000m、Y=-30560.000m。北緯36°08′48.1304″、東経139°29′37.4310″、標高は遺構の検出面で15.325m、B区のS-23グリッド北西より西へ1m地点の杭の座標は、X=16610.000m、Y=-30571.000m。北緯36°08′57.2141″、東経139°29′36.9518″、標高は現地表面で17.688m、C区のP-7グリッド北西杭の座標は、X=16640.000m、Y=-30730.000m。北緯36°08′58.1694″、東経139°29′30.5866″、標高は現地表面で17.428mである。

- 2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直 角座標に基づき、10×10mの範囲を基本(1 グ リッド)とし、調査区全体をカバーする方眼を 組んだ。
- 3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C~Z・AA・AB…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。
- 4 遺物集中の3地点及びL-16グリッドについては、1m四方の小グリッドを設定し、分割図に掲載遺物の出土小グリッドを記した。小グリッド名称は(a-1)のようにアルファベットを小文字表記とした。
- 5 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略 号は、以下のとおりである。

SB…掘立柱建物跡 SD…溝跡

SE…井戸跡 SJ…竪穴住居跡

SK···十塘 SH···遺物集中(祭祀遺構)

SX…性格不明遺構·鍛冶関連遺構

P…ピット・柱穴

- 6 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高(単位m)を表す。
- 7 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:400 1:800

遺構区割図 1:100 1:200

遺構図 1:60 1:30 微細図 1:30

土器類実測図・拓影図 1:4 1:6

土製品 1:1 1:2 1:4

金属製品 1:3 石製品 1:3

子持勾玉・石製模造品 1:2 1:1

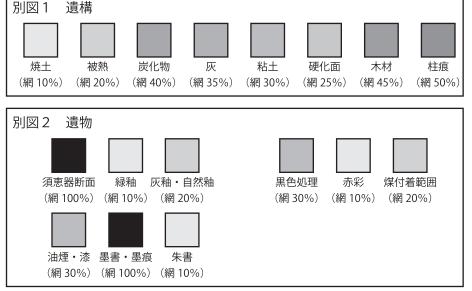
臼玉 2:3 ガラス玉 1:1

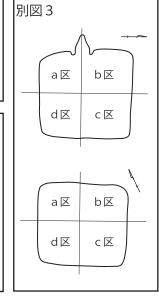
- 8 遺構図の表記方法は、別図1のとおりである。
- 9 遺物実測図のトーン表記方法は、別図2のとおりである。
- 10 完形で口径が小さく、内面を測定出来なかった遺物は厚さを測り、破線で推定線を記した。
- 11 遺構一覧表の表記は、以下のとおりである。
 - ・長さ・幅・深さ・短径・長径はm単位である。
- 12 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。
 - ・大きさはcm・重さはg単位である。
 - ・() 内の数値は推定値を示す。
 - ・[]内の数値は残存値を示す。
 - ・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴 的なものを記号で示した。

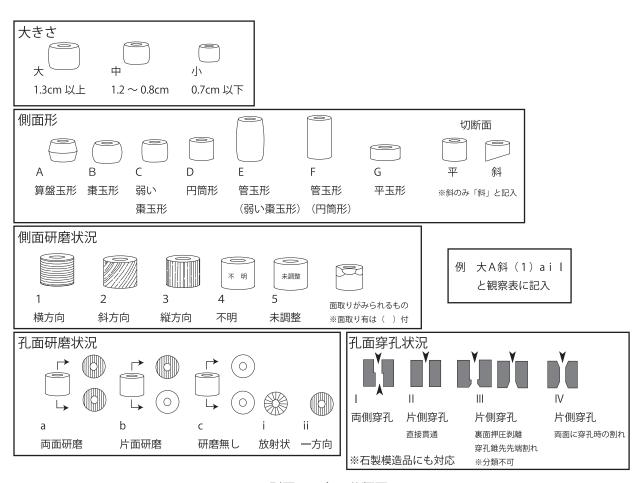
A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石

- E:石英 F:軽石 G:砂粒子 H:赤色 粒子 I:白色粒子 J:針状物質 K:黒 色粒子 L:その他
- ・残存率は、器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
- ・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて 示した。
- ・色調は『新版標準土色帖』に従った。
- ・備考には、注記No.・生産地・年代・所見等を 示した。備考にあるNo.は出土地点の記録No.で ある。
- ・ 土器・ 陶磁器の 生産地については、 器形、 技法、 胎土によって 判断した。
- ・竪穴住居跡から出土した遺物の出土地点は別図3の通りに4分割で記載した。
- ・遺物集中より出土した遺物の観察表には出土 地点の小グリッド、標高値を記した。
- ・ 臼玉の観察表には別図4の分類を記した。
- 13 断面図と俯瞰図及び拓本の配置関係は、縄 文土器の俯瞰図及び拓本は、断面図に対して向 かって左側に俯瞰図及び拓本を配置した。それ 以外の土器は、断面図に対して向かって右側に 外面の俯瞰図及び拓本、左側に内面の俯瞰図及 び拓本を配置した。
- 14 遺物の分類及び編年は以下のとおりである。
 - ・須恵器の編年は田辺昭三による編年を用いた

- (田辺1966・1981、近つ飛鳥博物館2006)。
- ・器種分類の一部は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(以下、奈文研)による分類を用いた(奈文研2017)。
- ・土師器の編年は、行田市内の遺跡で同時期の 土器編年を設定している『築道下遺跡Ⅲ』埼 玉県埋蔵文化財調査事業団第245集(埼玉県 埋蔵文化財調査事業団2000)を参考とした。
- ・子持勾玉の分類は、腹部子勾玉の形状から大別3形式小別15形式に分類した。詳細は「IX調査のまとめ」を参照。
- ・石製模造品の分類は大別して勾玉形・剣形・ 斧形・有孔円板・不明・未製品に分類した。
- ・臼玉の分類は篠原祐一の分類(篠原1995)及 び『金井東裏遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事 業団調査報告書第652集(群馬県埋蔵文化財 調査事業団2019)の分類を元に北大竹遺跡で の実態に即して分類を行った(別図4)。
- 15 本書に使用した地形図は、国土地理院発行 1/25,000地形図(行田・鴻巣・羽生)、行田市 1/2,500都市計画図を編集・使用した。
- 16 本書に掲載した遺構番号は、A区、B区、C 区ごとにそれぞれ1から付した。また、発掘調 査時に付した番号を一部振り替えた。対応関係 は別表1に示した。







別図4 臼玉分類図

別表 1 北大竹遺跡第18次遺構名変更一覧表

旧	新	旧	新	旧	新
A⊠SJ20P3	A⊠AR-22P3	A⊠AS-23P9	A⊠AS-23P11	C⊠SJ19	C⊠SD6
A区SE12	A⊠SK20	A⊠AS-23P12	A⊠AS-22P1	C ⊠K-10P2	C⊠K-11P8
A⊠SE18	A⊠SE18	A⊠AU-24P18	A ⊠AU-24P18	C⊠K-10P5	C ⊠SE8
A区SE18	A⊠SE19	A⊠AU-24P18	A ⊠AU-24P19	C ⊠K-10P13	C区柱穴列2P1
A区SD4	A区SD4	A⊠AU-25P11	A⊠AU-25P11	C⊠K-11P7	C区J-11P6
A区SD4	A区SD7	A⊠AU-25P11	A区AU-25P12	C⊠L-9P1	C区柱穴列2P5
A区SD6P3	A⊠AS-23P12	B⊠SJ10P1	B区SJ2P3	C⊠L-9P3	C区柱穴列1P5
A区SK1	A区SJ5	B区SJ14P3	B区Q-20P7	C⊠L-9P4	C区柱穴列2P6
A区SK3	A区SE7	B⊠SJ14P5	B区Q-21P1	C⊠L-9P15	C区L-10P10
A⊠SK4	A⊠SE2	B⊠SB1P5	B区SJ8P3	C⊠L-10P1	C区柱穴列1P1
A区SK10	A区SJ13P2	B⊠SE2	B区R-21P1	C⊠L-10P2	C区柱穴列1P2
A⊠SK11	A⊠SK11	B⊠SK7	B区SJ18貯蔵穴	C ⊠L-10P3	C区柱穴列1P3
A区SK11	A区SK19	B区SX1·第4号遺物集中	B区L-16グリッド	C 区L-10P4	C区柱穴列1P4
A区SK14	A区SJ16貯蔵穴	B⊠SX2	B区SJ30·B区SD7	C ⊠L-10P5	C区柱穴列2P4
A区SK15	A⊠SX1SK2	B区第2号遺物集中P1	B区K-15P1	C 区L-10P6	C区柱穴列2P3
A⊠AR-23P5	A⊠AR-22P1	B⊠M-17P1	B区M-17P1	C 区L-10P7	C区柱穴列2P2
A⊠AR-23P8	A⊠AR-22P2	B⊠M-17P1	B⊠M-17P2	C区O-6P1	C ⊠0-6P1
A⊠AS-23P7	A⊠AT-23P12	B ⊠R-21P1	B区R-21P1	C区O-6P1	C⊠SJ10P1
A⊠AS-23P8	A⊠AS-23P10	B ⊠R-21P1	B区R-21P2		
A⊠AS-23P9	A⊠AS-23P9	C⊠SJ11P1	C⊠N-7P6		

目 次

(第1分冊)	
巻頭図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要・・・・・・・1	2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物・・・・ 104
1 発掘調査に至る経過・・・・・・・1	(1) 竪穴住居跡 · · · · · · 104
2 発掘調査・報告書作成の経過・・・・・2	(2) 井戸跡 135
(1) 発掘調査2	(3) 溝跡
(2) 整理・報告書の作成2	3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物・・・・ 145
3 発掘調査・報告書作成の組織・・・・・・3	(1) 竪穴住居跡 · · · · · · · 145
Ⅱ 遺跡の立地と環境・・・・・・・・4	(2) 掘立柱建物跡 152
1 地理的環境4	(3) 井戸跡 152
2 歴史的環境5	(4) 溝跡
Ⅲ 遺跡の概要・・・・・・10	(5) 土壙
1 これまでの調査概要・・・・・・10	(6)ピット・グリッド検出面出土遺物・・ 159
2 第18次調査の概要・・・・・・12	VI C区の調査・・・・・・ 161
IV A区の調査・・・・・・14	1 C区の概要・・・・・ 161
1 A区の概要······14	2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物・・・・ 165
2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物・・・・・19	(1) 竪穴住居跡 · · · · · 165
(1) 竪穴住居跡19	(2) 井戸跡 184
(2) 井戸跡53	(3) 溝跡
(3) 溝跡56	(4) 土壙 · · · · · 189
(4) 土壙61	3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物・・・・ 191
3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物・・・・・68	(1) 竪穴住居跡 · · · · · 191
(1) 竪穴住居跡68	(2) 掘立柱建物跡
(2) 井戸跡80	(3) 柱穴列 ····· 193
(3) 溝跡83	(4) 溝跡
(4) 土壙88	(5)ピット・グリッド検出面出土遺物・・ 195

(第2分冊)

Ⅷ 遺物集中の調査・・・・・・ 199

1 遺物集中の概要・・・・・・・・・・・・・199

2 遺物集中の遺構と遺物・・・・・・・ 212(1) 第1号遺物集中・・・・・・ 212

(5) 鍛冶関連遺構群 ………88

(6) 旧河川跡 ………91(7) ピット・グリッド検出面出土遺物 …94

V B区の調査······99

1 B区の概要······99

(2)	第2号遺物集中 · · · · · · 266	4 テ	フラ分析・・・・・・・・ 463
(3)	第3号遺物集中 · · · · · · 395	IX 調査	のまとめ・・・・・・ 468
3 そ	の他・・・・・・ 427	1 発	掘調査の成果・・・・・・・・ 468
(1)	L-16グリッド · · · · · 427	2 須	恵器について・・・・・・ 468
(2)	遺物集中関連遺構 · · · · · · · 445	3 子	持勾玉について・・・・・・・ 473
(3)	非掲載遺物・土器内容物 ・・・・・・ 454	4 金	属製品について・・・・・・・477
VIII 自然	科学分析・・・・・・・458	5 北	大竹遺跡の性格・・・・・・・ 478
1 蛍	光X線分析458	6 北	大竹遺跡の周辺・・・・・・・ 483
2 須	恵器坏の内容物・・・・・・・・ 460	写真図版	
3 放	射性炭素年代測定・・・・・・・・ 463	付図 北	大竹遺跡第18次 遺物集中分布図
	挿図目	目次	
(第1分 [冊)	第23図	A区第8号竪穴住居跡出土遺物 ····34
第1図	埼玉県の地形 ・・・・・・・・・4	第24図	A区第10号竪穴住居跡・出土遺物 ・・35
第2図	周辺の遺跡分布図 ・・・・・・・8	第25図	A区第11号竪穴住居跡 · · · · · 37
第3図	遺跡調査地点位置図 ・・・・・・11	第26図	A区第11号竪穴住居跡出土遺物 ····38
第4図	A・B・C区位置図 ·····13	第27図	A区第13号竪穴住居跡 · · · · · 39
第5図	A区基本土層土層説明 · · · · · · · · 14	第28図	A区第13号竪穴住居跡出土遺物 ····40
第6図	A区基本土層東壁・南壁断面図 ····15	第29図	A区第15号竪穴住居跡・出土遺物 ‥41
第7図	北大竹遺跡第18次A区全体図 ·····16	第30図	A区第16号竪穴住居跡 · · · · · 42
第8図	北大竹遺跡第18次A区区割図(1)··17	第31図	A区第16号竪穴住居跡出土遺物 ····43
第9図	北大竹遺跡第18次A区区割図(2)··18	第32図	A区第17号竪穴住居跡 · · · · · · 44
第10図	A区第1号竪穴住居跡 ·····20	第33図	A区第17号竪穴住居跡出土遺物 ····44
第11図	A区第1号竪穴住居跡出土遺物 ····21	第34図	A区第18号竪穴住居跡 · · · · · · 45
第12図	A区第4号竪穴住居跡 ·····22	第35図	A区第18号竪穴住居跡出土遺物 ····45
第13図	A区第4号竪穴住居跡カマド・	第36図	A区第19号竪穴住居跡 · · · · · · 47
	出土遺物 · · · · · · 23	第37図	A区第19号竪穴住居跡遺物出土状況··48
第14図	A区第5号竪穴住居跡 ·····25	第38図	A区第19号竪穴住居跡出土遺物(1) · · 48
第15図	A区第5号竪穴住居跡遺物出土状況··26	第39図	A区第19号竪穴住居跡出土遺物(2) · · 49
第16図	A区第5号竪穴住居跡出土遺物 ····26	第40図	A区第20号竪穴住居跡 · · · · · · 50
第17図	A区第6・9号竪穴住居跡 ·····28	第41図	A区第20号竪穴住居跡出土遺物 ····50
第18図	A区第6号竪穴住居跡出土遺物 ····29	第42図	A区第21・22号竪穴住居跡 ······51
第19図	A区第7号竪穴住居跡 · · · · · · 31	第43図	A区第22号竪穴住居跡出土遺物 ····52
第20図	A区第7号竪穴住居跡出土遺物 ····32	第44図	A区井戸跡 (1) · · · · · · 54
第21図	A区第8号竪穴住居跡 · · · · · · 33	第45図	A区井戸跡 (2) · · · · · · · 55
第22図	A区第8号竪穴住居跡遺物出土状況··34	第46図	A区井戸跡出土遺物 · · · · · · 56

第47図	A区第3a・b号溝跡 ·····57	第80図	A区第1~4号河川トレンチ・
第48図	A区第3a・b号溝跡出土遺物 ・・・・58		出土遺物 (2)93
第49図	A区第4号溝跡 · · · · · · · 59	第81図	A区グリッド・調査区一括・
第50図	A区第4号溝跡出土遺物 · · · · · · · 59		表採出土遺物 (1)96
第51図	A区第6・7号溝跡 · · · · · · · 60	第82図	A区グリッド・調査区一括・
第52図	A区土壙 (1)·····62		表採出土遺物 (2)97
第53図	A区土壙 (2)······63	第83図	B区基本土層 · · · · · · · · 99
第54図	A区土壙 (3)······64	第84図	北大竹遺跡第18次B区全体図 · · · · 100
第55図	A区土壙出土遺物 (1)·····65	第85図	北大竹遺跡第18次B区区割図(1)·· 101
第56図	A区土壙出土遺物 (2)·····66	第86図	北大竹遺跡第18次B区区割図(2)·· 102
第57図	A区第2号竪穴住居跡 · · · · · · · 69	第87図	北大竹遺跡第18次B区区割図(3)·· 103
第58図	A区第2号竪穴住居跡カマド ・・・・・70	第88図	B区第1・24号竪穴住居跡 · · · · · 104
第59図	A区第2号竪穴住居跡・	第89図	B区第1号竪穴住居跡・
	カマド遺物出土状況 ・・・・・・71		カマド遺物出土状況 105
第60図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(1) · · 72	第90図	B区第1号竪穴住居跡出土遺物 · · 106
第61図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(2) · · 73	第91図	B区第2号竪穴住居跡 · · · · · · 108
第62図	A区第2号竪穴住居跡出土遺物(3) · · 74	第92図	B区第2号竪穴住居跡出土遺物 · · 109
第63図	A区第3号竪穴住居跡 · · · · · · · 77	第93図	B区第5号竪穴住居跡 ····· 111
第64図	A区第3号竪穴住居跡・	第94図	B区第5号竪穴住居跡出土遺物 · · 112
	カマド遺物出土状況 ・・・・・・78	第95図	B区第6号竪穴住居跡 ····· 113
第65図	A区第3号竪穴住居跡出土遺物 ····79	第96図	B区第6号竪穴住居跡出土遺物 · · 113
第66図	A区第12号竪穴住居跡 · · · · · · · 80	第97図	B区第8・9号竪穴住居跡 · · · · · 114
第67図	A区第12号竪穴住居跡カマド・	第98図	B区第8号竪穴住居跡カマド ・・・・ 115
	出土遺物81	第99図	B区第8号竪穴住居跡出土遺物 · · 116
第68図	A区井戸跡 ·····82	第100図	B区第9号竪穴住居跡出土遺物 · · 117
第69図	A区第3号井戸跡出土遺物 · · · · · · 82	第101図	B区第11号竪穴住居跡・出土遺物・・ 118
第70図	A区第1・2号溝跡 (1)・・・・・84	第102図	B区第12号竪穴住居跡 · · · · · · 119
第71図	A区第1・2号溝跡 (2)・・・・・・85	第103図	B区第12号竪穴住居跡出土遺物 · · 120
第72図	A区第1・2号溝跡出土遺物 ·····85	第104図	B区第13号竪穴住居跡・出土遺物・・ 120
第73図	A区第5号溝跡・出土遺物 ・・・・・・86	第105図	B区第14号竪穴住居跡 · · · · · · 121
第74図	A区第11号土壙 · · · · · · · · · 88	第106図	B区第14号竪穴住居跡出土遺物 · · 122
第75図	A区第11号土壙出土遺物 · · · · · · · 88	第107図	B区第15・16号竪穴住居跡 · · · · · 123
第76図	A区第1号鍛冶関連遺構 · · · · · · · 89	第108図	B区第15号竪穴住居跡出土遺物 · · 124
第77図	A区第1号鍛冶関連遺構遺物	第109図	B区第16号竪穴住居跡出土遺物 · · 124
	出土状況 · · · · · · · 90	第110図	B区第17号竪穴住居跡 · · · · · · 126
第78図	A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物 ··90	第111図	B区第17号竪穴住居跡出土遺物 · · 128
第79図	A区第1~4号河川トレンチ(1)…92	第112図	B区第18号竪穴住居跡 · · · · · · 129

第113図	B区第18号竪穴住居跡出土遺物(1)・・	130	第150図	B区グリッド・一括出土遺物 ····	160
第114図	B区第18号竪穴住居跡出土遺物(2)・・	131	第151図	北大竹遺跡第18次C区基本土層·	
第115図	B区第19号竪穴住居跡 · · · · · · · · ·	132		全体図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	162
第116図	B区第22·23号竪穴住居跡 ······	133	第152図	北大竹遺跡第18次C区区割図(1)··	163
第117図	B区第22·23号竪穴住居跡出土遺物··	133	第153図	北大竹遺跡第18次C区区割図(2)··	164
第118図	B区第25・28号竪穴住居跡・出土遺物・・	135	第154図	C区第2号竪穴住居跡・出土遺物・・	165
第119図	B区第26号竪穴住居跡 · · · · · · · · ·	136	第155図	C区第3号竪穴住居跡 · · · · · · · · ·	166
第120図	B区第26号竪穴住居跡出土遺物 · ·	137	第156図	C区第4号竪穴住居跡・出土遺物・・	166
第121図	B区井戸跡 (1)······	138	第157図	C区第5・6号竪穴住居跡 · · · · ·	168
第122図	B区井戸跡 (2)······	139	第158図	C区第5号竪穴住居跡出土遺物 · ·	169
第123図	B区井戸跡出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	139	第159図	C区第6号竪穴住居跡出土遺物 · ·	170
第124図	B区第2号溝跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	140	第160図	C区第7・23号竪穴住居跡 ······	171
第125図	B区第3号溝跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	141	第161図	C区第7号竪穴住居跡出土遺物 · ·	172
第126図	B区第3号溝跡出土遺物 (1) · · · ·	141	第162図	C区第8・9号竪穴住居跡 ······	173
第127図	B区第3号溝跡出土遺物 (2) · · · ·	142	第163図	C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物・・	174
第128図	B区第3号溝跡出土遺物 (3)····	143	第164図	C区第10号竪穴住居跡・出土遺物・・	176
第129図	B区第3号竪穴住居跡 ······	146	第165図	C区第11・12号竪穴住居跡・	
第130図	B区第3号竪穴住居跡出土遺物 · ·	147		出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	177
第131図	B区第4号竪穴住居跡・出土遺物・・	147	第166図	C区第13号竪穴住居跡 ······	178
第132図	B区第7号竪穴住居跡・出土遺物・・	148	第167図	C区第14・17号竪穴住居跡 · · · · · ·	179
第133図	B区第10号竪穴住居跡 ······	149	第168図	C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物・・	180
第134図	B区第10号竪穴住居跡出土遺物 · ·	149	第169図	C区第18号竪穴住居跡 ······	181
第135図	B区第20号竪穴住居跡・出土遺物・・	150	第170図	C区第20号竪穴住居跡 ······	182
第136図	B区第21号竪穴住居跡 ······	151	第171図	C区第20号竪穴住居跡出土遺物 · ·	182
第137図	B区第21号竪穴住居跡出土遺物 · ·	151	第172図	C区第21号竪穴住居跡 ······	183
第138図	B区第27号竪穴住居跡・出土遺物・・	152	第173図	C区第21号竪穴住居跡出土遺物 · ·	183
第139図	B区第29・30号竪穴住居跡 · · · · · ·	153	第174図	C 区井戸跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	184
第140図	B区第30号竪穴住居跡出土遺物 · ·	153	第175図	C区井戸跡出土遺物 (1)······	185
第141図	B区第1号掘立柱建物跡 · · · · · · ·	154	第176図	C区井戸跡出土遺物 (2)······	186
第142図	B区第4号井戸跡・出土遺物 ・・・・	154	第177図	C区溝跡・出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	188
第143図	B区第4号溝跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	155	第178図	C区土壙 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	190
第144図	B区第4号溝跡出土遺物 · · · · · · ·	156	第179図	C区第6・8号土壙出土遺物 · · · ·	190
第145図	B区第5号溝跡・出土遺物 ・・・・・・	157	第180図	C区第15号竪穴住居跡 ······	191
第146図	B区第7号溝跡・出土遺物 · · · · ·	158	第181図	C区第15号竪穴住居跡出土遺物 · ·	191
第147図	B区土壙 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	158	第182図	C区第16号竪穴住居跡 · · · · · · · · ·	192
第148図	B区土壙出土遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	159	第183図	C区第16号竪穴住居跡出土遺物 · ·	192
第149図	B区第1号土壙 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	159	第184図	C区第1号掘立柱建物跡 · · · · · · ·	194

第185図	C区第1号掘立柱建物跡出土遺物	194	第187図	C区第1・4・7号溝跡 · · · · · · ·	196
第186図	C区第1 · 2号柱穴列 · · · · · · · ·	195	第188図	C区グリッド・調査区一括出土遺物 ·・	197

表目次

(第1分	冊)	第31表	A区溝跡一覧表·····	87
第1表	周辺の遺跡一覧表・・・・・・9	第32表	A区第11号土壙出土遺物観察表······	88
第2表	A区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··21	第33表	A区土壙一覧表·····	88
第3表	A区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··23	第34表	A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物	
第4表	A区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··27		観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 91
第5表	A区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··30	第35表	A区河川トレンチ出土遺物観察表・・・・	. 94
第6表	A区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··32	第36表	A区ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 95
第7表	A区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··34	第37表	A区グリッド出土遺物観察表・・・・97・	98
第8表	A区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··35	第38表	B区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表・・]	107
第9表	A区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··38	第39表	B区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表···	109
第10表	A区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··40	第40表	B区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表・・]	112
第11表	A区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··41	第41表	B区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表···	113
第12表	A区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表 · · 43	第42表	B区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表・・]	116
第13表	A区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表 · · 44	第43表	B区第9号竪穴住居跡出土遺物観察表···	117
第14表	A区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表 · · 45	第44表	B区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	119
第15表	A区第19号竪穴住居跡出土遺物観察表 · · 49	第45表	B区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	120
第16表	A区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··51	第46表	B区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	120
第17表	A区第22号竪穴住居跡出土遺物観察表 ··52	第47表	B区第14号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	122
第18表	A区井戸跡一覧表·····55	第48表	B区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表・・]	124
第19表	A区井戸跡出土遺物観察表·····56	第49表	B区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	125
第20表	A区第3a・b号溝跡出土遺物観察表・・58	第50表	B区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	128
第21表	A区第4号溝跡出土遺物観察表·····59	第51表	B区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表・・ 1	132
第22表	A区溝跡一覧表······60	第52表	B区第22・23号竪穴住居跡出土遺物	
第23表	A区土壙一覧表······67		観察表	134
第24表	A区土壙出土遺物観察表·····67	第53表	B区第28号竪穴住居跡出土遺物観察表··]	135
第25表	A区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表	第54表	B区第26号竪穴住居跡出土遺物観察表··]	137
	······74 • 75	第55表	B区井戸跡出土遺物観察表·····	139
第26表	A区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表··80	第56表	B区井戸跡一覧表·····	140
第27表	A区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表··81	第57表	B区第3号溝跡出土遺物観察表····	144
第28表	A区井戸跡一覧表·····82	第58表	B区溝跡一覧表·····	144
第29表	A区第3号井戸跡出土遺物観察表····82	第59表	B区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表···	147
第30表	A区第1・2・5号溝跡出土遺物観察表 ・・87	第60表	B区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表・・]	148

第61表	B区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表··	148		観察表・・・・・・	175
第62表	B区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表··	149	第83表	C区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表··	176
第63表	B区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表··	150	第84表	C区第11・12号竪穴住居跡出土遺物	
第64表	B区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表··	151		観察表	178
第65表	B区第27号竪穴住居跡出土遺物観察表··	152	第85表	C区第14・17号竪穴住居跡出土遺物	
第66表	B区第30号竪穴住居跡出土遺物観察表··	153		観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	180
第67表	B区第4号井戸跡出土遺物観察表··	155	第86表	C区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表··	182
第68表	B区第4号溝跡出土遺物観察表····	157	第87表	C区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表··	183
第69表	B区第5号溝跡出土遺物観察表····	157	第88表	C区井戸跡出土遺物観察表······	187
第70表	B区第7号溝跡出土遺物観察表····	158	第89表	C区井戸跡一覧表······	187
第71表	B区溝跡一覧表······	158	第90表	C区第5号溝跡出土遺物観察表····	188
第72表	B区土壙出土遺物観察表······	159	第91表	C区溝跡一覧表·····	188
第73表	B区土壙一覧表······	159	第92表	C区土壙一覧表·····	189
第74表	B区土壙一覧表······	159	第93表	C区土壙出土遺物観察表······	190
第75表	B区グリッド出土遺物観察表・・・・・	160	第94表	C区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表··	191
第76表	B区ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	160	第95表	C区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表··	192
第77表	C 区第 2 号竪穴住居跡出土遺物観察表・・	165	第96表	C区第1号掘立柱建物跡出土遺物	
第78表	C区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表··	166		観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	194
第79表	C区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表··	170	第97表	C区溝跡一覧表·····	196
第80表	C区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表··	170	第98表	C区ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	197
第81表	C区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表··	172	第99表	C区グリッド出土遺物観察表・・・・・	198
第82表	C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物				

写真図版目次

(第1分冊)					2	第2号遺物集中	須恵器脚付長
巻頭図版1	1	子持勾玉・勾玉飛	集合			頸壺集合	
巻頭図版2	1	金属製品集合		巻頭図版 6	1	第2号遺物集中遺	遺物出土状況
巻頭図版3	1	第1号遺物集中	須恵器甕出土		2	第2号遺物集中	須恵器集合
		状況		巻頭図版7	1	第2号遺物集中	土器集合
	2	第1号遺物集中	須恵器甕集合		2	第2号遺物集中	土師器高坏集
巻頭図版4	1	第2号遺物集中	須恵器甕等出			合	
		土状況		巻頭図版8	1	第3号遺物集中遺	貴物 出土状況
	2	第2号遺物集中	須恵器甕集合		2	第3号遺物集中	須恵器甕集合
巻頭図版5	1	第2号遺物集中	須恵器脚付長				
		頸壺出土状況					

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県企業局地域整備課では、行田富士見工業 団地拡張地区産業団地について、第3次田園都市 産業ゾーン基本方針に基づき行田市との共同で整 備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化 財の保護について、従前から関係機関と事前協議 を重ね、調整を図ってきたところである。

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業 地内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成29年 度「公共事業と埋蔵文化財保護の調整会議」で照 会があった。

事業予定地は「北大竹遺跡 (No.68-048)」に該当しており、行田市教育委員会が平成31年2月12日から平成31年3月27日に確認調査を実施したところ、縄文時代・古墳時代~平安時代と思われる遺構や遺物が確認された。この結果に基づき、令和元年8月1日付け教生文第873-1号で次の通り地域整備課長宛回答した。

1 埋蔵文化財の所在

事業予定地には次の周知の埋蔵文化財包蔵地 が所在します。

名称	種別	時代	所在地
北大竹遺跡	集落跡	古墳、	行田市大字若小玉
(No.68-048)		奈良、	字枳1900-1他
		平安	

2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地 が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護 法第94条の規定による発掘通知を提出してくだ さい。

3 取扱いについて

別添図のうち、「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

「工事に着手して差し支えない区域」については、保護層が確保される場合に限り工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状 保存は困難との結論に達したため、記録保存の措 置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団 法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、地域整備 課、文化資源課の三者で、工事日程、調査計画、 調査期間などについて会議を開催し、各種の調整 を行った。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉 県知事からの通知に対する同条第4項の規定によ る埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のと おりである。

令和元年9月6日付け教文資第4-983号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から の発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長か らの指示通知は以下のとおりである。

令和元年10月14日付け教文資第2-31号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

北大竹遺跡第18次の発掘調査は、行田富士見工 業団地拡張地区産業団地整備事業に伴って実施さ れた。

発掘調査は、令和元年度から令和2年度にかけて実施した。調査区はA区・B区・C区に分け、調査対象面積は5,280㎡である。発掘調査期間は、令和元年10月15日から令和2年10月31日まで実施した。

令和元年10月10日に埋蔵文化財発掘届を提出 し、事前準備を開始した。調査はB区から着手 し、11月8日に動力の設置工事を、12日に囲柵設 置工事に着手した。

重機による表土掘削は、11月18日から開始し、 12月2日から補助員作業を開始した。基準点測量 及びグリッド杭打設作業委託は12月24日に実施し た。確認された遺構については、土層断面図・平 面図の作成、写真撮影等の記録作成を行った。高 所作業車による全景写真の撮影を3月5日に、空 中写真撮影を6日に実施した。

B区は一部を除き、3月25日から埋め戻しを開始し、3月30日に終了した。

A区の調査はB区と並行して実施し、防塵ネット設置を12月10日、動力の設置工事を16日から開始し、重機による表土掘削を12月19日から開始した。基準点測量及びグリッド杭打設作業委託は3月16日に実施し、本格的な補助員作業は令和2年度から開始した。

令和2年度の発掘調査は、4月8日に補助員作業を開始した。並行してC区の調査を開始し、C区の表土掘削は4月16日から開始した。

確認された遺構については、土層断面図・平面 図の作成、写真撮影等の記録作成を行った。その 際の平面図の測量は、トータルステーションシス テムを用いて実施した。C区の基準点測量及びグ リッド杭打設作業委託は、6月10日に実施した。 A区の高所作業車による写真撮影は7月29日に空中写真撮影は8月4日に実施した。C区の高所作業車による写真撮影と空中写真撮影は9月3日に実施した。また、自然科学分析委託は、8月4日に委託業者へ資料の引き渡しを行い、9月30日に成果が納品された。

A区の補助員作業は8月31日まで行い、B区、 C区の補助員作業は9月17日まで行った。

9月24日に埋蔵物発見届(行田警察署長あて) と埋蔵文化財保管証(埼玉県教育委員会あて)を 提出し、実績報告書作成等の事務処理を行った。

A区の本格的な埋め戻しとB区・C区の安全対 策工事を10月1日から開始し10月30日に終了した。

(2) 整理・報告書の作成

北大竹遺跡第18次調査の整理・報告書作成作業は、令和2年10月1日から令和4年3月29日にかけての18箇月、2箇年度にわたり実施した。

令和2年度の作業は出土遺物の水洗・注記から 開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終え た遺物は順次実測、トレース、採拓を経て、遺構 ごとに印刷用の挿図を作成した。並行して、発掘 調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合 し、修正を加えてスキャナでコンピュータに取り 込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ご とにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷 用の版下とした。

令和3年度にも引き続き、遺物の水洗・注記、接合復元、実測、トレース、採拓を行い、9月から遺物の写真撮影を行い、7月から原稿執筆を開始した。10月6・7日に口絵写真撮影を行った。

令和4年1月までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、令和4年3月23日に報告書(本書)を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、令和 4年3月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施 設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

令和元年度 (発掘調査)			
理 事 長 藤田栄二	調査部		
常務理事兼総務部長 高津 導	調査部長	黒	反 禎 二
総務部	調査部副部長	吉日	租 稔
総務部副部長 山本 靖	主幹兼調査第二課長	大 名	谷 徹
総務課長 新井了悟	主 任	渡	邊 理伊知
	主 任 専 門 員	赤	淮 浩 一
	主	砂生	上 智 江
	主	鈴	大 知 怜
令和2年度 (発掘調査・報告書作成)			
理 事 長 藤田栄二	調査部		
常務理事兼総務部長 福 沢 景	調査部長	吉日	租 稔
総務部	調査部副部長	福日	田 聖
総務部副部長 山本 靖	調査部副部長兼整理第一課長	上	野 真由美
総務課長 鈴木裕一	主幹兼調査第一課長	栗	到 潤
	主幹兼整理第二課長	大 1	分 徹
	工刊	/	
	主任		邊 理伊知
		渡	
	主 任	渡遊	邊 理伊知
	主 主 任	渡沙赤	邊 理伊知
	主 任 主 任 主 任 責 任	渡沙赤	邊 理伊知
令和3年度 (報告書作成)	主 任 主 任 主 任 責 任	渡沙赤	邊 理伊知
令和3年度(報告書作成) 理 事 長 依 田 英 樹	主 任 主 任 主 任 責 任	渡沙赤	邊 理伊知
	主 任 主 任 主 任 主 事	渡砂赤桑	邊 理伊知
理 事 長 依田英樹	主 任 主 任 主 任 事 調査部	渡砂赤桑田	邊 理伊知
理 事 長 依 田 英 樹 常務理事兼総務部長 福 沢 景	主 任 主 任 主 任 主 事 調査部 調 査 部 長	渡砂赤桑田福	邊 理伊知 主 智 江 市 法 安須美 中 広 明

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

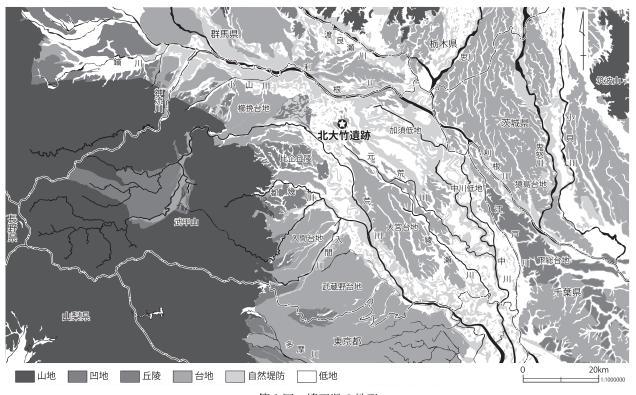
北大竹遺跡(1)は埼玉県行田市藤原町・若小玉に 所在する遺跡である。

埼玉県は、盆地と周辺の山地からなる県西部地域、荒川から西にかけての武蔵野台地、入間台地、高坂台地、東松山台地、江南台地などからなる県中部地域、荒川低地・中川低地と大宮台地などの低台地からなる県東部地域に分かれる西高東低の地形である。また、利根川と荒川を中心とした河川が多く、中部地域から東部地域にかけては全体的に平坦な地形である。そのため、河床勾配が緩く、蛇行している河川も多い。埼玉県の面積は約3,800平方キロメートルであり、県全体の面積に対する河川面積の占める割合は3.9%である。この割合は日本一であり、埼玉県は河川との関わりが深い県といえる。

行田市は埼玉県北東部に位置しており、北部に は利根川が東流し、利根川を境に群馬県邑楽郡千 代田町と接している。市内全域が利根川と荒川に よる沖積平野であり、地形区分では加須低地に位 置する。標高は約20m前後であり、高低差がほぼ ない平らな地形である。

加須低地の形成には、利根川から排出される堆積物と関東造盆地運動と呼ばれる沈降運動が大きく関わっている。関東造盆地運動とは、関東平野の中心部が沈降する一方で、関東西部の山地や房総半島といった周縁部において地盤が隆起するという地殻運動である。そのため市内の多くの場所で埋没ロームがみられ、埋没したローム台地が現地表下4mで確認される地域もある。行田市内には、古墳が墳丘ごと埋没している事例もみられ、古墳時代以降の洪水被害の凄まじさがうかがえる。

利根川は、新潟県と群馬県の県境に位置する大水上山を源流とする。現在は茨城県と千葉県の県境に位置する銚子沖の河口から太平洋へ注いでい



第1図 埼玉県の地形

る。流路延長が約322kmで信濃川に次ぐ日本第2位、流域面積は16,840kmで日本第1位の規模を誇り、「坂東太郎」の異名を持つ大河川である。本来の利根川は幾多の支流を形成しつつ、東京湾へ流れており、時期によっても流路が異なる。

江戸時代には、忍藩によって現在の羽生市川俣付近で河川を締切り、南流していた河川を東流するようにしている。また、徳川幕府による治水事業によって、東京湾へ流れていた流路を銚子沖へ流れるようにした利根川東遷事業が実施された。

中世頃には行田市に隣接する加須市内を流れる 会の川がかつての本流筋であったとみられる。日 本最大級の河畔砂丘が連なる状況からもその名残 をうかがうことができる。

古代以前の利根川流路については、行田市内を 流れる星川の周辺から利根川上流に位置する榛名 山から流入する角閃石安山岩転石の分布が認めら

2 歴史的環境

北大竹遺跡第18次の調査では、主に古墳時代から古代にかけての遺構が検出され、他に縄文時代の土器片や石器が出土しているが、遺構は検出されなかった。中世以降の遺構は僅かながら検出された。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は多くない。北大竹遺跡においても過去の調査で石器や剥片が出土している。 周辺でも馬場裏遺跡(8)、内郷遺跡(17)において石器や剥片が数点出土している程度であり、詳細は明らかでない。

縄文時代

縄文時代の遺跡の多くは埋没台地やその支台上に分布している。行田市内では草創期の石槍が出土した神明遺跡(5)が最も古い。また、小針遺跡(10)では早期後半の集石と土壙が検出されており、これが最も古い遺構となる。前期前半には馬場裏遺跡において竪穴住居跡が13軒検出されている。

れ、星川に利根川水系の水が角閃石安山岩転石を伴って流れ込んでいた時期がある(秋池2000)。そのことから、現在の星川に利根川の水が流れ込んでいた時期があったことがわかる。

榛名山の火山活動は6世紀代に活発化しており、6世紀以降の利根川は行田市南河原付近から南下し、星川に合流する流路を西端としてそれより東側に複数の流路が流れていたとされる(熊谷市史考古専門部会2011)。また元々、埼玉古墳群の西側を流れていた利根川の流路が、6世紀代のどこかの段階で埼玉古墳群の東側へ流路を変遷させている可能性も想定されている(埼玉県教育委員会2018)。

現在、行田市内には利根川や星川の他に忍川、 旧忍川、元荒川、奈良川、福川が流れており、他 に武蔵水路、見沼代用水、埼玉用水路といった水 路が流れている。

中期から後期にかけての主な遺跡としては、船原・ 内郷通遺跡(18)で中期後半から後期前半の袋状土 壙や後期後半の竪穴状遺構が検出されている。また、 高畑遺跡(31)からは後期中葉の土偶が出土してい る。

弥生時代

弥生時代の遺跡はあまり多くはないが、主だった遺跡は行田市から熊谷市にかけて位置する荒川扇状地の扇端部周辺の微高地に立地している。遺跡としては行田市小敷田遺跡(45)とそれに隣接した熊谷市の池上遺跡から中期中葉の環濠集落や方形周溝墓が検出されている。

また、熊谷市の北島遺跡においては前期未葉から中期初頭に位置付けられる再葬墓が、前中西遺跡では、旧河川跡を境に北側に集落域、南側に方形周溝墓による墓域が広がる状況が確認されている。

古墳時代

古墳時代には、遺跡数が増加する。前期・中期の

主な集落遺跡としては石田堤遺跡(26)、武良内遺跡(32)、高畑遺跡、陣馬遺跡(12)、小針遺跡、白鳥田遺跡(46)、柳坪遺跡(41)、小敷田遺跡などがある。この時期の古墳は少なく、鴻巣市に立地する袋・台遺跡(54)で中期の円墳が確認されている。

しかし、中期後半に全長120mの前方後円墳で、「辛亥年」の紀年銘などを刻む金錯銘鉄剣が副葬された稲荷山古墳(A1)が造営されると、以後、約150年にわたり埼玉古墳群(A)が形成される。埼玉古墳群は5世紀後半から7世紀中頃にかけて造営された全国有数の古墳群であり、国の特別史跡に指定されている。史跡内に8基の前方後円墳、1基の円墳、史跡の隣接地に所在する1基の円墳と1基の方墳からなる合計11基の古墳群である。また、稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣を含めた副葬品は国宝に指定されている。

後期には築道下遺跡(22)や小針遺跡といった大規模な集落遺跡が現れるとともに、佐間古墳群(D)、 斉条古墳群(F)、酒巻古墳群(H)などの古墳群が 造営される。この時期前後に造営される小見真観 寺古墳(E1)や真名板高山古墳(K)、久喜市の菖 蒲天王山塚古墳は同時期の埼玉鉄砲山古墳(A7) に匹敵する規模を有する。

北大竹遺跡と深く関連する若小玉古墳群(B)もこの時期から造営が開始される。北大竹遺跡で本格的に集落が展開するのは古墳時代前期からであるが、その後、後期初頭頃に小型の円墳が築かれて若小玉古墳群の造営が開始される。後期前半には墳長約70mの三方塚古墳(B1)が造営される。三方塚古墳の下には前期から古墳造営の直前まで集落が展開していたが、古墳造営の際に集落が移転している状況が確認されている。

墳丘は残っていないが、三方塚古墳のほか荒神山、愛宕山、福仙塚、笹塚・稲荷山と呼ばれていた古墳の存在が『埼玉県史』に記録されている。また、太田西小学校に須恵器とともに保管されていた「見取図」にはオトカ塚、カキビン塚、ヤキバという古

墳の位置が記されている(埼玉県教育委員会1980)。

北大竹遺跡の西側に位置する中村遺跡(2)においても円墳が確認されており、一連の古墳群が西側へ広がっていたことも確認されている。

現在でも残っている古墳としては、終末期古墳に位置付けられる八幡山古墳(B2)、地蔵塚古墳(B3)の2基の古墳がある。八幡山古墳は昭和9年(1934)の小針沼干拓事業の際に土取りのために墳丘が崩されたが、副室構造の横穴式石室が確認されている。地蔵塚古墳では、埼玉県で唯一、石室に線刻壁画が描かれている。

古代

飛鳥時代に入ると畿内に宮都が造営され、全国で評制が施行される。埼玉県では榛澤評家に比定される深谷市の中宿遺跡や熊野遺跡、幡羅評家に比定される深谷市・熊谷市の幡羅官衙遺跡群において評家関連遺跡が確認されているが、北大竹遺跡の位置する前玉評を含め県内他地域では確実な評家関連遺跡は確認されていない。しかし、奈良県橿原市の日高山瓦窯跡から「前玉評 大里評」という刻書文字瓦が出土している。日高山瓦窯跡は藤原京の造営の際に必要な瓦を生産した瓦窯であり、この段階での前玉評と大里評の存在を示している。

幡羅官衙遺跡群では、古代寺院である西別府廃 寺が確認されるとともに、祭祀遺跡として湧泉に 関する祭祀が執り行われた西別府祭祀遺跡が調査 され、そこから7世紀後半の櫛形や馬形、剣形の 石製模造品や有孔円板、臼玉が出土している。また、 後続する奈良時代以降にも祭祀が継続して行われ ており、坏や埦、皿などの土器を用いた祭祀に転 換していく様相が確認されている。

北大竹遺跡の周辺は、奈良・平安時代には武蔵国 埼玉郡に属する。飛鳥時代と同様に埼玉郡は未だ 明確な官衙遺跡は確認されていない。寺院跡とし ては、旧盛徳寺跡(9)が小針遺跡の範囲内に所在し、 8世紀後半に比定される瓦が確認されている。なお、 寺伝では大同年間(806~809)の創建とされている。 この時代の主な集落遺跡は高畑遺跡、原遺跡(13)、 内郷遺跡、船原・内郷通遺跡、八ツ島遺跡(23)、馬 場裏遺跡、柳坪遺跡、小敷田遺跡、築道下遺跡、 小針遺跡などが挙げられる。小敷田遺跡からは公 出挙に関する木簡が出土している。また、小針遺 跡からは平安時代の竪穴住居跡から「丈部鳥麻呂」 と線刻された紡錘車が出土しており、この時期の 武蔵国造である「丈部直」との関連が想定される。

また、奈良時代末に成立したとみられる『万葉集』 には「埼玉の小埼の沼に鴨ぞ羽霧るおのが尾に降り 置ける霜を掃ふとにあらし」と「埼玉の津に居る船 の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」の2つの 歌に「さきたま」の名称がみられる。「埼玉の小埼の 沼」と「埼玉の津」はいずれもいくつかの候補地が比 定されているが、確定には至っていない。

中世

中世の武蔵国では、武蔵武士と呼ばれる武士団が活躍する。行田市域にも多くの武士が知られるが、武蔵武士の館跡とみられる遺跡が確認された事例は少ない。確認された事例として、内郷遺跡で渡柳館跡と推定される堀跡が検出されている。また、神明遺跡からは二重の堀跡が検出され、外堀からは多量の柿経が出土している。築道下遺跡からは13・14世紀代の区画溝や上部施設に板碑を有する蔵骨器に埋葬された火葬墓が検出されており、有力者の館や墓域が所在していた。

『吾妻鏡』には若児玉小次郎や若児玉次郎、若児玉氏元と称する武士の名がみられる。若児玉氏は武蔵七党の児玉党とされるがその系図には表れない。また、上野国の園田氏の系統に若児玉小五郎なる人物があり、これに関わるという説もある(行田市史編さん委員会2012)。若児玉氏の館は、近世の地誌である『新編武蔵風土記稿』の「埼玉郡若小玉村」によれば、村内の小名鞘戸耕地に所在し祠が残っていたが、今は陸田となり祠も失われているとある。

中世後半以降の周辺地域は、下総国古河に本拠

を構えた古河公方と関東管領上杉氏が対峙した最前線に位置していた。

忍城址(47)は扇ガ谷上杉氏方に属していた忍氏を滅ぼした成田氏によって築城されたとされる。 成田氏はその後、太田道灌の執り成しで扇ガ谷上 杉氏と和睦するが、越後上杉氏への恭順と離反を 経て、相模国小田原の後北条氏の勢力拡大により、 その影響下に降った。

成田氏の忍城は、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原征伐の際に石田三成が指揮を執った水攻めによる攻城戦を小田原城開城まで耐え抜いたことで知られる。この際に石田三成が築いた堤である石田堤(25・26・52)が一部、現存している。

石田堤は数地点で発掘調査が行われている。石田堤遺跡第4次調査地点では、地形の低い調査区西側で地形の高い東側と同じ高さまで小丘状に土を盛るという盛土構造が確認されている。類似した盛土構造は加須市の旧利根川堤防跡でもみられる。

近世・近代

江戸時代の行田市域は忍藩領に属した。忍城は忍藩の本拠となり、親藩・譜代の大名が入った。まず、文禄元年(1592)に徳川家康の四男松平忠吉が10万石、その補佐役として松平忠家が1万石で入った。その後、忠家は下総小見川へ移り、忠吉も慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦で武功を挙げ、尾張清洲藩52万石に加増移封された。

その後しばらくは天領となり、代官の伊奈忠次や大河内久綱らが治めた。寛永10年(1633)に大河内松平家が3万石で入り、改めて忍藩が置かれた。寛永16年(1639)に松平信綱は島原の乱の武功で6万石に加増され武蔵川越藩へ移り、代わって5万石で阿部家が入り長らく忍藩を治めたが、文政6年(1823)に陸奥白河藩へ移封となった。

その後は10万石で奥平松平家が入った。奥平松 平家第5代藩主の忠敬は明治2年(1869)の版籍奉 還で忍藩知事となった。しかし明治4年(1871)7



第2図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表(第2図)

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
行田T	ti	29	東谷遺跡	57	明用・一ノ耕地A遺跡	В2	八幡山古墳
1	北大竹遺跡	30	西谷遺跡	58	赤城遺跡	В3	地蔵塚古墳
2	中村遺跡	31	高畑遺跡	59	光安寺遺跡	С	若王子古墳群
3	中村東遺跡	32	武良内遺跡	羽生市	Τ̈́	D	佐間古墳群
4	鶴巻遺跡	33	諏訪山遺跡	60	六反坪遺跡	D 1	大日塚古墳
5	神明遺跡	34	諏訪山北遺跡	61	横塚遺跡	D 2	大人塚古墳
6	中斉遺跡	35	野合遺跡	62	横塚南遺跡	Е	小見古墳群
7	林遺跡	36	屋敷通遺跡	63	上宿遺跡	E 1	小見真観寺古墳
8	馬場裏遺跡	37	屋敷通西遺跡	64	宿裏遺跡	F	斉条古墳群
9	旧盛徳寺跡	38	屋敷通北遺跡	65	別所遺跡		斉条5号墳
10	小針遺跡	39	棒川遺跡	66	上新郷遺跡	G	犬塚古墳群
11	小針北遺跡	40	文殊前遺跡	67	五十ヶ谷戸遺跡	G 1	とやま古墳
12	陣馬遺跡	41	柳坪遺跡	68	竜住遺跡	Н	酒巻古墳群
13	原遺跡	42	南河原条里遺跡	69	道畑遺跡	H 1	酒巻8号墳
14	原東遺跡	43	池守遺跡	70	中妻遺跡	H 2	酒巻14号墳
15	原南遺跡	44	Ⅲ尾遺跡		古墳·古墳群	Н3	酒巻15号墳
16	百塚原遺跡	45	小敷田遺跡	行田ī	市	I	大稲荷古墳群
17	内郷遺跡	46	白鳥田遺跡	Α	埼玉古墳群	I 1	大稲荷1号墳
18	船原・内郷通遺跡	47	忍城址	A 1	稲荷山古墳	J	愛宕神社古墳
19	杉原通遺跡	48	立野遺跡	A 2	丸墓山古墳	K	真名板高山古墳
20	稲荷通遺跡	49	宅地遺跡	A 3	将軍山古墳	鴻巣ī	र्ग
21	北海戸遺跡	50	船川遺跡	A 4	二子山古墳	L	愛宕神社古墳
22	築道下遺跡	51	砂原遺跡	A 5	愛宕山古墳	M	宝養寺古墳
23	八ツ島遺跡	鴻巣ī	fi	A 6	瓦塚古墳	N	三嶋神社古墳
24	鎌田氏館跡	52	石田堤	A 7	鉄砲山古墳	羽生下	ti ti
25	中通南遺跡	53	吹上1号遺跡	A 8	奥の山古墳	0	新郷古墳群
26	石田堤遺跡	54	袋・台遺跡		中の山古墳		愛宕塚古墳
27	武良内・中通遺跡	55	袋遺跡	В	若小玉古墳群	Р	下新郷1号墳
28	武良内(鴻地)遺跡	56	前砂・宮脇遺跡	B 1	三方塚古墳		

月の廃藩置県で忍藩は廃されて忍県が置かれ、11 月には埼玉県に統合された。

忍藩の藩運営は治水や洪水と深く関わる。文禄3年(1594)に松平忠吉から命を受けた家老の小笠原三郎座衛門によって、現在の埼玉県羽生市本川俣で会の川の締切りが行われた。これにより利根川の幹川は現在、加須市中心部を流れる会の川から加須市大越方面を経て、浅間川へ至るようになった。

北大竹遺跡の北側約300m付近を南東方向へ流れる見沼代用水は、用水を引いて新田開発を行う目的で、幕府の旗本であった井沢弥惣兵衛為永が普請に取り掛かり、享保13年(1728)に完成している。行田市街地を通る見沼代用水は星川の流路を活かす形で通されている。

寛保2年(1742)8月には江戸三大洪水の1つといわれる大洪水によって多摩川や荒川とともに利根川も氾濫している。『徳川実紀』によると忍城下も被害を受けたことが記録されている。

『見沼代用水沿革史』によると天明2年(1782)6月に「洪水のため見沼代用水路砂埋多し」とあり、見沼代用水が砂で埋まることがあったことがわかる。翌年、天明3年(1783)には、浅間山が噴火し、それによって利根川に泥流が流れ込んだことで河床が上昇し、洪水が頻発するようになる。それにより天明3年や同6年に洪水が発生した。

近代以降も大規模な洪水は起こり、明治43年 (1910)の大洪水や昭和22年(1947)のカスリーン台 風による被害が広く知られる。

近世及び近代に位置付けられる遺跡の調査は多くはないが、忍城址第9次調査では、諏訪曲輪東側に位置する堀跡が調査されており、元禄期の木樋や阿部家の家紋である「丸に遠い鷹の羽」の漆椀蓋が出土している。

また、平成24年度の埼玉鉄砲山古墳の発掘調査では、多量の銃弾や砲弾、遠眼鏡のレンズや雷管が出土しており、この場所が忍藩の砲術演習場である埼玉村角場であったことが明らかになった。

Ⅲ 遺跡の概要

1 これまでの調査概要

北大竹遺跡は、行田市藤原町・若小玉に所在する。行田市によって平成2年(1990)に第1次調査が行われて以来、断続的に発掘調査が行われている(第3図)。また、周辺には中村遺跡や中村東遺跡も展開し、北大竹遺跡と同様に集落を構成する竪穴住居跡や円墳の周溝が確認されている。

これまでの発掘調査で北大竹遺跡からは、旧石 器時代の石器や縄文時代の土器片なども出土して いるが、古墳時代前期頃から本格的に集落が形成 されたことが明らかになっている。

その後、埼玉古墳群において最初の前方後円墳である稲荷山古墳が造営される頃に、北大竹遺跡の遺跡範囲とその周辺にかけても、墳径20m以下の小型の円墳が造営され始め、若小玉古墳群の造営が開始される。

これまでの発掘調査成果において、特筆される ものとして、第3次調査において、隠滅していた 前方後円墳である三方塚古墳が検出されたこと が挙げられる。三方塚古墳は墳長約70mと推定さ れ、前方部が北西を向き、周溝は方形で北側のく びれ部全面に外堤部が突き出ており、ここから人 物埴輪や馬形埴輪が出土している。埴輪の年代か ら古墳の築造時期は6世紀中頃と推定される。

三方塚古墳の下層からは、古墳時代前期から三 方塚古墳の築造直前までの集落が検出されている ことから、古墳の築造に伴って集落の移転が図ら れた様子がうかがえる。

他に三方塚古墳の西側約300mの地点に荒神山古墳が推定されているが詳細は不明である。また、北大竹遺跡の南西方向には、昭和22年(1947)に取り壊されるまで愛宕山古墳が残されていた。前方部を南に向けた墳長約72mの前方後円墳で、発掘調査は行われずに取り壊されたが、その際に円筒埴輪が1点出土しており、その年代

から三方塚古墳に後続する前方後円墳と推定されている。

このように若小玉古墳群では6世紀代には70m 級の前方後円墳が複数造営されている。

7世紀に造営された終末期古墳として若小玉古 墳群に残る古墳としては、八幡山古墳と地蔵塚古 墳がある。

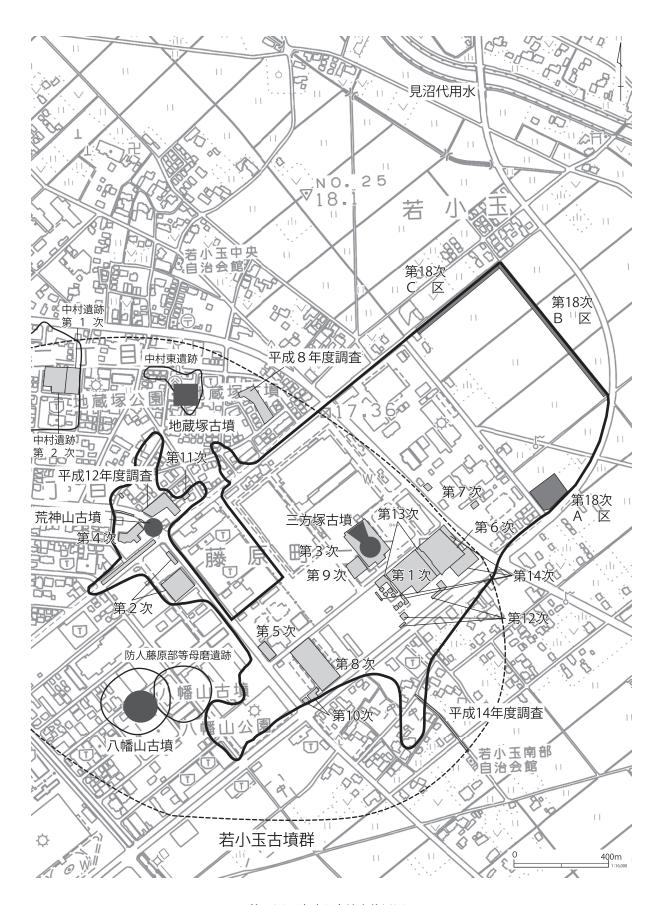
八幡山古墳は昭和9年(1934)に小針沼の干拓 事業のために墳丘が取り壊され、現在は石室のみ が残る。元々は約9.5mの高さ、直径約80mの規 模を持つ大型の円墳であった。

石室は羨道、前室、中室、奥室で構成されており、羨道部分は失われている。推定全長は16.7mとされるが、現存長は14.7mとなっている。奥壁の横幅は約4.8mで大型の横穴式石室である。石室に用いられた石材は、奥室の壁に角閃石安山岩と輝石安山岩質溶岩、天井や中室、前室の側壁には巨大な緑泥片岩の板石も用いられている。

副葬品も豊富に確認されており、須恵器長頸 壺、銅鋺、青銅製八花棺金具、長刀片、乾漆器 片、夾紵棺片、漆塗木棺片及び銅鋲、鉄釘、銀製 弓筈金物片、鉄鏃、銅漆装方頭柄頭、金銅装鞘尻 金具が出土している。

地蔵塚古墳は一辺約28m、高さ約4.5m、周溝幅約1mの方墳で、若小玉古墳群の最後の古墳に位置付けられる。石室は胴張りで緑泥片岩を奥壁と天井石に用いている。石室内の左右の壁と奥壁に烏帽子を被った人物、弓を引いている人物、馬、水鳥、家などが線刻によって描かれている。

律令期以降の北大竹遺跡の様相としては、第6次調査地点において、6世紀代から10世紀代にかけての集落が検出されている。竪穴住居跡75軒以上の他、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構とともに大量の土器類が出土している。



第3図 遺跡調査地点位置図

2 第18次調査の概要

北大竹遺跡第18次調査はA区、B区、C区の3 区に分かれた地点の発掘調査を実施した。

行田富士見工業団地拡張に伴う発掘調査で、A 区は調整池の設置、B区・C区は現道の拡幅に伴 う発掘調査である。各調査区の距離間は、A区の 東端からC区西端まで約360m、A区の南東端か らB区・C区の接点まで約420mの距離を測る。

A区は、第18次調査地点の中で南側に位置し、 これまでの調査地点と最も近い地点となる。調査 面積は3,067㎡である。ローム層を地山とし、遺 構検出面とした。調査区の南側半分において、遺 構が検出された。一方で調査区の北側半分は洪水 によって削平されており、遺構は一切確認され なかった。試掘調査の際に、遺構検出面の標高約 15mからさらに約3m掘削し、下層の様相が確認 されているが、ローム層は確認されなかった。こ の洪水により流れ込んだ砂層は旧表土直下から確 認され、肥前系の染付磁器が出土していることか ら、18世紀後半以降の洪水によるものと想定され る。遺構は、古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡18 軒、井戸跡13基、溝跡4条、土壙14基である。7 世紀代の遺構が多い傾向にあり、ウマを含めた獣 骨を伴う土壙が検出されている。奈良時代・平安 時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、井戸跡5基、溝 跡3条、土壙1基、鍛冶関連遺構1基、旧河川跡 1箇所である。9世紀代を中心とする時期で10世 紀代には下らない。

B区は第18次調査で最も北東側に位置する。調査面積は1,448㎡である。幅約6mで約260mにかけて調査を行った。ローム層を地山とし、遺構検出面とした。B区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡21軒、井戸跡11基、溝跡4条、遺物集中が3箇所である。B区の奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡3条、土壙4基である。奈良時代・平安時代の遺構は調査区

中央から南東寄りの地点に多く分布する傾向にある。他に中世とみられる土壙が1基検出された。

C区は第18次調査で最も北西側に位置する。調査面積は765㎡である。幅約6mで約165mにかけて調査を行った。ローム層を地山とし、遺構検出面とした。C区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡18軒、井戸跡8基、溝跡4条、土壙7基である。C区の奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、溝跡3条である。奈良時代・平安時代の遺構は調査区の中央から南西寄りの地点に多く分布する傾向にある。

北大竹遺跡第18次調査で得られた最大の成果は B区で検出された3箇所の遺物集中地点である。 主に6世紀中頃から7世紀中頃にかけての大量の 遺物が、大きく3箇所にわたって確認された。最 も南側で確認された第1号遺物集中は、7世紀中 頃を主体とする時期である。残存率の高い須恵器 の甕を8点並べ、周囲から須恵器の坏や土師器の 坏、甕などとともに子持勾玉12点や石製模造品を 伴って出土している。

その北西側へ約13mの地点で確認された第2号 遺物集中は、6世紀中頃から後半を中心とする時 期であり、5 mほどの範囲に掲載資料で須恵器 122点、土師器559点、子持勾玉19点、石製模造品 187点、臼玉765点、金属製品307点といった量の 遺物が出土している。

そこからさらに北西へ約25mの地点で確認された第3号遺物集中は、7世紀初頭頃を中心とする時期であり、須恵器甕11点を並べた様相が確認された。子持勾玉は11点出土している。

この3地点で6世紀中頃から7世紀中頃までにかけて確認された遺物の共通点としては、須恵器の甕と子持勾玉を一貫して用いているという点が挙げられる。これらを用い、継続した祭祀行為が執り行われたことによる結果といえよう。



第4図 A・B・C区位置図

A区の調査 \mathbf{W}

A区の概要

A区は第18次調査地点の中で最も南東に位置 し、これまで調査された北大竹遺跡の調査地点か らは、第6次調査地点、第14次調査地点から北東 へ約160mの場所に位置する。

調査面積は3,067㎡である。掘削深度は現地表 面から2.2m~3.0m下で地山となるローム面(X -1層)を検出している。

検出された遺構は主な時代のものとして古墳時 代・飛鳥時代、奈良時代・平安時代の時期に位置 付けられる遺構を主体に検出された。遺構数は、 古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡が18軒、井戸跡 が13基、溝跡4条、土壙14基が検出されている。

古墳時代・飛鳥時代の特徴として、獣骨を伴う 土壙が多数検出された点が挙げられる。ウマの骨 を放射性炭素年代測定した結果、6世紀後半から 7世紀前半頃の年代に収まるという成果が得られ た。これは竪穴住居跡の年代と一致する。このこ とから、A区において6世紀後半から7世紀前半 に展開していた集落はウマとの関りが深い人々が 生活していた集落であった可能性が想定される。

奈良時代・平安時代の遺構は、竪穴住居跡が3 軒、井戸跡が5基、溝跡3条、土壙1基が検出さ れている。平安時代となる9世紀前半頃の遺構を 最後にその後の遺構は検出されていない。9世紀 以降は土地利用の在り方が生活域だったものから 変化していったとみることができる。

また、小規模ながら鍛冶関連の遺構も検出され ていることから、集落内での鉄製品の生産や補修 を行っていた様子もうかがえる。

これらの遺構は全て調査区の南西側半分におい て検出されており、北東側半分は旧河川跡が検出 され、それ以外の遺構は一切検出されていない。 この旧河川跡は遺構検出面で確認されたものは平 安時代頃と想定されるが、現表土下から淡褐色砂 質土が検出されており、これは近世か近代の洪水 に起因するものに位置付けられる。

また、行田市教育委員会によって調査が行われ ている第6次調査地点において、6世紀代から10 世紀代にかけての竪穴住居跡が75軒以上検出され ている。このことから、この第6次調査地点から 第18次調査区A区にかけての範囲に大規模な集落 が展開していた可能性があり、A区の旧河川跡の 辺りが集落域の際であったとみられる。しかし、 この旧河川跡を挟んだ対岸に位置するB区におい ても集落域が確認されており、広範囲な集落内に 河川が流れ込んでいたようである。

```
基本土層
   現表土
```

```
灰黄褐色土 As-a 粒子多量
しまり・粘性やや強い
褐色砂 しまり・粘性なし
褐色粘質土 しまり・粘性強い
淡灰褐色砂質土 しまり強い
淡灰褐色砂質土 しまり強い
粘性やや弱い
青灰色粘土 しまり・粘性強い
暗褐色土 白色粒子・赤色粒子少量
しまり強い 粘性弱い
褐色砂質土 しまり強い 粘性弱い
にぶい黄褐色土 黒褐色土・砂少量
しまり強い 粘性やや強い
灰黄褐色土 L-16 グリッドの遺物包含層
黒褐色ブロック多量 しまり強い
料性やや途い
無陶巴フロック重 しまり強い
粘性やや強い
にぶい黄褐色土 遺物少量
しまり強い 粘性やや強い
暗褐色土 白色粒子・赤褐色粒子少量
しまり強い 粘性弱い
灰白色土 白色粒子含む
しまり・粘性強い
 As-b 粒子多量
```

```
VII-1 古代面 (B・C区)
```

VII-2	古代面	(B •	(ZX)

VII-3 古代面 (B・C区)

XII

XIV 立川ローム層 (C区)

```
暗褐色粘質土 炭化物多量 赤褐色粒子微量
しまり・粘性強い
```

しまり・和仕強い 灰褐色土 下層に炭化物少量 しまり・粘性やや強い 灰黄褐色土 しまり・粘性強い にぶい灰褐色土 しまり・粘性強い にぶい灰褐色土 黄白色粒子微量

においた何によ」 関ロ日紀 丁城里 しまり・粘性あり にぶい灰褐色土 しまり・粘性あり 白色粒子・黄白色粒子多量 雲母微量 黒褐色土 炭化物少量 Fa火山灰・赤褐色粒子 微量 しまり・粘性やや弱い 黒色土 ローム粒子微量 しまりあり

ローム粒子微量 しまりあり 粘性やや弱い

暗褐色土 ロームブロック多量 炭化物少量 しまり・粘性やや強い

粘性あり黄褐色土

第5図 A区基本十層十層説明

I-2 旧表土 近世後期の水田面 (B・C区)

近世の洪水砂 (B・C区)

Ⅲ-2 Ⅲ-1 層洪水流路の底面泥層 (B・C区) Ⅲ-3 近世の洪水砂 (A区)

Ⅲ-4 近世の洪水層 (A 区)

中近世の洪水堆積土 (B・C区)

中近世の洪水堆積土 (B区) IV-3 中近世の洪水堆積土

IV-4 中近世の洪水堆積土(B区)

IV-5 中近世の洪水堆積土

V-1 中世面 (B ⋅ C 区)

V-2 中世面 (A区)

天仁元年(1108)の 浅間山火山灰降灰

古代面(A区) 古代面(A区) VII-5

VII-6 古代面(A区)

古墳時代面(B·C区) VIII-1

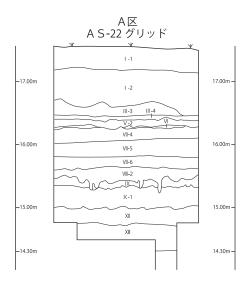
Ⅷ-2 古墳時代面(A区)

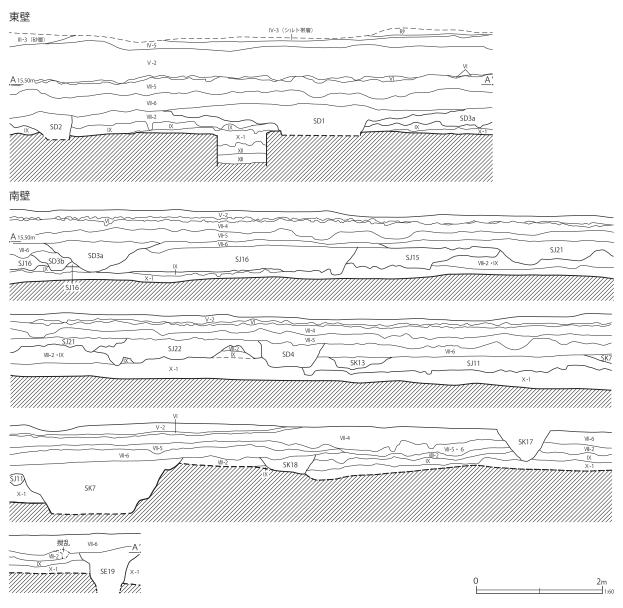
ΙX WILとX-1 の漸移層

ソフトローム層 ハードローム層 (B・C区) XI

黒色帯1

XIII 里色带 2

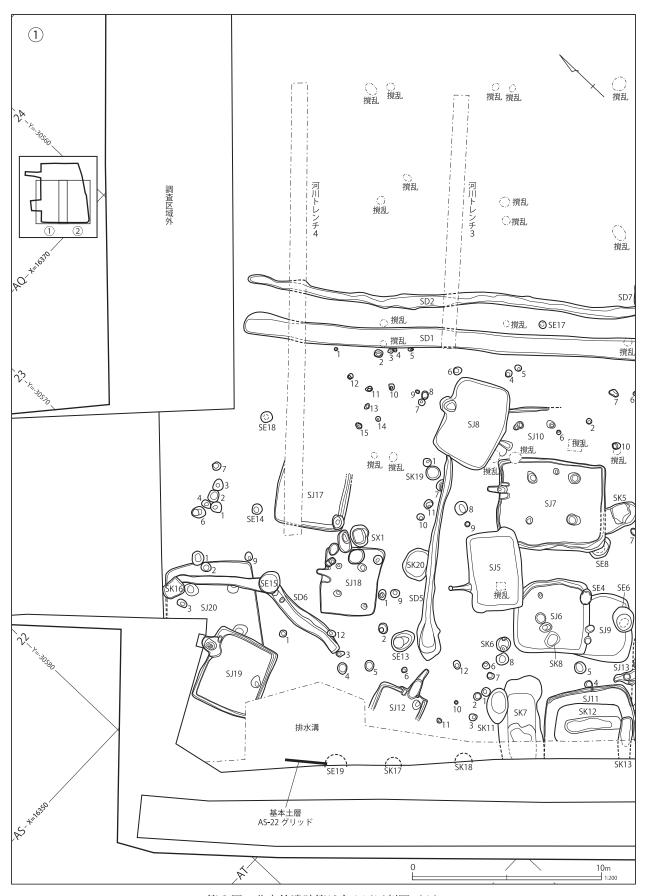




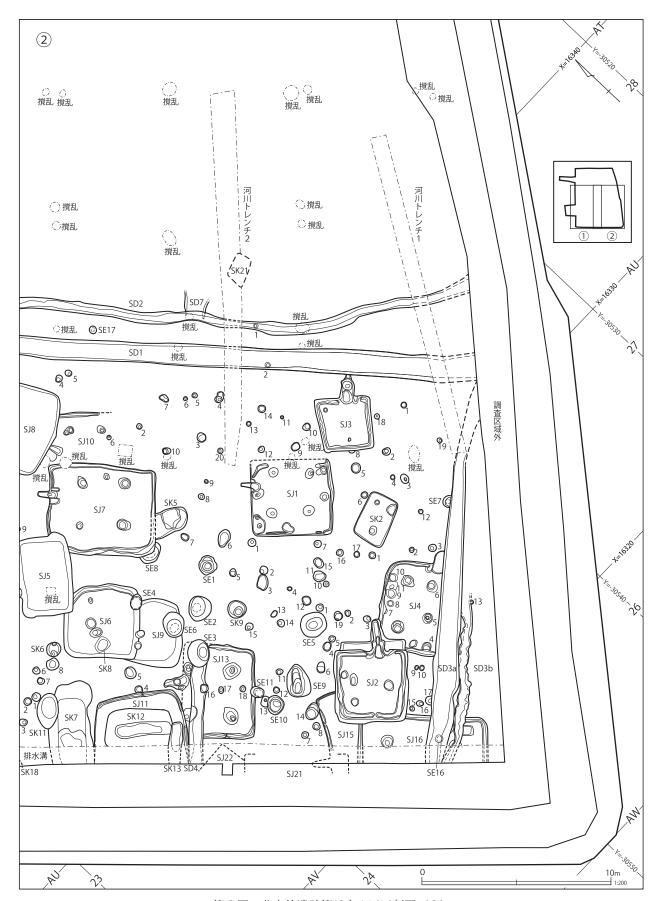
第6図 A区基本土層東壁・南壁断面図



第7図 北大竹遺跡第18次A区全体図



第8図 北大竹遺跡第18次A区区割図(1)



第9図 北大竹遺跡第18次A区区割図(2)

2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

A区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構数は、竪穴住居跡18軒、井戸跡13基、溝跡4条、土壙が14基検出されている。後世に削平されている調査区北半分を除いて、調査区南半分のほぼ全域に遺構が分布しており、調査区域外の西側、東側、南側へ集落が広がっていると想定される。

(1) 竪穴住居跡

A区第1号竪穴住居跡(第10図)

A区の第1号竪穴住居跡は調査区の南東部、 AT-24・25グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は認められないが、覆土が削平され浅く、北東辺の遺存状態は良くない。 平面形は隅丸方形で、残存規模は長軸長4.40m、 短軸長4.03m、深さ0.09mである。主軸方位はN -40°-Wを指す。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体と するが、削平されていることから堆積状況は不明 瞭である。

カマドは北西辺に設置され、規模は長さ1.04m、幅0.72mで燃焼部の深さは0.07mである。煙道部は残存長0.50m、深さ0.02m程度の残存であり、先端部が削平されて、実際はもっと長かった可能性がある。燃焼部は住居内部に収まる。袖は左右ともに残存状態が悪いが、地山削り出しとみられる。

カマドの反対側にあたる南東辺付近に0.5m~ 0.7m程度の範囲にかけて硬化面が広がっている。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴・ピットは9 基検出された。このうち、P1~4は配置関係から竪穴住居跡の主柱穴であるとみられるが、いずれも柱痕は確認されなかった。P5はカマドの反対側の南東辺に位置することから、入口施設に関わる可能性が想定される。P6~9は竪穴住居跡に伴う可能性は低いが、カマドや壁溝に切られていることから、竪穴住居跡の構築以前の時期に帰 属する可能性がある。

壁溝は残存状態が悪いが南西辺、南東辺及び 北側コーナーで検出されている。幅は0.08m~ 0.26m、深さは0.02m~0.09mである。

遺物は、須恵器、土師器、石製品、石製模造品が出土している。第11図1は須恵器の坏蓋である。体部に稜がみられ、端部が垂直に延びる。産地は末野窯と推定される。2は須恵器の腿である。外面に波状文が残る。

3~5は土師器の坏である。3は有段口縁坏で 内外面に黒色処理が施されている。4は蓋模倣坏 である。5は身模倣坏で外面に黒色処理が施され ている。6は緑泥片岩の敲石とみられる。7と8 は滑石製の石製模造品である。いずれも孔の部分 から欠損している。8は北辺コーナー付近から出 土している。9と10は滑石の臼玉である。いずれ も中央付近から出土している。

時期は、須恵器から TK10(新)型式に位置付けられ、6世紀中頃~後半頃と推定される。

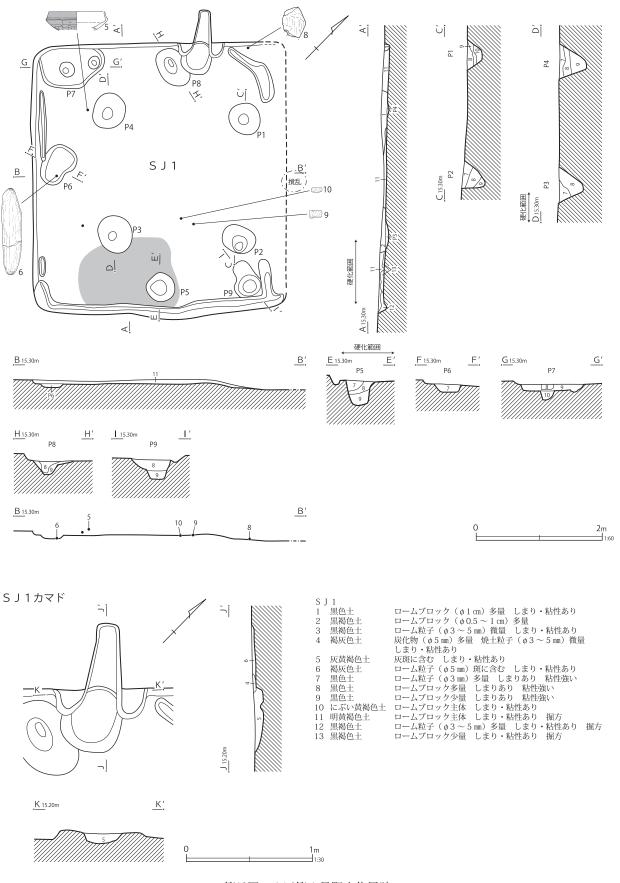
A区第4号竪穴住居跡 (第12・13図)

A区の第4号竪穴住居跡はAU −24・25グリッド、調査区の南東部に位置する。

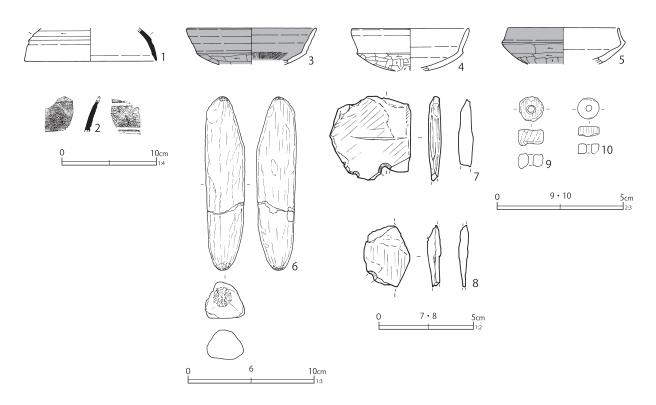
第3号溝跡に南西部から北東部にかけて壊されている。また、西コーナー部分は第2号竪穴住居跡に切られている。平面形は、3箇所のコーナーが残存していないが、残存する北西部のコーナーから隅丸方形と想定される。残存規模は長軸長4.75m、短軸長3.24m、深さ0.19mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。

覆土は黒褐色土及び暗褐色土を主体とする。中 央部を中心に貼床が認められ、部分的に掘方も残 る。

カマドは北東辺に設置されているが、南東側半 分が第3号溝跡によって壊されている。残存規模 は長さ1.20m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.21m である。燃焼部は住居の外側に張り出すように構



第10図 A区第1号竪穴住居跡



第11図 A区第1号竪穴住居跡出土遺物

第2表 A区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(13.7)	[3.4]	_	Ι	5	良好	灰	b 末野窯産か	
2	須恵器	颹	_	[3.3]	-	I	5	良好	灰	d 波状文	91-1
3	土師器	坏	(13.4)	[3.8]	-	HK	20	普通	にぶい黄橙	b·AT-25 有段口縁坏 内外面黑色処理	91-1
4	土師器	坏	(12.2)	[4.4]	-	AH	20	普通	褐	c 蓋模倣坏	91-1
5	土師器	坏	(11.6)	[3.7]	-	AHI	20	普通	黒褐	No.1 身模倣坏 外面黑色処理	91-1
6	石製品	敲石	長さ13.	8 幅3.1	厚さ2.9	重さ1	50.8	浅存100		No. 3・AT-24 P 3 緑泥片岩	91-1
7	石製模造品	不明	長さ[4.	4] 幅[4	2] 厚さ	0.7 孔径	圣(0.6)	重さ2	0.6 残存60	d 滑石 片面直 ミガキ	91-1
8	石製模造品	不明	長さ[3.	2] 幅[2	.4] 厚さ	至0.7 重	さ5.6	残存40)	No.4 滑石 片面直 ミガキ	
9	石製品	臼玉	長0.9	短1.0 厚	10.6 孔1	圣0.3 重	1.0 列	读存95		No.5 滑石 中C斜(2)aiN	
10	石製品	臼玉	長0.8	短0.8 厚	10.8 孔1	圣0.2 重	0.3 列	美 存90		No.6 滑石 中D斜2cII	

築されている。煙道部は検出されなかった。袖は 左側のみ残存しており、地山削り出しとみられる。

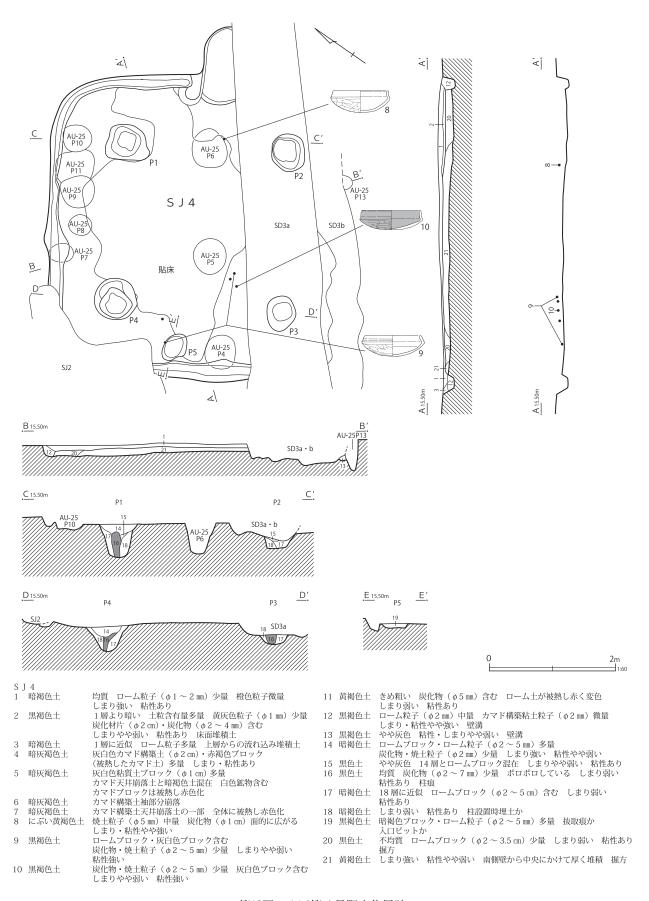
貯蔵穴は検出されなかった。第3号溝跡に切られた場所に位置していた可能性もあるが、溝跡の底面までの0.35m下では確認されていないことから、存在してもこれより浅かったといえる。

柱穴・ピットは5基検出された。P1~4は位置関係から竪穴住居跡の主柱穴とみられる。このうち、P2・3は第3号溝跡の底面から検出され

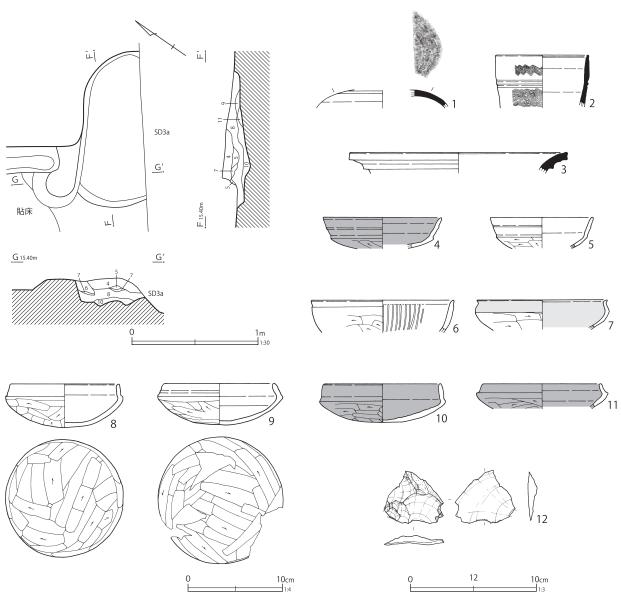
ている。P5はカマドの反対側に位置する南西辺 に位置することから、入口施設に関わる可能性が 想定される。

壁溝は、残存している北西辺及び南西辺の一部で検出されている。幅は0.14m~0.38m、深さは0.13m~0.21mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第13図1は須恵器の蓋である。体部にヘラ削りの痕が残る。稜は認められない。陶邑窯産の製



第12図 A区第4号竪穴住居跡



第13図 A区第4号竪穴住居跡カマド・出土遺物

第3表 A区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	_	[1.9]	-	Ι	5	良好	灰	AU-24~26 陶邑窯産か 天井部ヘラケ ズリ	91-2
2	須恵器	壺	(9.6)	[5.5]	-	Ι	5	普通	灰	b 末野窯産か 波状文	91-2
3	須恵器	壺か	(22.8)	[2.0]	-	EIK	5	良好	灰赤	a 自然釉	91-2
4	土師器	坏	(12.4)	[3.2]	-	GI	5	普通	黒褐	d 有段口縁坏 内外面黒色処理	
5	土師器	坏	(10.7)	[3.2]	-	AHI	10	普通	にぶい黄橙	c 有段口縁坏	
6	土師器	坏	(14.8)	[3.4]	-	AI	5	良好	橙	c 放射状暗文	
7	土師器	坏	(13.6)	[3.1]	-	HI	5	良好	赤褐	b 比企型坏 内外面赤彩	
8	土師器	坏	11.4	4.6	-	AHI	100	普通	明赤褐	No. 6 身模倣坏	91-2
9	土師器	坏	11.4	4.3	-	AHI	80	普通	にぶい黄褐	d・No.1・4 身模倣坏	91-2
10	土師器	坏	(12.2)	3.9	-	Ι	40	普通	褐灰	No.3 身模倣坏 内外面黑色処理	91-2
11	土師器	坏	(12.2)	[2.6]	-	ACI	10	普通	黒褐	P1 身模倣坏 内外面黑色処理	
12	石製品	掻削器か	長さ4.2	幅[4.8]] 厚さ0	.8 重さ	10.0 3	残存95		a	

品の可能性がある。2は須恵器壺の口縁部で垂直に立ち上がる長頸壺とみられる。2条の沈線を挟んで波状文がみられる。末野窯産の製品とみられる。3は須恵器の壺か小型の甕の口縁部とみられる。内外面に自然釉が掛かる。産地は不明である。4と5は土師器坏で有段口縁坏である。4は内外面に黒色処理が施されているが、摩滅が激しく部分的に剥げている。6は土師器の坏で内面に放射状暗文がみられる。7は比企型坏で内面及び口縁外面に赤彩が施されている。8~11は身模倣坏で10と11は内外面に黒色処理が施されている。12は掻削器の可能性がある石製品である。混入品の可能性がある。

時期は、1の須恵器がTK43型式の坏蓋とみられる点、残存状態の良い土師器の模倣坏や有段口縁坏からみても6世紀後半の可能性が高いが、6の暗文土器が混入でなければ、7世紀初頭の竪穴住居跡である可能性もある。

A区第5号竪穴住居跡(第14・15図)

A区の第5号竪穴住居跡はAS・AT-23・24 グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

他の遺構との重複関係は、第6・7号竪穴住居 跡と重複し、これらよりも新しい。

覆土はロームブロックを多量に含んだ黒褐色土を主体とする。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長4.35m、短軸長2.80m、深さ0.55mである。主軸方位はN-48°-Wを指す。

カマドは西辺に設置されている。規模は長さ 1.20m、幅0.50mで燃焼部の深さは0.29mである。燃焼部は不鮮明である。煙道部は長さ約 1 m、幅0.19mで煙出しピットがみられる。袖は確認されなかった。

貯蔵穴、柱穴、壁溝の諸施設はいずれも検出されなかった。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第16図 1は須恵器の坏身で、奈文研分類坏Gに該当す る。底部回転ヘラ削り左回転である。また、底部 に「一」とみえるへう記号があるが欠損している ため、他の記号の可能性もある。器面に光沢をも つ黒色粒子が付着している。産地は秋間窯とみら れる。2は須恵器の坏身で奈文研分類坏Hに該当 する。口縁部はやや長く外反して立ち上がる。稜 は丸みを持ち短い。底部は欠損しているが、湾曲 して丸底になるとみられる。産地は湖西窯とみら れる。3は須恵器甕の胴部破片である。外面に平 行タタキ、内面に同心円文アテ具痕がみられる。 また、外面には自然釉がみられる。産地は不明で あるが北関東系の製品とみられる。

4は土師器の皿である。内外面に黒色処理が施されているが摩滅して一部が剥げている。内面に放射状暗文が施されている。5は土師器の坏で4と同様に内面に放射状暗文が施されている。7は高坏で内外面に赤彩が施されている。摩滅により剥離が著しい。混入品である。8は土師器の甕である。口縁部から体部上半にかけて残存している。口唇端部に面を持つ。頸部に指頭押さえがみられる。9と10は土師器壺の底部である。9はカマド付近から出土しており、カマドで用いられていた可能性がある。また、至近から馬歯が出土している。

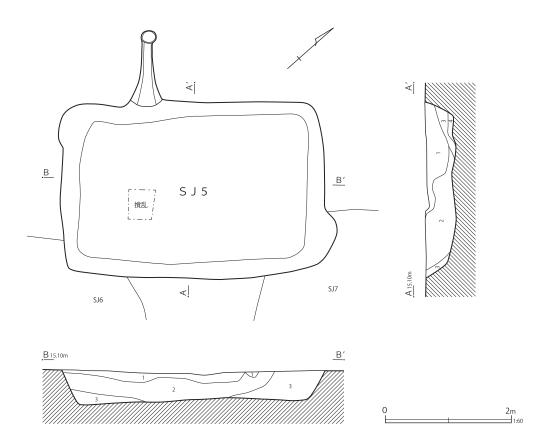
4・6・10は竪穴住居跡中央付近からまとまって出土し、1と8は南側コーナー付近から出土している。時期は、須恵器坏から7世紀中頃~後半とみられる。

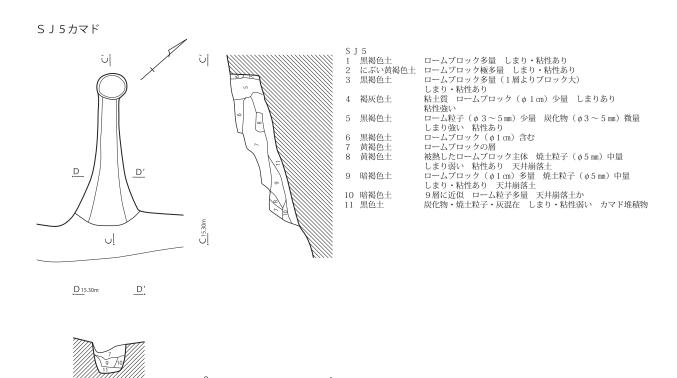
A区第6号竪穴住居跡(第17図)

A区の第6号竪穴住居跡はAT−23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

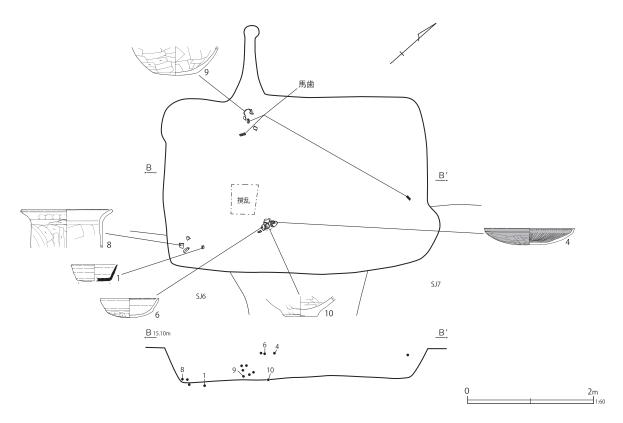
重複する他遺構との新旧関係は、第9号竪穴住 居跡と第8号土壙より新しく、第5号竪穴住居跡 と第4号井戸跡より古い。

覆土はロームブロック、炭化粒子を含む黒色土を主体とする。平面形は隅丸方形だがやや東辺が 歪む。規模は長軸長4.02m、短軸長3.90m、深さ 0.20mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。

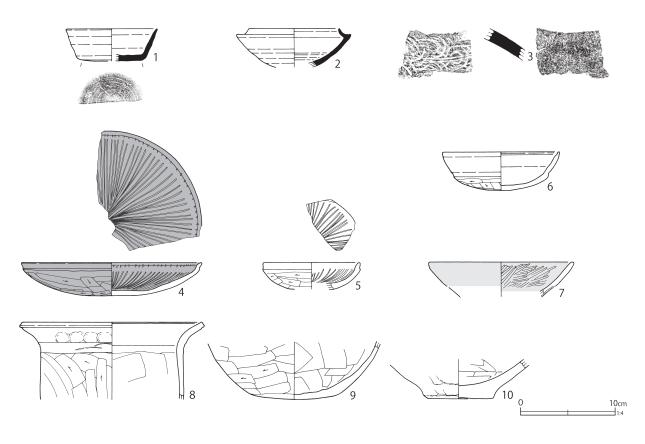




第14図 A区第5号竪穴住居跡



第15図 A区第5号竪穴住居跡遺物出土状況



第16図 A区第5号竪穴住居跡出土遺物

	番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
•	1	須恵器	坏	(9.5)	[3.3]	(6.2)	IK	45	良好	青灰	No.11 秋間窯産か 坏G 底部ヘラケズ リ ヘラ記号	92-1
	2	須恵器	坏	(9.5)	[3.9]	-	I	20	良好	灰	a 湖西窯産か 坏H	92-1
	3	須恵器	甕	_	[3.4]	_	I	5	良好	オリーブ黄	d 外面平行叩き 自然釉 内面同心円文	
l	4	土師器	Ш	(18.9)	3.5	_	AI	30	良好	にぶい黄褐	d·No.7 放射状暗文 内外面黑色処理	92-1
	5	土師器	坏	(10.0)	[2.8]	_	ACI	20	良好	明赤褐	c 放射状暗文	92-1
i	6	土師器	坏	(12.1)	4.0	-	ACHI	30	普通	明赤褐	No.8 蓋模倣坏 内面摩滅により剥離	92-1
	7	土師器	高坏	(15.2)	[3.6]	-	AIK	20	普通	明赤褐	AU-23 内外面赤彩 体部外面剥離	
	8	土師器	甕	(18.8)	[8.1]	_	AI	20	良好	橙	No.13	
	9	土師器	壺	_	[6.1]	9.2	EHI	30	普通	にぶい黄褐	a・カマド・No.14	92-1
	10	土師器	壺	_	[4.1]	7.2	AI	30	普通	橙	No.15	92-1

第4表 A区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表(第16図)

カマドは検出されなかったが、北東コーナー付近に焼土が多く、第5号竪穴住居跡に壊されている可能性がある。ピットは4基検出されたが、いずれも浅く、配置も規則性がない。壁溝は東辺のみで確認されている。規模は、幅が0.26m~0.37m、深さは0.06m~0.12mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第18図1は、須恵器壺の肩部である。内面に指押さえの痕がある。外面に、カキ目と自然釉がみられる。胎土が灰赤色を呈している。産地は陶邑窯の可能性がある。2は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文のアテ具痕がみられる。

3~6は土師器の暗文坏である。いずれも内面に放射状暗文が施されている。3と6は胎土が明るい橙色を呈しているのに対して、4はややくすんだ胎土である。5は内外面に黒色処理が施されている。

7は土師器の比企型坏で口縁部が屈曲し、口唇部に沈線が廻る。胎土は黒褐色を呈している。8は土師器の有段口縁坏である。橙色で明るい胎土を呈している。9は土師器の鉢である。器面が滑らかで堅緻である。10は土師器壺の底部である。胎土に角閃石が多量に含まれている。内面が煤けている。

11は板状の緑泥片岩である。カマドの構築材と

みられるが、中央付近から出土している。

第6号竪穴住居跡では、カマドが検出されていないが、前述の通り、第5号竪穴住居跡に壊された可能性がある。その際に動いたか、他の竪穴住居跡のカマド構築材が混入したものと思われる。

時期は、暗文坏から7世紀中頃に位置付けられる。

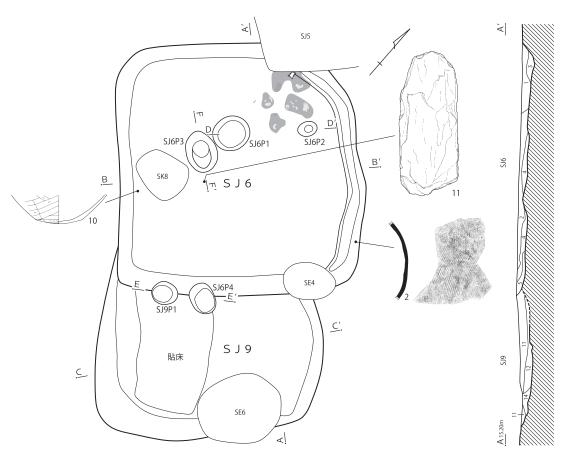
A区第9号竪穴住居跡(第17図)

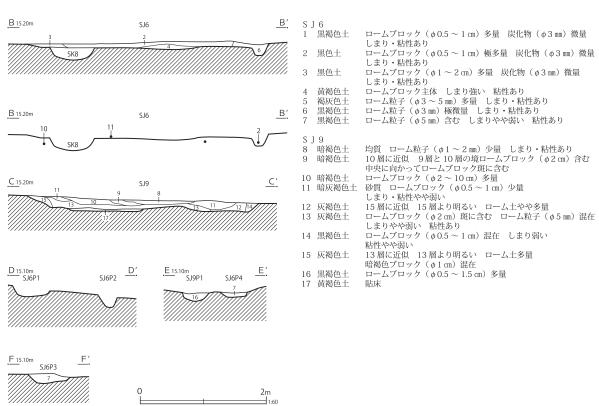
A区の第9号竪穴住居跡はAT −23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第6号竪穴住 居跡により北西辺側が壊されている。また、北東 側で第4号井戸跡、南東側で第6号井戸跡に壊さ れている。

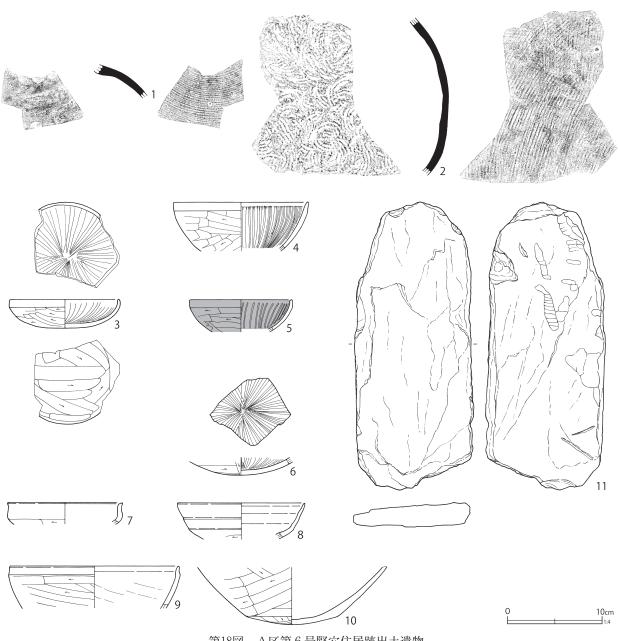
覆土は、上層はロームブロックを含む暗褐色 土、下層は灰褐色土を主体とする。平面形は、北 辺が残存しておらず、東辺がやや歪んでいるが、 隅丸方形であったと想定される。残存規模は長軸 長3.60m、短軸長2.32m、深さ0.20mである。長 軸方位はN-42°-Wを指す。

カマドは検出されなかった。北辺に設置されていたものが、第6号竪穴住居跡に壊されている可能性がある。主柱穴の可能性があるピットが1基検出されているが、規模が浅く判然としない。また、中央から西側にかけて貼床が検出されている。壁溝や貯蔵穴は検出されなかった。





第17図 A区第6·9号竪穴住居跡



第18図 A区第6号竪穴住居跡出土遺物

図示できる遺物は出土しなかったが、第6号竪 穴住居跡に壊されていることから、7世紀中頃以 前に位置付けられる。

A区第7号竪穴住居跡(第19図)

A区の第7号竪穴住居跡はAS・AT-24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第10号竪穴住 居跡、第8号井戸跡、第5号土壙より新しく、第 5号竪穴住居跡より古い。

覆土は浅く残存状況は良くないが、黒褐色土を

主体とする。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸 長5.70m、短軸長4.80m、深さ0.10mである。主軸方位はN-42° -Wを指す。

カマドは北西辺に設置されている。残存規模は 長さ1.43m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.20mで ある。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。 煙道部は長さ0.50m、幅0.33mである。袖は両袖 とも一部に粘土が用いられる。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は4基検出されている。いずれも深さが0.40m~0.70mあ

第5表 A区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表(第18D

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	_	[3.4]	_	I	10	良好	灰赤	b・AT-24 陶邑窯産か 自然釉	92-2
2	須恵器	甕	_	[16.5]	_	EIK	5	良好	灰	No. 2・SK12No. 5 外面平行叩き 内面同心円文	92-2
3	土師器	坏	(11.4)	3.0	_	IK	40	良好	明赤褐	b·AT-24 放射状暗文	92-2
4	土師器	坏	(14.0)	[5.1]	_	ACHI	10	良好	黒褐	a 放射状暗文	92-2
5	土師器	坏	(10.6)	[3.3]	_	ACI	10	普通	黒褐	b 放射状暗文 内外面黑色処理	92-2
6	土師器	坏	_	[1.9]	_	AHI	20	良好	橙	a 放射状暗文	92-2
7	土師器	坏	(12.2)	[2.2]	_	IK	10	普通	黒褐	比企型坏	
8	土師器	坏	(13.3)	[3.7]	_	CI	5	良好	橙	b 有段口縁坏	
9	土師器	鉢	(17.6)	[4.4]	_	HI	15	良好	褐灰	a	
10	土師器	壺	_	[6.0]	9.6	CIK	10	普通	にぶい黄橙	No.3 角閃石多量	
11	石製品	カマド構築材	長さ30.	4 幅12.5	5 厚さ2	.7 重さ	1617.2	残存1	00	No. 4 緑泥片岩	92-2

り、残りが良い。壁溝は全周しているが、残存 状況はあまり良くない。規模は、幅が0.20m~ 0.35m、深さは0.08m~0.12mである。

遺物は須恵器、土師器、臼玉が出土している。 第20図1は須恵器坏身である。返し部分は受け口より長く突き出す。口縁部は欠損しているが、や や内傾し、小型化している。奈文研分類坏Hに位 置付けられる。産地は末野窯とみられる。2は須 恵器甕の肩部である。外面に平行タタキ後カキ目 痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3は須 恵器甕の胴部片である。外面に格子タタキ、内面 に同心円文アテ具痕とその後に施されたナデの痕 がみられる。

4は土師器坏である。内外面に赤彩が施されているが、大部分は薄くなっている。主柱穴のP2から出土している。5は土師器の有段口縁坏である。内外面に黒色処理が施されているが、部分的に黒色処理が残っていない。6はミニチュア土器である。口縁部は欠損している。体部に縦方向のヘラケズリ調整が認められる。7~9は土師器の甕である。7は口縁部にヨコナデ、胴部に斜方向にヘラケズリ調整が残る。胎土は明るい黄橙色を呈する。8も口縁部にヨコナデが残り、胴部にヘラケズリがみられる。9は底部である。底部と外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの痕跡がみられる。

10は滑石製の臼玉である。側面形は弱い棗玉形

で孔面の一方が斜めにカットされている。側面の 研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面と も研磨は施されていない。穿孔は片面穿孔で錐先 貫通である。

時期は、須恵器坏身から7世紀前半~中頃に位置付けられよう。

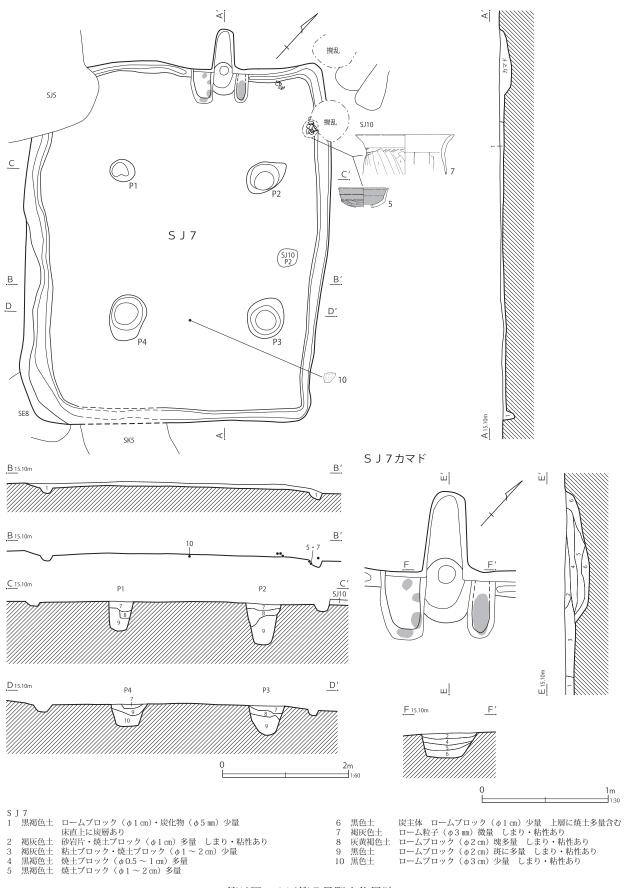
A区第8号竪穴住居跡 (第21・22図)

A区の第8号竪穴住居跡はAS-24グリッド、 調査区の南部中央付近に位置する。重複する他 遺構との新旧関係は、第10号竪穴住居跡より新し く、第5号溝跡より古い。

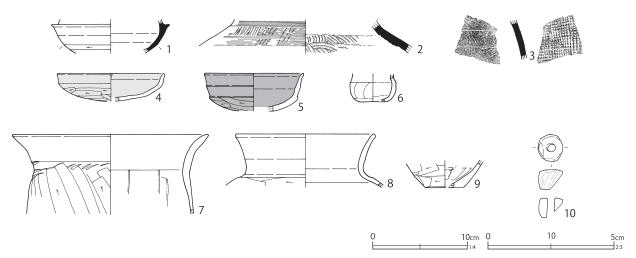
覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長4.55m、短軸長3.20m、深さ0.45mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

カマドは北西辺に設置されている。残存規模は 長さ0.90m、幅0.93mで燃焼部の深さは0.60mで ある。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。 煙道部は検出されなかった。カマドの燃焼部前及 び中央から東側にかけて硬化面が広がっていた。 貯蔵穴、主柱穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。第23 図1は、かえりを持つ須恵器の蓋である。胎土は 灰白色を呈する。部分的に煤けている。2は須恵 器の坏である。底部回転ヘラケズリ調整で左回転 と思われる。産地は末野窯とみられる。3は土師



第19図 A区第7号竪穴住居跡



第20図 A区第7号竪穴住居跡出土遺物

第6表 A区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	_	[3.5]	_	EI	15	良好	青灰	末野窯産か 坏H	93-1
2	須恵器	甕	_	[3.4]	_	Ι	5	良好	青灰	b 外面平行叩き後カキ目 内面同心円 文	
3	須恵器	甕	_	[4.2]	_	IK	5	良好	暗青灰	c 外面格子叩き 内面同心円文後ナデ 自然釉	
4	土師器	坏	(11.2)	[2.8]	_	AI	40	良好	明赤褐	P 2 内外面赤彩	93-1
5	土師器	坏	(10.2)	[3.9]	_	AI	40	普通	褐灰	No.1 有段口緣坏 内外面黑色処理	93-1
6	土師器	ミニチュア土器	_	[2.8]	(2.8)	EI	20	普通	灰褐	a	93-1
7	土師器	甕	20.4	[8.3]	-	CHIK	30	良好	黄橙	No. 1	93-1
8	土師器	甕	(14.4)	[5.5]	-	CHIK	20	普通	にぶい黄橙	a •AS-24	
9	土師器	甕	_	[2.8]	(3.8)	CDIK	10	普通	灰黄褐	b・SJ10 底部ケズリ	
10	石製品	臼玉	長1.1	短1.0 厚	10.8 孔	至0.3 重	[1.1 列	浅 存100		No.7 滑石 中B斜(2)cⅡ	

器の坏である。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整がみられる北武蔵型坏である。4は土師器甕である。胴部に斜め方向にヘラケズリ調整、内面にヘラナデ痕がみられる。胎土に角閃石をやや多く含む。5は土師器の甑である。口縁端部に面を持ちへこむ。胴部外面に縦方向の細かいヘラケズリ、内面には丁寧なヘラナデが施され、器面が滑らかであるが、一部の粘土が剥離している。

土師器の甕と甑はカマド周辺から出土しており、カマドで使用されていたとみられる。時期は 須恵器の年代から7世紀末~8世紀初頭に位置付 けられる。

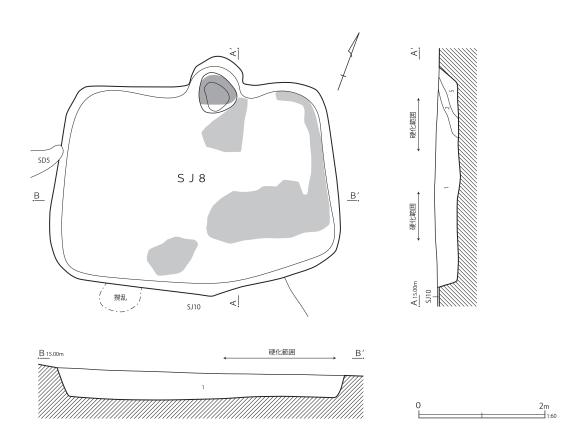
A区第10号竪穴住居跡(第24図)

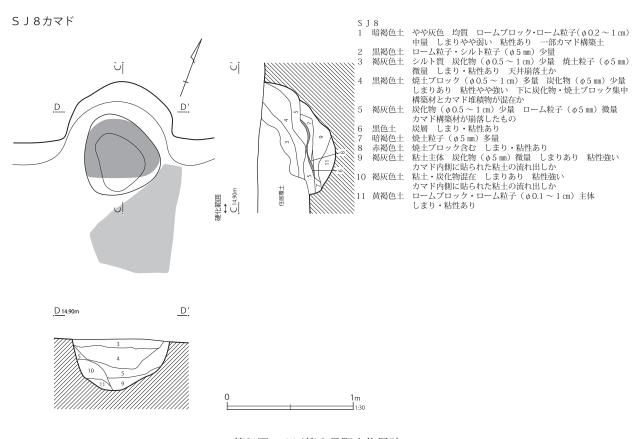
A区の第10号竪穴住居跡は AS -24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

他の遺構との重複関係は、第7・8号竪穴住居跡 AS-24P6と重複し、これらより古い。覆土は黒褐色土を主体とするが残存状態は極めて悪い。竪穴住居跡の北東部分のみが残存しており、大部分が残存していない。平面形は残存範囲から推定すると方形状と思われる。

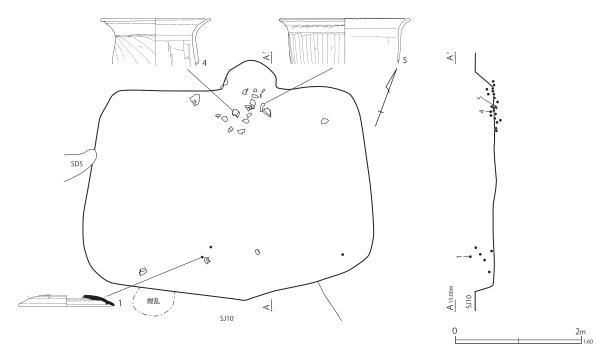
規模は残存長で長軸長3.10m、短軸長2.70m、深さ0.10mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

カマドは北辺に袖と想定される粘土ブロックと

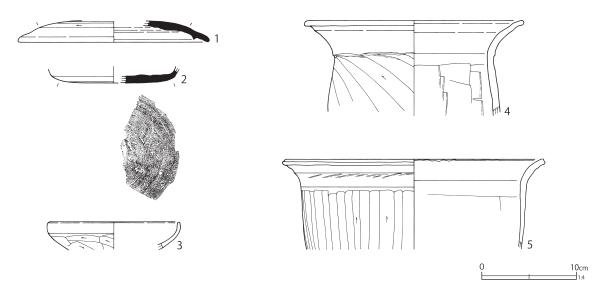




第21図 A区第8号竪穴住居跡



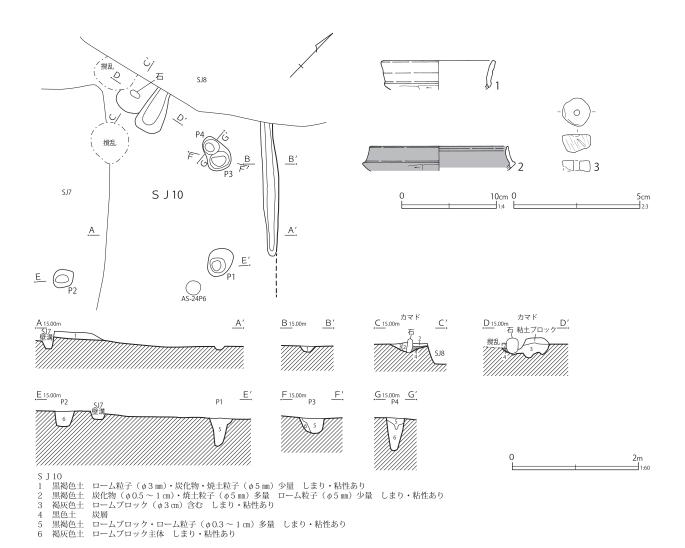
第22図 A区第8号竪穴住居跡遺物出土状況



第23図 A区第8号竪穴住居跡出土遺物

第7表 A区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(20.0)	[2.2]	_	K	40	良好	灰白	No.3 かえり蓋 ヘラケズリ	93-2
2	須恵器	坏	_	[1.7]	(12.9)	EIK	20	普通	灰	c 末野窯産か 底部ヘラケズリ	93-2
3	土師器	坏	(13.5)	[2.8]	_	ACI	20	普通	にぶい橙	c·d 北武蔵型坏	93-2
4	土師器	甕	(22.6)	[9.9]	_	CI	10	普通	橙	No.19 角閃石やや多量	93-2
5	土師器	甑	(27.0)	[9.4]	_	AHI	10	良好	明褐	No. 6 内面粘土剥離	93-2



第24図 A区第10号竪穴住居跡·出土遺物

第8表 A区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	[2.9]	_	AI	5	普通	にぶい黄褐	カマド	
2	土師器	坏	(14.5)	[2.5]	_	AHI	5	良好	P1 身模倣坏 内外面黑色処理		
3	石製品	白玉	長1.1	短1.1 厚	10.7 孔	径0.2 重	[0.9 列	支 存50	滑石 中D斜2cⅡ		

支脚として使用された石が検出されているが、残 存状態が極めて悪く規模は不明である。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は4基検出されたが、北西側の柱穴は検出されなかった。その一方で北東側の柱は重複している。壁溝は北東コーナーで検出された。幅は0.15m~0.25m、深さは0.02m~0.10mである。他の部分では検出されなかった。

遺物は、土師器と臼玉が出土している。第24図 1 は土師器の坏である。カマドから出土している。 2 は土師器の身模倣坏である。 P 1 から出土している。内外面に黒色処理が施されている。 1、2 ともに破片資料である。 3 は滑石製の臼玉である。側面形は円筒形で孔面の一方が、一部欠損している。側面の研磨は斜め方向に施されている。

孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔 は片側穿孔で錐先貫通である。

時期は、土師器の年代から6世紀末頃に位置付けられる。

A区第11号竪穴住居跡 (第25図)

A区の第11号竪穴住居跡はAT −23・24、AU −23グリッド、調査区中央の南西端付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第13号竪穴住 居跡、AT -23 P 4 より新しく、第 4 号溝跡、第 7・12・13号土壙より古い。

覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。平面形は西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。規模は長軸長5.00m、短軸長3.70m以上、深さ0.25mである。長軸方位はN-51°-Wを指す。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は 2基検出された。壁溝は東辺から南辺にかけて検 出された。幅は0.15m~0.24m、深さは0.08m~ 0.22mである。

遺物は須恵器、土師器、土製品などが出土している。第26図1は須恵器坏の坏身で、奈文研分類坏Gに該当する。底部回転ヘラケズリ右回転である。産地は末野窯である。

2は土師器の坏で有段口縁坏である。内外面に 黒色処理が施されているが、内面の黒色処理は薄 くなっている。3は土師器の坏で身模倣坏であ る。口縁部はやや内傾しつつ立ち上がり、体部に ヘラケズリ調整を施す。4は土師器の暗文坏であ る。内面体部に放射状暗文が、見込み部分に螺旋 暗文が施されている。口縁部にヨコナデ、外面体 部にヘラケズリ調整が施されている。5は土師器 の壺である。口縁部にヨコナデ、外面体部にヘラ ケズリ調整が施されている。胎土に角閃石を多く 含む。6と7は土師器の甕である。6は口縁部に ヨコナデ調整、胴部内面にヘラケズリ調整、内面 にヨコナデ調整がみられる。7は底部を含む破片 で、胴部下半から底部にかけてヘラケズリ調整がみられる。

8・9・10は土製品で、8は土玉、9は土錘である。10は棒状の形状を呈するが、器種は不明である。11は有孔砥石である可能性がある。やや軟質である。詳細な石材は不明である。

時期は須恵器の坏Gや暗文坏から7世紀中頃から後半に位置付けられる。

A区第13号竪穴住居跡(第27図)

A区の第13号竪穴住居跡はAT・AU -23・24 グリッド、調査区の中央のやや南寄り付近に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第11号竪穴住居跡、第3・11号井戸跡、第4号溝跡より古く、AT-24P16・17、AU-24P18との新旧関係は不明である。

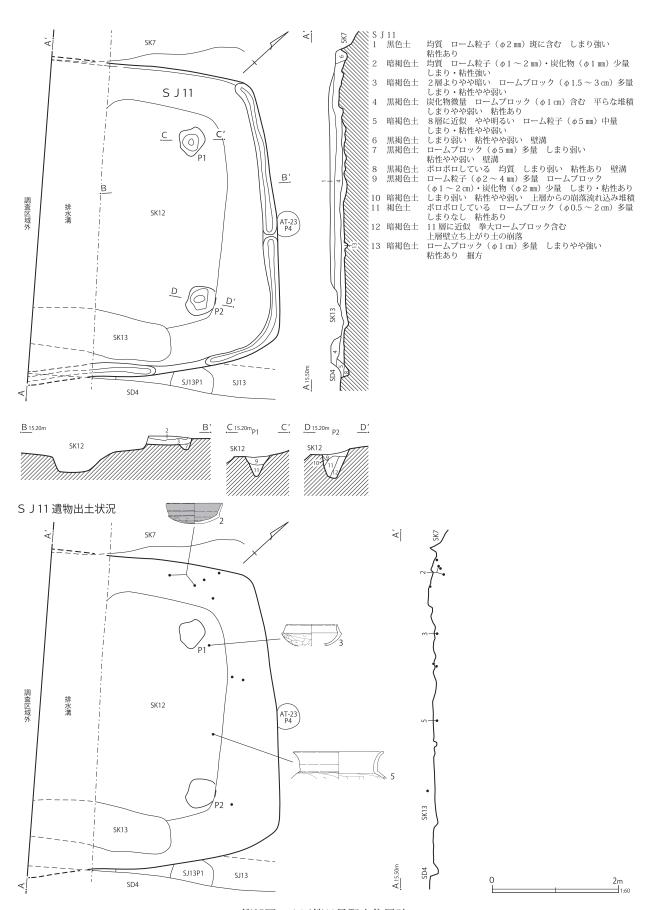
覆土は、大部分が削平されていることから堆積 状況は不明瞭である。

平面形は北辺の立ち上がりが削平され不明瞭であるが、カマドの燃焼部が検出されていることから、推定線から大きく外れることはない。プランは東西方向にやや長い隅丸長方形で、規模は長軸長4.96m、短軸長3.87m、深さ0.05mである。主軸方位はN-43°-Wを指す。

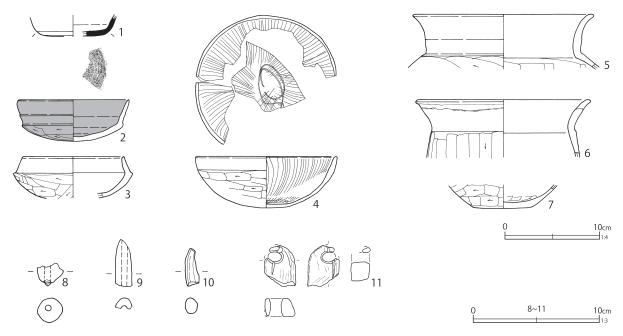
カマドは北西辺に設置されている。残存規模は 長さ1.50m、幅0.76mで燃焼部の深さは0.20mで ある。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。 煙道部は検出されなかった。

貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は四方に4 基検出された。壁溝は北辺以外で検出された。幅は0.11m~0.32m、深さは0.06m~0.15mである。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。第28 図1は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキ 痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。胎土は 灰白色を呈する。2は土師器の蓋模倣坏である。 体部にヘラケズリ調整が施されている。P1から 出土している。3は土師器の有段口縁坏である。



第25図 A区第11号竪穴住居跡



第26図 A区第11号竪穴住居跡出土遺物

第9表 A区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	_	[2.2]	(6.2)	AIK	15	普通	灰黄	c 末野窯産 坏G 底部外面ヘラケズ リ	94-1
2	土師器	坏	(11.5)	4.3	_	CHI	40	普通	黒褐	No.3·4 有段口縁坏 内外面黒色処理	94-1
3	土師器	坏	(10.6)	[4.3]	_	ACHI	30	良好	にぶい橙	No. 8 身模倣坏	94-1
4	土師器	坏	(14.7)	5.4	_	HIK	40	普通	橙	b·c 放射状暗文·螺旋暗文	94-1
5	土師器	壺	(18.6)	[5.7]	_	CHI	10	普通	明黄褐	No. 2 · AT-23 角閃石多量	94-1
6	土師器	甕	(18.0)	[6.0]	_	AHI	10	普通	灰黄褐	a·d	94-1
7	土師器	甕	_	[2.5]	6.1	HI	10	普通	褐灰	a・b 底部ヘラケズリ	94-1
8	土製品	土玉	最大高 重さ3.7	l.3 径2. 孔径0.		AHI	50	普通	にぶい黄橙	b	
9	土製品	土錘	長軸長 1.3 重		大径 L径(0.5)	AI	30	普通	にぶい黄橙	a	
10	土製品	不明	長さ[2. 重さ2.8		1.2]	AI	50	普通	にぶい黄橙	a 棒状製品	
11	石製品	砥石か	長さ[3.	2] 幅2.	5 厚さ1	.5 孔径	(1.2)	重さ12	2.7		

胎土は浅黄橙色を呈する。黒色処理は施されていない。

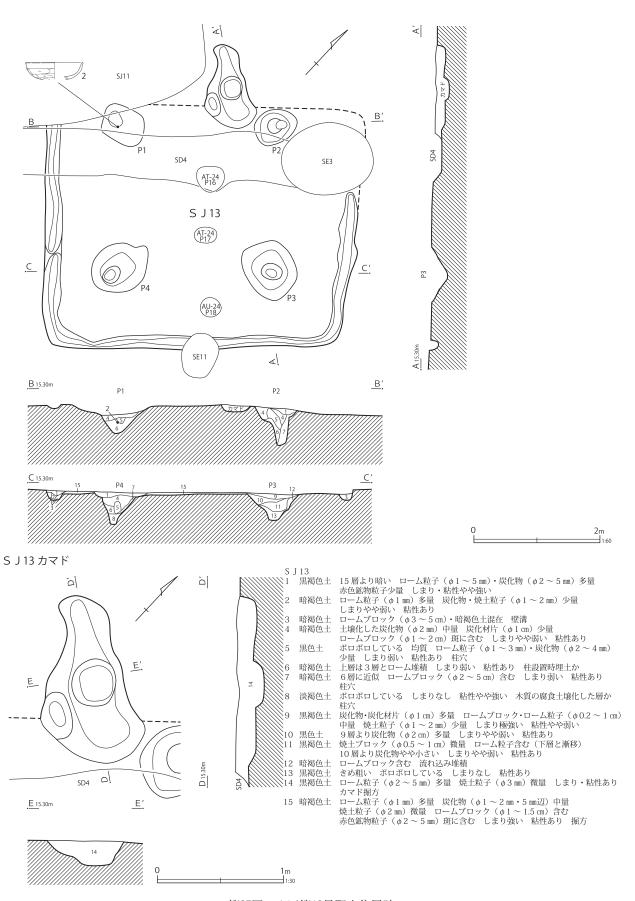
時期は主柱穴から出土した土師器から7世紀中 頃以降には機能していたとみられる。

A区第15号竪穴住居跡 (第29図)

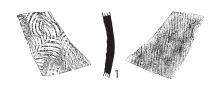
A区の第15号竪穴住居跡はAU-24グリッド、 調査区の南側に位置する。重複する他遺構との 新旧関係は、第2・16・21号竪穴住居跡、AU- 24P14より古い。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする堆積土であるが、西側は調査区域外に至り、南側は第2・16号竪穴住居跡によって壊されており平面形は不明である。

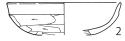
規模は残存部分で長軸長4.96m、短軸長 3.87m、深さ0.15mである。主軸方位はN-55° -Wを指す。

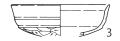
カマドは調査区南壁において検出されたが、東



第27図 A区第13号竪穴住居跡









第28図 A区第13号竪穴住居跡出土遺物

第10表 A区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[6.9]	_	IK	5	普通	灰白	P1 外面平行叩き 内面同心円文	94-2
2	土師器	坏	(11.8)	[3.3]	_	AK	30	普通	にぶい橙	P 4 · No. 1 蓋模倣坏	94-2
3	土師器	坏	(10.3)	[3.3]	_	CIK	30	普通	浅黄橙	有段口縁坏	94-2

側は排水溝の掘削によって削平され、西側は調査 区法面に位置するが、安全対策上掘削できなかっ たため、平面形は不明である。

貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。壁溝は 北東コーナー部分で検出された。幅は0.09m~ 0.20m、深さは0.04m~0.10mである。

遺物は、第29図1の土師器蓋模倣坏が1点出土 している。時期は土師器坏から6世紀代に位置付 けられるが、1点のみのため精度に欠ける。しか し第2号竪穴住居跡に壊されていることから8世 紀末以前であることは確実である。

A区第16号竪穴住居跡 (第30図)

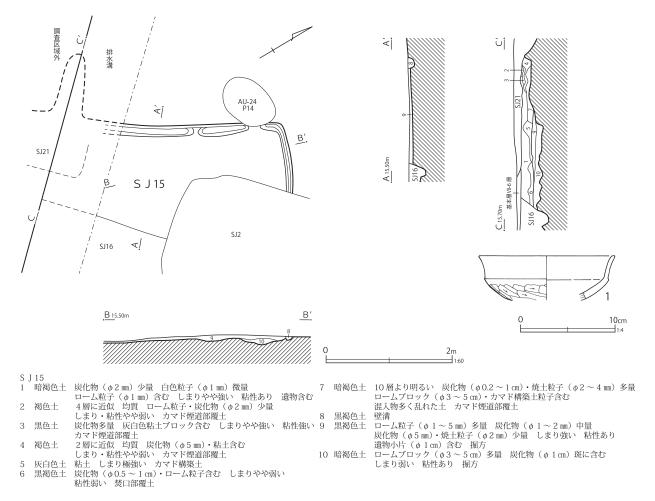
A区の第16号竪穴住居跡はAU-24、AV-24・25グリッド、調査区の南端に位置する。重複する他遺構との新旧関係は、第15号竪穴住居跡、第16号井戸跡より新しく、第2号竪穴住居跡、第3号溝跡より古い。

覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。平面形は南西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。残存規模は長軸長6.80m以上、短軸長1.70m、深さ0.17mである。主軸方位はN-46°-Eを指す。

カマドは北東辺の中央やや東寄りの場所に設置 されている。規模は長さ1.50m、幅1.56mで燃焼 部の深さは0.10mである。燃焼部は住居壁からや や外側に位置する。袖は燃焼部の両脇に土師器の 甕が2点並んで出土したことから、これが、袖の 芯材として転用されていた可能性がある。

貯蔵穴はカマドの東隣にて検出された。規模は長軸長0.80m、短軸長0.54m、深さ0.36mである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む暗褐色土であり、カマド燃焼部からもたらされた土で埋没したとみられる。主柱穴は北側に2基検出された。いずれの柱穴も深さ約0.50mあり、残存状態が良好であったので、調査区域外にあたる南側の2基も残存している可能性が高い。壁溝は検出された範囲を全周する形で確認された。幅は0.19m~0.28m、深さは0.10m~0.17mである。調査区域外にあたる南側でも残存している可能性が高い。

遺物は土師器が多く出土している。第31図1は 土師器の坏である。口唇端部に沈線が廻り窪む。 口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整が施さ れる。器面はやや滑らかである。2は身模倣坏で ある。口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整 が施される。胎土がやや砂質で器面がざらつく。 3と4は土師器の比企型坏である。いずれも内外 面に赤彩が施されている。5~9は土師器の甕で ある。いずれも口縁部が残存しており、胴部には 縦方向のヘラケズリ調整が施されている。5と6 は口唇端部に面を持つ。9は小型の甕で口唇部が 肥厚する。6と7はカマドの袖材として転用され



第29図 A区第15号竪穴住居跡·出土遺物

第11表 A区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.3)	[4.6]	_	EI	20	良好	橙	南壁内 蓋模倣坏	

ていた可能性がある。

時期は、土師器から6世紀後半に位置付けられる。

A区第17号竪穴住居跡(第32図)

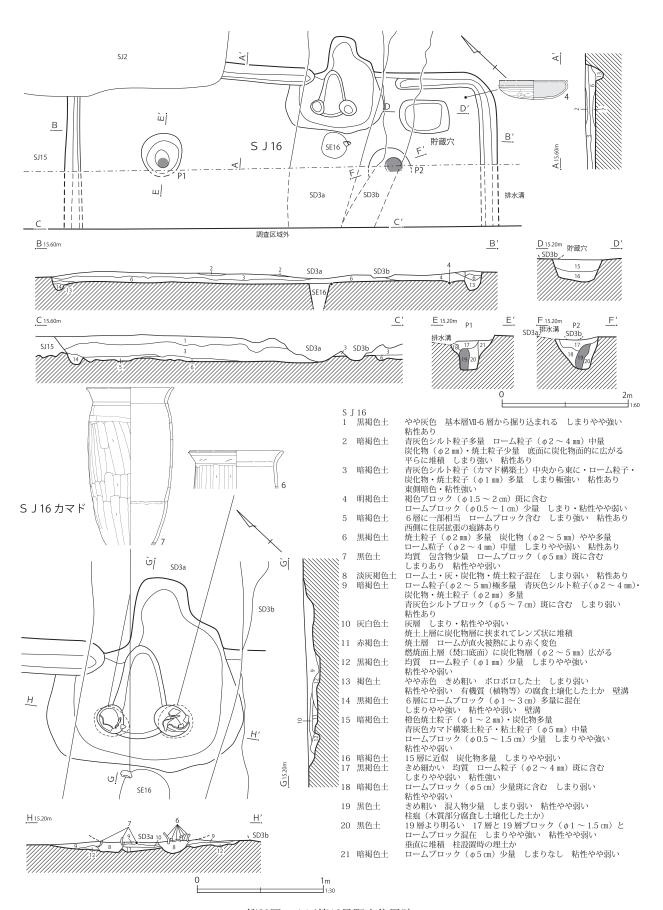
A区の第17号竪穴住居跡はAR・AS-23グリッド、調査区の西側に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第1号鍛冶関 連遺構の炉跡と重複しこれより古い。

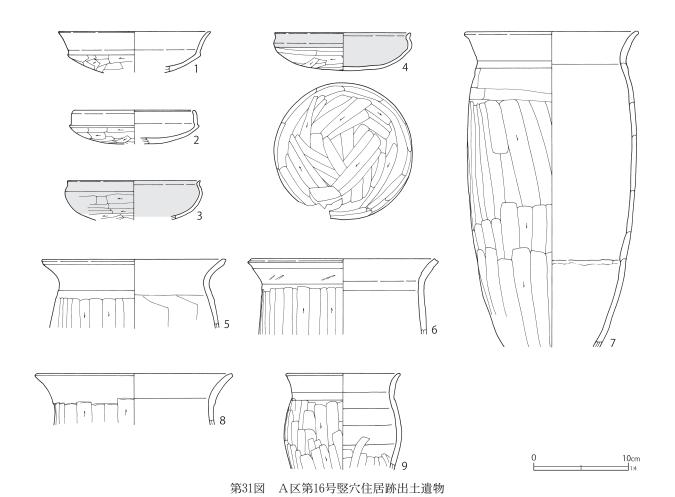
覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。東 辺が残存していないが、平面形は隅丸長方形と みられる。規模は長軸長3.85m、短軸長3.50m以 上、深さ0.38mである。長軸方位は $N-35^{\circ}-W$ を指す。

カマド、主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。 壁溝は南東辺及び南西辺で検出された。幅は 0.30m~0.39m、深さは0.30m~0.39mである。北 西辺において覆土が残っていたが、壁溝が検出さ れなかったことから、この部分では当初から壁溝 は存在していなかった可能性がある。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。第 33図1と2は須恵器甕の胴部片である。いずれも 外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円文アテ



第30図 A区第16号竪穴住居跡



第12	表 A区第	516号竪穴	住居跡は	出土遺物	勿観察表	長(第31	図)				
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(16.0)	[4.2]	_	HI	20	良好	黄橙	蓋模倣坏	
2	土師器	坏	(12.7)	[3.5]	_	ACGH	30	普通	にぶい橙	AU-24 身模倣坏 角閃石やや多量	95-1
3	土師器	坏	(13.8)	[4.1]	_	IK	10	良好	赤褐	a 比企型坏 内外面赤彩	95-1
4	土師器	坏	14.1	3.9	_	HI	95	良好	赤褐	No.5 比企型坏 内外面赤彩	95-1
5	土師器	甕	(19.3)	[7.2]	_	AEI	10	普通	にぶい赤褐	SJ14b	
6	土師器	甕	19.2	[7.9]	_	AHI	20	普通	にぶい褐	No. 4 • SJ14	
7	土師器	甕	18.0	[33.1]	_	GI	50	普通	にぶい橙	No. 3 • SJ14 • SJ14b • SJ14No. 1 • SD3	95-1
8	土師器	甕	(20.4)	[5.3]	_	AEGI	10	普通	橙	SJ14·SJ14b 砂粒子多量	
9	土師器	甕	(11.9)	[10.1]	_	GHI	20	普通	にぶい赤褐	SJ14b	

具痕がみられる。同一個体の可能性がある。3は 土師器の坏で、浅黄橙色を呈する北武蔵型坏であ る。4は土師器の鉢である。胴部に縦方向のヘラ ケズリ調整がみられる。甕の可能性もある。時期 は北武蔵型坏から7世紀末頃と想定される。

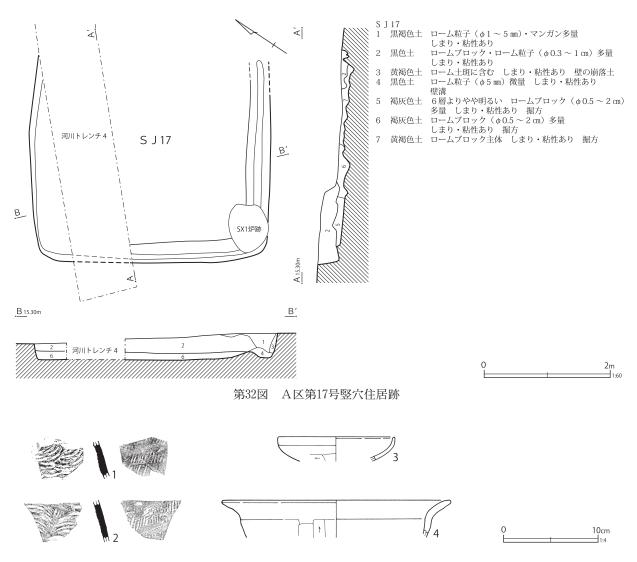
A区第18号竪穴住居跡 (第34図)

A区の第18号竪穴住居跡はAS-23グリッド、

調査区の西側に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第1号鍛冶関 連遺構と重複しこれより古い。

覆土は部分的に黒色土が堆積しているが、大部分が削平されている。平面形はやや歪んだ隅丸長方形とみられる。規模は長軸長3.65m、短軸長2.97m、深さ0.15mである。主軸方位はN-36°



第33図 A区第17号竪穴住居跡出土遺物

第13表 A区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表(第33図)

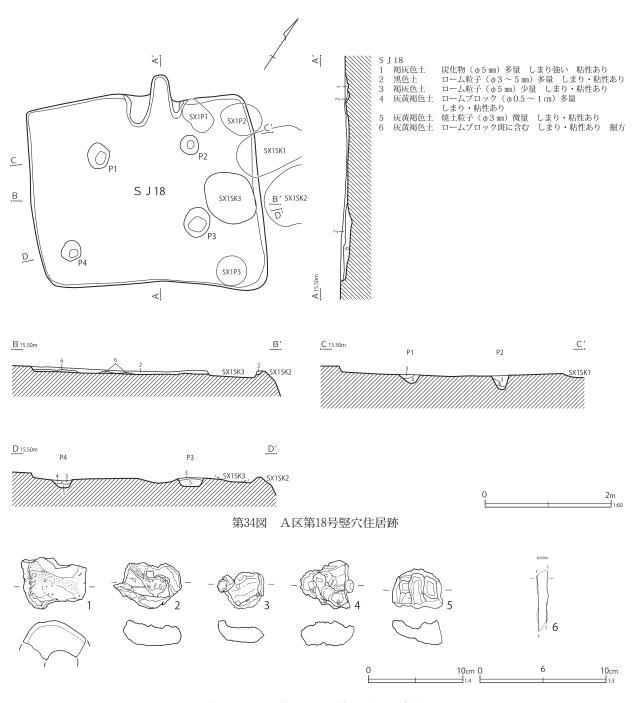
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
1	須恵器	甕	_	[3.9]	_	I	5	良好	灰	2と同一個体か	外面平行叩き後カキ目	95-2
2	須恵器	甕	_	[4.4]	_	I	5	良好	灰	1 と同一個体か 内面同心円文	外面平行叩き後カキ目	95-2
3	土師器	坏	(12.2)	[2.5]	_	CI	5	良好	浅黄橙	北武蔵型坏		95-2
4	土師器	鉢	(23.8)	[3.9]	_	ACHI	5	普通	にぶい赤褐			95-2

-Wを指す。

カマドは北西辺の中央に設置されている。規模は長さ0.80m、幅0.95mで燃焼部の深さは0.06mであるが、残存状態が悪い。袖は地山削り出しであった可能性がある。主柱穴は4基検出されたが、P4のみやや外側にずれる。貯蔵穴、壁溝は

検出されなかった。

遺物は、羽口、鉄滓、鉄製品が出土している。 土器類は出土しなかった。第35図1は羽口、2から5は椀形鍛冶滓である。6は鉄製品である。細 長い板状の製品であるが、器種は不明である。こ れらの遺物は重複している第1号鍛冶関連遺構か



第35図 A区第18号竪穴住居跡出土遺物

第14表 A区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	羽口	長さ[4.6] 幅6.5 厚さ3.1 孔径(3.5) 外径(7.2) 重さ93.7			НК	30	普通	灰	С	
2	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ4.4 幅7.1 厚さ2.1 重さ87.9 残存50								
3	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ3.8 幅4.8 厚さ1.5 重さ40.1 残存80							d	
4	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ4.9 幅5.5 厚さ2.4 重さ65.1 残存70								
5	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ3.5	幅5.2	厚さ2.5	重さ60	.9 残	字30			
6	鉄製品	不明	長さ[4.8	8] 幅0.	8 厚さ0	.15 重さ	2.5				

ら混入したものとみられる。時期は第1号鍛冶関連遺構より古い時期となる点から古墳時代後期と推定される。

A区第19号竪穴住居跡 (第36・37図)

A区の第19号竪穴住居跡はAR・AS-22グリッド、調査区の西側に位置する。

重複する他遺構との新旧関係は、第20号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。

覆土の残存状態は良く、黒褐色土を主体とする。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形で、 規模は長軸長4.14m、短軸長3.50m、深さ0.50m である。主軸方位はN-17°-Wを指す。

カマドは北辺の中央やや東寄りに設置されている。規模は長さ1.20m、幅1.00mで燃焼部の深さは0.30mである。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。袖は燃焼部の左側に土師器の甕が逆位で置かれていることから、これが袖の芯材として転用されていたとみられる。右袖側では、左側の土師器甕と対になる場所に浅い窪みがあり、土器などが置かれていた痕跡の可能性がある。

主柱穴は検出されなかったが、南辺際の中央付近にピットが1基検出されており、入口施設に関わる可能性が想定される。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周して検出されている。幅は0.22m~0.45m、深さは0.06m~0.20mである。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。第 38図1は須恵器の蓋である。疑宝珠のツマミを持 つ。産地は末野窯とみられる。

2は須恵器の坏である。底部のみが残存している。底部回転ヘラケズリ調整がみられる。産地は 末野窯とみられる。

3と4は湖西窯産の須恵器で3は坏である。底部回転へラ切り後外周ヘラケズリ調整がみられる。成形時のロクロ回転方向は右回転、底部の回転へラケズリは左回転となる。4は高台付坏である。底部の中心部は残存していないが、底部が高台よりも張り出すタイプである。5から7は土師

器の坏で北武蔵型坏に位置付けられる。8は比企 型坏である。内外面に赤彩が施されている。9と 10は土師器の甕である。10は燃焼部の左側に逆位 で置かれていたものになる。

時期は北武蔵型坏の大・中・小の三種、比企型 坏、末野窯産の疑宝珠のツマミを持つ蓋、湖西窯 産の坏、高台付坏が共伴していることから、7世 紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

A区第20号竪穴住居跡 (第40図)

A区の第20号竪穴住居跡は $AR \cdot AS - 22 \cdot 23$ グリッド、調査区の西側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第19号竪穴住居跡、 第6号溝跡、第16号土壙、AR22-P1・2と重 複し、これらに壊されている。

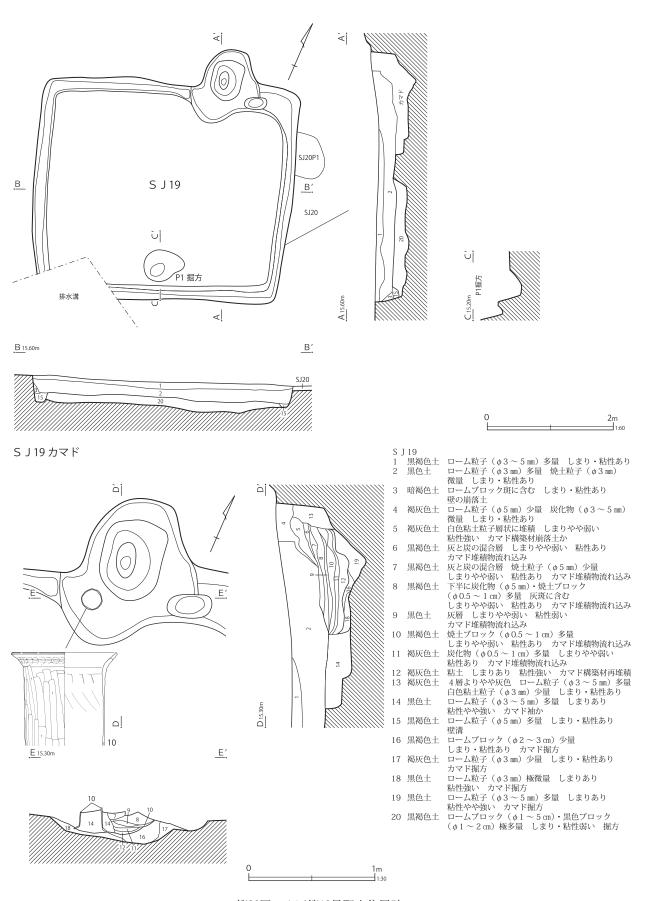
覆土の残存状態はあまり良くない。北側において黒色土及び黒褐色土を主体とする堆積土が確認されている。南側へ至ると残存状態が悪く、掘方のみが確認されている。北西コーナー部分は調査区域外に至り、南西コーナー部分は第19号竪穴住居跡によって壊されているため、詳細な平面形は不明であるが、隅丸長方形になると想定される。残存規模は長軸長4.50m、短軸長4.40m、深さ0.40mである。長軸方位はN-49°-Wを指す。

カマド、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。主 柱穴は3基検出された。この3基は均等に並んで いることから、北西側の柱穴も調査区域外に現存 している可能性が高い。

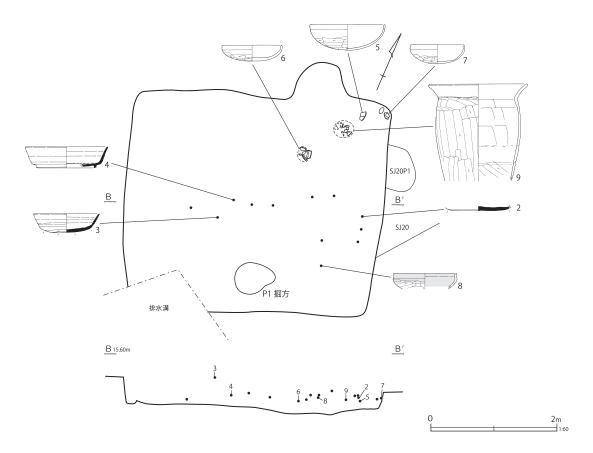
遺物は、須恵器と土師器が出土している。第41 図1と2は須恵器甕の破片である。1は口縁部片で2は胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文アテ具痕がみられる。

3~5は土師器の坏である。

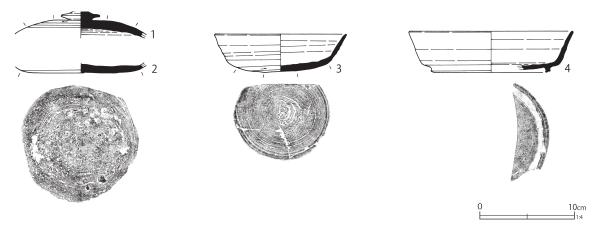
3は北武蔵型坏、4は有段口縁坏、5は暗文坏である。6は土師器の甕で胎土に角閃石が多く含まれる。7は高坏で内外面に赤彩が施されている。時期は、7世紀後半頃に位置付けられる。



第36図 A区第19号竪穴住居跡



第37図 A区第19号竪穴住居跡遺物出土状況

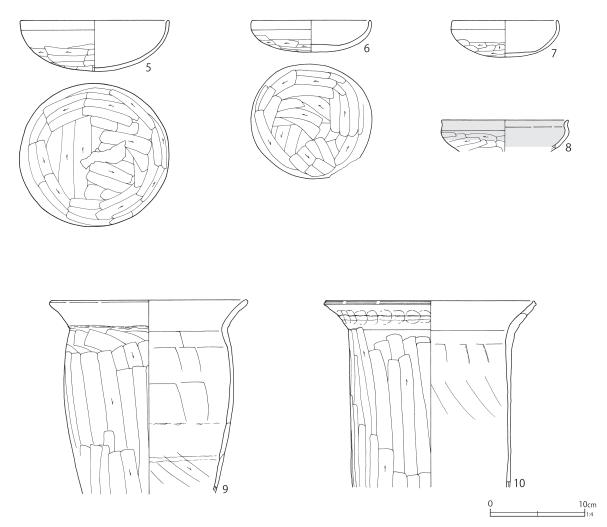


第38図 A区第19号竪穴住居跡出土遺物(1)

A 区第21·22号竪穴住居跡 (第42図)

A区の第21・22号竪穴住居跡はAU -23・24 グリッド、調査区の南西側に位置する。

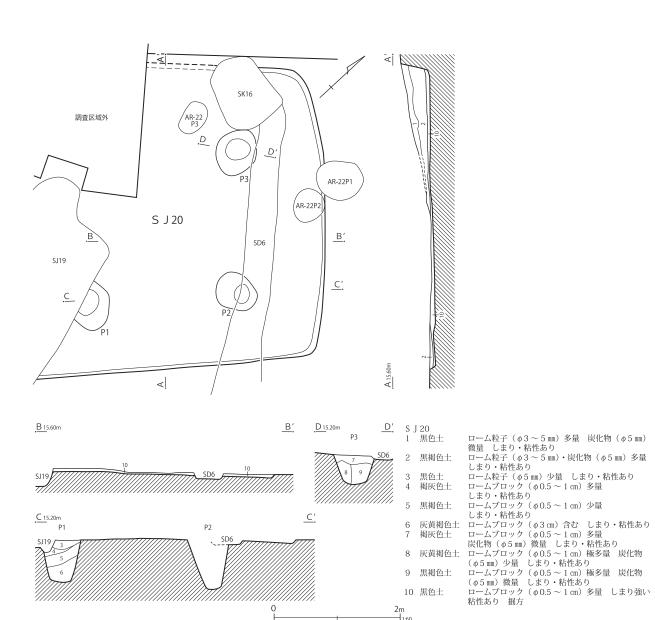
いずれの竪穴住居跡も大部分が調査区域外に至 るため、平面形は不明である。調査区南壁におい て検出された。重複関係も調査区南壁において確認した。それによると、第21号竪穴住居跡は第15・22号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。また、第22号竪穴住居跡は第21号竪穴住居跡、第4号溝跡と重複し、これらより古い。第21号竪穴



第39図 A区第19号竪穴住居跡出土遺物(2)

第15表 A区第19号竪穴住居跡出土遺物観察表(第38・39図)

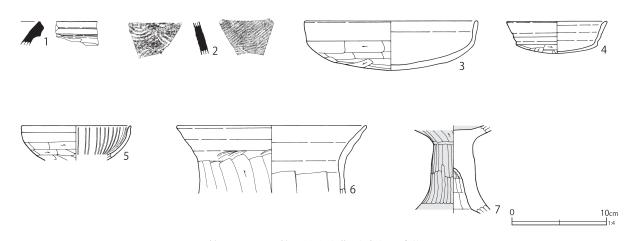
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	_	[2.9]	_	BEIK	30	良好	灰白	AS-22 末野窯産か ヘラケズリ 疑宝 珠つまみ	96-1
2	須恵器	坏	_	[1.1]	12.6	ABEK	50	普通	灰白	No.9 末野窯産か 底部回転ヘラケズリ	96-1
3	須恵器	坏	13.8	3.9	9.5	Ι	70	良好	灰白	No. 2 AS-22 湖西窯産 底部ヘラ切り 外周ヘラケズリ	96-1
4	須恵器	高台付坏	(17.2)	4.3	(11.8)	IK	40	良好	灰白	No. 3 湖西窯産	96-1
5	土師器	坏	15.5	5.3	_	CI	90	良好	にぶい橙	b·No.15·AS-22 北武蔵型坏	96-1
6	土師器	坏	12.3	3.3	-	AI	90	良好	橙	No.18 北武蔵型坏	96-1
7	土師器	坏	(11.0)	3.8	-	ACI	70	普通	にぶい褐	No.13 北武蔵型坏	96-1
8	土師器	坏	(13.2)	[3.2]	-	HI	20	良好	赤	比企型坏 内外面赤彩	
9	土師器	甕	(20.4)	[20.3]	_	CI	20	良好	にぶい赤褐	カマド・No.16 「く」の字状口縁甕 角閃石 多量	
10	土師器	甕	21.8	[19.5]	_	EGHI	70	普通	にぶい橙	カマド・No.19	96-1



第40図 A区第20号竪穴住居跡

0

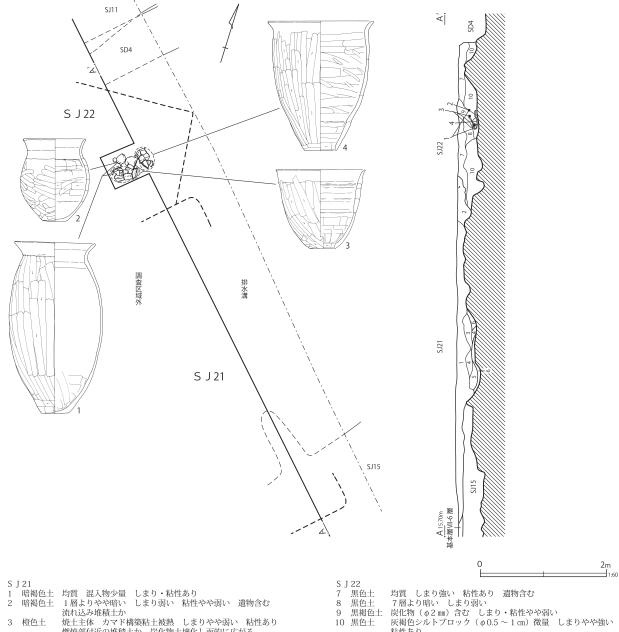
10 黒色土



第41図 A区第20号竪穴住居跡出土遺物

第16表 A区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表(第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[2.5]	_	IK	5	良好	黄灰		96-2
2	須恵器	甕	_	[3.5]	_	I	5	良好	暗灰黄	外面平行叩き 内面同心円文	96-2
3	土師器	坏	(17.9)	5.3	_	CIK	30	普通	にぶい黄橙	北武蔵型坏	96-2
4	土師器	坏	(10.4)	3.3	_	ACHIK	30	普通	明赤褐	有段口縁坏	96-2
5	土師器	坏	(11.5)	[3.6]	_	CHI	30	良好	橙	暗文坏	96-2
6	土師器	甕	(20.0)	[7.1]	_	CIK	10	普通	にぶい黄橙	角閃石多量	
7	土師器	高坏	_	[9.1]	_	ACIK	30	普通	赤褐	内外面赤彩	96-2



 S J 21
 1
 暗褐色土
 均質 混入物少量 しまり・粘性あり

 2
 暗褐色土
 1層よりやや暗い しまり弱い 粘性やや弱い 遺物含む流れ込み堆積土か

 3
 橙色土
 焼土主体 カマド構築粘土被熱 しまりやや弱い 粘性あり燃焼部付近の堆積土か 炭化物土壌化し面的に広がる

 4
 青灰色土
 粘土主体 カマド粘性土 部分的に暗褐色粒子含む しまりあり粘性強い

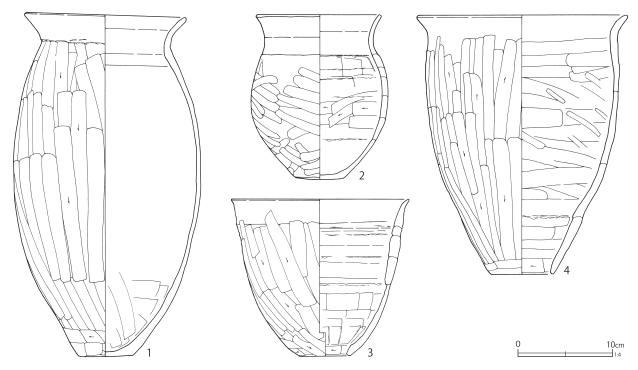
 5
 原場の料工(42~4 mm) 条号 ※解引 たカマド構築料土場 1

特性強い
 灰褐色土 灰褐色粒子(φ2~4 mm)多量 溶解したカマド構築粘土混入しまり・粘性強い
 黒色土 ロームブロック含む 5層との境に黒色炭(φ5 mm)層帯状にありしまり弱い 粘性やや弱い カマド掘方

第42図 A区第21·22号竪穴住居跡

-51-

9 黒褐色土 10 黒色土



第43図 A区第22号竪穴住居跡出土遺物

第17表 A区第22号竪穴住居跡出土遺物観察表(第43図)

番	号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
	1	土師器	甕	16.4	35.8	5.6	CI	80	普通	にぶい黄褐	No. 3 • 4	97-1
	2	土師器	甕	(12.8)	17.1	5.0	С	90	良好	橙	No.3 角閃石多量	97-1
	3	土師器	魱	18.4	16.4	5.2	HIK	100	良好	橙	No. 2 • 4	97-1
	4	土師器	甑	(22.0)	27.1	6.5	AGHI	70	普通	にぶい黄褐	No. 1 • AU-23	97-1

住居跡は調査区南壁においてカマドも検出されているが、詳細は不明である。

遺物は、第22号竪穴住居跡から土師器の甕、甑がまとまって出土している。部分的な検出であるため、詳細は不明であるが、ここから出土した土器は残存状態が良いことから、貯蔵穴のような土壙にまとめて入れられていたものか、カマド付近で使用されていた可能性が想定される。甕と甑のみで坏類などは出土していないことから、煮炊きに使用する道具をまとめて置いていたものである可能性がある。

第43図1は土師器の甕である。胴部に縦方向の ヘラケズリ調整、内面にナデ調整がみられる。2 は土師器の甕でやや小型である。外面にヘラケズ リ後ナデ調整、内面上半にヘラナデ、下半にヘラ ケズリ調整がみられる。胎土に角閃石を多く含む。

3と4は土師器の甑である。いずれも胴部外面 に縦方向のヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整 がみられる。また、3の甑の胴部内面上半には粘 土紐による輪積痕が明瞭に残っている。

時期は、これらの土師器から6世紀後半頃に位置付けられる。

なお、第21号竪穴住居跡から遺物は出土しなかったが、重複する第22号竪穴住居跡よりも新しいため、時期は6世紀後半以降に位置付けられる。

(2) 井戸跡

A区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる井戸跡は13基検出された。形状は、上端が0.40m~0.70m程度の小型のタイプ、1.00m以上のタイプに分かれる。

また、遺構検出面から1.2mほどで底面に到達するタイプと、そこからさらに下層に至り、安全対策のため掘削できなかったタイプがある。浅いタイプの井戸跡は溜井などに用いられたなど、形状の違いが、井戸跡の用途によって異なっていた可能性が想定される。

検出された井戸跡は全て素掘りである。木材片なども検出されなかったため、木枠などがあった可能性も低い。

第18表に検出グリッド、平面形、規模、深さを 示した。以下には、それぞれの井戸跡の特徴、重 複関係、出土遺物について記す。

A区第1号井戸跡 (第44図)

漏斗状の断面形状を呈する。底面は深さ1.00m で検出されている。底面に土器片を多量に含む砂 利層が堆積するが、いずれの土器片も細片で図示 できなかったが、時期は土器片から古墳時代に位 置付けられると思われる。

A区第2号井戸跡(第44図)

上端は1.34mあるが、深さ0.82mより下で幅が 狭くなり、底面は検出できなかった。

遺物は須恵器の蓋、土師器の高坏、坏が出土し、時期は7世紀代に位置付けられる。

A区第5号井戸跡(第44図)

上端が1.34mで下端が狭い。底面は深さ1.32mで検出されている。

遺物は細片だが、北武蔵型坏の口縁部が出土し、時期は7世紀代以降とみられる。

A区第7号井戸跡 (第44図)

上端が0.68mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ1.15mでは底面には到達していない。第3号溝跡に壊されている。

遺物は放射状暗文及び螺旋暗文をもつ土師器暗 文坏と細片だが土師器の蓋模倣坏の口縁部、甕類 の口縁部が出土している。時期は7世紀中頃以降 とみられる。

A区第9号井戸跡(第44図)

不整楕円形の形状を呈する。底面は深さ1.28m で検出されている。遺物は土師器の甕が底面から 出土している。残存率が90%と良好であった。時 期は6世紀後半に位置付けられる。

A区第10号井戸跡 (第44図)

上端は1.00mあり、底面は深さ0.66mで検出されている。AU -24P13と重複し、これより新しい。

遺物は土師器片が出土しており、時期は6世紀代以降とみられる。

A区第13号井戸跡 (第44図)

不整楕円形の形状を呈する。底面は深さ1.50mで検出されている。

遺物は木葉痕が残る土師器甕の底部と図示できる大きさではないが、土師器の蓋模倣坏口縁部、 甕類の細片が出土している。時期は6世紀代以降 とみられる。

A区第14号井戸跡 (第44図)

上端が0.56mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。底面は深さ1.16mで検出されている。 遺物は図示できないが土師器の細片が出土している。 時期は6世紀代以降とみられる。

A区第15号井戸跡 (第45図)

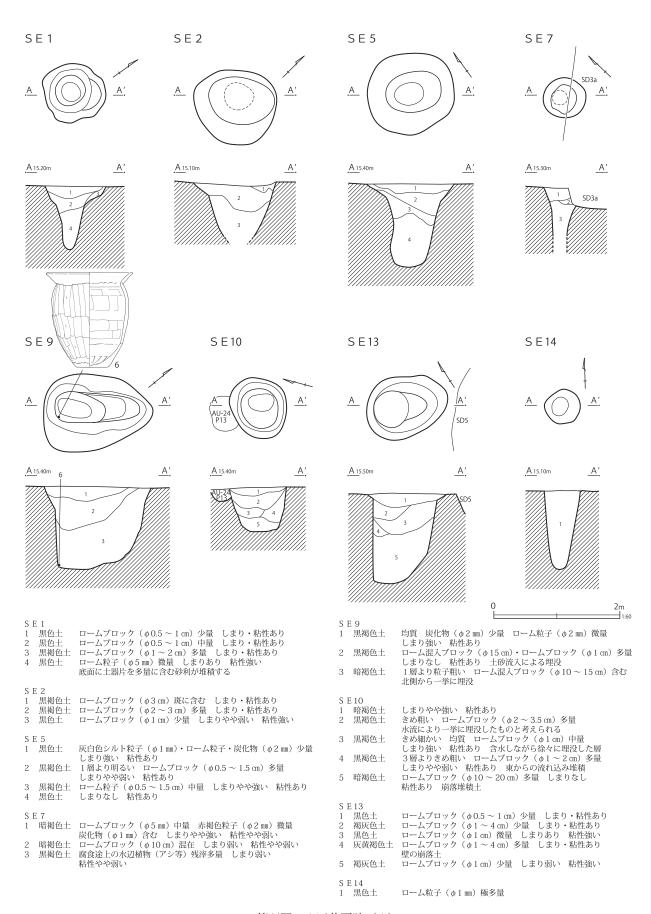
上端が1.24mでほぼ垂直に掘削されている。底面は深さ1.17mで検出されている。

遺物は土師器の鉢が出土しており、時期は6世紀代以降とみられる。

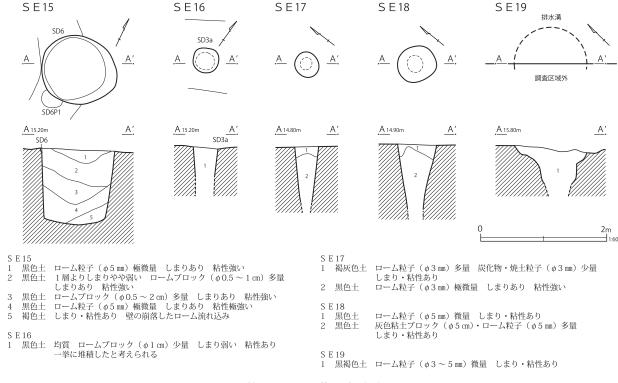
A 区第16号井戸跡 (第45図)

上端が0.40mの小型のタイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ0.80mでは底面には到達していない。第3号溝跡と重複し、これより古い。

遺物は出土していない。第3号溝跡より古いこ



第44図 A区井戸跡(1)



第45図 A区井戸跡 (2)

第18表 A区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
1	AT-24	円形	上0.98 下0.30	上0.96	1.00		13	AS-23	不整楕 円形	上1.16 下0.53	上0.96 下0.44	1.50	
2	AT-24	楕円形	上1.34 下0.54	上1.18 下0.44	[0.82]		14	AR-23	不整形	上0.56 下0.29	上0.52 下0.26	1.16	
5	AU-24	楕円形	上1.34 下0.44	上1.30 下0.40	1.32		15	AS-23	楕円形	上1.24 下1.00	上1.06	1.17	SD6
7	AU-25	不整円 形	上0.68 下0.22	上0.63 下0.20	[1.15]	SD3a	16	AU-24	円形	上0.40 下0.30	下0.28	[0.80]	SD3a
9	AU-24	不整楕 円形	上1.84 下0.54	上1.20 下0.30	1.28		17	AS-25	円形	上0.40 下0.20	上0.38 下0.18	[0.90]	
10	AU-24	不整形	上1.00 下0.46	上0.86 下0.38	0.66	AU-24P13	18	AR-23	円形	上0.60 下0.28	上0.55 下0.25	[1.20]	
12			2	火番			19	AS•AT-22	不明	_	_	[0.70]	

とから時期は7世紀前半以前とみられる。

A区第17号井戸跡 (第45図)

上端が0.40mの小型のタイプで下層は幅がやや狭くなる。深さ0.90mでは、底面には到達していない。

遺物は土師器の身模倣坏が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

A区第18号井戸跡(第45図)

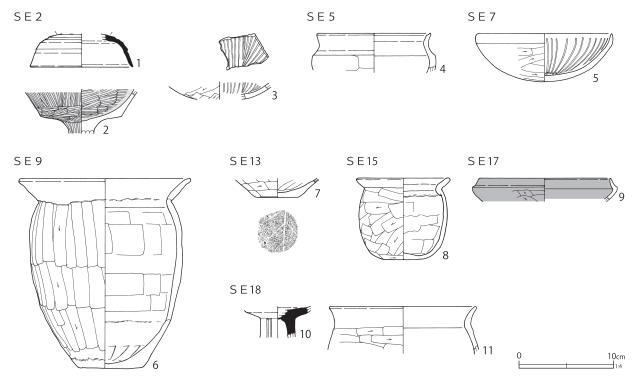
上端が0.60mの小型のタイプで下層は幅がやや

狭くなる。深さ1.20mでは、底面には到達していない。

遺物は須恵器の高坏と土師器の甕が出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

A区第19号井戸跡(第45図)

調査区南壁において検出された。平面形は不明である。調査区域外に遺構の残り部分が残存している。深さ0.70mで底面には到達していない。遺物は出土していない。時期は不明である。



第46図 A区井戸跡出土遺物

第19表 A区井戸跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(10.6)	[3.4]	_	I	10	良好	灰	SK 4	
2	土師器	高坏	_	[4.6]	_	CHI	30	普通	にぶい赤褐	SK 4 内外面赤彩	
3	土師器	坏	_	[2.0]	_	I	5	普通	灰褐	SE 2 暗文坏 内面布目圧痕	97-2
4	土師器	甕	(11.8)	[4.1]	_	CEHI	20	良好	明赤褐	SE 5	
5	土師器	坏	(14.0)	5.0	_	EIK	30	良好	橙	SK 3・4 放射状暗文・螺旋暗文	97-2
6	土師器	甕	(18.0)	19.9	6.8	ACGHI	90	普通	褐	SE 9 No. 1 外面煤	97-2
7	土師器	甕	_	[1.9]	4.4	CGI	20	普通	黒褐	SE13 木葉痕	
8	土師器	鉢	(9.6)	8.5	4.3	AHI	80	普通	灰褐	SE15	97-2
9	土師器	坏	(13.8)	[2.4]	_	ACI	5	普通	黒褐	SE17 身模倣坏 内外面黑色処理	
10	須恵器	高坏	_	[3.2]	_	EI	10	良好	灰	SE18 末野窯産 三方透かし	
11	土師器	甕	(15.4)	[4.8]	_	AHI	10	良好	にぶい黄橙	SE18	

(3) 溝跡

A区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる溝跡は4条検出された。

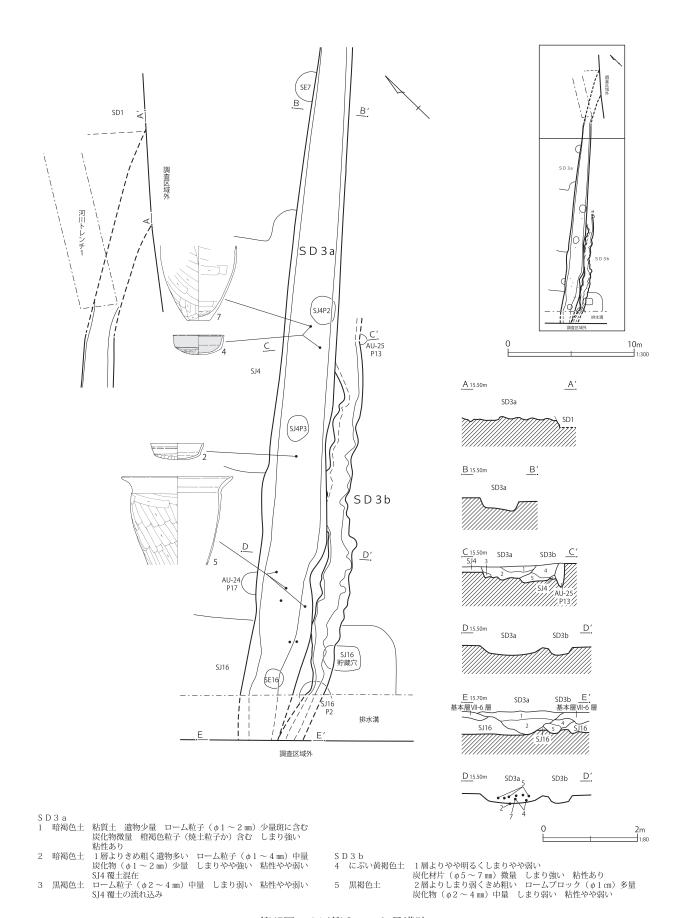
第22表に検出グリッド、方位、長さ、幅、深さ を示した。

A区第3号溝跡 (第47図)

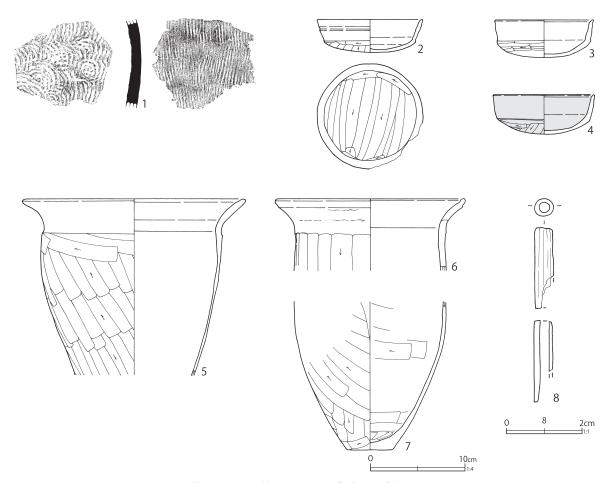
第3号溝跡はaとbの2時期に分かれ、bの方が古い。走行方位はN-52°-Eを指す。北東から南西方向に延びている。両端が調査区域外へ至

るため全長は不明である。重複関係は、第4・16号竪穴住居跡、第7・16号井戸跡、AU-24P 17、AU-25P13と重複し、aとbいずれもこれらより新しい。

検出された規模は a が長さ15.38m、幅1.10m~2.00m、深さ0.22m~0.35mである。 b が長さ7.50m、幅0.26m~0.64m、深さ0.22m~0.35mである。 b は a と比べて規模が小さく、掘方も不均等である。これに対し、 a は直線的に掘削されて



第47図 A区第3a・b号溝跡



第48図 A区第3a・b号溝跡出土遺物

第20表 A区第3 a · b 号溝跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[9.3]		EI	5	普通	黄灰	末野窯産か 外面平行叩き 内面同心円 文	
2	土師器	坏	11.0	3.4	_	ACI	90	普通	橙	No.1 有段口縁坏	97-3
3	土師器	坏	10.3	3.9	_	AHI	70	良好	明赤褐	蓋模倣坏	97-3
4	土師器	坏	10.6	4.1	_	AI	90	良好	明赤褐	No. 2·3 蓋模倣坏 内外面赤彩	97-3
5	土師器	甕	(23.2)	[18.5]	_	AGI	40	普通	橙	No.5・6・7 「く」の字状口縁甕	97-3
6	土師器	甕	(19.8)	[7.6]	_	AHI	20	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	_	[15.6]	4.6	CHI	40	普通	にぶい橙	No.3 角閃石多量	97-3
8	石製品	管玉	長さ2.2	幅0.5	厚さ0.5	さ0.5 孔径0.3 重さ0.7 残存80				SD3 碧玉 片面直 ミガキ	

いる。

遺物はaから多く出土している一方でbから図示できるような遺物は出土しなかった。第48図1は須恵器甕の胴部片である。産地は末野窯とみられる。2から4は土師器の坏である。2は有段口縁坏、3と4は蓋模倣坏である。5から7は土師器の甕である。8は碧玉製の管玉である。部分的

に欠損している。また、ウマの歯及び骨が出土している。

時期は、aは出土遺物から7世紀前半とみられ、bはそれ以前となる。しかし6世紀後半の遺構を壊していることから、aとさほど変わらない時期に掘削された後、bに掘り直されたとみることができる。

A区第4号溝跡 (第49図)

A区の第4号溝跡の走行方位はN-45°-Eを指す。北東から南西方向に延びている。南端が調査区域外へ至り、北端は第3号井戸跡に壊されているが、その先へは延びていない。全長は不明である。検出された規模は長さ4.00m、幅0.68m~0.78m、深さ0.07m~0.40mである。

重複する遺構の新旧関係は、第11・13・22号竪 穴住居跡より新しく、第3号井戸跡、AT-24P 16より古い。

遺物は土師器の甕が1点出土している。時期は6世紀代以降とみられる。

A区第6号溝跡(第51図)

A区の第6号溝跡の走行方位は北西側がN-4°-W、南側がN-0°を指す。南から北方向へ延び、中心付近で北西に屈曲する。南端は調査区域内で立ち上がり、北端は第16号土壙に壊されているが、そこから先へは延びていない。

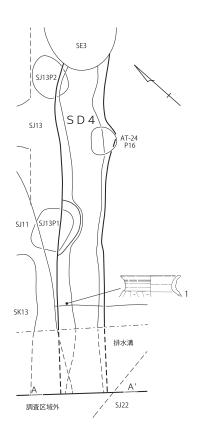
検出された規模は長さ9.70m、幅0.38m~ 0.90m、深さ0.08m~0.23mである。

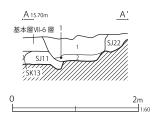
重複する遺構の新旧関係は、第20号竪穴住居跡より新しく、第15号井戸跡、第16号土壙、AS - 23 P12より古い。

遺物は図示できなかったが、木杭が出土している。時期は第15号井戸跡より古いことから6世紀代以前に位置付けられる。

A区第7号溝跡(第51図)

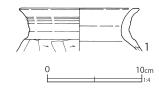
A区の第7号溝跡の走行方位はN-57°-Eを指す。南西から北東方向へ延びる。南端は第2号溝跡に壊され、北端は旧河川跡に壊されている。検出された規模は長さ1.20m、幅1.05m~1.25m、深さ0.10mである。遺物は出土していない。残存状態が極めて悪く、時期を含め詳細は不明である。





S D 4 1 黒褐色土 均質 橙褐色粒子 (φ2 mm) 微量 混入物少量 しまり・粘性あり 2 黒色土 ロームブロック (φ2 ~ 3 cm) 中量 しまりやや弱い 粘性強い

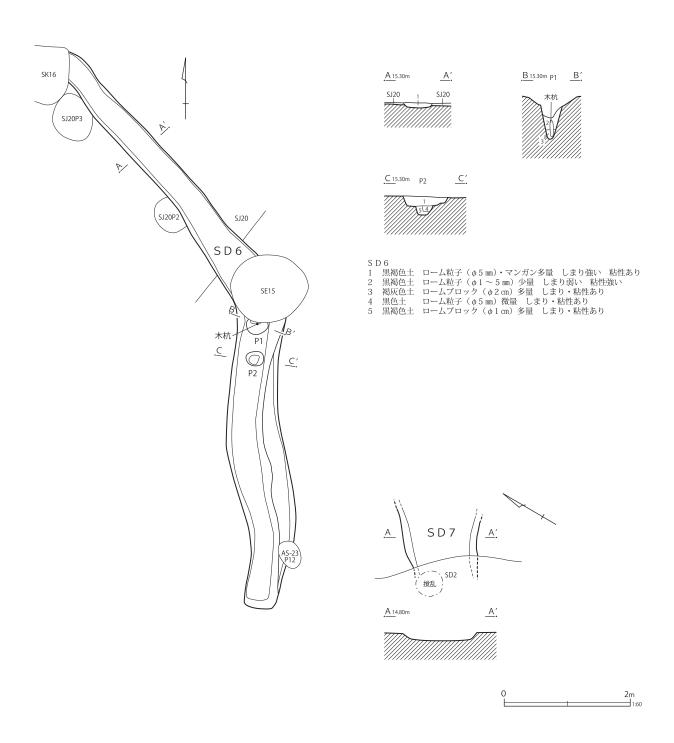
第49図 A区第4号溝跡



第50図 A区第4号溝跡出土遺物

第21表 A区第4号溝跡出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(12.5)	[4.4]	_	CI	20	普通	明赤褐	No. 1	



第51図 A区第6·7号溝跡

第22表 A区溝跡一覧表

No.	グリッド	方位	方位	巨 ナ (m)	幅(m)	深さ	(m)	重複遺構
INO.	クリット 	刀址	刀址	長さ(m)	最大	最小	最大	最小	里 後退構
2	AT-25.26 AU-24~26	N-52° -E	_	15.38	2.00	1.10	0.35	0.22	SJ4 SJ16 SE7 SE16 SD1
3	AV-24	N-32 -E		7.50	0.64	0.26	0.35	0.22	AU-24P17 AU-25P13
4	AT-23•24 AU-23•24	N-45° -E	-	4.00	0.78	0.68	0.40	0.70	SJ11 SJ13 SJ22 SE3 AT- 24P16
6	AR-22·23 AS-23	N-44° -W	N-0°	9.70	0.90	0.38	0.23	0.08	SJ20 SE15 SK16 AS-23P12
7	AS-25	N-57° -E	_	(1.20)	(1.25)	1.05	0.10	_	SD2

(4) 土壙

A区において古墳時代・飛鳥時代の土壙は14基 検出された。用途不明の土壙が多いが、ウマの骨 やウマの歯と思われる獣骨が出土している土壙も 認められ、これらはウマを埋葬した墓か廃棄した 土壙であった可能性がある。また、小型で円形ぎ みの形状を呈する土壙は、炭化物や焼土を含む覆 土で埋没している特徴がある。

第23表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下には、それぞれの土壙の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

第2号土壙(第52図)

平面形は長方形の形状を呈する。底面にピットが3基検出された。

遺物の出土量が多い。出土地点をみると、多くが土壙内の外周に位置し中心付近には少ない。この土壙から骨や歯は出土していないが、他の土壙と類似した長方形型の形状などから、中心付近に遺体などを置いた余地は残る。

第55図1~7は土師器の坏である。1は内外面に黒色処理が施されている有段口縁坏である。2・4・5は蓋模倣坏である。3と7は口縁部が直立するタイプの坏である。6は胎土に石英粒を多く含む。比企型坏である。内外面に赤彩が施されている。8と9は高坏である。8は坏部分で角閃石を多く含む。9は脚部であるが、8とは別個体である。10は壺である。内面に黒色の付着物が認められる。11は甕である。底部に木葉痕がみられる。須恵器は出土していない。時期は6世紀末頃に位置付けられる。

第5号土壙 (第52図)

平面形は楕円形の形状を呈する。西側が第7号 竪穴住居跡と重複し上端が壊されている。

遺物の出土量が多い。出土地点をみると、多くが土壙内の外周に位置し、中心付近には少ない。 この土壙から骨や歯は出土していないが、他の土 壙と類似した楕円形型の形状などから、中心付近 に遺体などを置いた余地は残る。第55図12~15は 土師器の坏である。12と13は蓋模倣坏、14は小針 型に類似した坏、15は有段口縁坏である。16と17 は甕の口縁部である。須恵器は出土していない。 時期は6世紀末頃に位置付けられる。

第6号土壙 (第52図)

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化 材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は出土して いない。

第7号土壙 (第53図)

平面形は不整長方形の形状を呈する。南西側は 調査区域外に至る。第11号土壙と重複し、これに 壊されている。長軸側は緩やかに立ち上がり、短 軸側は中段を持ち立ち上がる。底面はほぼ水平で ある。覆土に炭化材片や炭化物が含まれる。ま た、獣骨が出土している。

遺物は土師器が出土している。第55図18は北武 蔵型坏、19は甕の口縁部である。時期は7世紀末 頃に位置付けられる。

第8号土壙 (第52図)

平面形は不整楕円形の形状を呈する。覆土に炭化材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は出土していない。

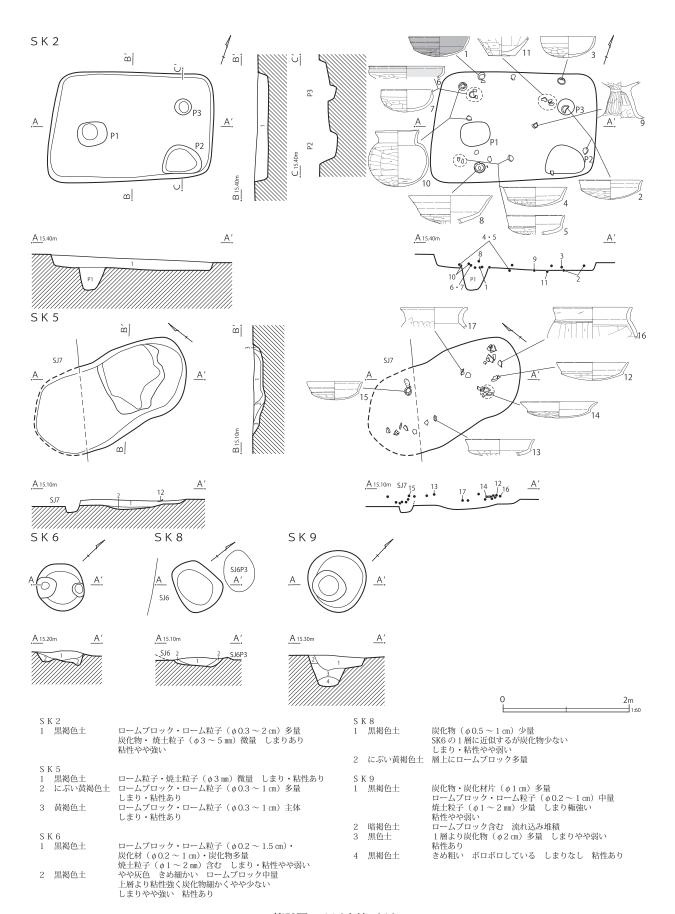
第9号土壙 (第52図)

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化材、炭化粒子、焼土粒子を含む。遺物は須恵器甕の破片が出土している(第55図20)。時期は須恵器片から6世紀~7世紀に位置付けられる。

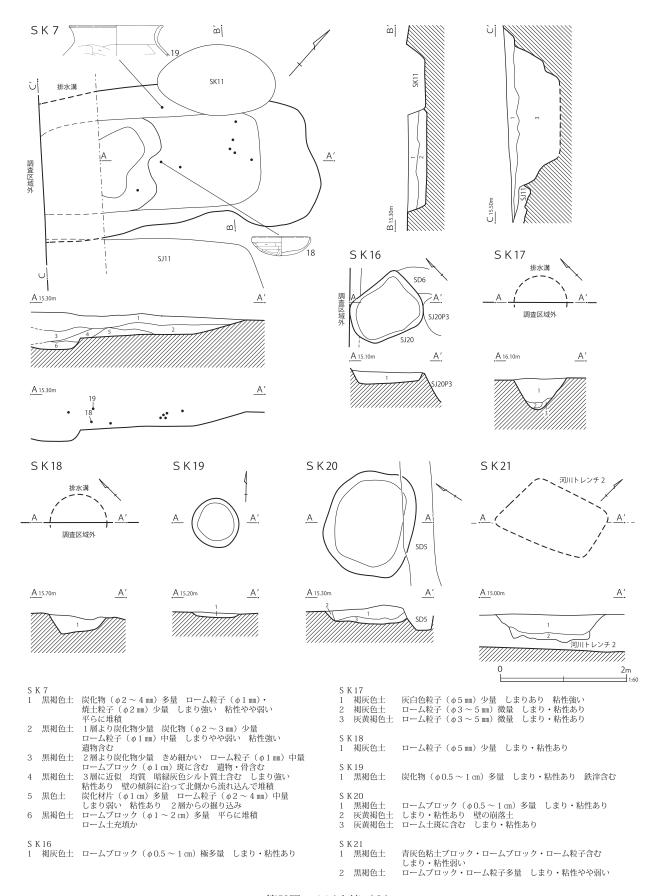
第12号土壙(第54図)

平面形は長方形の形状を呈する。第11号竪穴住居跡の廃絶後に掘削されている。南東辺が第13号土壙に壊されている。ウマを埋葬または廃棄したものと思われる。第12号土壙は第13号土壙より一回り大きいが平面プランや底部分が箱形長方形を呈す形状が類似している。

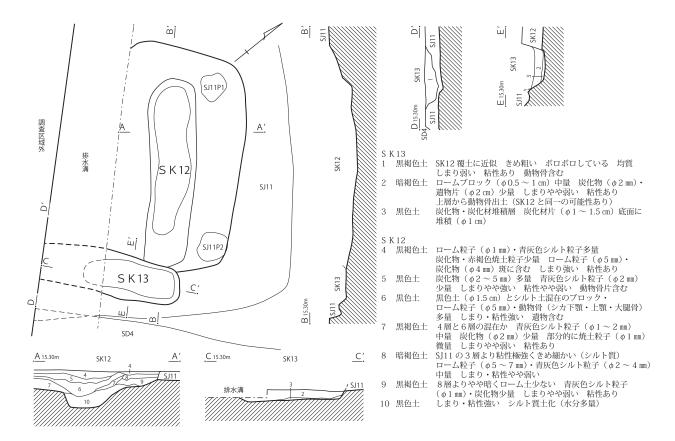
出土した獣骨は放射性炭素年代測定を実施して おり、その結果、ウマの中手骨または中足骨であ



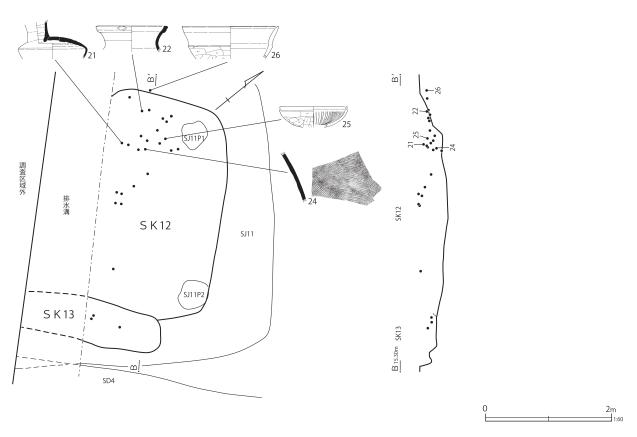
第52図 A区土壙 (1)



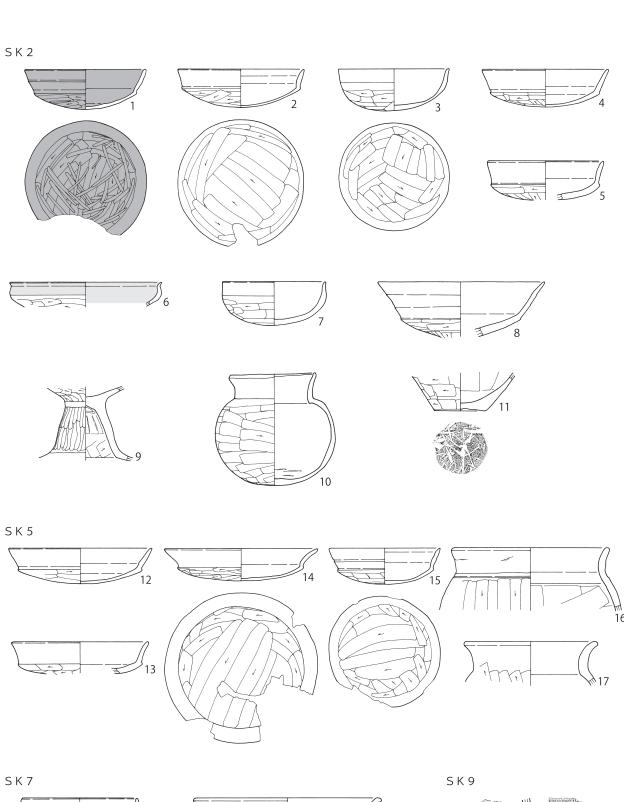
第53図 A区土壙 (2)

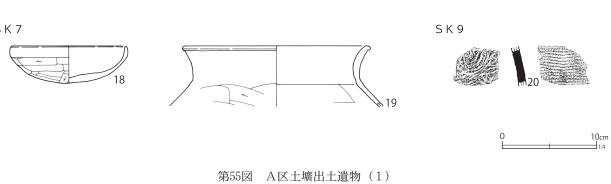


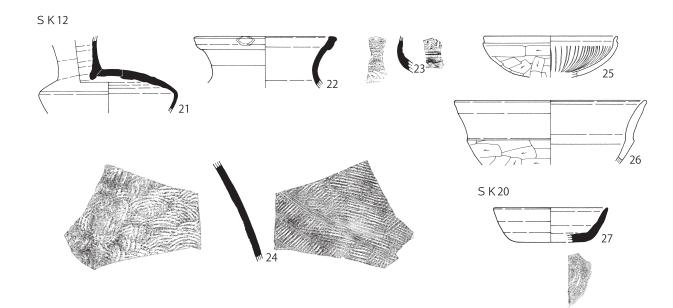
S K 12·13 遺物出土状況



第54図 A区土壙 (3)







第56図 A区土壙出土遺物 (2)

り、測定結果から得られた年代は6世紀後半~7 世紀前半の間である。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第56図 21は須恵器の平瓶である。外面に自然釉がかかり、胎土に黒色粒が多量に含まれる。産地は秋間 窯とみられる。22と23は須恵器の壺口縁部である。 22は内面に窯壁片が付着している。外面には釉玉 がみられる。産地は末野窯か。23は外面に波状文 と沈線、内面に同心円文アテ具痕がみられる。24 は須恵器甕の胴部で外面に平行タタキ痕とヘラ状 工具によるカキ目、内面に同心円文アテ具痕がみ られる。25は土師器の暗文坏、26は土師器の鉢で ある。時期は7世紀後半に位置付けられる。

第13号土壙 (第54図)

平面形は不整長方形の形状を呈する。重複関係は第11号竪穴住居跡、第12号土壙と重複しこれらよりも新しい。南西側は調査区域外に至る。覆土に炭化物を含む。遺物は出土していない。

第16号土壙 (第53図)

平面形は不整方形の形状を呈する。重複関係は 第20号竪穴住居跡、第6号溝跡と重複し、これら より新しい。覆土にはロームブロックを多量に含 む。遺物は出土していない。

第17号土壙 (第53図)

調査区南壁で検出された。平面形は、排水用に 溝を掘削した際に削平され残存していない。遺物 は出土していない。

第18号土壙 (第53図)

調査区南壁で検出された。平面形は削平され残存していない。遺物は出土していない。

第19号土壙 (第53図)

平面形は不整円形の形状を呈する。覆土に炭化物を含む。遺物は図示できる大きさではないが、 鉄滓が出土している。

第20号土壙 (第53図)

平面形は不整方形の形状を呈する。重複関係は第5号溝跡と重複し壊されている。覆土にはロームブロックを多量に含む。遺物は第56図27の須恵器坏が出土している。奈文研分類の坏Gに位置付けられる。産地は末野窯とみられる。

第21号土壙 (第53図)

河川トレンチ2東壁において検出された。平面 形はトレンチ掘削の際に削平され残存していない。 遺物は出土していない。

第23表 A区土壙一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1			欠番				12	AT-23	長方形	N-43° -W	(3.60)	(2.00)	0.57
2	AT•AU-25	長方形	N-70° -E	2.58	1.75	0.20	13	AT•AU-23	不整長方形	N-47° -E	(1.80)	(0.68)	0.20
3			欠番				14			欠番			
4			欠番				15			欠番			
5	AT-24	楕円形	N-66° -W	(2.70)	1.26	0.18	16	AR-22	不整方形	N-78° -W	1.14	0.93	0.19
6	AT-23	不整円形	N-50° -E	0.76	0.74	0.22	17	AT-22	不明	_	_	_	0.50
7	AT-23	不整長方形	N-48° -E	(3.80)	2.33	0.66	18	AT-23	不明	_	_	_	0.30
8	AT-23	不整楕円形	N-90°	0.84	0.68	0.14	19	AS-24	不整円形	N-43° -W	0.77	0.73	0.11
9	AT-24	不整円形	N-40° -W	0.98	0.92	0.52	20	AS-23	不整方形	N-73° -E	1.65	1.37	0.33
10			欠番				21	AS-25	不明	_	_	_	0.43

第24表 A区土壙出土遺物観察表(第55·56図)

₩.□				nu =		11.71	T1 -	Left	P ≃III	Etti →by	EST III
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.6	4.2	_	HI	80	良好	橙	SK 2 No. 8 有段口縁坏 黒色処理	97-4
2	土師器	坏	13.2	4.0	_	ACGHI	95	良好	橙	SK 2 No.14·16 蓋模倣坏	97-4
3	土師器	坏	11.5	4.4	_	AEHI	100	普通	にぶい橙	SK 2 No.12	97-4
4	土師器	坏	(13.2)	3.9	_	CHI	30	良好	橙	SK 2 No. 2 · 5 蓋模倣坏	97-4
5	土師器	坏	(12.0)	[4.0]	_	HIK	40	良好	浅黄橙	SK 2 No. 2 · 5 蓋模倣坏	
6	土師器	坏	(16.0)	[2.5]	_	HI	20	良好	赤	SK 2 No. 7 比企型坏 赤彩 石英多量	
7	土師器	坏	10.8	4.5	_	ACEGHI	60	普通	橙	SK 2 No. 7	97-4
8	土師器	高坏	17.3	[5.8]		CHI	40	良好	橙	SK 2 No. 1 角閃石多量	
9	土師器	高坏	_	[7.8]	_	I	30	良好	橙	SK 2 No.15	
10	土師器	壺	8.8	11.6	_	AHIK	80	良好	灰褐	SK 2 No. 6 · 10 内面黒色付着物	97-4
11	土師器	甕	_	[3.9]	5.5	AGI	10	普通	にぶい赤褐	SK 2 No.13 底部木葉痕	97-4
12	土師器	坏	(15.0)	3.7	_	AHI	30	良好	明赤褐	SK 5 No.15 蓋模倣坏	
13	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	_	ACI	30	普通	にぶい黄橙	SK 5 No.10 蓋模倣坏	
14	土師器	坏	16.0	3.4	_	ACEHI	80	良好	明赤褐	SK 5 No.14 蓋模倣坏	97-5
15	土師器	坏	11.6	3.8	_	AHI	90	良好	明赤褐	SK 5 No. 2 有段口縁坏	97-5
16	土師器	甕	(16.3)	[6.6]	_	ACHI	20	普通	にぶい橙	SK 5 No.16	
17	土師器	甕	(13.8)	[4.5]	_	CHIK	20	普通	明赤褐	SK 5 No.11	
18	土師器	坏	(12.0)	3.9	_	ACEI	40	良好	橙	SK 7 No. 2 北武蔵型坏	97-5
19	土師器	甕	(19.4)	[6.4]	_	ACI	20	普通	にぶい褐	SK 7 No. 1	97-5
20	須恵器	甕	_	[4.2]	_	EI	5	良好	灰	SK9 末野窯産 外面平行叩き 内面同 心円文	97-5
21	須恵器	平瓶	_	[8.1]	_	I	30	良好	灰白	SK12No.12 秋間窯産か 外面自然釉 内面黒色粒多量	97-6
22	須恵器	壺	(14.6)	[5.3]	_	I	5	良好	オリーブ黒	SK12No.3 末野窯産か 内面釉・窯壁片 外面釉玉	97-6
23	須恵器	壺	_	[3.9]	_	I	5	良好	暗灰	SK12 外面波状文·沈線 内面同心円文	
24	須恵器	甕	_	[10.5]	_	EI	5	良好	オリーブ黒	SK12No.10 外面平行叩き・ヘラ状工具に よるカキ目 内面同心円文	97-6
25	土師器	坏	(13.8)	[4.3]	_	CHI	20	良好	橙	SK12No.7 暗文坏	97-6
26	土師器	鉢	(20.0)	[6.7]	_	ACDI	20	良好	にぶい黄褐	SK12No. 1	
27	須恵器	坏	(12.0)	3.6	(7.4)	BEI	30	良好	黄灰	SE12 末野窯産か 坏G 底部ヘラ切り 石英多量	

3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

A区において検出された奈良時代・平安時代の 遺構数は、竪穴住居跡3軒、井戸跡5基、溝跡3 条、土壙1基、鍛冶関連遺構1基、旧河川跡一箇 所である。後世に削平されている調査区北半分を 除いて、古墳時代・飛鳥時代同様に調査区南半分 のほぼ全域に遺構が分布しており、調査区域外の 西側、東側、南側へ集落が広がっていると想定さ れる。

(1) 竪穴住居跡

A 区第 2 号竪穴住居跡 (第57~59図)

A区の第2号竪穴住居跡はAU-24・25グリッド、調査区の南部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第4・15・16号竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

遺構の残りは極めて良好である。平面形は 隅丸方形で、残存規模は長軸長4.37m、短軸長 3.92m、深さ0.56mである。主軸方位はN-45° - Eを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。

カマドは北東辺に設置され、規模は長さ 2.06m、幅1.46mで燃焼部の深さは0.55mである。煙道部は残存長1.35m程度である。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。第 62図40の石材が支脚として設置されていた。袖は直立させた石材と青灰色粘土を用いて構築されている。煙道部の天井は、崩落していたが一部に青灰色粘土が残存していた。

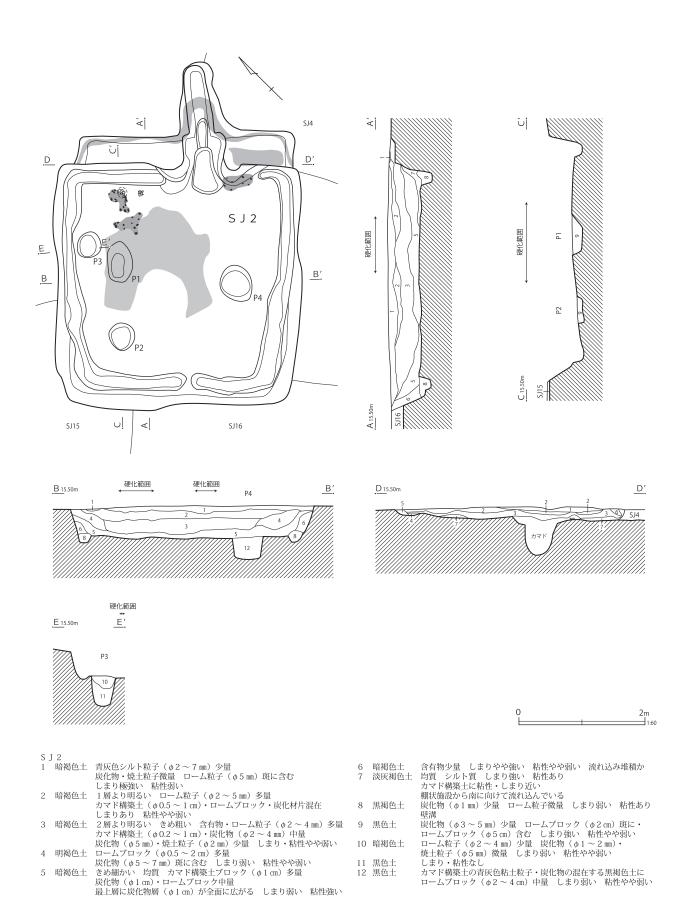
カマドの左右両側において棚状施設が検出された。竪穴住居跡の壁よりも外側に張り出すタイプで、地山を掘り残してそこに粘土を充填し、使用面を構築しているとみられる。カマド廃絶後に一部の棚状施設構築の粘土が崩落し、カマド構築の粘土を覆っている様子が確認された。

中心部からやや北西にかけて部分的に硬化面が 広がっている。貯蔵穴は検出されなかった。柱 穴・ピットは4基検出された。いずれも配置が不 規則であるため主柱穴かは判然としないが、いず れも床面から検出されている。しかしP1に関しては、硬化面下から検出されていることから、古い時期の別遺構の可能性もある。いずれも柱痕が確認されなかった。

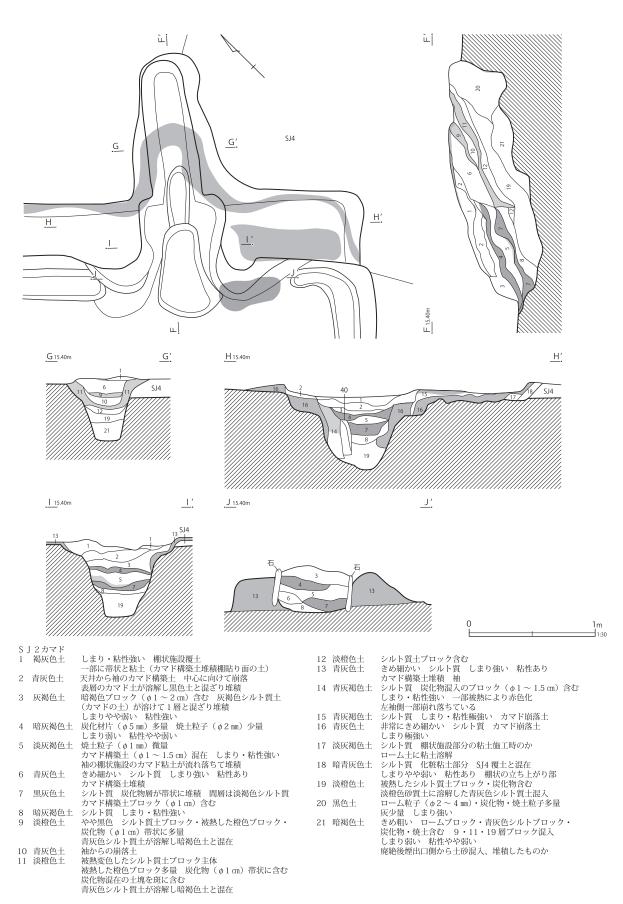
壁溝はほぼ全周して検出されているが、南西辺で部分的に立ち上がる。幅は0.18m~0.40m、深さは0.10m~0.17mである。

遺物は、須恵器、土師器、石製品が出土している。第60図1は須恵器の蓋である。完形品である。内面に朱墨が認められるが、研磨跡はみられないため、転用硯として使用された可能性は低い。産地は南比企窯と推定される。2も須恵器の蓋である。内面の外周に煤が多く付着している。カマド燃焼部付近からこの2点の須恵器蓋が重なって出土している。

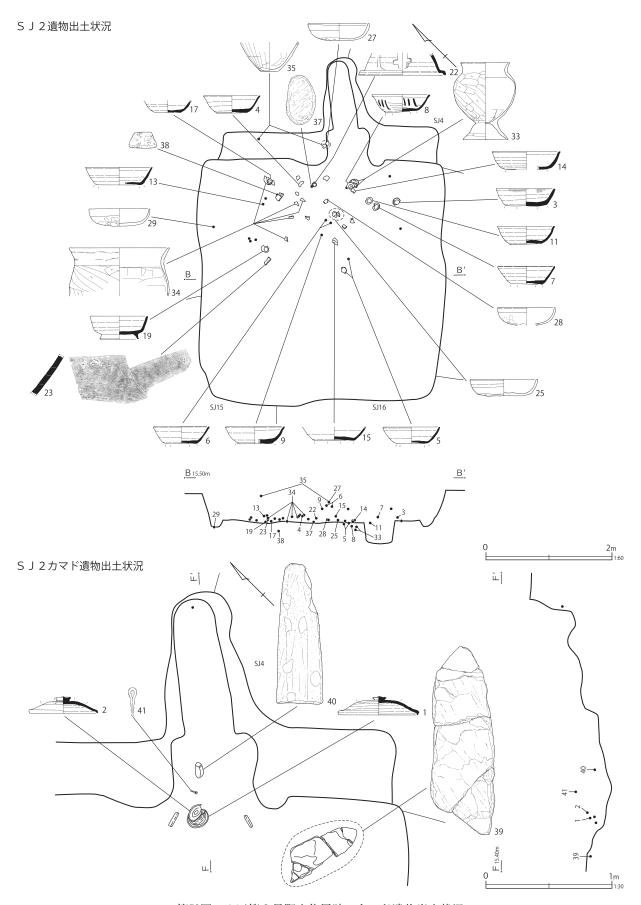
3~21は須恵器である。3はほぼ完形の坏で底 部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられる。口 縁部に煤が付着し、見込み部分に漆と思われる付 着物が残っている。4は底部回転糸切り後無調整 である。全体的に煤けている。5は底部に回転糸 切り後外周ヘラケズリがみられ、薄いが「+」の ヘラ記号がみられる。6は底部に回転糸切り後外 周ヘラケズリがみられる。底部から外面の大部分 と、内面の口縁部付近にかけて煤けている。7は 底部に回転糸切り後外周ヘラケズリがみられ、5 と同様に薄いが「+」のヘラ記号がみられる。8 は底部静止糸切り後外周ヘラケズリがみられる。 体部の内外面2箇所に「川」とみられる墨書があ る。9は底部全面にヘラケズリ調整がみられる。 口縁部が煤けている。10は底部回転糸切り後無調 整である。口縁部が少し煤けているが、他の土器 と比べると少ない。11は底部回転糸切り後無調整 である。底部に「オ」のような墨書がみられる。 12~17も須恵器の坏であるが、残存率は低い。ま た、他の残存率が高い須恵器坏と異なり、煤けて いない。



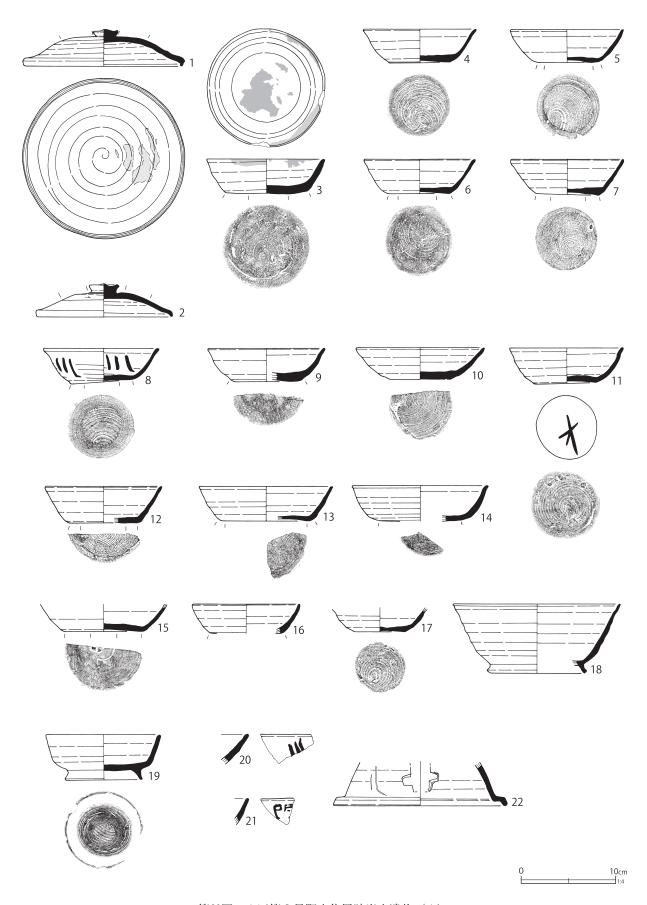
第57図 A区第2号竪穴住居跡



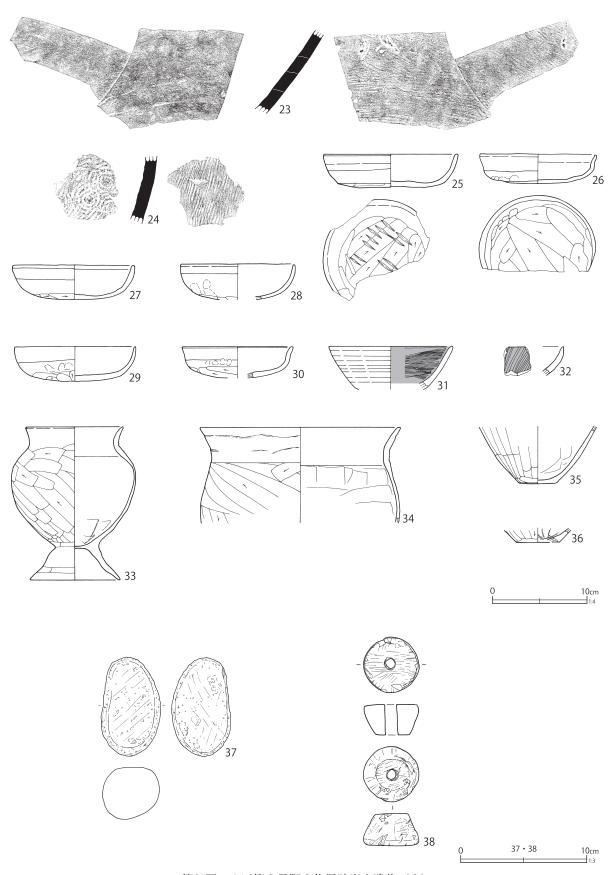
第58図 A区第2号竪穴住居跡カマド



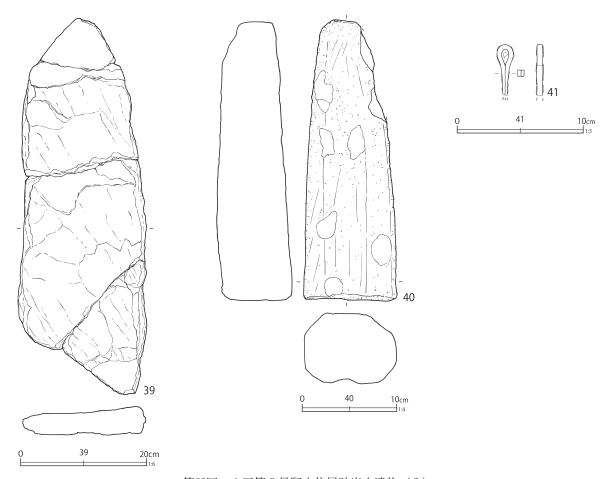
第59図 A区第2号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況



第60図 A区第2号竪穴住居跡出土遺物(1)



第61図 A区第2号竪穴住居跡出土遺物 (2)



第62図 A区第2号竪穴住居跡出土遺物(3)

第25表 A区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表(第60~62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	16.5	3.9	_	IJ	100	普通	褐灰	カマドNo.3 南比企窯産か 肩部ヘラケ ズリ 内面朱墨痕	98-1
2	須恵器	蓋	13.9	3.4	_	EK	80	普通	灰白	カマドNo.2 内面外周煤 肩部ヘラケズ リ	98-1
3	須恵器	坏	12.2	3.8	8.6	EI	95	普通	褐灰	No.27 油煙 煤付 見込漆 底部回転糸 切り外周ヘラケズリ	98-1
4	須恵器	坏	11.8	3.5	6.2	DK	80	普通	褐灰	b・No.18 底部回転糸切り	98-1
5	須恵器	坏	(11.8)	3.5	6.5	EIJ	40	普通	褐灰	b・No.13・36 南比企窯産 底部回転糸切 り外周ヘラケズリ ヘラ記号[+]	98-1
6	須恵器	坏	(11.6)	3.6	6.4	IJK	60	普通	黄灰	No.3・4 南比企窯産 被熱 煤 底部回 転糸切り外周ヘラケズリ	98-1
7	須恵器	坏	(11.8)	3.7	6.7	EIJK	70	普通	灰白	No.28 底部回転糸切り外周ヘラケズリ ヘラ記号[+]	98-1
8	須恵器	坏	11.9	3.8	6.8	IJK	85	普通	褐灰	No.42 南比企窯産 墨書 「川」か 底部静 止糸切り外周ヘラケズリ	98• 99-1
9	須恵器	坏	(12.3)	3.5	(6.8)	IK	35	普通	黄灰	No.5 底部ヘラケズリ	98-1
10	須恵器	坏	(13.4)	3.3	6.4	DI	40	普通	褐灰	c 底部回転糸切り無調整	98-1
11	須恵器	坏	11.8	3.7	6.4	IJ	70	普通	褐灰	No.29 南比企窯産 墨書「オ」か 底部回 転糸切り無調整	98-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版		
12	須恵器	坏	(12.2)	3.9	(7.0)	IJK	30	普通	黄灰	c 南比企窯産 底部回転糸切り外周へ ラケズリ	98-1		
13	須恵器	坏	(13.8)	3.6	(9.4)	EI	10	普通	褐灰	No.7 底部静止糸切り外周へラケズリ			
14	須恵器	坏	(14.0)	[3.7]	(8.9)	EI	10	普通	褐灰	No.30 底部ヘラケズリ			
15	須恵器	坏	_	[2.9]	8.0	IJK	30	普通	灰	No.35 南比企窯産 底部回転糸切り外周 ヘラケズリ	98-1		
16	須恵器	坏	(11.2)	[3.1]	(7.5)	EIK	20	普通	黄灰	b 手持ちヘラケズリか			
17	須恵器	坏	_	[2.5]	5.3	IJK	30	普通	オリーブ黒	No.40 南比企窯産か 底部回転糸切り無 調整	98-1		
18	須恵器	高台付坏	(17.3)	7.2	(9.8)	EI	10	普通	褐灰	c 末野窯産			
19	須恵器	高台付坏	11.8	4.8	7.9	IK	90	普通	褐灰	No.25 煤 転用硯か	98-1		
20	須恵器	坏	_	[3.1]	_	Ι	5	普通	にぶい黄橙	墨書[川]	99-3		
21	須恵器	坏	_	[2.7]	_	Ι	5	普通	褐灰	c 墨書「門」	99-4		
22	須恵器	円面硯	_	[5.6]	(17.8)	IJ	10	普通	褐灰	No.41 南比企窯産か 十字透かし ヘラ 記号[川]	99-2		
23	須恵器	甕	_	[8.7]	_	EI	5	良好	褐灰	カマド・No.26 内面指頭圧痕 輪積痕			
24	須恵器	甕	_	[7.0]	_	EI	5	不良	褐灰	c 内面にぶい赤褐 外面平行叩き 内面同心円文 No.34 底部ヘラケズリ 板状圧痕			
25	土師器	坏	(13.8)	3.5	_	CI	45	普通	にぶい橙	No.34 底部ヘラケズリ 板状圧痕	98-2		
26	土師器	坏	12.0	3.0	_	CHIK	60	普通	にぶい橙	d	98-2		
27	土師器	坏	(12.5)	3.6	_	IK	65	普通	明褐	No.46 底部手持ちヘラケズリ	98-2		
28	土師器	坏	(11.8)	[3.7]	_	CK	20	普通	にぶい褐	b・No.37 底部手持ちヘラケズリ			
29	土師器	坏	(12.5)	3.6	_	CI	45	普通	にぶい褐	No.48	98-2		
30	土師器	坏	(11.3)	3.2	_	AHI	20	普通	にぶい褐	d 底部手持ちヘラケズリ無調整	98-2		
31	土師器	坏	(12.8)	[4.5]	_	Ι	10	普通	にぶい黄橙	d 黒色土器 ミガキ後内面黒色処理			
32	土師器	坏	_	[3.0]	_	HI	5	普通	灰黄褐	b 暗文坏 内面黑色処理			
33	土師器	台付甕	(10.0)	16.0	9.3	AIK	50	普通	にぶい黄褐	No.43 • 44	98-2		
34	土師器	甕	(20.8)	[10.0]	_	HI	30	普通	にぶい橙	b 北武蔵型甕	98-2		
35	土師器	甕	_	[6.0]	3.9	AHI	20	普通	黒褐	カマド・No.11・46			
36	土師器	甕	_	[1.9]	(4.6)	AI	5	普通	黒褐	d			
37	石製品	磨石	長さ7.8	幅4.7	厚さ4.2	重さ89	.6 残	字100		No.45 角閃石デイサイト			
38	石製品	紡錘車	長さ4.4	幅4.3	厚さ2.5	重さ55	.9 残	字100		No.47 流紋岩 片面直 穿孔 ミガキ			
39	石製品	天井石	長さ60.	0 幅20.6	6 厚さ4	.5 重さ	5832.9			カマドNo.7 緑泥片岩			
40	石製品	支脚	長さ29.	8 幅9.8	厚さ8.0) 重さ1	516.6	残存10	00	カマドNo.6 砂岩			
41	鉄製品	環釘	長さ[4.	0] 幅0.	25 厚さ	0.5 重さ	₹6.8			カマドNo.1			

18と19は高台付坏である。18は残存率が悪く判然としないが、煤けていない。19は残存率が高い。底部を中心とした周辺と内面見込み部分が煤けている。また、見込み部分が摩滅しており、研具として転用されていた可能性がある。20と21は須恵器坏の口縁部片であるが、墨書土器である。いずれも口縁部外面の下に20は「川」、21は「門」と墨書されている。 22は須恵器の円面硯

である。脚部のみ残存し、端部が屈曲して立ち上がる。透かしは残存部分からの推定では十字透かしになるとみられる。透かしに並んでへう記号で「儿」のような記号がみえるが、断片的なので判然としない。産地は南比企窯とみられる。

23と24は須恵器甕の胴部片である。23は内面に 指頭圧痕と輪積痕が残る。24は外面に平行タタキ 痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。 25~32は土師器の坏である。25は口縁部にナデ調整、底部にヘラケズリ痕と板状圧痕がみられる。胎土に角閃石をやや多く含む。31と32は黒色土器である。いずれも破片であるが、内面に黒色処理とミガキ調整がみられる。33は台付甕である。外面及び内面の上半が煤けている。8の「川」記載の墨書土器とともにカマド正面付近より出土している。34は甕でいわゆる北武蔵型甕に位置付けられる。

37は角閃石デイサイト製の磨石である。複数面に擦痕がみられる。刃物痕はみられない。38は流紋岩製の紡錘車である。全体的に摩滅しているが、完形で残存している。39は緑泥片岩のカマド天井石である。右袖の手前で出土しており、原位置から移動している。全体的に被熱し赤く変色している。40は砂岩製のカマド支脚である。カマド燃焼部に直立して出土している。41は鉄製の環釘である。カマド燃焼部から出土している。

遺物の多くはカマド前の範囲に集中して散らば るように出土している。

時期は8世紀末頃~9世紀初頭頃と推定される。

A区第3号竪穴住居跡(第63・64図)

A区の第3号竪穴住居跡はAT-25グリッド、 調査区の南東部に位置する。

第1号溝跡にカマドの一部が壊されている。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長2.90m、短軸長2.84m、深さ0.35mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土や暗褐色土を主体とする。

カマドは北東辺に設置されている。残存規模は 長さ1.65m、幅1.10mで燃焼部の深さは0.45mで ある。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築 されている。煙道部は検出されなかったが、重複 する第1号溝跡に壊されている可能性がある。袖 は右側のみ残存しており、地山削り出しとみられ る。

カマド前には広く炭化物が堆積し、袖の下にも

炭化物が確認できる。袖が崩落していたか、造り 替えを行っていた可能性がある。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴・ピットは2 基検出された。P1は北西コーナー付近に位置するが、対応する他のコーナー付近からは柱穴・ ピットが検出されなかった。P2はカマドの反対 側に位置する南東辺に位置することから、入口施 設に関わる可能性が想定される。

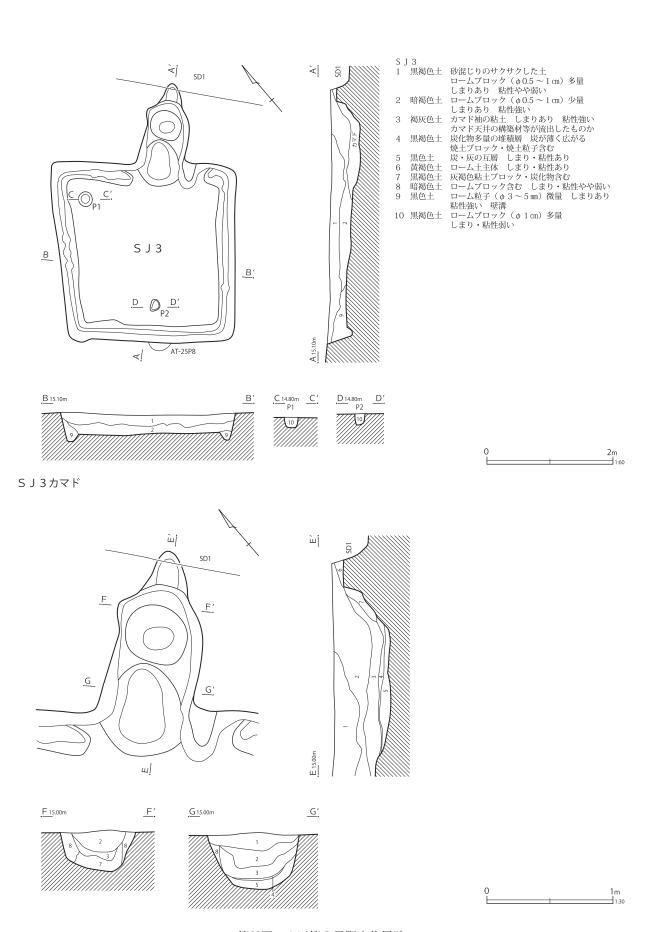
壁溝は、カマド部分を除き全周して検出されている。幅は0.23m~0.38m、深さは0.07m~0.15mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第65図1~4は須恵器の坏である。いずれも南比企窯産の製品である。3のみ完形品である。底部に回転糸切り後外周ヘラケズリ調整がみられ、「十」か「×」のヘラ記号がみられる。4は底部のみ残存しており、回転糸切り後外周ヘラケズリ調整がみられる。外面が煤けている。

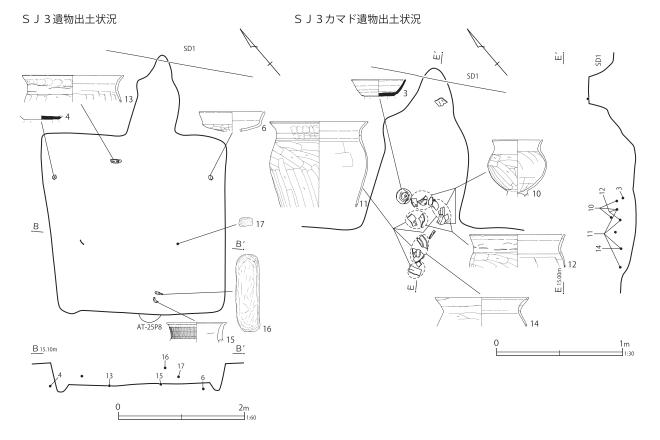
5から7は土師器の坏である。いずれも口縁部から体部にかけての一部が残る破片資料である。8から10は土師器の台付甕である。8と9は脚部のみの残存で、10は甕部分が残存している。胴部にヘラケズリ調整がみられる。11から14は土師器の甕である。いずれも口縁部から胴部にかけて残存しており、底部は残存していない。「コ」の字状口縁を持つ北武蔵型甕に位置付けられるタイプのものである。15は土師器の壺である。口縁部のみの残存である。頸部に縦方向の丁寧なミガキが施されている。16の緑泥片岩製敲石とともにカマドの反対側に位置する南東辺から出土している。

16は緑泥片岩製の敲石である。混入品の可能性 もあるが、15の土師器壺と同一地点より出土して いる。17は滑石製の臼玉である。側面形は弱い棗 玉形である。側面の研磨は斜め方向に施されてい る。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿 孔は片側穿孔で錐先貫通である。

出土した遺物のうち、3の須恵器坏、10の台付



第63図 A区第3号竪穴住居跡



第64図 A区第3号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況

甕、11・12・14の土師器甕はカマドの燃焼部から 出土しており、カマドが機能していた時期に使用 されていたか、廃絶直後のものと想定することが できる。これらの遺物から竪穴住居の時期は8世 紀末~9世紀初頭頃と推定される。

A 区第12号竪穴住居跡 (第66・67図)

A区の第12号竪穴住居跡はAS $-22 \cdot 23 \cdot$ AT-23グリッド、調査区の西側付近に位置する。

他の遺構との重複関係はないが、南半分が調査 区域外に至る。

覆土はロームブロックを含んだ黒褐色土を主体とする。平面形は残存範囲から推定すると隅丸長方形とみられる。残存規模は長軸長2.80m、短軸長1.60m、深さ0.30mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

カマドは東辺に設置されている。残存規模は長さ1.78m、幅0.90mで燃焼部の深さは0.30mであ

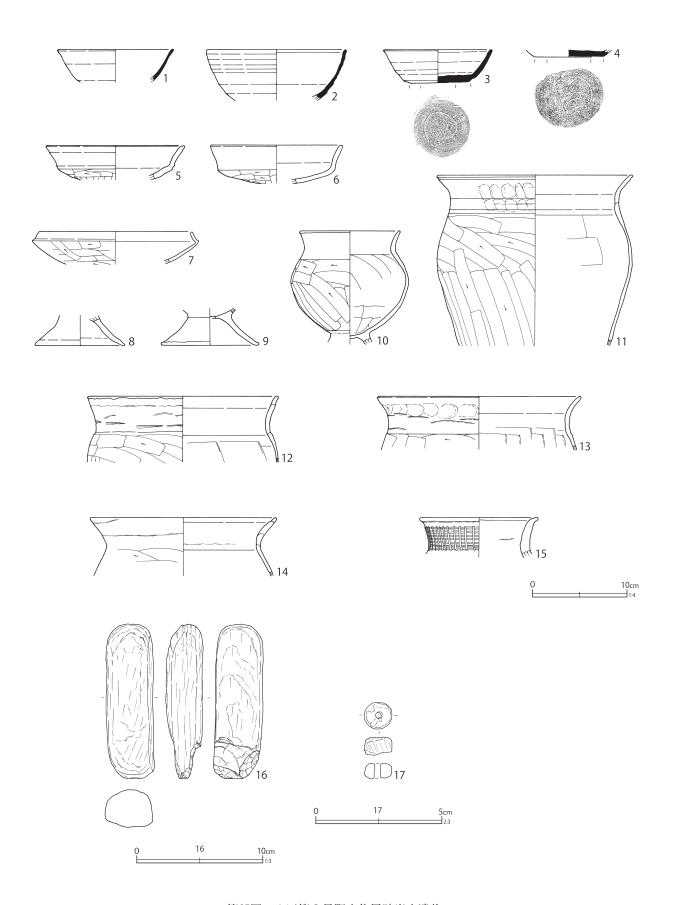
る。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。袖は左袖のみ確認された。

貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はカマド右側付近より1基検出された。壁溝は検出された範囲ではカマド部分以外で検出されたことから全周していた可能性がある。規模は、幅は0.20m~0.30m、深さは0.05m~0.20mである。

遺物は須恵器と鉄製品が出土している。図示できる土師器は出土していない。

第67図1~3は須恵器の坏である。いずれも底部回転糸切り無調整である。産地は1と3は南比企窯、2は東金子窯である。4は須恵器壺の底部で高台が付く。産地は南比企窯とみられる。

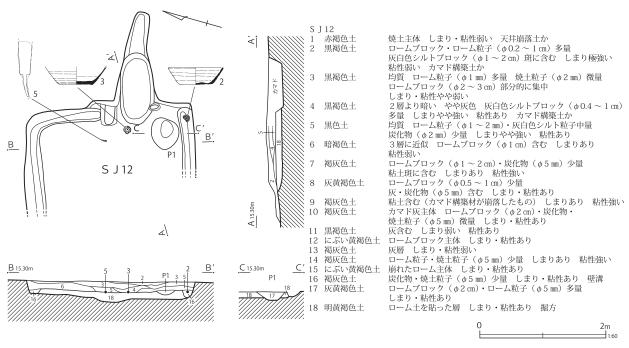
1はカマドの左袖付近、4はカマドの右袖付近 からの出土である。また、3もカマドの燃焼部の 手前、2も壁溝の西端でカマドに近接した場所か らの出土である。



第65図 A区第3号竪穴住居跡出土遺物

第26表 A区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	須恵器	坏	(12.0)	[3.4]	_	IJK	20	普通	灰	d 南比企窯産		
2	須恵器	坏	(14.5)	[5.3]	_	IJK	30	普通	灰	c 南比企窯産 重ね焼き痕		
3	須恵器	坏	11.2	3.5	6.2	IJ	100	普通	褐灰	カマドNo.9 南比企窯産 底部回転糸切り外周ヘラケズリ ヘラ記号[+]か[×]	99-5	
4	須恵器	坏	_	[0.8]	7.2	IJK	20	普通	灰	No.4 南比企窯産 底部糸切り外周ヘラ ケズリ	99-5	
5	土師器	坏	(14.4)	[3.5]	_	CIK	20	普通	にぶい黄橙	b·c		
6	土師器	坏	(13.7)	[4.0]	_	CHI	20	良好	にぶい褐	No. 2 蓋模倣坏		
7	土師器	坏	(16.0)	[3.4]	_	AI	20	普通	灰黄褐	d 身模倣坏		
8	土師器	台付甕	_	[3.2]	9.4	ACI	10	普通	黒褐	d		
9	土師器	台付甕	_	[3.9]	(10.0)	CHI	10	普通	にぶい黄橙	a	99-5	
10	土師器	台付甕	(10.4)	[11.9]	_	AC	40	普通	にぶい橙	カマドNo.1・4・5	99-5	
11	土師器	甕	(20.4)	[17.8]	_	ACI	30	良好	黒褐	b・カマド・No.4・6・7・8 北武蔵型甕	99-5	
12	土師器	甕	(20.0)	[6.8]	_	AHI	20	普通	にぶい橙	カマド・No.4・6 北武蔵型甕		
13	土師器	甕	(21.2)	[5.5]	_	AC	20	普通	にぶい褐	a·No.3 北武蔵型甕 金雲母多量		
14	土師器	甕	(19.4)	[6.1]	_	AI	10	良好	橙	カマド・No.7 北武蔵型甕 雲母多量		
15	土師器	壺	(12.1)	[4.2]	_	ACHI	20	普通	灰褐	No. 6		
16	石製品	敲石	長さ12.	2 幅3.9	厚さ3.0) 重さ2	19.0 3	浅存100		No. 7 緑泥片岩	99-5	
17	石製品	白玉	長1.1	短1.1 厚	10.7 孔	径0.3 重	1.2 B	桟存100		No.1 滑石 中C斜2cⅡ		



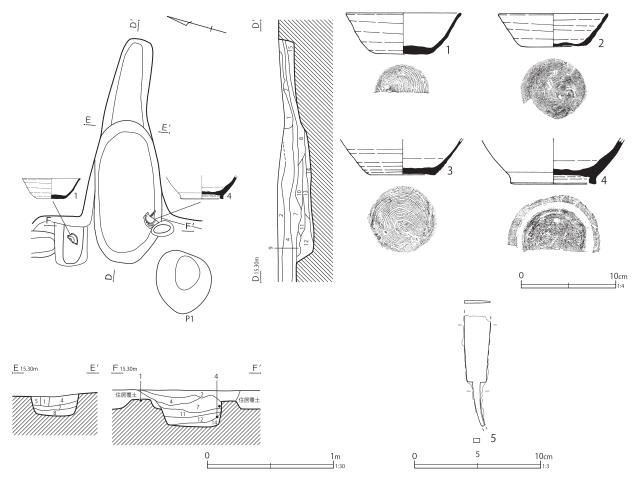
第66図 A区第12号竪穴住居跡

5 は鉄鏃である。先端部は欠損している。広根 式か斧箭式のタイプとみられる。

時期は須恵器の年代から、9世紀前半頃と推定 される。

(2) 井戸跡

A区において奈良時代・平安時代に位置付けられると想定される井戸跡は5基検出された。遺物が伴う遺構は少ないが、重複関係などから時期を



第67図 A区第12号竪穴住居跡カマド・出土遺物

第27表 A区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		1	備考	図版
1	須恵器	坏	12.0	4.3	5.6	GJ	50	普通	灰白	No. 6	南比企窯産	底部回転無調整	100-1
2	須恵器	坏	11.4	3.5	6.8	G	70	普通	褐灰	No. 3	東金子窯産	底部回転無調整	100-1
3	須恵器	坏	_	[3.8]	6.8	AJ	60	普通	褐灰	No. 4	南比企窯産	底部回転無調整	100-1
4	須恵器	壺	_	[4.9]	9.0	EIJ	5	普通	灰褐	No. 2	南比企窯産		100-1
5	鉄製品	鉄鏃	長さ[8.8]	8] 幅2.0	厚さ0.	2 重さ	10.1			No. 5			

位置付けたが、飛鳥時代以前や中世以降の時期の可能性もある。形状は、上端が0.50m~0.70m程度の小型のタイプ、1.00m以上のタイプに分かれる。

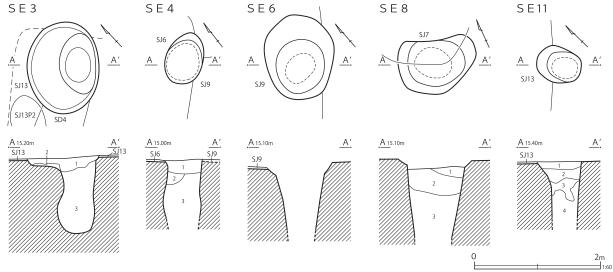
また、遺構検出面から1.2mほどで底面に到達するタイプと、そこからさらに下層に至り、安全対策のため掘削できなかったタイプがある。このような遺構の違いは古墳時代・飛鳥時代の様相と同様である。

第28表に検出グリッド、平面形、規模、深さを 示した。以下にそれぞれの井戸跡の特徴、重複関 係、出土遺物について記す。

A区第3号井戸跡(第68図)

上端が1.14mであるが、検出面から0.10m下からはほぼ垂直に掘削されている。下半分がやや袋状に広がる。深さ1.22mで底面に到達している。

遺物は土師器の甑と甕の破片が出土している。



S E 3 1 暗褐色土 やや明るい ローム粒子 $(\phi 2 \, \text{mm}) \cdot$ 炭化材片 $(\phi 1 \, \text{cm})$ 多量 炭化物 $(\phi 5 \, \text{mm})$ 少量 しまり・粘性あり ロームブロック $(\phi 5 \, \text{cm})$ 多量 しまりなし 粘性やや弱い 井戸肩口が部分的に崩落してブロック状に堆積したものか 均質 遺物小片 $(\phi 2 \, \text{cm})$ 微量 しまりなし 粘性やや弱い

2 黒褐色土

3 黒褐色土

S E 4

万 灰黄褐色土 ロームブロック(φ0.5 ~ 5 cm) 多量 しまり・粘性あり
 2 灰黄褐色土 1層よりロームブロックやや小さい しまり・粘性あり
 3 黒褐色土 ローム粒子(φ5 mm) 少量 しまりやや弱い 粘性強い

1 明黄褐色土 ロームブロック含む しまり・粘性あり 2 灰黄褐色土 ロームブロック多量 黒色土層状に含む しまり・粘性あり 3 黒色土 含有物少量 しまりやや弱い 粘性強い

 SE11
 一人粒子(φ2 mm)多量 赤暗色不定形円礫(φ1 cm)少量 炭化物(φ2 mm) 後量 しまりあり 粘性やや弱い

 2 にぶり黄褐色土 1層よりやや暗くローム粒子少ない 赤色粒子(焼土ではない)(φ2 mm)少量 3層赤色粒子が漸移したものか シルト質〜粘質土 灰・焼土・炭化物互層 炭化物(φ5 mm)・炭化材片・上層に赤色鉱物粒子(φ1 ~ 2 mm)(上層赤色粒子と同一か)少量 しまり弱い 粘性強い 均質 ロームブロック(φ0.2 ~ 1 cm) 斑に含む しまりなし 粘性やや弱い

第68図 A区井戸跡

第28表 A区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複	遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
3	AT-24	不整形	上1.50 下0.55	上1.14 下0.40	1.22	SJ13	SD4	8	AT-24	不整形	上1.24 下0.58	上0.80 下0.45	[1.20]	SJ7
4	AT-24	不整形	上0.82 下0.58	上0.60 下0.52	[0.90]	SJ6	SJ9	11	AU-24	不整形	上0.72 下0.40	上0.50 下0.32	[0.90]	SJ13
6	AT-24	不整形	上1.34 下0.50	上1.10 下0.40	[1.08]	SJ9								



第69図 A区第3号井戸跡出土遺物

第29表 A区第3号井戸跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
1	土師器	魱	_	[4.1]	(6.0)	ACI	5	普通	にぶい黄褐	下端に穿孔		100-2
2	土師器	甕	_	(4.4)	_	ACI	5	普通	にぶい褐	北武蔵型甕	胴部に径4mmの焼成前穿孔	100-2

第69図1は甑の下半片である。端部に径8㎜の穿孔がみられる。2は甕の胴部破片で北武蔵型甕とみられる。胴部に径4㎜の焼成前穿孔がみられる。出土している2点の土器片いずれからも穿孔がみられ、同様の目的で使用されていた可能性があるが詳細は不明である。

時期は北武蔵型甕から8世紀末から9世紀初頭 頃とみられる。

A区第4号井戸跡(第68図)

上端が0.6m~0.82mの小型タイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ0.90mでは底面に到達していない。遺物は出土していない。

時期は第6号竪穴住居跡より新しいことから7世紀中頃以降とみられる。

A区第6号井戸跡(第68図)

上端が1.10m~1.34mで下層に至るにつれて狭くなる。深さ1.08mでは底面に到達していない。 遺物は出土しなかった。

時期は第9号竪穴住居跡より新しいことから7世紀中頃以降とみられる。

A区第8号井戸跡 (第68図)

上端が0.80m~1.24mのタイプで下層に至るに つれて狭くなる。深さ1.20mでは底面に到達して いない。遺物は出土しなかった。

時期は第7号竪穴住居跡より古いことから7世 紀前半~中頃以前とみられる。

A区第11号井戸跡(第68図)

上端が0.50m~0.72mの小型タイプでほぼ垂直に掘削されている。深さ0.90mでは底面に到達していない。

遺物は細片のため図示できなかったが、比企型 坏の口縁部片、土師器甕の口縁部片などが出土し ている。

時期は第13号竪穴住居跡より新しいことから7 世紀中頃以降とみられる。

(3) 溝跡

A区において奈良時代・平安時代に位置付けら

れると想定される溝跡は3条検出された。

第31表に検出グリッド、方位、長さ、幅、深さ を示した。

A区第1号溝跡(第70・71図)

A区第1号溝跡は、走行方位はN-40°-Wを 指す。南東から北西方向に延びている。南東端が 調査区域外へ至るため全長は不明である。北西端 は調査区域内で立ち上がる。A区集落域北側の地 形肩部端をほぼ直線的に走る。

断面形状は底面が逆台形となる。覆土は黒褐色 土と青灰色粘土を主体とする。重複関係は、第3 号竪穴住居跡、AS-25P2と重複しこれより新 しい。第2号溝跡とほぼ並行して走り、北西端の 立ち上がり地点も同じである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第72図 1と2は須恵器甕の胴部片である。1は外面に平 行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕と自然釉が みられる。2は外面に平行タタキ痕とカキ目、内 面に同心円文アテ具痕がみられる。3は土師器の 坏で北武蔵型坏である。口縁部が垂直に立ち上が り、体部にヘラケズリ調整がみられる。4は土師 器の皿である。体部で緩やかに屈曲し口縁部が外 側へ広がる。5は残存率が高い土師器の鉢である。

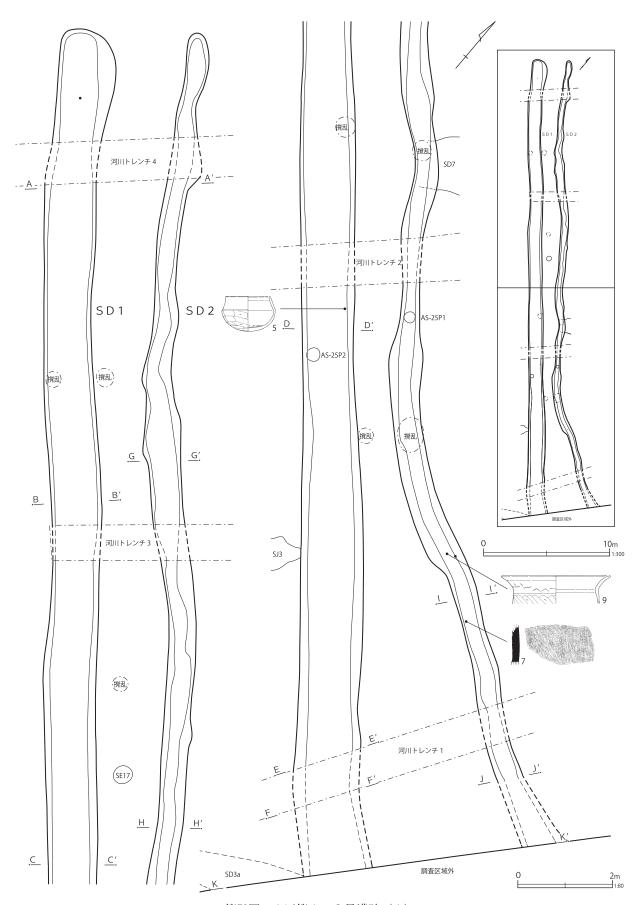
時期は土師器からみると、8世紀初頭頃に位置付けられる。

A区第2号溝跡(第70・71図)

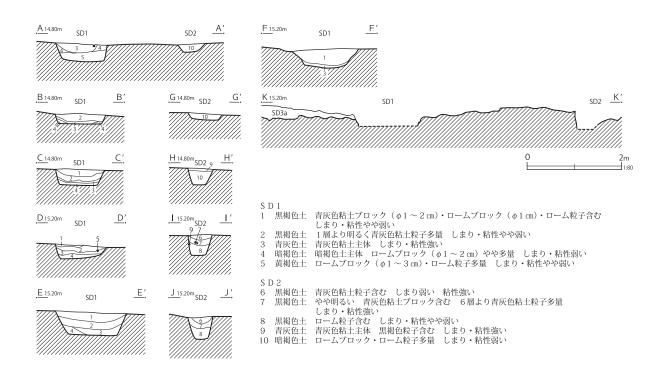
A区第2号溝跡は、走行方位はN-40°-Wを 指す。南東から北西方向に延びている。南東端が 調査区域外へ至るため全長は不明である。北西端 は調査区域内で立ち上がる。第1号溝跡と同様に A区集落域北側の地形肩部端を走るが、第1号溝 跡と比べやや歪んで走り、南側の方が東側へ振れ ている。

断面形状は底面が逆台形となる。覆土は黒褐色 土を主体とする。重複関係は、第7号溝跡、AS -25P1と重複しこれより新しい。

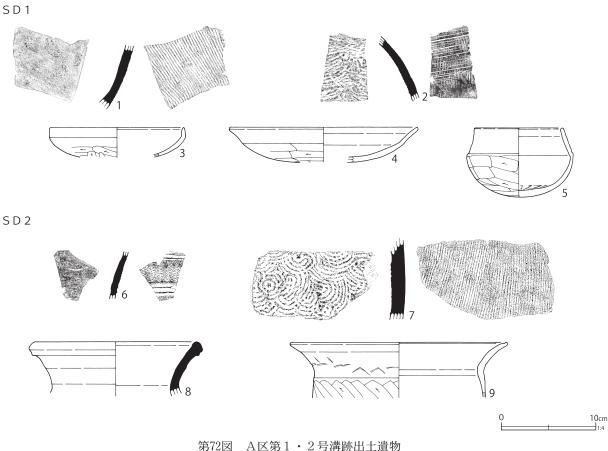
遺物は須恵器と土師器が出土している。第72図

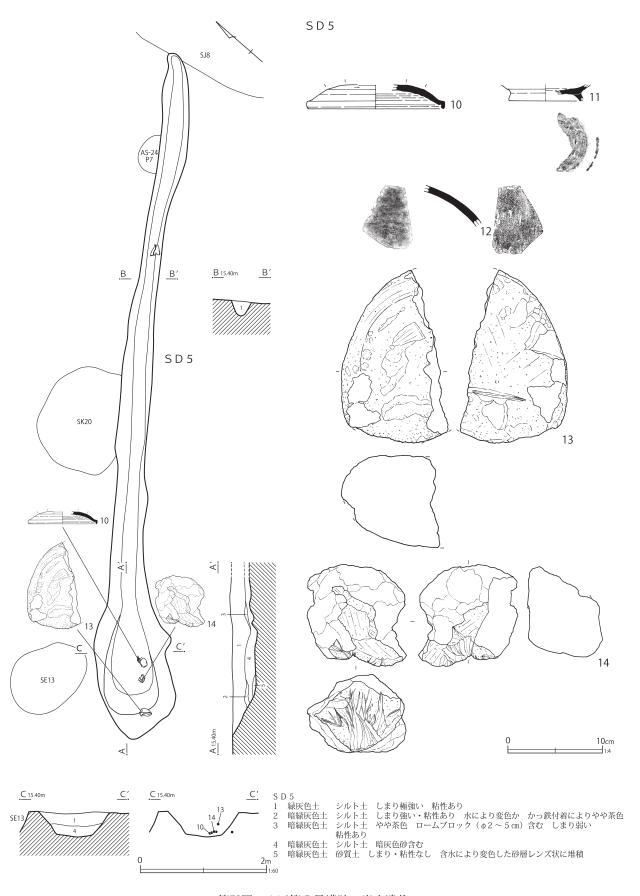


第70図 A区第1・2号溝跡(1)



第71図 A区第1·2号溝跡(2)





第73図 A区第5号溝跡・出土遺物

第30表 A区第1・2・5号溝跡出土遺物観察表 (第72・73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	
1	須恵器	甕	_	[6.6]	_	I	5	良好	灰	SD 1・AT-25 外面平行叩き 内面同心円 文後ナデ・自然釉	
2	須恵器	甕	_	[6.8]	_	IK	5	良好	灰	SD 1・AT-25 外面平行叩き後カキ目 内面同心円文	
3	土師器	坏	(14.0)	[3.0]	_	ACI	15	普通	橙	SD1 北武蔵型坏	100-3
4	土師器	Ш	(19.7)	[3.7]	_	ACI	20	普通	橙	SD 1 • AT-25	
5	土師器	鉢	9.3	7.2	_	CHI	90	良好	橙	SD 1 No. 1	100-3
6	須恵器	璲	_	[4.9]	_	I	5	良好	灰	SD2 外面波状文	100-3
7	須恵器	甕	_	[8.2]	_	I	5	良好	灰	SD 2 No. 1 末野窯産か 外面平行叩き 内面同心円文	100-3
8	須恵器	甕	(17.2)	[5.6]	_	BI	10	普通	にぶい褐	SD 2 末野窯産か	
9	土師器	甕	(22.4)	[5.8]	_	ACHI	20	良好	にぶい褐	SD 2 No. 2 「く」の字状口縁甕 金雲母	100-3
10	須恵器	蓋	(14.2)	[2.4]	_	I	30	良好	灰	SD 5 No. 1 東金子窯産か 肩部ヘラケズ リ	100-3
11	須恵器	高台付坏	_	[1.7]	(7.3)	EIK	20	普通	灰白	SD5 末野窯産か	100-3
12	須恵器	壺	_	[4.2]	_	I	5	良好	灰オリーブ	SD 5 外面平行叩き 内面無文当て具痕 後ナデ	
13	石製品	不明	長さ[18.3] 幅[11.3] 厚さ10.4 重さ1142.0 残存50					142.0	残存50	 SD 5 No. 5 安山岩 全体被熱 黒色化	
14	石製品	不明	長さ[10.7] 幅[10.5] 厚さ[9.5] 重さ416.5						SD 5 No. 4 安山岩か		

第31表 A区溝跡一覧表

No.	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)		深さ(m)		重複遺構	
INO.	299F	刀业	刀似	及さ(III)	最大	最小	最大	最小	里後退円	
1	AQ-24 AR-23 · 24 AS- 24 · 25 AT-25 · 26	N-40° -W	-	[36.00]	0.70	0.50	0.46	0.27	SJ3 SD3a AS-25P2	
2	AQ-24 AR-24 • 25 AS- 25 AT-25 • 26	N-40° -W	_	[36.00]	0.80	0.36	0.48	0.16	SD7 AS-25P1	
5	AS-23·24	N-57° -E	_	[10.90]	1.10	0.30	0.36	0.21	SJ8 SK20 AS-24P7	

6は 聴の 頸部である。外面に 波状文がみられる。 7は 須恵器甕の 胴部片である。外面に 平行 タタキ痕、 内面に 同心 円文アテ 具痕がみられる。 8は 須恵器甕の 口縁部である。 7と8の 須恵器はいずれも 末野窯産の 製品とみられる。 9は 土師器甕の口縁部で「く」の 字状口縁部を持つ。

時期は第1号溝跡よりやや古い時期に位置付け られるが、さらに遡る可能性もある。

A区第5号溝跡(第73図)

A区第5号溝跡は、走行方位はN-57°-Eを 指す。南西から北東方向に延びている。全長は 10.90mで、調査区域内において両端ともに立ち 上がる。断面形状は南西側で底面が逆台形、北東 側で薬研形となり、途中で形状が変わる。覆土は暗緑灰色土を主体とする。重複関係は、第8号竪穴住居跡、第20号土壙、AS-24P7と重複し、これより新しい。

遺物は須恵器と安山岩製の不明石製品が出土している。第73図10は須恵器の蓋である。ツマミ部分は欠損している。東金子窯産の製品とみられる。11は高台付坏である。末野窯産の製品とみられる。12は須恵器壺の肩部片である。13と14は安山岩製の石製品とみられるが、擦痕や刃物痕のような痕跡がみられることから砥具として使用された可能性がある。時期は、須恵器から8世紀末~9世紀初頭頃とみられる。

(4) 土壙

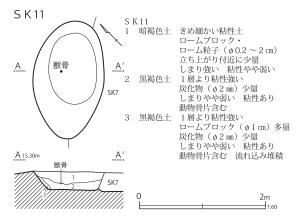
A区において奈良時代・平安時代と想定できる 土壙は1基のみ検出された。

A区第11号土壙 (第74図)

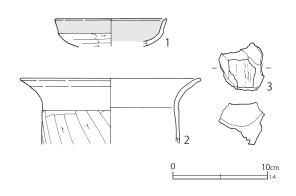
平面形は楕円形の形状を呈する。覆土は暗褐色 土や黒褐色土を主体とし、炭化粒子や獣骨片を含む。古墳時代や飛鳥時代の土壙に伴うような様相 とは異なるので、埋没時に流れ込んだものとみられる。重複関係は第7号土壙と重複し、これより 新しい。

遺物は土師器のほかに羽口や図示できなかったが鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土している。第75図1は土師器の坏である。内外面に赤彩が施された比企型坏の破片である。2は土師器の甕である。胴部にヘラケズリ調整がみられる。3は羽口の破片である。周辺に黒色で気泡のあるガラス化した鉄滓が付着している。

図示できなかった破片資料もいくつか出土しており、土師器の模倣坏口縁部片が6点、羽口の破片が3点、鉄滓が18点出土している。これらの鍛冶関連遺物は第1号鍛冶関連遺構から混入したとみられる。時期は8世紀代以降に位置付けられると思われる。



第74図 A区第11号土壙



第75図 A区第11号土塘出土遺物

第32表 A区第11号土壙出土遺物観察表(第75図)

番	号 種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	
1	土師器	坏	(11.7)	[2.9]	_	HI	5	普通	赤褐	比企型坏 内外面赤彩	
2	土師器	甕	(18.8)	[6.8]	_	ACI	10	普通	にぶい黄褐	AT-23	
3	土製品	羽口	長さ[5. 厚さ4.3			I	10	普通	黒	周辺に黒色で気泡のあるガラス化した鉄 溶付着 内面酸化橙色	

第33表 A区土壙一覧表

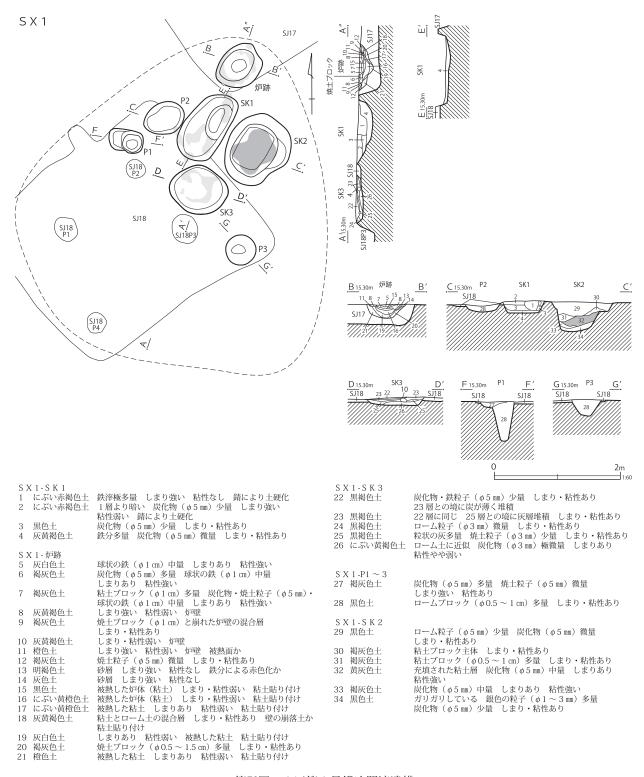
遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
11	AT-23	楕円形	N-46° -E	1.87	1.12	0.30

(5) 鍛冶関連遺構群

A区において検出された鍛冶関連遺構群とは、 複数の炉跡、土壙やピットから構成され、その周 辺から羽口や鍛冶滓、椀形鍛冶滓などが集中的に 分布していた範囲とした。これらを包括する竪穴 住居跡や掘立柱建物跡などの施設的な遺構は検出されなかった。

A区第1号鍛冶関連遺構(第76図)

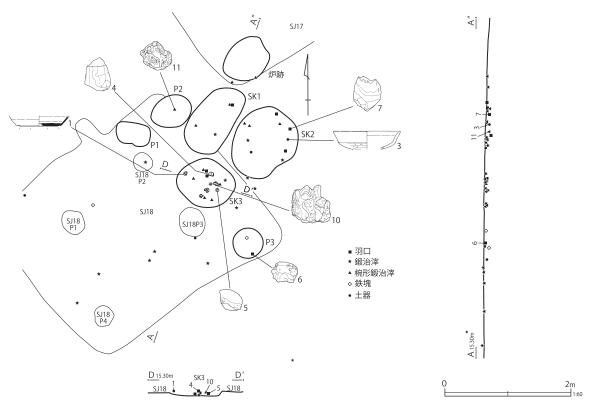
AS-23グリッドに位置する。炉跡1基、土壙3基、ピット3基から構成される。



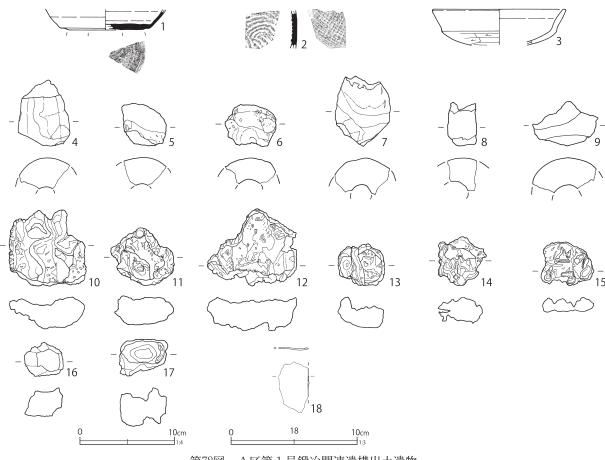
第76図 A区第1号鍛冶関連遺構

炉跡は第1号鍛冶関連遺構群のなかで北東側に 位置する。覆土は灰白色土や褐灰色土、灰黄褐色 土が確認されるとともに、被熱した炉壁や炭化物 や焼土を含んだ土で埋没している。しかし、この 炉跡から図示できる遺物は出土していない。

第1号鍛冶関連遺構群に属する第1号土壙は炉跡と第3号土壙の間に位置する。鉄滓片などが含まれるが、炉跡とは異なり炉壁片などは出土して



第77図 A区第1号鍛冶関連遺構遺物出土状況



第78図 A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物

第34表 A区第1号鍛冶関連遺構出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	=	[2.1]	(8.0)	IJ	10	普通	灰	炉2No.7 南比企窯産か 底部回転糸切り外周ヘラケズリ	
2	須恵器	甕	-	[4.0]	-	IK	5	普通	黄灰	SK15 外面平行叩き 内面同心円文	
3	土師器	坏	(13.8)	[3.7]	_	CI	20	普通	にぶい橙	No.35 蓋模倣坏	
4	土製品	羽口	3.0 孔	幅5.3 径(2.4) 0) 重さ		HI	20	普通		炉 2 No. 1	
5	土製品	羽口	2.9 孔	幅4.2 径(2.4) 8) 重さ		HIK	10	普通		炉 2 No. 4	
6	土製品	羽口	2.2 孔	幅5.3 径(2.6) 8) 重さ		HIK	10	普通		No. 1	
7	土製品	羽口	2.7 孔	幅5.7 径(2.0) 4) 重さ		НІ	20	普通		No. 4	
8	土製品	羽口	2.4 孔	幅3.0 径(2.6) 2) 重さ		HI	5	普通			
9	土製品	羽口	2.8 孔	幅6.6 径(2.8) 0) 重さ		HIK	10	普通		SK15	
10	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ7.9	幅7.9	厚さ2.9	重さ21	7.6 残	上 存80		 炉 2 No. 3	
11	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ5.9	幅6.2	厚さ2.7	重さ12	1.0 残	存70		No.29	
12	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ7.7	幅9.4	厚さ3.0	重さ26	8.4 残	存70		SK15	
13	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ4.2	幅4.8	厚さ2.3	重さ63	.3 残	存80		SK15	
14	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ5.1	幅4.4	厚さ2.4	重さ61	.1 残	存80		SK15	
15	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ4.1	幅5.3	厚さ1.4	重さ44	.4 残	存50		SK15	
16	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ3.5	幅4.0	厚さ2.5	重さ53	.7 残	存10		SK15	
17	鉄滓	椀形鍛治滓	長さ3.2	幅4.8	厚さ2.9	重さ76	.4 残	存50		SK15	
18	鉄製品	不明	長さ[4.	0] 幅[2	2.3] 厚さ	至0.1 重	さ5.5				

いない。

第2号土壙は第1号土壙の東隣に位置する。覆土は黒色土、褐灰色土を主体とする。炉壁片は出土していない。遺物は第78図3の土師器坏と7の羽口の破片を図示した。

第3号土壙は第1号鍛冶関連遺構群に属する第1号土壙の南側に位置する。覆土は黒褐色土を主体とし、炉壁片などは出土しておらず炉跡とは異なる。遺物は第78図1・4・5・10が出土している。1は須恵器の坏で底部回転糸切り後外周へラケズリ調整がみられる。南比企窯産の製品とみられる。4と5は羽口の破片で、10は椀形鍛冶滓である。

他にピット3基を第1号鍛冶関連遺構群とした が、規則性はなく建物跡に伴う可能性は低い。

(6) 旧河川跡

A区調査区の北東側約半分を占めている。埋没状況を確認するため、トレンチを4本設定した。(第79・80図)遺構検出面を切り込むように青灰色粘土が堆積する。安全上の問題から断面図を記録することができなかった。遺構検出面から約2.2m~3.0m下まで掘削したが、ローム面を確認できなかった。

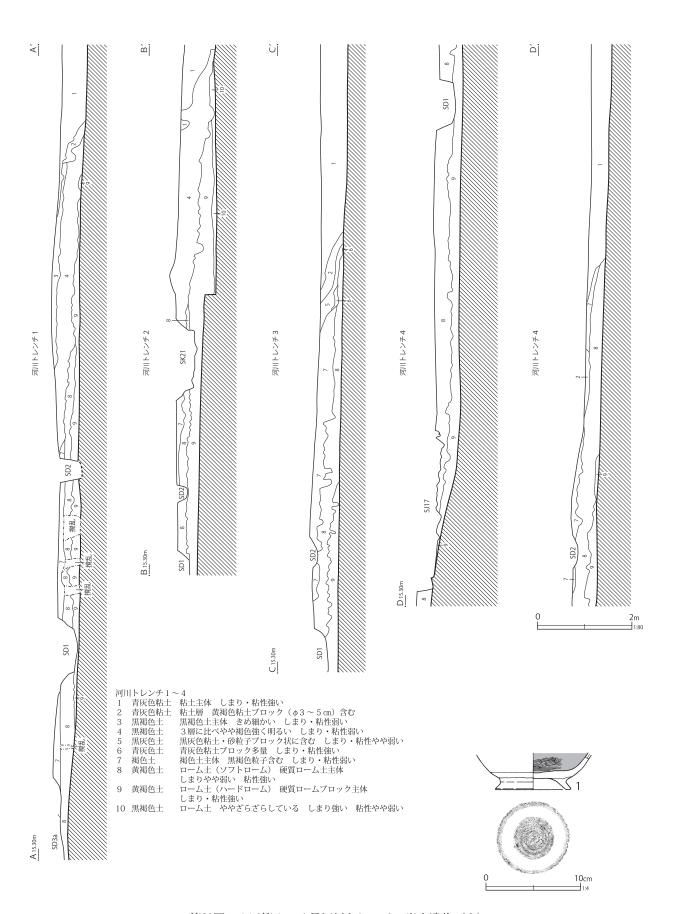
遺物はトレンチ3から黒色土器が1点出土している。また、図示できなかったが、土師器甕の口縁部片などが出土している。出土した遺物から平安時代の9世紀代以降に埋没したとみられる。

なお、A区基本土層において確認されたⅢ-3 層の淡灰褐色砂質・シルト土は、近世から近代の 洪水とみられる。



0 10m

第79図 A区第1~4号河川トレンチ(1)



第80図 A区第1~4号河川トレンチ・出土遺物(2)

第35表 A区河川トレンチ出土遺物観察表 (第80図)

番	号 種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高台坏埦	_	[4.8]	7.8	AEHI	30	普通	灰黄褐	トレンチ3 黒色土器 ミガキ後内面黒 色処理 底部指ナデ	

(7) ピット・グリッド検出面出土遺物

A区においてグリッドピットは、132基検出された。分布状況は第8・9図から示した。長径、短径、深さの規模は第36表に示した。全体的に各グリッドにまばらに分布しており、特定の範囲に偏っているという傾向はない。

遺物も図示できるものは少なく、年代の特定が 困難なものが多いが、中世以降の遺物が一切出土 していない点や他の遺構が6世紀後半~9世紀前 半頃に収まることから、これらのピットも同様の 時期に収まると推定される。

A区において、明確に建物跡や柵列のように並んだ配列のものは確認されなかったため、これらピットの性格付けは難しい。

出土遺物はグリッド検出面及び検出面一括、表 採遺物については、残存率が高いもの、特徴的な ものを選び掲載した。第81図1は土師器の暗文皿 である。AR -22グリッドから出土している。内 面に螺旋及び放射状暗文がみられる。付近に位置 する第20号竪穴住居跡などに帰属するものの可能 性がある。

2~4はAR-23グリッドから出土している。 2は土師器の坏でAR-23P7のグリッドピット から出土している。3は甑の把手部分である。4 は流紋岩製の有孔砥石である。下半分が欠損して いる。欠損部以外の面に擦痕と刃物痕がみられる。

5~9はAS-22グリッドから出土している。 5は須恵器の坏身である。奈文研分類の坏Hに位置付けられる。6は底部回転糸切り後ナデ調整で糸切り跡を消している。7は坏身で奈文研分類の坏Gに位置付けられる。いずれも産地は末野窯産に位置付けられる。8は須恵器甕の胴部片、9は土師器の坏である。10~16はAS-23グリッドか ら出土している。10は須恵器の坏蓋である。産地は末野窯産とみられる。11は須恵器甕の胴部片である。AS -23 P 3 から出土している。外面に別個体の破片が固着している。12は土師器坏で北武蔵型坏、13は蓋模倣坏で AS -23 P 4 から出土している。14は暗文皿である。15は縄文土器の破片、16は角閃石デイサイトの磨石である。

17は AS -24グリッドから出土している。須恵器の坏身である。18は AS -25グリッドから出土している。北武蔵型皿である。19~21は AT -23グリッドから出土している。19は須恵器の坏蓋で天井部分に「廾」のようなへラ記号がみられる。欠損しているため全容は不明である。20は土師器坏で北武蔵型坏。21は暗文坏である。

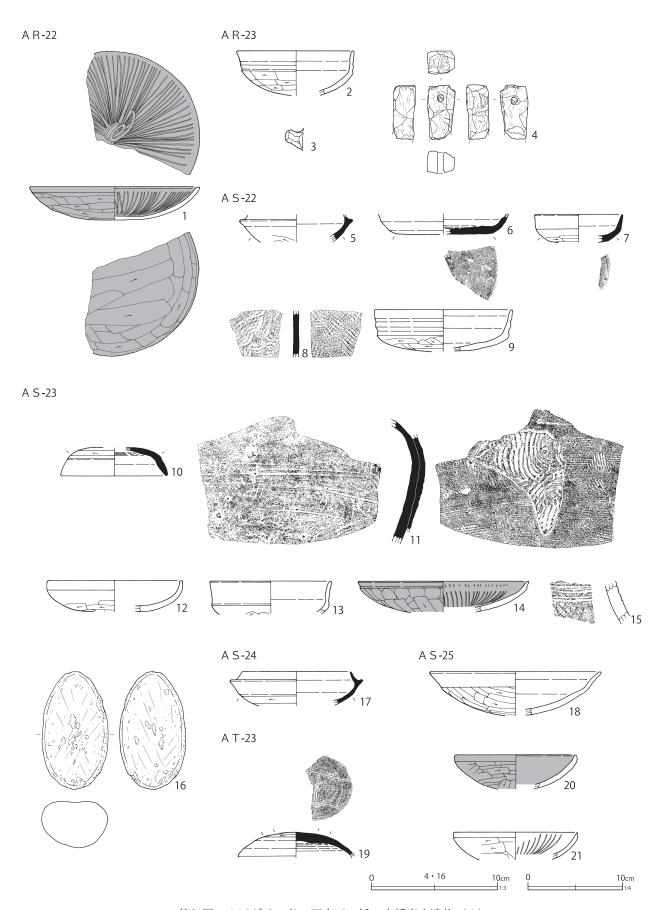
第82図22・23はAT-24グリッドから出土している。縄文土器の破片である。24・25はAT-25グリッドから出土している。25は臼玉である。側面形は平玉形で、側面の研磨は縦方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。

26・27は AU -24グリッドから出土している。 26は蓋模倣坏で27は比企型坏である。28~32は AU -25グリッドから出土している。28は須恵器 の蓋で末野窯産の製品とみられる。29は土師器の 坏、30は縄文土器の鉢である。31と32は石器で31 は黒曜石の剥片、32はチャート製の石鏃である。 33から44は表採資料である。土師器の他に染付磁 器や縄文土器が確認されている。

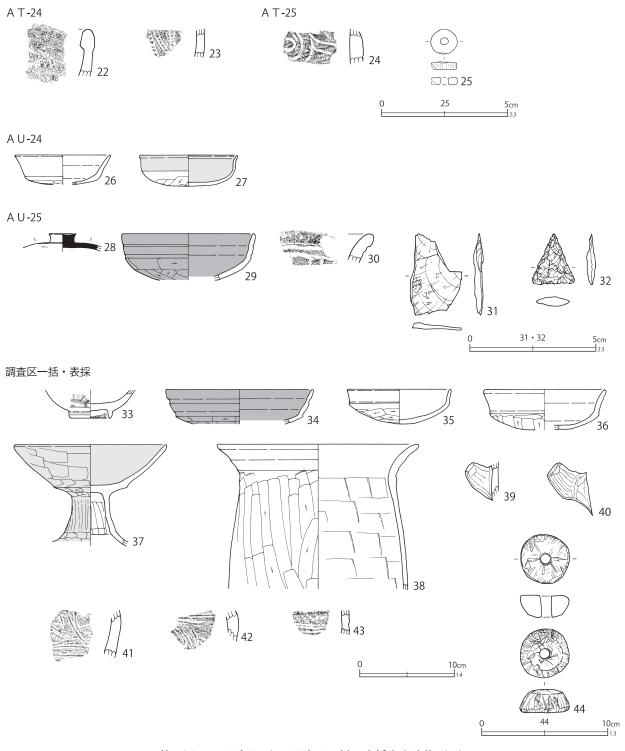
今回の調査区からは、縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文土器や石器が出土していることから、付近に縄文時代の遺跡が所在する可能性がある。

第36表 A区ピット計測表

グリッド	番号	- ク ド 同 i		深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
AR-22	P 1	72	62	64	AS-24	P 7	62	60	64	AT-25	P 7	38	38	37
	P 2	53	48	56		P 8	68	66	18		P 8	52	40	49
	P 3	55	35	20		P 9	28	28	7		P 9	46	40	12
AR-23	P 1	60	54	100		P10	44	34	42		P10	42	36	24
	P 2	64	54	20	AS-25	P 1	24	23	52		P11	18	17	10
	Р3	60	54	66		P 2	29	28	40		P 12	33	32	14
	P 4	46	34	48		Р3	48	45	100		P13	26	25	14
	P 5		欠番			P 4	50	36	32		P14	40	36	12
	P 6	72	60	29		P 5	29	27	22		P 15	58	40	13
	P 7	46	42	76		P 6	22	20	14		P16	36	32	10
	P 8		欠番			P 7	51	28	26		P17	30	30	17
	P 9	46	40	72	AT-23	P 1	44	42	30		P18	28	26	20
AR-24	P 1	18	16	18		P 2	40	40	28		P19	16	16	22
	P 2	44	38	37		Р3	42	34	33		P 20	19	19	50
	P 3	28	24	28		P 4	41	[38]	10	AU-24	P 1	38	38	28
	P 4	20	16	11		P 5	64	60	17		P 2	34	29	28
	P 5	28	18	22		P 6	37	36	20		Р3	40	33	54
	P 6	44	40	27		P 7	38	35	42		P 4	50	40	10
	P 7	34	30	24		P 8	68	56	74		P 5	36	32	29
	P 8	44	34	8		P 9		欠番			P 6	58	40	14
	P 9	22	18	8		P10	18	17	10		P 7	36	32	13
	P10	34	26	18		P11	28	26	8		P 8	40	36	12
	P11	34	25	24		P12	46	36	35		P 9	23	19	8
	P 12	30	22	13	AT-24	P 1	42	40	22		P10	28	24	10
	P13	26	22	8		P 2	42	42	82		P11	38	32	38
	P 14	26	24	18		P 3	84	58	22		P12	32	30	30
	P 15	36	30	37		P 4	26	20	14		P13	54	44	30
AS-22	P 1	36	35	37		P 5	42	34	33		P14	92	64	38
AS-23	P 1	55	38	40		P 6	84	64	25		P 15	26	25	18
	P 2	59	46	60		P 7	44	34	15		P16	39	30	20
	P 3	45	30	16		P 8	32	31	30		P17	46	(26)	17
	P 4	60	50	38		P 9	20	18	8		P18	34	30	16
	P 5	56	47	32		P10	30	30	20		P19	50	44	18
	P 6	30	27	19		P11	68	56	18	AU-25	P 1	37	34	14
	P 7		欠番			P 12	50	44	92		P 2	28	26	18
	P 8	40	欠番			P13	38	26	9		P 3	40	35	42
	P 9	48	42	90		P14	40	36	38		P 4	54	48	35
	P10	40	34	30		P 15	38	38	32		P 5	57	52	76
	P11	51	42	17		P16	44	41	[30]		P 6	62	55	46
40.04	P12	45	30	50	A / D = 0.5	P17	36	26	28		P 7	40	30	20
AS-24	P 1	42	42	19	AT-25	P 1	32	30	20		P 8	38	34	10
	P 2	30	27	14		P 2	44	38	48		P 9	52	50	20
	P 3	9.0	欠番	90		P 3	42	38	24		P10	46	42	8
	P 4	36	34	20		P 4	26	22	10		P11	62	[50]	16
	P 5 P 6	36 24	32	25 14		P 5 P 6	55 36	48 34	80 60		P 12 P 13	15 24	(14)	30 51
	1.0	4	44	14		1 0	30	94	00		F 13	L 24	(14)	1 21



第81図 A区グリッド・調査区一括・表採出土遺物 (1)



第82図 A区グリッド・調査区一括・表採出土遺物 (2)

第37表 A区グリッド出土遺物観察表 (第81・82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	Ш	(17.8)	3.5	_	AIK	30	普通	灰黄褐	AR-22 内面螺旋暗文・放射状暗文 内外 面黒色処理	
2	土師器	坏	12.0	[4.6]	_	ACEI	50	普通	赤褐	AR-23 P 7 有段口縁坏	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 図版
3	土師器	甑	— —	[2.4]	- EXE	ACEHI	5	普通	にぶい黄橙	AR-23 把手
3	上即奋	官凡		[2.4]		ACEHI	ъ	普理	にかい典位	AR-23 12+
4	石製品	砥石	長さ[4.	3] 幅2.	2 厚さ1	.8 孔径().5 重	さ22.9		AR-23 P 2 流紋岩 ミガキ 片面直 穿孔
5	須恵器	坏	_	[2.9]	_	EI	20	普通	灰	AS-22 末野窯産 坏H 底部手持ちへ ラケズリ
6	須恵器	坏	_	[2.1]	(10.2)	BEI	30	普通	黄灰	AS-22 末野窯産
7	須恵器	坏	(9.2)	[2.9]	(6.0)	I	20	良好	灰	AS-22 末野窯産 坏G 底部手持ちへ ラケズリ
8	須恵器	蕉	_	[4.9]	_	IK	5	良好	灰白	AS-22 外面平行叩き 内面同心円文 底部手持ちヘラケズリ
9	土師器	坏	(14.4)	[4.3]	_	ACI	30	普通	にぶい橙	AS-22 有段口縁坏
10	須恵器	蓋	(11.0)	[2.9]	_	I	30	良好	黄灰	AS-23 末野窯産か 外面ヘラケズリ
11	須恵器	甕	_	[13.0]	_	EIK	10	良好	灰	AS-23 P 3 No. 1
12	土師器	坏	(14.0)	[3.2]	_	ACI	20	普通	橙	AS-23 北武蔵型坏
13	土師器	坏	(12.6)	[3.4]	_	CHI	10	良好	明赤褐	AS-23 P 4 蓋模倣坏
14	土師器	Ш	(17.8)	[3.2]	_	I	15	普通	にぶい黄褐	AS-23 放射状暗文 内外面黒色処理
15	縄文土器		_	[4.3]	_	AGI	5	普通	橙	AS-23 • SJ5c
16	石製品	磨石	長さ9.3	幅5.2	厚さ3.9	重さ87.	7 残	字100		AS-23 角閃石デイサイト
17	須恵器	坏	(11.4)	[3.5]	_	EI	10	良好	灰	AS-24
18	土師器	Ш	(17.8)	[4.5]	_	CHI	25	良好	橙	AS-25 北武蔵型皿 赤色粒子多量
19	須恵器	蓋	_	[2.5]	_	AI	40	良好	灰	AT-23No.2 末野窯産 ヘラ記号[廾]
20	土師器	坏	(12.5)	[3.6]	_	AI	20	良好	褐灰	AT-23 北武蔵型坏 内外面黒色処理
21	土師器	坏	(13.0)	[2.8]	_	ACI	5	良好	橙	AT-23 放射状暗文
22	縄文土器		_	[4.9]	_	CGI	5	普通	橙	AT-24
23	縄文土器		_	[2.9]	_	CGI	5	普通	にぶい橙	AT-24 爪形文
24	縄文土器		_	[3.8]	_	ACK	5	普通	褐灰	AT-25 加曽利E式か
25	石製品	白玉	長1.0	短1.0 厚	章0.3 孔行	径0.3 重	0.5 勇	長存80		AT-25 滑石 中D斜(3)cⅡ
26	土師器	坏	(10.0)	[3.0]	_	ACHI	40	普通	橙	AU-24 蓋模倣坏
27	土師器	坏	(10.2)	3.1	_	I	20	良好	赤褐	AU-24 比企型坏 内外面赤彩
28	須恵器	蓋	_	[1.8]	_	I	20	普通	黄灰	AU-25 末野窯産か ヘラケズリ
29	土師器	坏	(13.8)	[4.8]	_	CHI	25	普通	にぶい褐	AU-25 有段口縁坏 内外面黒色処理
30	縄文土器	鉢	_	[3.0]	_	ACGHI	5	普通	にぶい赤褐	AU-25
31	石製品	剥片	長さ3.2	幅2.0	厚さ0.4	重さ1.8	3			AU-25 P 3 黒曜石
32	石製品	石鏃	長さ2.0	幅1.7	厚さ0.4	重さ0.9			1	AU-25 チャート
33	磁器	碗	-	[2.9]	4.0	IK	20	良好	灰白	表採
34	土師器	坏	(15.4)	[3.6]	_	CI	30	良好	灰褐	表採 有段口縁坏 内外面黒色処理
35	土師器	坏	(10.8)	3.6	_	ACI	60	良好	橙	蓋模倣坏
36	土師器	坏	(12.5)	[4.2]	_	ACHI	40	良好	浅黄橙	表採
37	土師器	高坏	(15.8)	[10.6]	_	ACI	40	普通	赤	表採 内外面赤彩
38	土師器	甕	21.2	[15.0]	_	CEGHI	50	普通	橙	包含層
39	土師器	甔	_	[3.9]	_	AIK	5	普通	灰黄褐	表採 把手
40	土師器	甔	_	[4.5]	_	AIK	5	普通	橙	表採 把手
41	縄文土器		_	[4.9]	_	EG	5	普通	にぶい黄橙	
42	縄文土器		_	[3.0]	_	EG	5	普通	にぶい黄橙	
43	縄文土器		_	[2.2]	_	EG	5	普通	にぶい黄橙	
44	石製品	紡錘車	長さ3.8	幅3.8	厚さ1.8	孔径1.0	重き	38.7	残存100	滑石 片面直 穿孔 ミガキ

V B区の調査

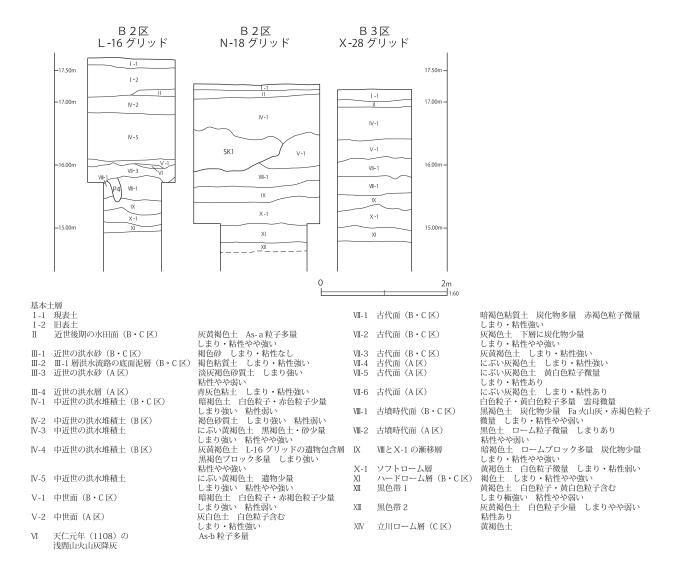
1 B区の概要

B区は第18次で調査を行った3地点のなかで最も北東側に位置する。現道の拡幅に伴う発掘調査である。幅約6mで約260mにかけて掘削した。調査面積は1,448㎡である。掘削深度は現地表面から1.9m~2.4m下で地山となるローム面(X-1層)を検出している。

なお、約95m間隔で調査区に直行するように農業用の用排水路が通っている。この部分は、調査対象外として発掘調査を行わなかった。また、この用排水路を境に調査区を北東から順にB1区、

B2区、B3区、B4区と細分し調査を行った。 検出された遺構は主な時代のものとして古墳時代・飛鳥時代、奈良時代・平安時代に位置付けられる。また、少数だが、中世に位置付けられる遺構が検出されている。

古墳時代・飛鳥時代の遺構数は竪穴住居跡が21 軒、井戸跡が9基、溝跡が2条検出された。別に項目を立てた第1~3号遺物集中もB区の古墳時代・飛鳥時代に該当する。ローム面の上層にて確認された黒褐色土(WII-1層)が古墳時代の遺構



第83図 B区基本土層

掘削面にあたる。調査区北西部は第1~3号遺物 集中が検出され、それ以外の遺構は希薄である。 第1号遺物集中との関連が想定される第1号溝跡 より南東側において、竪穴住居跡を始めとした多 数の遺構が検出されている。

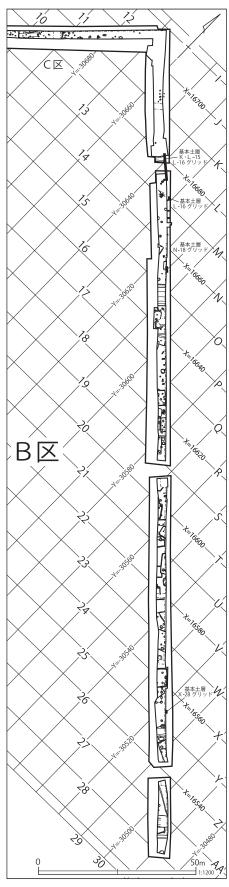
なお、遺物集中及びそれに付随する可能性が高い遺構は、別に取りまとめ、本項では取り扱わない。

遺物集中に伴うとした第1号溝跡より北側では、C区に至るまでの間に古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡は検出されなかった。第1号溝跡が集落域の区画としての役割を持って機能していた可能性が想定される。

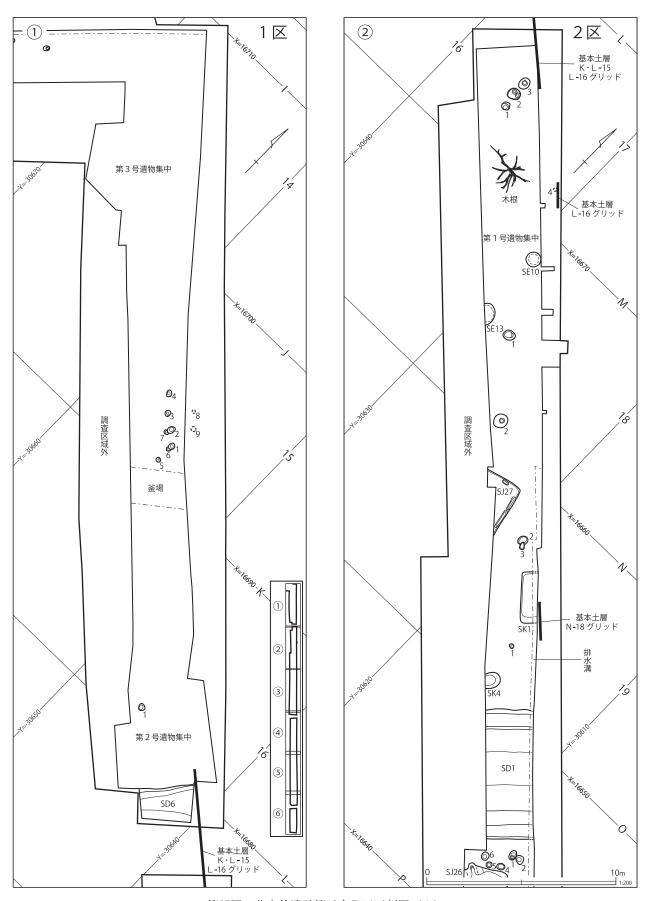
奈良時代・平安時代の遺構数は、竪穴住居跡が 9軒、掘立柱建物跡が1棟、井戸跡が1基、溝跡 3条、土壙4基が検出された。

奈良時代・平安時代の遺構の特徴としては、B 区中央より、やや南側に遺構が多い傾向にある。 ただし、第27号竪穴住居跡のみが他と離れた場所 に位置する。時期は8世紀代の遺構は少なく、9 世紀代の遺構が多いが、10世紀代となる遺構は認 められない。C区においてもB区に接続する付近 では、奈良時代・平安時代の遺構は検出されてい ないことから、奈良時代・平安時代の集落の中心 はより南側に分布すると想定される。

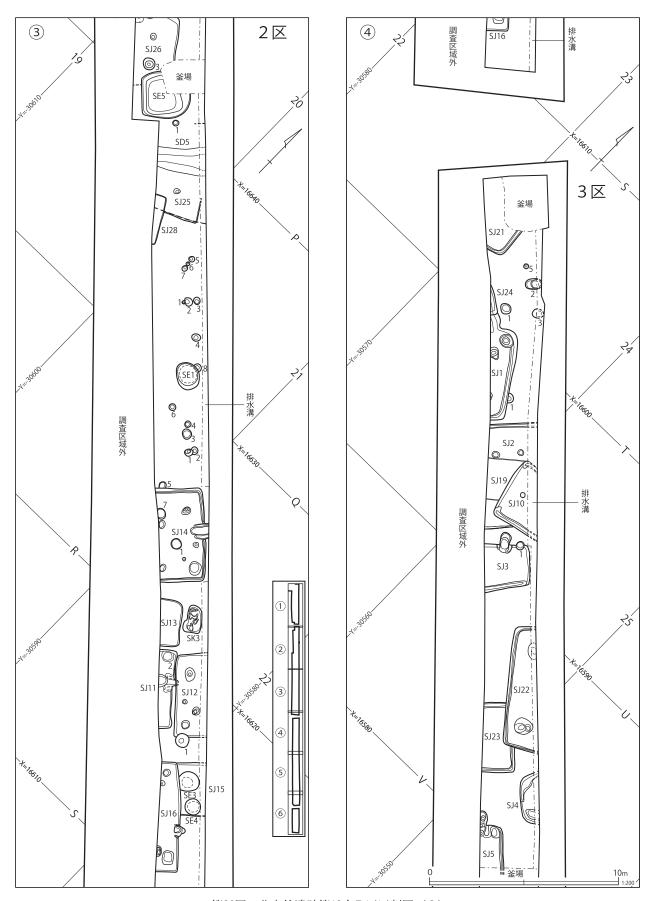
他に中世とみられる土壙が1基検出されている。中世・近世の遺構はさほど多くないが、表土掘削の際に細片であるが、かわらけや肥前系の磁器などが出土していた。現表土下の基本層Ⅱ層はAs-a軽石粒を含む水田面であるため、近世後期には水田として土地利用されていた。



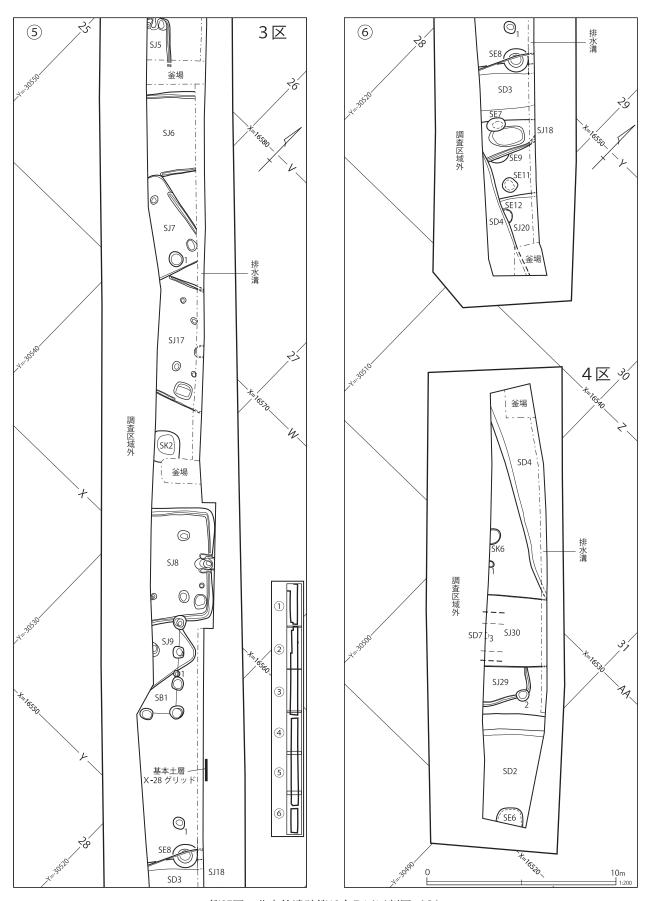
第84図 北大竹遺跡第18次B区全体図



第85図 北大竹遺跡第18次B区区割図(1)



第86図 北大竹遺跡第18次B区区割図(2)



第87図 北大竹遺跡第18次 B 区区割図 (3)

2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

B区において検出された古墳時代・飛鳥時代の遺構数は竪穴住居跡が21軒、井戸跡が9基、溝跡2条が検出された。調査区北西側の遺物集中が検出された地点からは竪穴住居跡は検出されておらず、他の遺構も希薄である。調査区域内の中央付近に遺構が多く分布する傾向にあり、南東側も遺構が希薄である。

(1) 竪穴住居跡

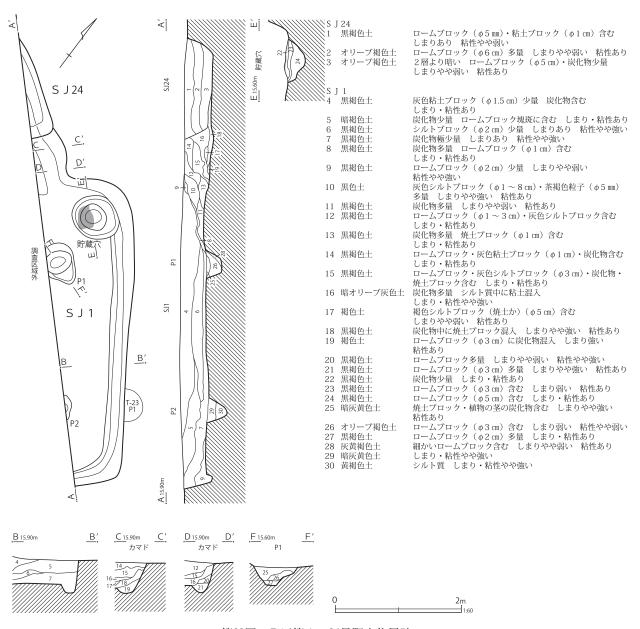
以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、

覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。 B区第1・24号竪穴住居跡(第88・89図)

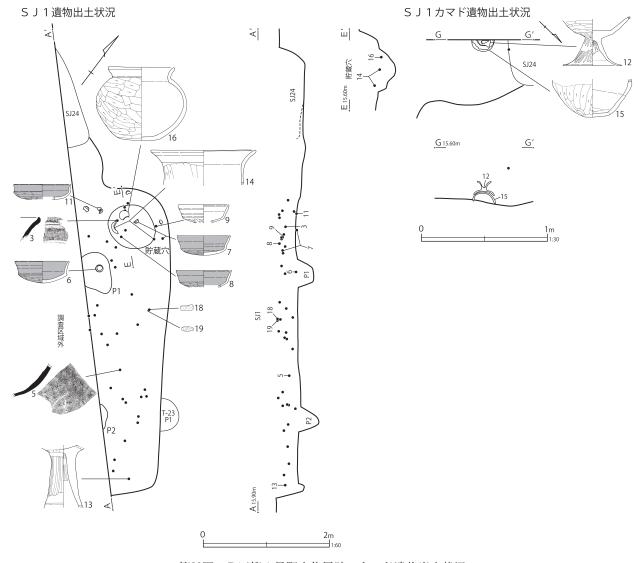
B区の第1号竪穴住居跡はS・T-23グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。

他の遺構との重複関係は第24号竪穴住居跡より 古く、T-23P1より新しい。

東辺のみが検出され、半分以上が調査区域外に 至る。平面形は検出範囲からの推定であるが、隅 丸方形とみられる。検出規模は長軸長4.85m、短



第88図 B区第1・24号竪穴住居跡



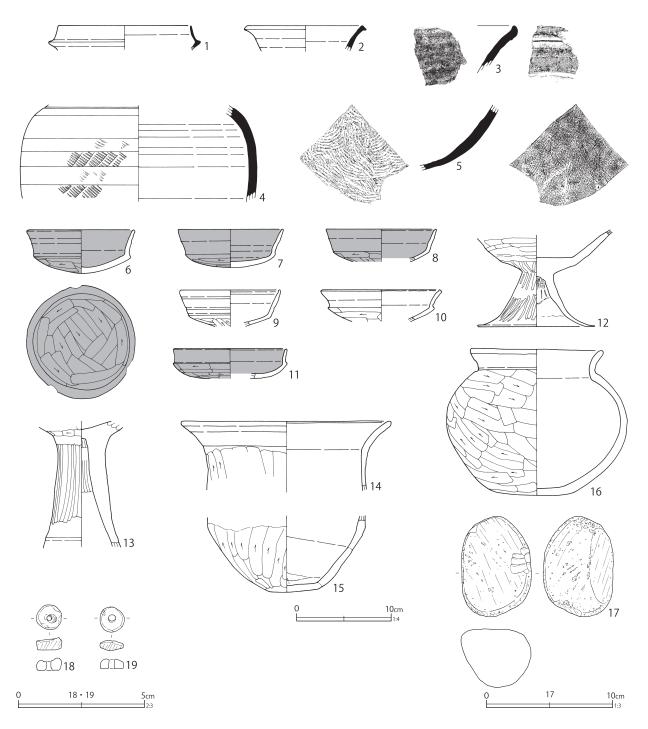
第89図 B区第1号竪穴住居跡・カマド遺物出土状況

軸長1.25m、深さ0.40mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

覆土はロームブロックと炭化物を含む黒褐色土を主体とする。カマドは北辺で検出された。位置的に竪穴住居跡の中心ではなく東側に寄った位置に設置されたとみられる。規模は長さ2.40m、幅0.50m以上で燃焼部の深さは0.40mである。煙道部は第24号竪穴住居跡に壊され不明である。燃焼部は住居の外側に張り出すように構築されている。袖は検出されなかった。

貯蔵穴はカマドの東側で検出された。深さ 0.30m程で上層に炭が堆積している。ピットは2 基検出された。いずれも配置関係から竪穴住居跡 の主柱穴であるとみられるが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。壁溝は東辺、南辺で検出されている。幅は0.23~0.48m、深さは0.10~0.13mである。

遺物は、須恵器、土師器、石製品が出土している。第90図1は須恵器の坏身である。口縁部がやや内側へ傾き立ち上がる。陶邑編年のTK10(古)頃か。2と3は須恵器壺の口縁部片である。3は波状文がみられるが、2にはみられない。4は須恵器壺の胴部である。外面に自然釉がみられる。末野窯産の製品とみられる。5は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。秋間窯産の製品とみられる。



第90図 B区第1号竪穴住居跡出土遺物

6~11は土師器の坏である。6~8は、有段口 縁坏で内外面に黒色処理が施されている。9も有 段口縁坏であるが、黒色処理はみられない。10は 蓋模倣坏で黒色処理は施されていない。11は身模 倣坏で黒色処理が施されている。12と13は高坏で ある。坏部下半から脚部にかけてミガキ調整がみ られる。13は脚部のみ残存しており、ヘラケズリ 調整がみられる。14は甕の口縁部片である。貯蔵 穴から出土している。15は甕である。下半部から 底部にかけて残存している。内面が煤けている が、割れ口の一部も煤けていることから上半部 が欠損後に煤けるような使用をされていたとみら

第38表 B区第1号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	備考	図版		
1	須恵器	坏	(14.0)	[2.4]	_	I	20	良好	灰	а	
2	須恵器	壺	(12.2)	[2.7]	_	I	30	良好	暗赤褐		
3	須恵器	壺	_	[4.9]	_	AEI	5	普通	灰	No.28 波状文 末野窯産か	101-1
4	須恵器	壺	_	[10.1]	_	EI	10	良好	灰	排水溝 末野窯産か 外面自然釉	101-1
5	須恵器	甕	_	[6.8]	_	EIK	5	良好	灰	No.13 秋間窯産 外面平行叩き 内面同 心円文	101-1
6	土師器	坏	11.0	4.6	_	CI	95	普通	にぶい黄橙	No.42 有段口縁坏 黒色処理	101-1
7	土師器	坏	(11.0)	4.0	_	IK	30	普通	黒褐	a·No.33·40 有段口縁坏 黒色処理	101-1
8	土師器	坏	(11.6)	[3.4]	_	ACI	30	普通	黒褐	a·No.25 有段口縁坏 黒色処理	
9	土師器	坏	(10.4)	` ' " "			30	普通	にぶい橙	No.32 有段口縁坏	
10	土師器	坏	(12.4)	(12.4) [3.2] - AHI 30 良好 赤褐						a 蓋模倣坏	
11	土師器	坏	(11.8)	[3.1]	_	ACIK	30	良好	黒褐	No.39 身模倣坏 黒色処理	
12	土師器	高坏	_	[10.2]	12.2	GHI	60	普通	橙	No.45	101-1
13	土師器	高坏	_	[13.2]	_	CHI	30	普通	橙	No. 9	101-1
14	土師器	甕	(21.8)	[7.3]	_	CI	20	普通	にぶい褐	貯蔵穴・No.34・49	101-1
15	土師器	甕	_	[8.0]	5.4	GIK	50	普通	にぶい黄橙	No.46 内面煤	101-1
16	土師器	壺	(13.5)	15.3	7.6	CGHI	90	不良	にぶい橙	No.48	101-1
17	石製品	磨石	長さ7.9	幅5.5	厚さ4.6	重さ10	2.6 残	角閃石デイサイト			
18	石製品	臼玉	長1.0	短1.0 厚	₹0.5 孔4	径0.4 重	[0.6 列	读 存100		No.1 滑石 中D斜2cⅢ	
19	石製品	臼玉	長1.0	短1.0 厚	章0.4 孔径	径0.4 重	[0.5 列	表存100		No.2 滑石 中G斜(2)cⅡ	

れる。15の甕はカマド燃焼部に逆位に置かれ、その上を覆うように12の高坏が逆位で重ねられていた。16は土師器の壺である。口縁部と底部の一部が欠損しているが、完形率が高い。貯蔵穴の中端付近から出土している。

17は角閃石デイサイトの磨石である。3面に擦痕がみられる。18と19は滑石製の臼玉である。18の側面形は円筒形である。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。19の側面形は平玉形であるが欠損し、やや不整形となっている。側面の研磨は斜め方向に施されている。孔面には両面とも研磨は施されていない。穿孔は片側穿孔で錐先貫通である。時期は、6世紀中頃から後半頃とみられる。

B区第24号竪穴住居跡は第1号竪穴住居跡と重複し、南東コーナー部分の一部のみが検出された。第1号竪穴住居跡のカマド部分と重複し、炭化物や焼土を多く含むカマドの堆積土は切り込ん

で確認された。隅丸でプランが直線的に延びる点と床面が平らに広がることが確認されたことから竪穴住居跡としたが、ごく一部分のみのため他の遺構である可能性も残る。時期は第1号竪穴住居跡よりも新しいということ以外は不明である。

B区第2号竪穴住居跡(第91図)

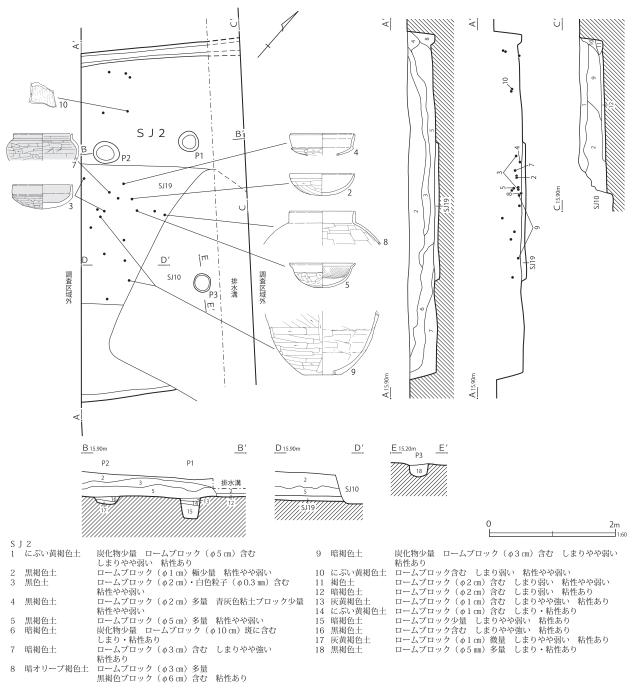
B区の第2号竪穴住居跡はT-23・24グリッド、調査区の南部中央付近に位置する。

他の遺構との重複関係は、第19号竪穴住居跡より新しく、第10号竪穴住居跡より古い。

北西辺と南東辺が検出されており、コーナー部分は全て調査区域外に至り未検出である。検出規模は長軸長5.54m、短軸長2.57m以上、深さ0.36mである。長軸方位はN-42°-Wを指す。

覆土は黒色土及び黒褐色土を主体とする。カマドは未検出である。他のカマドを設置する竪穴住居跡から南東辺に設置されている可能性が高い。

貯蔵穴は検出されていない。柱穴は3基検出された。南東側のみ検出されなかったが、P2も掘

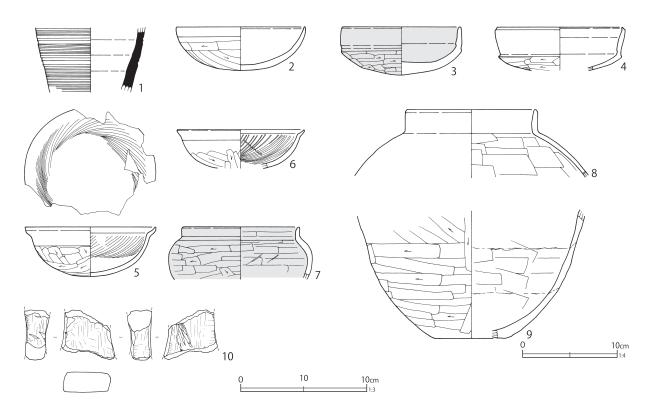


第91図 B区第2号竪穴住居跡

削深度は浅く、隠滅している可能性がある。

壁溝は北西辺で検出された。残存状況はあまり良くない。規模は、幅が0.18~0.27m、深さは0.05~0.10mである。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第92図1は須恵器長頸壺の頸部である。外面 にカキ目を多用している。産地は末野窯の製品と みられる。2~6は土師器の坏である。2は外面の器壁が一部剝離し、内面の器面も摩滅している。3は内外面に赤彩が施されている。口唇部に使用感が有り、摩滅が顕著である。器面の成形が不十分で器壁が厚い。5と6は内斜口縁坏と呼ばれるタイプの坏である。



第92図 B区第2号竪穴住居跡出土遺物

第39表 B区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	_	[6.8]	_	Е	10	良好	暗灰	a 末野窯産 外面自然釉	101-2
2	土師器	坏	(13.6)	4.5	-	CHI	40	普通	橙	c •No. 9	101-2
3	土師器	坏	12.2	5.0	-	CGHI	80	普通	赤	No.5·11 蓋模倣坏 赤彩	101-2
4	土師器	坏	(13.1)	[4.5]	-	АН	20	良好	橙	No. 6 蓋模倣坏	
5	土師器	坏	13.7	5.7	-	ACHI	70	良好	にぶい赤褐	b·c·No.10 内斜口縁坏 放射状暗文	101-2
6	土師器	坏	(13.4)	[4.0]	-	ACHI	30	良好	にぶい赤褐	b 内斜口縁坏 放射状暗文	
7	土師器	椀	(12.2)	[5.5]	-	ACHI	30	良好	赤	No.7 赤彩	
8	土師器	甕	(13.5)	[7.1]	-	ACEI	20	良好	にぶい黄橙	No.18 雲母片多量	
9	土師器	獲	_	[13.4]	(7.0)	HIK	30	普通	にぶい黄橙	c •No.13•20	
10	石製品	砥石	長さ[3.	9] 幅[4	1.3] 厚さ	₹ [2.0]	重さ36.	.5 残不	字 30	No.22 流紋岩か	101-2

B区第5号竪穴住居跡(第93図)

B区の第5号竪穴住居跡は $U \cdot V - 25$ グリッド、B3区の中央付近に位置する。

重複する遺構はないが、西辺が調査区域外へ至 り、南側の大部分が排水用に掘られた釜場によっ て大きく壊されている。

覆土はロームブロックを多量に含んだ黒褐色土 を主体とする。平面形は確認できる北東辺から隅 丸長方形と想定され、残存規模は長軸長2.25m、 短軸長1.20m、深さ0.40mである。主軸方位はN -44°-Wを指す。

カマドは西辺に設置されている。残存規模は 長さ1.35m、幅0.35mで、燃焼部の深さは0.40m である。煙道部は長さ0.65m、検出幅0.36mであ る。右袖のみ確認できた。

貯蔵穴はカマドの右側にあたる竪穴住居跡の北

東コーナー部、壁溝は東辺で検出されたが、柱穴は検出されなかった。壁溝の幅は0.18~0.20m、深さは0.50~0.80mである。

遺物は須恵器、土師器が出土している。第94図 1は須恵器の坏蓋で、奈文研分類坏Hに該当す る。天井部に左回転ヘラケズリがある。緻密な胎 土を有する。産地は湖西窯とみられる。2は甕の 胴部片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心 円文アテ具痕がみられる。産地は末野窯とみられ る。3~6は土師器の坏である。3と4は有段口 縁坏で内外面に黒色処理が施されている。5は蓋 模倣坏である。6は有段口縁坏でいずれも黒色処 理は施されていない。

7は土師器の鉢である。体部上半が横方向、下 半部が斜方向にヘラケズリされている。8~11は 土師器の甕である。いずれも口縁部にヨコナデ、 胴部に斜方向や縦方向のヘラケズリ調整が残る。 12は手捏ね土器である。外面に縦方向のヘラケズ リがみられる。内面は未調整である。時期は、須 恵器坏蓋から7世紀中頃とみられる。

B区第6号竪穴住居跡(第95図)

B区の第6号竪穴住居跡はV-25グリッド、B3区の中央付近に位置する。

第7号竪穴住居跡によって東辺の一部が壊されている。コーナー部分の全てが調査区域外に至る。

覆土はローム粒子、炭化粒子を含む灰褐色土を 主体とする。平面形は南東辺、北西辺ともに調査 区域外に延び、平面形は不明である。規模は長軸 長4.44m、短軸長2.55m、深さ0.15mである。長 軸方位はN-49°-Wを指す。

カマドと柱穴は検出されなかった。壁溝は北西 辺、南東辺で検出され、幅は0.15~0.37m、深さ 0.02~0.07mである。

遺物は土師器が出土している。第96図1~3は 蓋模倣坏である。いずれも口縁部が外反し、ヨコ ナデ調整され、体部にヘラケズリがみられる。4 は比企型坏である。口縁部が屈曲し端部は外側を 向く。内外面に赤彩が施されている。5と6は甕である。5は胴部に縦方向のヘラケズリがみられる。6は下半部から底部である。斜方向ぎみにヘラケズリが施されている。時期は6世紀後半頃とみられる。

B 区第8・9号竪穴住居跡 (第97・98図)

B区の第8号竪穴住居跡はW・X−27グリッド、B3区の南東側に位置する。

他の遺構との重複関係は、東側に重複する第9 号竪穴住居跡の西辺を壊しているほか、第1号掘 立柱建物跡のP4によって東辺の一部が壊されて いる。

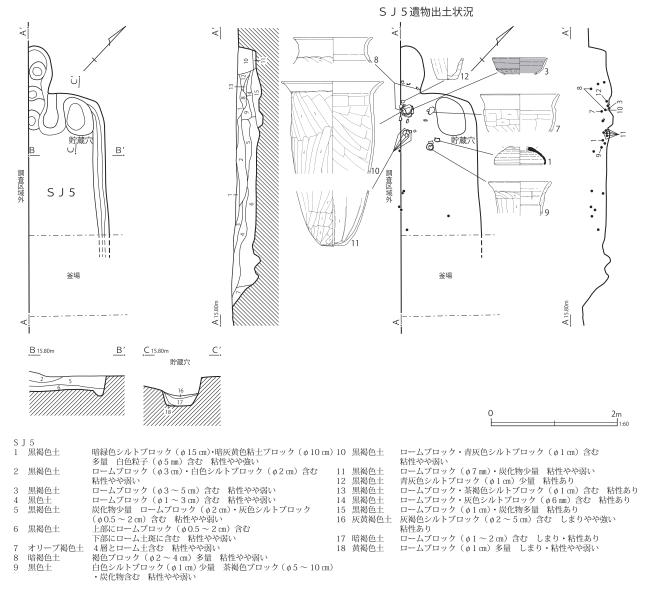
覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土である。平面形は、南辺が調査区域外に延び、確認できないが、隅丸方形であると想定される。検出された規模は長軸長6.05m、短軸長3.36m、深さ0.25mである。主軸方向はN-45°-Eを指す。

カマドは北辺中央に設置されている。煙道部は 調査区域外に延び、確認できなかった。残存規模 は長さ0.91m、幅1.03m、深さ0.47mである。

貯蔵穴はカマドの右側、竪穴住居跡の東コーナー部分に位置する。規模は長軸長0.78m、短軸長0.66m、深さ0.35mである。主柱穴は2基検出された。P1は長径0.67m、短径0.50m、深さ0.52m、P2は長径0.64m、短径0.52m、深さ0.52mと規模も類似し、北東辺壁溝と平行して並ぶ。調査区域外の南西側にも対応して同規模の柱穴が配置されているとみられる。

壁溝は残存するカマドを除く北東辺、南東辺、 北西辺で検出された。規模は幅0.25~0.43m、深 さ0.05~0.12mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第99図 1は須恵器の甕破片である。外面に格子タタキ 痕、内面に同心円文アテ具痕が残る。2は口縁部 が垂直に立ち上がる坏である。3~8は土師器の 甕である。3の甕はカマド左袖の構築材として使 用されていた。下半部は欠損している。胴部外面

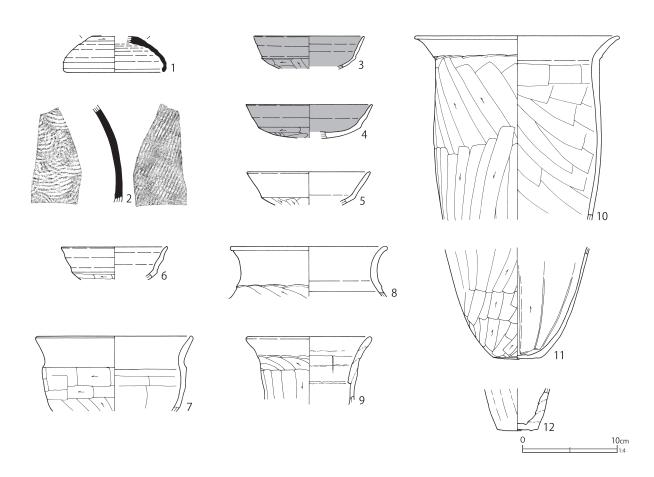


第93図 B区第5号竪穴住居跡

に斜方向のヘラケズリが施されている。内面には ナデ調整がみられる。4はカマド燃焼部に横倒し で出土している。胴部外面に斜方向のヘラケズリ が施されている。内面にはナデ調整がみられる。 5の甕もカマド周辺から出土している。6はカマ ド右袖の構築材として使用されていた。上半部が 欠損している。胴部外面に縦方向のヘラケズリが 施されている。内面にはナデ調整がみられる。7 はカマド左袖から燃焼部にかけての地点から出土 している。3の甕とともに袖の構築材として用い られた可能性があり、それが燃焼部側に崩れた か。胴部外面に縦方向のヘラケズリが施されている。8は甕の底部である。

B区の第9号竪穴住居跡はX-27グリッド、B 3区の南東側に位置する。西側に重複する第8号 竪穴住居跡に西辺が壊されている。東辺の一部を グリッドピットに壊される。また、第1号掘立柱 建物跡に壊されている。東辺、南辺は調査区域外 に延び、北東コーナー部分のみが検出された。

検出された規模は長軸長2.72m、短軸長 2.65m、深さ0.23mである。長軸方位はN-14° - Eを指す。ピットが1基検出され、規模は検出



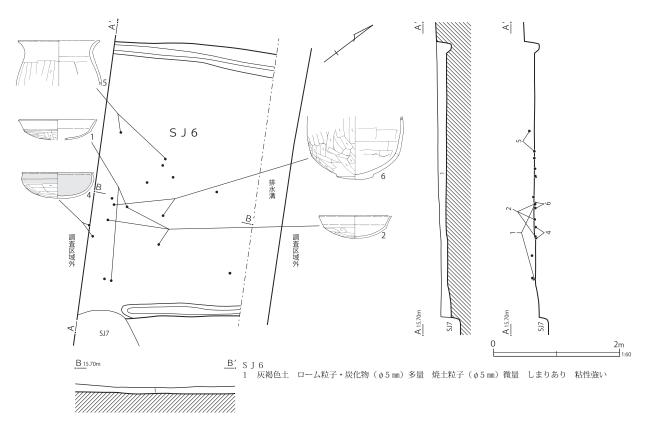
第94図 B区第5号竪穴住居跡出土遺物

第40表 B区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表(第94図)

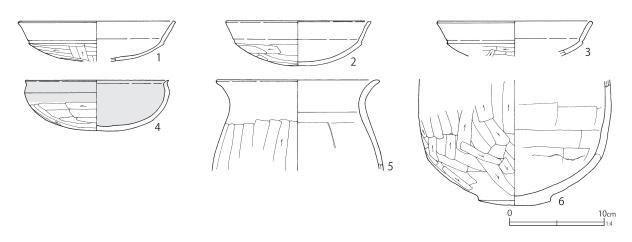
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版		
1	須恵器	蓋	(10.4)	[3.7]	_	I	40	良好	灰	No.9 湖西窯産 坏H ヘラケズリ	102-1		
2	須恵器	獲	_	[10.3]	_	I	5	良好	にぶい赤褐	b 末野窯産 外面平行叩き 内面同心 円文	102-1		
3	土師器	坏	11.6	[3.4]	_	CI	40	普通	褐	a·No.22 有段口緣坏 黒色処理			
4	土師器	坏	(13.4)	[3.5]	_	CHI	30	普通	黄灰	b 有段口縁坏 黒色処理			
5	土師器	坏	(12.9)	[3.4]	_	CIK	10	普通	にぶい赤褐				
6	土師器	坏	(11.2)	[3.4]	_	ACIK	20	普通	暗灰黄	a・b 有段口縁坏			
7	土師器	鉢	(16.2)	[7.9]	_	ACHI	30	普通	褐灰	a · No.15			
8	土師器	甕	(16.4)	[5.2]	_	ACHIK	10	普通	灰褐	b • No.16 • 21			
9	土師器	甕	13.0	[7.2]	_	ACHK	30	普通	にぶい橙	No. 8	102-1		
10	土師器	甕	21.2	[19.3]	_	CI	50	良好	橙	No.21	102-1		
11	土師器	甕	_	[11.6]	5.0	CHI	30	普通	にぶい褐	a · No.10 · 11 · 12 · 18 · 19			
12	土師器	手捏ね	_	[4.4]	4.2	ACIK	20	普通	黄灰	カマド・No.25			

部分で長径0.73m、短径0.34m、深さ0.55mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第100 図1は須恵器の坏蓋である。天井部と体部の境に 稜を持ち口縁端部が「ハ」の字状に開く。いわゆる北関東系須恵器の特徴を有する。2は須恵器の 甕である。外面に平行タタキ痕とナデ調整、内面に無文アテ具痕とナデ調整がみられる。平底瓶の



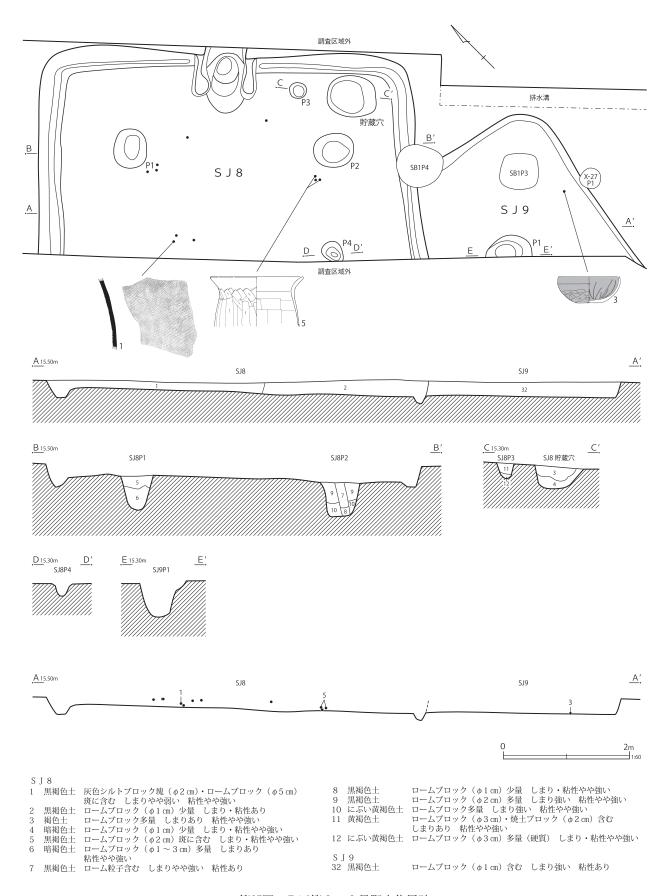
第95図 B区第6号竪穴住居跡



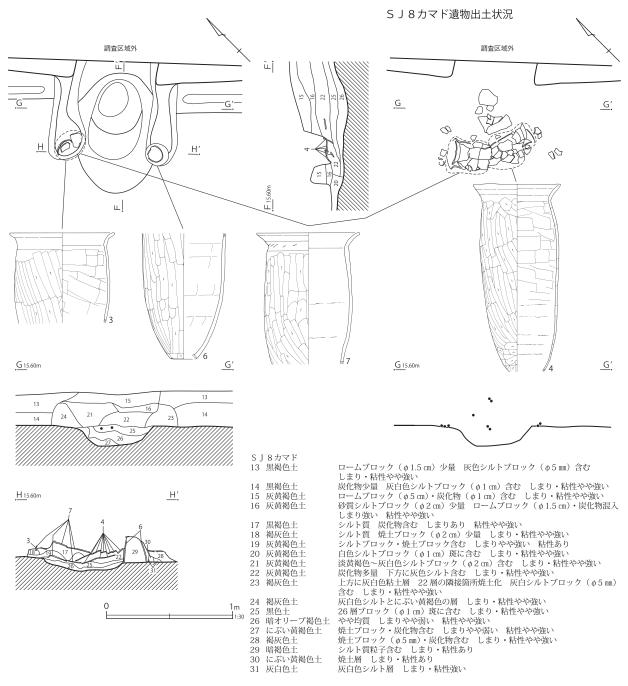
第96図 B区第6号竪穴住居跡出土遺物

第41表 B区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(16.2)	[4.2]	_	CHI	40	良好	にぶい橙	No. 6·15 蓋模倣坏	
2	土師器	坏	15.1	4.7	-	AHIK	70	普通	明赤褐	a·b·No.6·8·12 蓋模倣坏	102-2
3	土師器	坏	(16.2)	[3.7]	-	CHI	10	良好	にぶい橙	b 蓋模倣坏	
4	土師器	坏	15.0	5.3	-	AGHI	55	良好	赤褐	c·No.9·13 比企型坏 赤彩	102-2
5	土師器	甕	(17.0)	[9.5]	-	ACI	30	普通	にぶい黄橙	b • No. 1 • 2	
6	土師器	甕	_	[13.2]	7.6	AIK	25	普通	にぶい黄橙	No.10 • 17	102-2



第97図 B区第8・9号竪穴住居跡



第98図 B区第8号竪穴住居跡カマド

可能性もあるか。

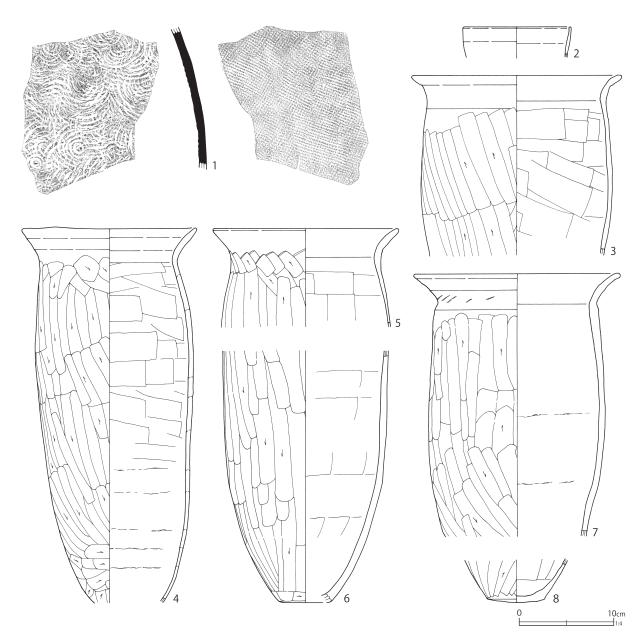
3は土師器の坏である。内外面に黒色処理が施されている。身の深い坏である。内面に放射状暗文が施されている。

時期は第8号竪穴住居跡が7世紀後半~末頃、 第9号竪穴住居跡がそれ以前、6世紀中頃~後半 頃の可能性がある。

B区第11号竪穴住居跡(第101図)

B区の第11号竪穴住居跡はR-21グリッド、B2区の南東側に位置する。

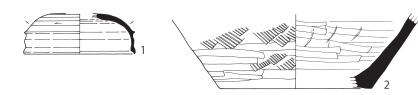
他の遺構との重複関係は、北側に近接する第12 号竪穴住居跡によってカマドの一部が壊されている。北辺と西辺、東辺の一部のみ検出され、南側の大部分が調査区域外に至る。

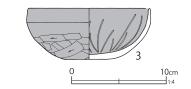


第99図 B区第8号竪穴住居跡出土遺物

第42表 B区第8号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[15.0]	_	EI	5	良好	黒灰	No.5 外面格子叩き 内面同心円文	103-1
2	土師器	坏	(11.2)	[3.2]	_	I	20	良好	褐灰	SJ 9 蓋模倣坏	
3	土師器	甕	(22.0)	[18.9]	_	AEGHI	30	普通	浅黄	No.31カマド	
4	土師器	甕	18.2	[39.5]	_	AHK	80	普通	浅黄橙	No.30カマド	103-1
5	土師器	甕	(19.3)	[10.3]	_	AHI	30	良好	にぶい黄橙	カマド周辺・No. 9・11	103-1
6	土師器	甕	_	[26.3]	(5.4)	HIK	75	普通	橙	カマド袖・No.32カマド	103-1
7	土師器	甕	17.4	[23.2]	_	ACEHIK	80	普通	明赤褐	No.29・31カマド	103-1
8	土師器	甕	_	[4.4]	6.0	ACHIK	10	普通	褐灰		
				1	l						





第100回 B区第9号竪穴住居跡出土遺物

第43表 B区第9号竪穴住居跡出土遺物観察表(第100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(11.5)	[4.2]	_	IK	30	良好	灰	北関東系	103-2
2	須恵器	甕	_	[7.8]	(16.0)	BEI	20	良好	灰	外面平行叩き・ナデ 内面無文当て具・ナ	103-2
3	土師器	坏	(12.8)	[5.4]	_	AIK	40	普通	黒	P 1 · No. 1 放射状暗文 黑色処理	103-2

覆土は浅く残存状況が極めて良くなかった。平面形は検出された北西辺と東辺から隅丸方形と想定される。規模は長軸長4.17m、検出された短軸長は0.93m、深さ0.07mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。

カマドは北西辺のやや西寄りに設置されている。残存規模は長さ0.95m、幅1.00m、深さ0.30mである。煙道部は第12号竪穴住居跡に壊されている。壁溝、柱穴は検出されなかった。

遺物は土師器が出土している。第101図1と2は蓋模倣坏である。カマド燃焼部から2の坏と同じ地点から出土している。3は有段口縁坏である。内外面に黒色処理が施されている。1と2の坏よりカマドの奥側より出土している。時期は土師器坏から6世紀後半頃に位置付けられる。

B区第12号竪穴住居跡(第102図)

B区の第12号竪穴住居跡は $Q \cdot R - 21$ グリッド、B 2区の南東側に位置する。

南側に接する第11号竪穴住居跡のカマドの煙道部を壊している。また、R-21P1に壊されている。

覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とする。竪 穴住居跡の南辺、西辺、東辺の一部が検出されている。北東辺は調査区域外に至る。平面形は残存 範囲から推定すると隅丸方形の形状と思われる。 規模は、検出された範囲で長軸長4.48m、短軸長 1.70m、深さ0.37mである。長軸方位は N-44° -Wを指す。

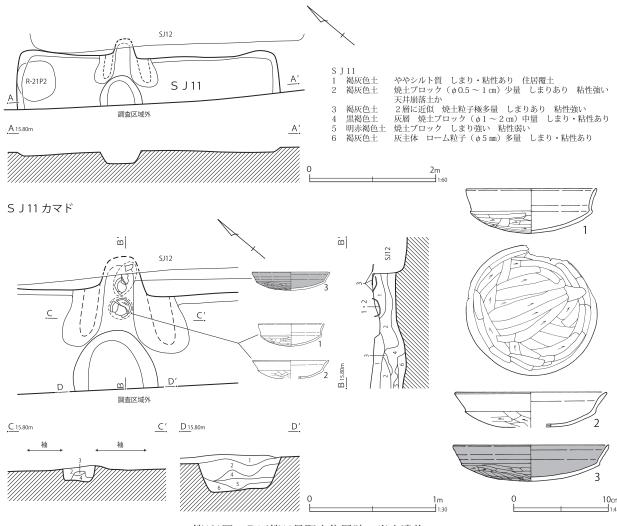
カマドは検出されておらず、調査区域外の北辺 に位置すると思われる。壁溝は検出されなかっ た。柱穴は4基検出されているが、主柱穴となる かは判然としない。

遺物は土師器が出土している。第103図 $1 \sim 3$ は坏である。 $1 \geq 2$ は口縁部が垂直に立ち上がる身の深い坏である。3は口縁部が外反する。4は甕である。胴が張っている。胴部にハケメ調整が施されている。時期は6世紀前半頃に位置付けられる。

B **区第13号竪穴住居跡** (第104図)

B区の第13号竪穴住居跡はQ・R-21グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係はない。

覆土はローム粒子や炭化物を含む暗褐色土を主体とする。平面形は西辺が調査区域外へ至るが、隅丸長方形とみられる。規模は長軸長2.47m、短軸長1.05m以上、深さ0.20mである。長軸方位はN-37°-Wを指す。カマド、柱穴、壁溝は検出されなかった。



第101図 B区第11号竪穴住居跡・出土遺物

遺物は須恵器、土師器、石製模造品が出土している。第104図1は須恵器坏の坏身である。口縁部が垂直に立ち上がる。産地は陶邑窯と思われる。2は土師器の壺口縁部である。内外面に黒色処理が施されている。

3と4は石製模造品である。3は滑石製である。長方形ぎみの形状である。穿孔は片面から錐状の工具で穿たれている。4は粘板岩製である。穿孔は片面から穿たれている。時期は、須恵器の坏から6世紀後半以降に位置付けられよう。

B区第14号竪穴住居跡 (第105図)

B区の第14号竪穴住居跡は $Q-20 \cdot 21$ グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は、Q-20P7に切られ、Q-20P5を壊

している。覆土は、ロームブロックを多く含む黒 色土、黒褐色土を主体とする。平面形は南辺が調 査区域外に延びているが、方形または長方形と推 定される。

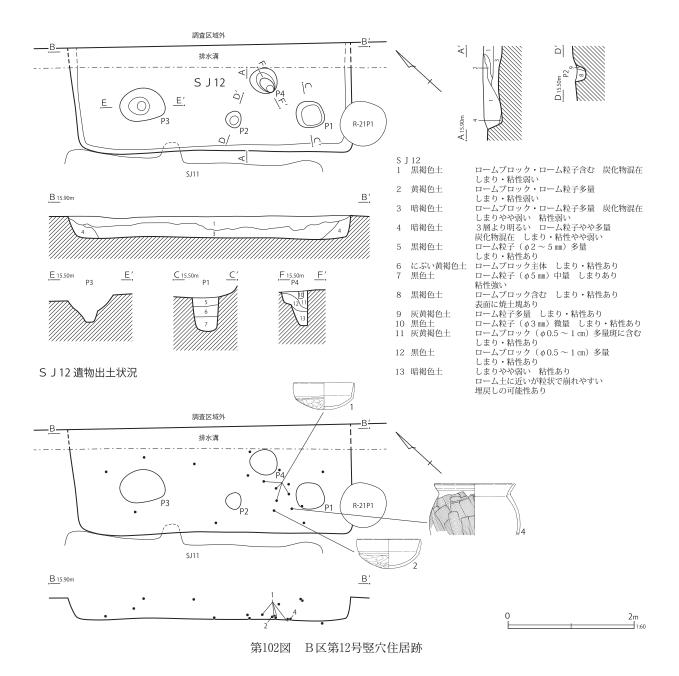
規模は長軸長5.00m、短軸長2.45m、深さ 0.27mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

カマドは北西辺に設置されている。煙道部が 調査区域外に延びる。検出された規模は長さ 1.45m、幅0.80mで燃焼部の深さは0.20mであ る。燃焼部は住居壁からやや外側に位置する。

貯蔵穴はカマド右側、竪穴住居跡の北東コーナー部で検出された。規模は長軸0.70m、短軸0.64m、深さ0.24mである。柱穴は5基検出されたが、主柱穴となるかは判然としない。壁溝は検

第44表 B区第11号竪穴住居跡出土遺物観察表(第101図)

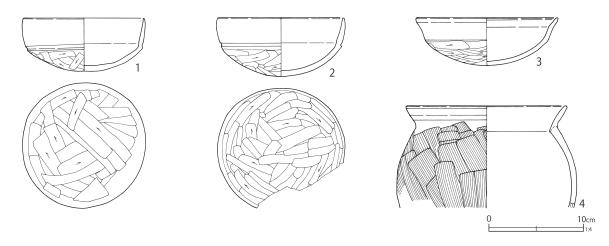
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考		図版
1	土師器	坏	13.7	4.7	_	ACHIK	90	良好	明赤褐	カマドNo.1	蓋模倣坏		104-1
2	土師器	坏	(15.8)	[3.6]	_	AIK	15	普通	橙	カマドNo.1	蓋模倣坏		104-1
3	土師器	坏	16.2	3.8	-	AHIK	55	普通	にぶい黄褐	カマドNo.2	有段口縁坏	黒色処理	104-1



出された竪穴住居跡のカマドを除く全周から検出 され、幅 $0.15\sim0.27$ m、深さ $0.05\sim0.15$ mである。

遺物は土師器と石製品が出土している。第106 図 $1 \sim 6$ は土師器の坏である。 $1 \sim 3$ は有段口縁

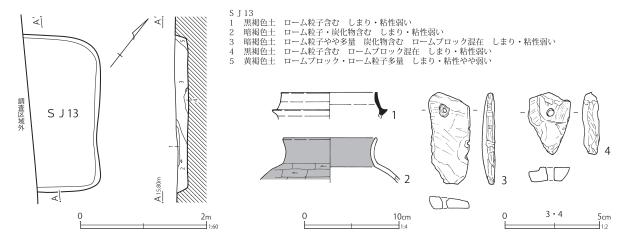
坏である。いずれも内外面に黒色処理が施されている。 1 は内面にまばらに 8 条の放射状暗文が施されている。 $4 \sim 6$ は身模倣坏である。 $4 \sim 6$ は 内外面に黒色処理が施されている。 4 の口縁部は



第103回 B区第12号竪穴住居跡出土遺物

第45表 B区第12号竪穴住居跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.7	5.6	_	I	90	良好	明赤褐	No. 2 · 5 · 7 · 11	104-2
2	土師器	坏	13.2	6.2	_	CHI	80	良好	橙	No. 1	104-2
3	土師器	坏	(14.8)	5.0	_	AI	35	良好	明赤褐	蓋模倣坏	104-2
4	土師器	甕	(16.6)	[10.7]	_	AHIK	10	普通	明赤褐	No. 3	

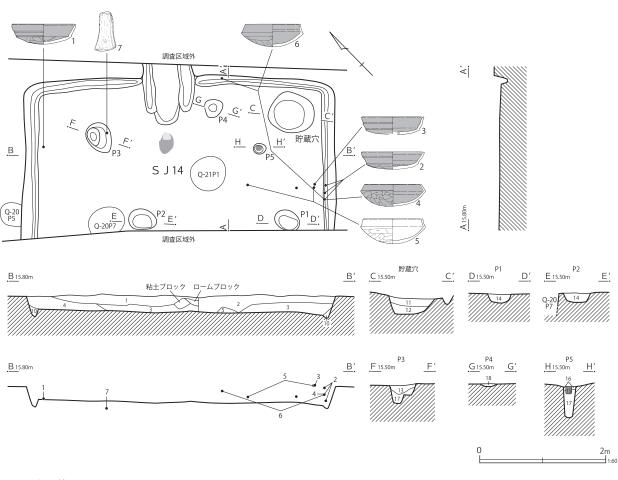


第104回 B区第13号竪穴住居跡·出土遺物

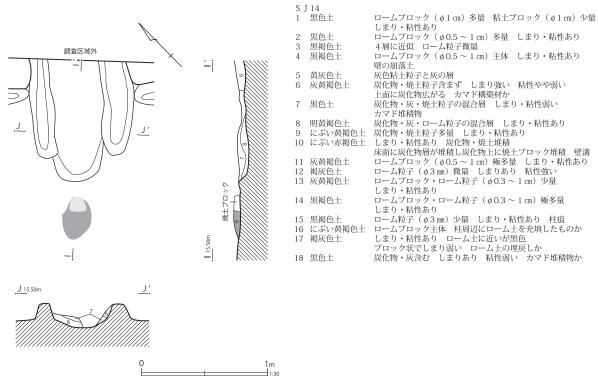
第46表 B区第13号竪穴住居跡出土遺物観察表(第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	
1	須恵器	坏	(10.2)	[2.8]	_	I	15	良好	灰	陶邑窯産	105-1
2	土師器	壺	(9.8)	[4.8]	_	HI	10	良好	にぶい赤褐	黒色処理	105-1
3	石製模造品	不明	長4.8	短2.2 厚	10.7 孔	径0.5 重	11.2	残存100)	滑石 片面押 穿孔 ミガキ	105-1
4	石製模造品	剣形	長3.3	短2.3 厚	10.9 孔	径0.4 重	5.7 列	读存100		粘板岩 片面直 穿孔 ミガキ	105-1

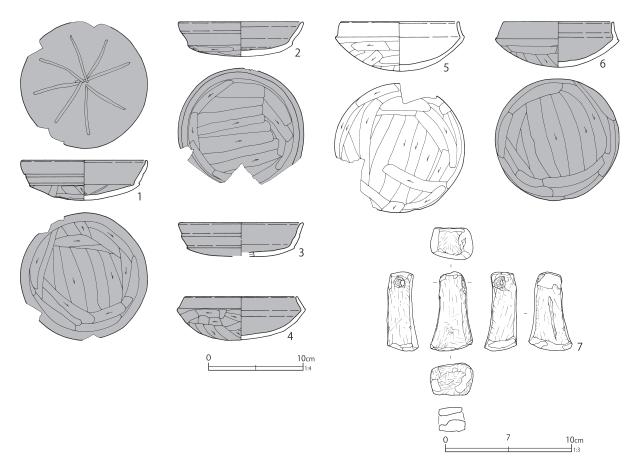
内傾し、5と6の口縁部は垂直に立ち上がる。 7は有孔砥石である。流紋岩製で両面から穿孔 されている。使用面は5面確認され、その内の1 面には、刃物痕が認められる。







第105図 B区第14号竪穴住居跡



第106図 B区第14号竪穴住居跡出土遺物

第47表 B区第14号竪穴住居跡出土遺物観察表(第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.2	4.2	_	CHIK	90	普通	黒	No.10 有段口縁坏 放射状暗文 黒色処理	105-2
2	土師器	坏	13.2	3.7	_	ACHIK	85	普通	明赤褐	No.1・2・4 有段口縁坏 黒色処理	105-2
3	土師器	坏	(12.8)	[3.5]	_	CHI	40	普通	にぶい黄橙	No.5 有段口緣坏 黑色処理	105-2
4	土師器	坏	(11.8)	4.5	_	AIK	55	普通	黒褐	貯蔵穴No.1 身模倣坏 黒色処理	105-2
5	土師器	坏	12.4	5.2	_	CHI	75	良好	橙	No. 3·7 身模倣坏	105-2
6	土師器	坏	11.6	4.8	_	IK	95	普通	浅黄橙	貯蔵穴No.1・8 身模倣坏 黒色処理	105-2
7	石製品	砥石	長6.2 短3.4 厚さ2.5 孔径0.9 重さ57.0 残存90							No. 9 流紋岩 有孔	105-2

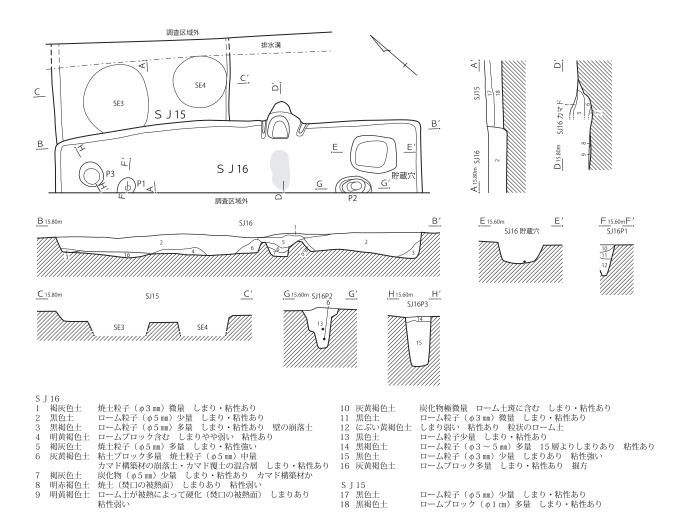
時期は土師器坏から6世紀後半頃になるとみられる。

B 区第15·16号竪穴住居跡 (第107図)

B区の第15号竪穴住居跡はR-21・22グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は、第16号竪穴住居跡、第3・4号井戸跡によって壊されている。

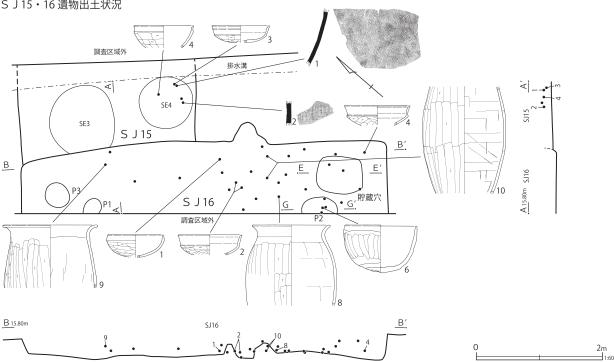
覆土はロームブロックやローム粒子を含む黒色 土及び黒褐色土を主体とする。北側は調査区域外 に至り、南側は第16号竪穴住居跡によって壊され ており平面形は不明である。

検出された範囲での規模は長軸長2.76m、短軸長1.15m、深さ0.25mである。長軸方位はN-39°-Wを指す。カマド、柱穴、壁溝は検出されな





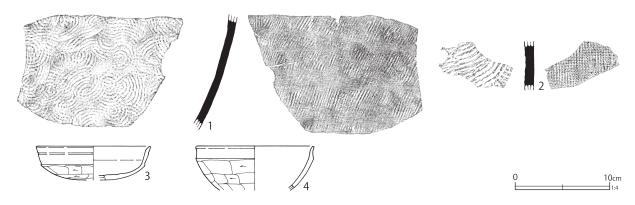
明黄褐色土



17 黒色土 18 黒褐色土

ローム粒子(ϕ 5 mm)少量 しまり・粘性あり ロームブロック(ϕ 1 cm)多量 しまり・粘性あり

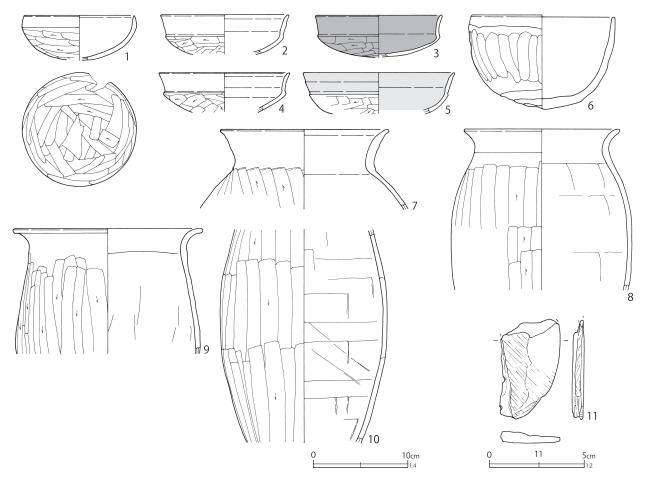
第107図 B区第15・16号竪穴住居跡



第108図 B区第15号竪穴住居跡出土遺物

第48表 B区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表(第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
1	須恵器	甕	_	[12.1]	_	IK	10	良好	灰白	No. 2 文	外面平行叩き・カキ目 内面同心円	106-1
2	須恵器	甕	_	[5.1]	_	I	5	良好	暗灰	No. 1	外面平行叩き 内面同心円文	106-1
3	土師器	坏	(11.9)	[3.5]	_	CHI	30	普通	橙	No. 4	蓋模倣坏	106-1
4	土師器	坏	(12.3)	[4.6]	_	CI	30	良好	橙	No. 5	蓋模倣坏	106-1



第109図 B区第16号竪穴住居跡出土遺物

第49	表 B	玄第	引6号竪穴	住居跡出	出土遺物	物観察表	€(第10	9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.5	[4.7]	_	EHIK	90	良好	明赤褐	SJ16No.24·SJ15.16 北武蔵型坏	106-2
2	土師器	坏	(13.3)	[4.1]	_	CHI	40	普通	にぶい黄褐	SJ16No.20·21 蓋模倣坏	106-2
3	土師器	坏	(13.3)	[4.4]	_	CHI	30	普通	明褐	SJ16 蓋模倣坏 黒色処理	106-2
4	土師器	坏	13.7	[4.1]	_	AHI	50	良好	明赤褐	SJ16No. 2 蓋模倣坏	106-2
5	土師器	坏	(15.8)	[4.3]	_	AHI	20	良好	赤	SJ15.16 有段口縁坏 赤彩	
6	土師器	鉢	14.7	9.9	_	CEHIK	95	不良	黒	SJ16 P 2 No. 1	106-2
7	土師器	甕	17.6	[8.4]	_	AHI	30	良好	明赤褐	SJ16 P 2·貯蔵穴	106-2
8	土師器	甕	(16.3)	[17.0]	_	AGHI	30	普通	にぶい黄橙	SJ16貯蔵穴・No.13・SJ15.16	
9	土師器	甕	(19.7)	[13.2]	_	HIK	30	普通	明赤褐	SJ16No.27 • SE 4	106-2
10	土師器	甕	_	[22.5]	-	AHIK	20	普通	暗褐	SJ16No.15 • 16	
11	石製品	不明	長[5.3]	短[3.2]	厚さ0	1.7 重さ	14.6 3	浅存50		SJ16 滑石 ミガキ	

かった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第108 図1と2は須恵器の甕片である。1は外面に平行 タタキ痕とカキ目がみられ、内面に同心円文アテ 具痕がみられる。2は外面に平行タタキ痕、内面 に同心円文アテ具痕がみられる。3と4は土師器 の坏である。

B区の第16号竪穴住居跡はR-21・22グリッド、B2区の南東側に位置する。他の遺構との重複関係は、第15号竪穴住居跡、第3号井戸跡を壊している。北辺と西辺、東辺の一部を検出し、南側の大半は調査区域外へと延び、平面形は長方形と推定される。規模は、長軸長5.78m、検出された短軸長1.15m、深さ0.40mである。主軸方位はN-48°-Eを指す。

カマドは、北辺やや東寄りに設置され、規模は 長さ1.40m、幅0.90m、深さ0.35mである。煙道 部は長さ0.15m、深さ0.10mである。貯蔵穴はカ マド右側、竪穴住居跡の北東コーナー部分に位 置し、規模は長軸長0.75m、短軸長0.59m、深さ 0.28mである。主柱穴はカマド側で3基検出され た。P1と対応する可能性があるピットは、P2 とP3の2基あり、規模的にはどちらも対応する 可能性がある。壁溝は検出されなかった。

遺物は土師器と石製品が出土している。第109

図1~5は土師器の坏である。1は北武蔵型坏に位置付けられよう。2~4は蓋模倣坏である。3 は内外面に黒色処理が施されている。5は有段口縁坏であるが内外面に赤彩が施されている。6は土師器の鉢である。全体的に摩滅しているが、ほぼ完形である。外面と見込みが煤けている。P2から出土している。7~10は甕である。胴部のケズリ方向はいずれも縦方向である。11は滑石製の製品である。欠損しているが、本来は穿孔を持つ石製模造品である。一方向から研磨されている。時期は、第16号竪穴住居跡は7世紀後半頃で第15号竪穴住居跡はそれ以前となる。

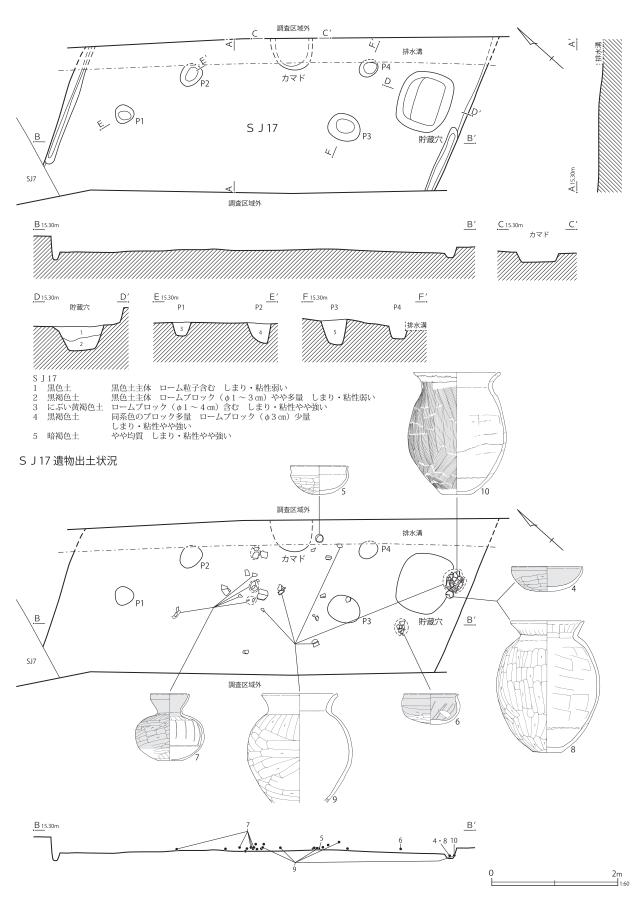
B区第17号竪穴住居跡 (第110図)

B区の第17号竪穴住居跡は $V \cdot W - 26$ グリッド、B3区のほぼ中央に位置する。

他の遺構との重複関係は、第7号竪穴住居跡に壊されている。北辺と南辺は調査区域外に延びる。

平面形は四方が調査区域外に至るため不明である。規模は長軸長6.10m、検出されている短軸長は2.20m、深さ0.25mである。主軸方位はN-67°-Eを指す。

カマドの一部が北側で検出された。検出された規模は長さ0.15m、幅0.50m、深さ0.13mである。貯蔵穴はカマド右側、東辺近くで検出された。壁溝は西辺と東辺の南半分で検出された。幅



第110図 B区第17号竪穴住居跡

0.12~0.20m、深さ0.05~0.06mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第111 図1は須恵器の脚付壺の脚部とみられる。透かし の底辺が残る。産地は末野窯の可能性がある。2 は須恵器甕の胴部片である。外面に擬格子タタキ 痕、内面に同心円文アテ具痕がみられる。3は須 恵器壺の破片である。内面に無文アテ具痕がみられる。6 れる。産地は南比企窯の製品である。

4~6は土師器の坏である。4は内外面に赤彩が施されている。5と6は口縁部が屈曲する。6は内外面に赤彩が施され、内面にミガキが施されている。底部に「キ」のようなへラ記号がみられる。7は土師器の坩である。内外面に赤彩が施され、内面に放射状暗文が施されている。

8~10は土師器の甕である。いずれも胴部が 張ったタイプである。10は外面にハケメがみられ る。貯蔵穴の縁部分から出土している。時期は、 6世紀代のやや古い時期とみられる。

B 区第18号竪穴住居跡 (第112図)

B区の第18号竪穴住居跡はX・Y-28グリッド、B3区の南東側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第8・9号井戸跡、 第3号溝跡より新しく、第7号井戸跡、第4号溝 跡より古い。

覆土は黒褐色土を主体とする。北辺と南辺は調査区域外に延びる。平面形は不明である。規模は長軸長4.67m、短軸長2.75m、深さ0.40mである。長軸方位はN-65°-Wを指す。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は東辺近くから検出された。規模は長軸長1.88m、短軸長1.04m、深さ0.55mである。壁溝は東辺で検出され、幅0.13~0.23mである。柱穴は検出されなかった。

遺物は須恵器、土師器、石製品が出土している。第113図1と2は須恵器の坏蓋である。1は 天井部に「×」のヘラ記号がみられる。2は天井部に「八」のようなヘラ記号がみられるが、欠損 しているため詳細は不明である。3は坏身である。完形品である。口縁部がやや内傾する。底部に「×」のへう記号がみられる。また、底部に別個体の破片が張り付いている。これらの須恵器はいずれも北関東系の窯跡製品とみられる。

4~14は土師器の坏である。4~9は蓋模倣坏で10~14は身模倣坏である。15と16は埦である。 口縁部が屈曲し、坏より一回り大きい。17は高坏である。蓋模倣の身を持ち、脚部が短く、身部にナデつけておりやや拙い。18~20は壺である。いずれも口縁部にヨコナデ、胴部に横方向にヘラケズリが行われる。

21は鉢である。外面及び内面の一部が煤けている。22~24は甕である。22は小型のタイプである。23と24は胴部が張る球胴甕である。

25は石製模造品である。粘板岩製で円板のような形状である。26~29は臼玉である。27は滑石製でほかは粘板岩製である。研磨方向は26は未調整、27と28は斜方向、29は不明である。30はチャートの剥片である。時期は須恵器から6世紀後半頃とみられる。

B区第19号竪穴住居跡 (第115図)

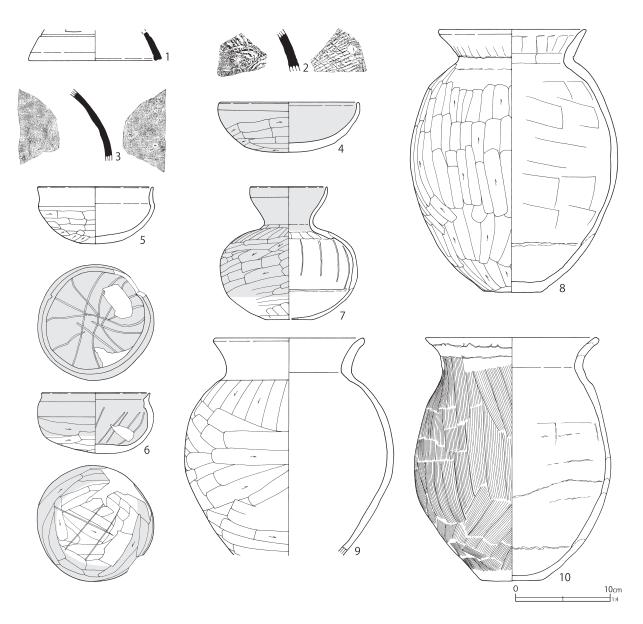
B区の第19号竪穴住居跡はT-23・24グリッド、B3区の北西側に位置する。

他の遺構との重複関係は、第2号竪穴住居跡と 第10号竪穴住居跡に壊されている。西辺は調査区 域外に延び、北辺と南辺がわずかに確認できた。 検出された規模は長軸長2.20m、短軸長1.90m、 深さ0.10mである。長軸方位はN-40°-Wを指 す。カマド、貯蔵穴、主柱穴、壁溝は検出されな かった。また、遺物も出土しなかった。時期は第 10号竪穴住居跡に壊されていることからそれ以前 となる。

B 区第22·23号竪穴住居跡 (第116図)

B区の第22号竪穴住居跡はU-24・25グリッド、B3区の北西側に位置する。

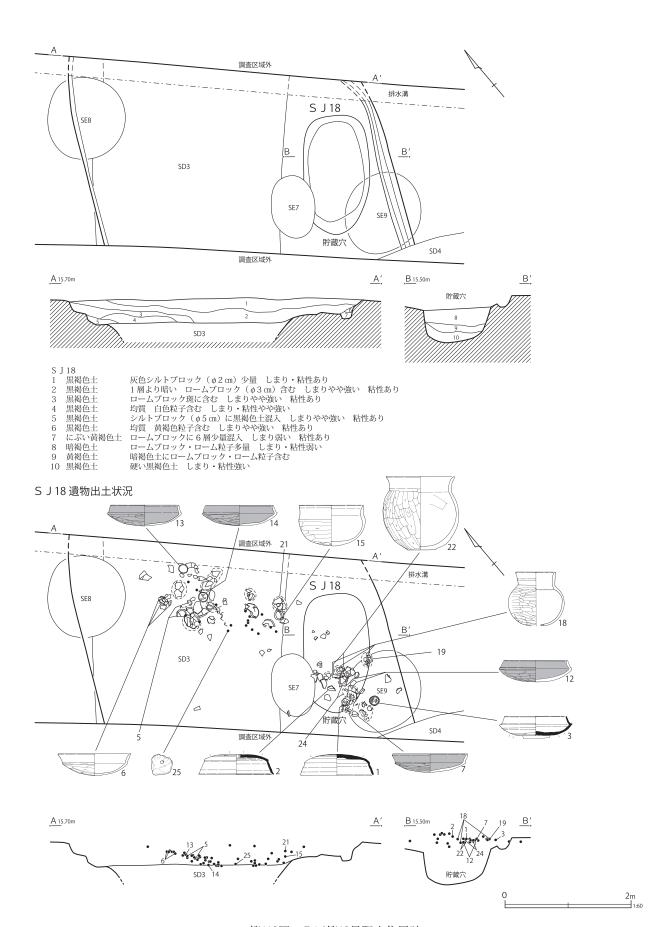
他の遺構との重複関係は、第23号竪穴住居跡を



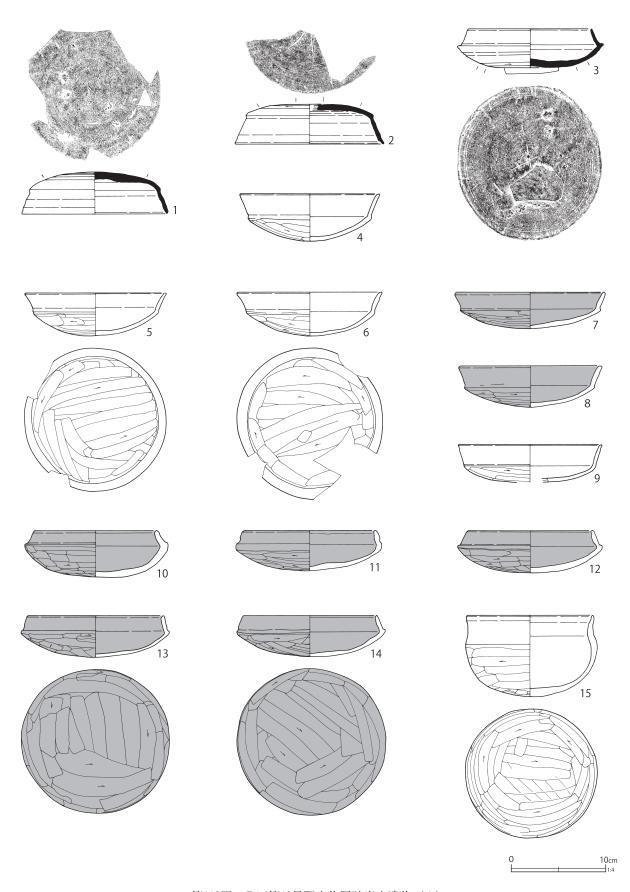
第111図 B区第17号竪穴住居跡出土遺物

第50表 B区第17号竪穴住居跡出土遺物観察表(第111図)

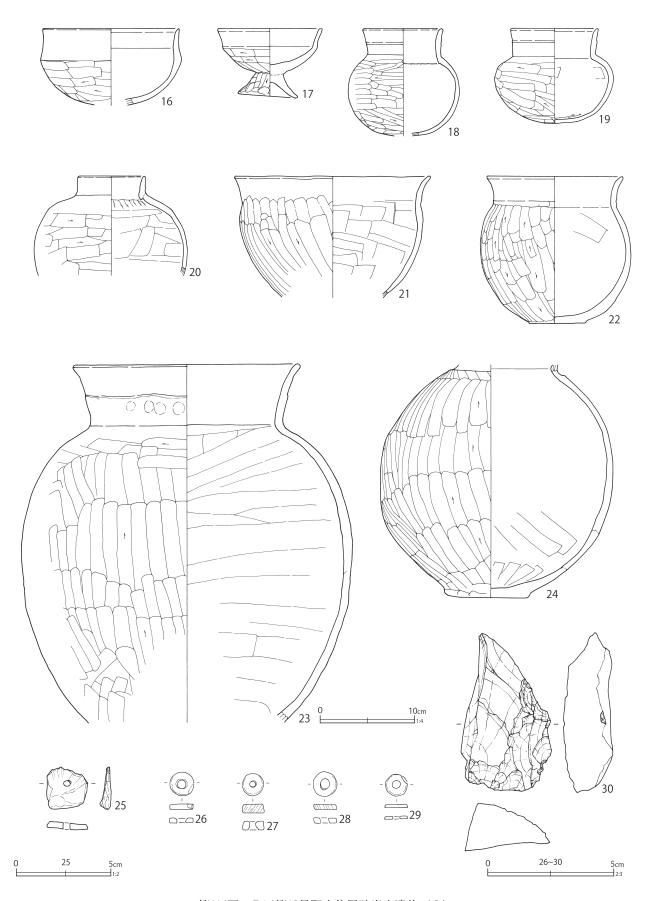
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	脚付壺	_	[3.2]	(13.0)	AI	5	普通	灰	末野窯産か 透かし	
2	須恵器	甕	_	[4.5]	_	BEI	5	良好	灰	末野窯産 外面擬格子 内面同心円文	
3	須恵器	壺	_	[7.6]	_	EIJ	5	良好	灰	南比企窯産 内面無文当て具	
4	土師器	坏	14.4	5.7	_	AIK	95	普通	赤	No. 1 赤彩	107-1
5	土師器	坏	12.2	6.0	_	GI	95	普通	橙	No. 7	107-1
6	土師器	坏	11.3	6.4	_	EIK	90	良好	赤	No.3・SK2 赤彩 放射状暗文 ヘラ記号	107-1
7	土師器	坩	(8.0)	14.0	(4.8)	HI	40	良好	暗赤褐	No.16・18・23・25・カマド・カマドNo.22 赤彩	107-1
8	土師器	甕	15.4	27.6	6.0	EGI	90	普通	にぶい赤褐	貯蔵穴No. 1	107-1
9	土師器	甕	15.6	[22.8]	_	AGHI	40	普通	にぶい褐	No. 2 · 5 · 12 · 13 · 21 · SJ17 · SK 2	107-1
10	土師器	甕	17.8	25.7	6.4	AHI	80	普通	にぶい褐	貯蔵穴・No. 2	107-1
					l			l			



第112図 B区第18号竪穴住居跡



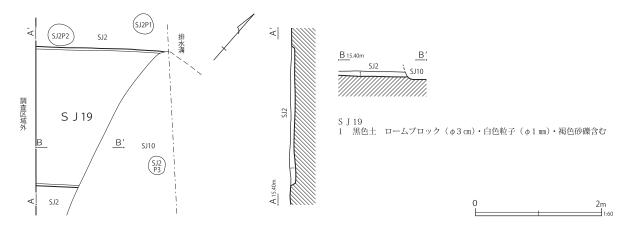
第113図 B区第18号竪穴住居跡出土遺物(1)



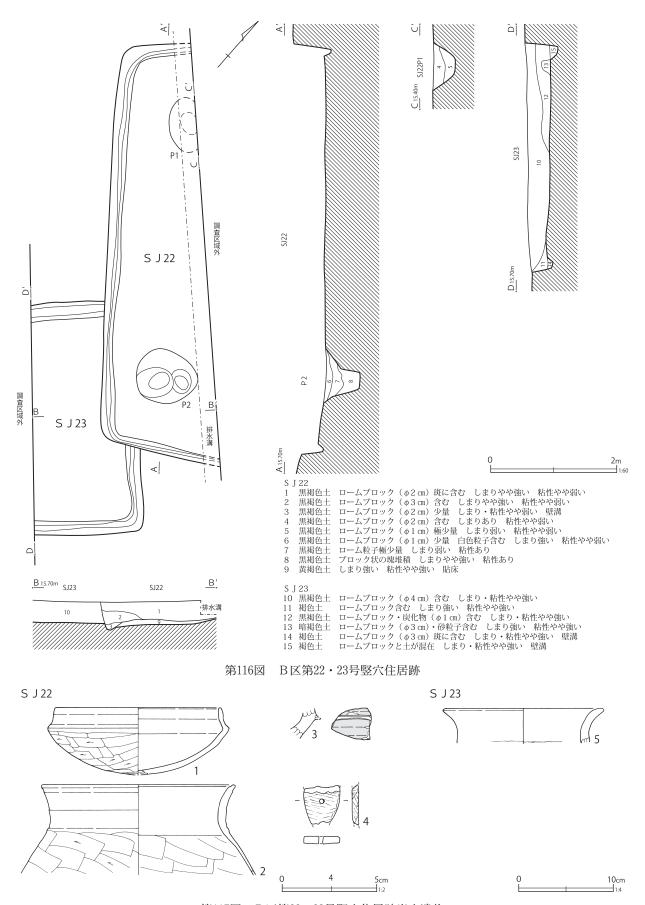
第114図 B区第18号竪穴住居跡出土遺物(2)

第51表 B区第18号竪穴住居跡出土遺物観察表(第113·114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(15.3)	4.4	_	BEIK	55	良好	灰	c・No.9 ヘラ記号 ヘラケズリ 北関東 系	107-2
2	須恵器	蓋	(15.6)	4.2	_	BEIK	30	良好	灰	No.13・B 3 一括 ヘラ記号 ヘラケズリ 北関東系	107-2
3	須恵器	坏	13.0	4.1	_	BEIK	100	良好	灰	No.3 ヘラ記号 焼き台付着 北関東系	107-2
4	土師器	坏	(14.6)	4.9	-	CEIK	65	普通	にぶい黄橙	SK7 蓋模倣坏	108-1
5	土師器	坏	14.6	4.5	-	BCEHIK	95	普通	橙	No.42·45 蓋模倣坏	108-1
6	土師器	坏	15.0	4.6	-	CEHIK	80	普通	にぶい赤褐	No.67·70·71 蓋模倣坏	108-1
7	土師器	坏	15.6	3.8	-	EIK	50	普通	灰褐	c·No.7 蓋模倣坏 黒色処理	108-1
8	土師器	坏	14.9	4.3	_	EIK	80	普通	灰褐	SE11フク土 蓋模倣坏 黒色処理	108-1
9	土師器	坏	(15.1)	[3.9]	_	EHIK	50	普通	橙	b・SE11フク土・Y-29 蓋模倣坏	108-1
10	土師器	坏	12.9	4.9	_	EHIK	75	普通	赤褐	b·SK 7 身模倣坏 黑色処理	108-1
11	土師器	坏	13.7	4.3	_	IK	55	普通	にぶい褐	No.75·SD3 身模倣坏 黒色処理	108-1
12	土師器	坏	13.1	4.4	_	EHIK	70	普通	にぶい赤褐	c·No.12·20 身模倣坏 黒色処理	108-1
13	土師器	坏	14.4	4.4	_	HIK	100	良好	明赤褐	No.60 身模倣坏 黑色処理	108-1
14	土師器	坏	14.0	4.3	_	EHIK	100	普通	にぶい赤褐	No.61 身模倣坏 黑色処理	108-1
15	土師器	埦	13.1	8.6	_	CEHIK	95	普通	にぶい赤褐	No.38	108-2
16	土師器	埦	(14.3)	[8.0]	_	CEHIK	30	普通	橙		108-1
17	土師器	高坏	10.8	7.3	5.8	CEHIK	95	普通	にぶい橙	No.72	108-2
18	土師器	壺	8.1	[11.3]	_	CIK	45	普通	にぶい赤褐	b·c·No.15·21·22	108-2
19	土師器	壺	9.0	10.0	_	CEHIK	75	普通	橙	b ⋅ c ⋅ No.22	108-2
20	土師器	壺	7.0	[10.5]	_	CEHIK	50	普通	橙	a · b · No.37	
21	土師器	鉢	20.3	[12.8]	_	CEHIK	85	普通	橙	No.74 • 84 • 90	109-1
22	土師器	甕	14.4	15.4	5.9	EIK	70	普通	にぶい黄橙	No.20・SJ16 底部ヘラケズリ	109-1
23	土師器	甕	_	[24.4]	8.8	EIK	60	普通	にぶい黄橙	b・c・No.10・14 底部ヘラケズリ後ナデ	109-1
24	土師器	甕	(23.4)	[37.7]	_	CEIK	20	普通	明赤褐	С	109-1
25	石製模造品	不明	長2.2	短2.2 厚	10.6 孔	径0.4 重	2.5 列	長存100		No.109 粘板岩 片面直 穿孔 ミガキ	
26	石製品	臼玉	長0.9	短0.9 厚	10.2 孔	径0.4 重	0.2 列	長存95		粘板岩 中G5cⅢ	
27	石製品	臼玉	長0.9	短0.9 厚	10.4 孔	径0.3 重	0.5 列	長存80		滑石 中C2cⅢ	
28	石製品	臼玉	長1.0	短0.9 厚	10.2 孔	径0.4 重	0.2 列	長存95		粘板岩 中G2cⅡ	
29	石製品	臼玉	長0.9	短0.9 厚	10.1 孔	径0.3 重	0.1 列	長存80		粘板岩 中G4cⅡ	
30	石製品	剥片	長さ6.3	幅3.1	厚さ2.0	重さ41	.5			c チャート	



第115図 B区第19号竪穴住居跡



第117図 B区第22·23号竪穴住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
1	土師器	坏	(17.3)	[7.0]	_	CIK	30	普通	にぶい黄	SJ22	身模倣坏	
2	土師器	甕	(20.2)	[9.5]	_	ACGHI	20	良好	にぶい黄橙	SJ22	B 3 一括 角閃石多量	
3	土師器	壺	_	[3.2]	_	ACHI	5	普通	赤褐	SJ22	赤彩	
4	石製模造品	不明	長[2.1]	短[1.9]	厚さ0	.4 孔径	0.3 重	さ3.0	残存60	SJ22	滑石 片面直 ミガキ	

普通 にぶい黄橙 SJ23

ΑI

第52表 B区第22·23号竪穴住居跡出土遺物観察表(第117図)

壊している。西辺と北辺、南辺の一部のみ検出され、東側は調査区域外に延びる。検出された規模は長軸長6.45m、短軸長1.80m、深さ0.35mである。長軸方位はN-40°-Wを指す。

(16.6)

[3.7]

土師器

カマドは検出されなかった。調査区域外に位置するとみられる。主柱穴は2基検出された。P1は検出された範囲で長径0.75m、短径0.18m、深さ0.33mである。P2は長径1.00m、短径0.86m、深さ0.53mである。壁溝は検出された範囲において全周する。幅0.15~0.25m、深さ0.04~0.10mである。

遺物は土師器と石製模造品が出土している。第 117図1は土師器の坏である。やや大振りな身模 倣坏である。底部が若干煤けている。2は土師器 の甕である。3は土師器の壺片である。内外面に 赤彩が施されている。器壁がやや厚い。4は石製 模造品である。滑石製で片面から穿孔されている。

B区の第23号竪穴住居跡はU-24・25グリッド、B3区の北西側に位置する。他の遺構との重複関係は、第22号竪穴住居跡に壊されている。

北辺、南辺、東辺の一部を検出した。西側は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長3.70m、短軸長1.70m、深さ0.38mである。

カマド、主柱穴は検出されなかった。壁溝は検出された範囲において全周する。幅0.20~0.27m、深さ0.05~0.10mである。

遺物は土師器甕の口縁部片が1点出土している。時期は第22号竪穴住居跡が6世紀後半代で第23号竪穴住居跡がそれ以前となる。

B 区第25・28号竪穴住居跡 (第118図)

B区の第25号竪穴住居跡は $P-19 \cdot 20$ グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第28号竪穴住居跡、第5号溝跡に壊されている。南辺、東辺の一部のみ検出された。検出された範囲での規模は長軸長2.70m、短軸長2.45m、深さ0.07mである。長軸方位はN-33°-Wを指す。覆土はローム粒子、炭化物を含む褐色土である。カマド、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。柱穴は1基検出されたが、主柱穴となるかは不明である。遺物は出土していない。

B区の第28号竪穴住居跡はP-19グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第25号竪穴住居跡を壊している。東辺と北辺、 南辺の一部のみ検出された。西側は調査区域外に 延びる。平面形の詳細は不明であるが、方形に近 い形状と推定される。

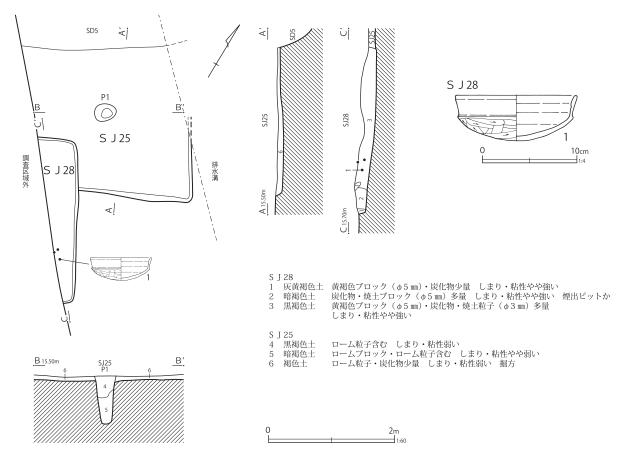
検出された範囲での規模は、長軸長2.60m、短軸長0.57m、深さ0.25mである。長軸方位はN-30°-Wを指す。

遺物は土師器の蓋模倣坏が1点出土している。 時期は第28号竪穴住居跡が6世紀後半頃で第25号 竪穴住居跡がそれ以前となる。

B 区第26号竪穴住居跡 (第119図)

B区の第26号竪穴住居跡は $O \cdot P - 19$ グリッド、B2区のほぼ中央に位置する。

第5号井戸跡に壊されている。北辺、東辺の一部を検出した。南辺は第5号井戸跡と排水用に設置した釜場によって壊されている。西側は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長



第118図 B区第25・28号竪穴住居跡・出土遺物

第53表 B区第28号竪穴住居跡出土遺物観察表(第118図)

番	号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
	1	土師器	坏	12.7	4.7	_	AIK	60	良好	にぶい褐	No. 1 蓋模倣坏		

3.20m、短軸長2.33m、深さ0.12mである。主軸方位は $N-43^{\circ}-W$ を指す。

カマドは北辺に設置され、規模は長さ0.90m、幅0.50m、深さ0.28mである。燃焼部がやや外側に位置する。

遺物は土師器が出土している。第120図 1 は坏である。カマドから出土している。口縁部が垂直に立ち上がり口径がやや小さい。 2~5 は甕である。いずれもカマドから出土している。胴部が張る球胴甕である。

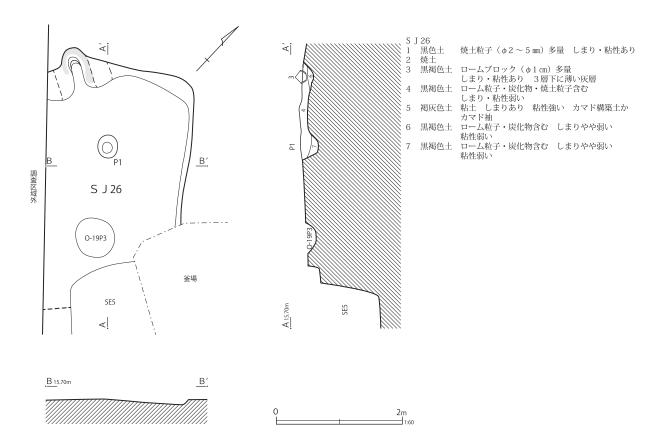
(2) 井戸跡

B区において井戸跡は10基検出され、このうち 古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる井戸跡は9 基検出された。安全対策のため、1・3・7・ 11・12は底面まで掘り下げなかった。

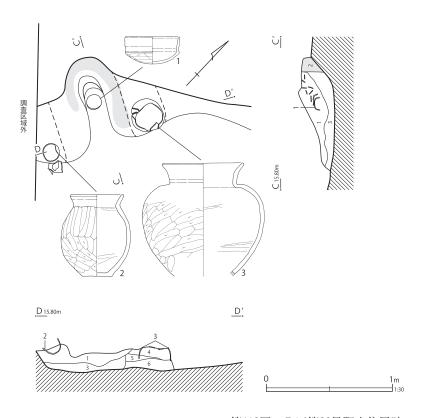
第56表に検出グリッド、平面形、規模、深さを示した。以下にそれぞれの井戸跡の特徴、重複関係、出土遺物について記す。

B 区第 1 号井戸跡 (第121図)

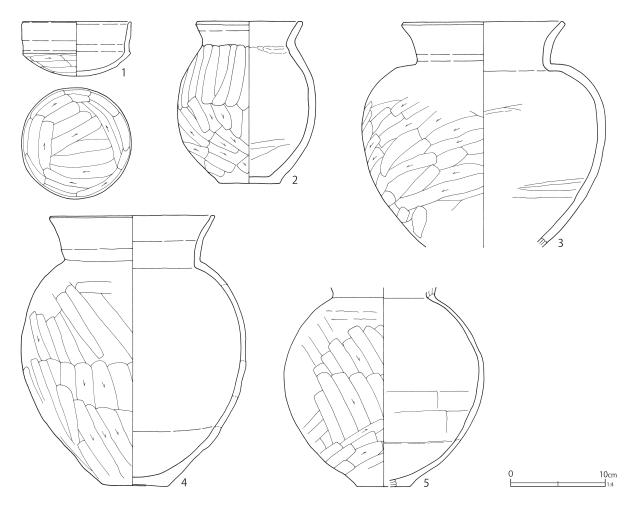
B2区南東側に位置する。第14号竪穴住居跡と 第25号竪穴住居跡に挟まれた空閑地に所在し、 ピットを一部壊している。平面形は楕円形に近 く、漏斗状の断面形状を呈する。遺物は、第1層 を中心に土師器甑の破片が散在した状態で出土し た。時期は古墳時代後期に位置付けられると思わ れる。



SJ26 カマド



第119図 B区第26号竪穴住居跡



第120図 B区第26号竪穴住居跡出土遺物

第54表 B区第26号竪穴住居跡出土遺物観察表(第120図)

種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
土師器	坏	11.4	5.7	_	BHIK	95	良好	明赤褐	カマド・No. 1 蓋模倣坏	109-2
土師器	甕	(10.8)	17.1	6.5	IK	60	普通	にぶい赤褐	カマド袖・No. 2	109-2
土師器	甕	(16.6)	[23.7]	_	CIK	60	普通	にぶい橙	カマド袖・No.3	109-2
土師器	甕	17.0	28.3	6.9	IK	80	普通	にぶい黄橙	カマド	109-2
土師器	甕	_	[21.0]	(5.6)	CHI	20	良好	橙	カマド	
	土師器 土師器 土師器 土師器	土師器 坏 土師器 甕 土師器 甕 土師器 甕	土師器 坏 11.4 土師器 甕 (10.8) 土師器 甕 (16.6) 土師器 甕 17.0	土師器 坏 11.4 5.7 土師器 甕 (10.8) 17.1 土師器 甕 (16.6) [23.7] 土師器 甕 17.0 28.3	土師器 坏 11.4 5.7 — 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 土師器 甕 (16.6) [23.7] — 土師器 甕 17.0 28.3 6.9	土師器 坏 11.4 5.7 — BHIK 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 IK 土師器 甕 (16.6) [23.7] — CIK 土師器 甕 17.0 28.3 6.9 IK	土師器 坏 11.4 5.7 — BHIK 95 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 IK 60 土師器 甕 (16.6) [23.7] — CIK 60 土師器 甕 17.0 28.3 6.9 IK 80	土師器 坏 11.4 5.7 — BHIK 95 良好 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 IK 60 普通 土師器 甕 (16.6) [23.7] — CIK 60 普通 土師器 甕 17.0 28.3 6.9 IK 80 普通	土師器 坏 11.4 5.7 - BHIK 95 良好 明赤褐 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 IK 60 普通 にぶい赤褐 土師器 甕 (16.6) [23.7] - CIK 60 普通 にぶい橙 土師器 甕 17.0 28.3 6.9 IK 80 普通 にぶい黄橙	土師器 坏 11.4 5.7 - BHIK 95 良好 明赤褐 カマド・№ 1 蓋模倣坏 土師器 甕 (10.8) 17.1 6.5 IK 60 普通 にぶい赤褐 カマド袖・№ 2 土師器 甕 (16.6) [23.7] - CIK 60 普通 にぶい橙 カマド袖・№ 3 土師器 甕 17.0 28.3 6.9 IK 80 普通 にぶい黄橙 カマド

B 区第 3 号井戸跡 (第121図)

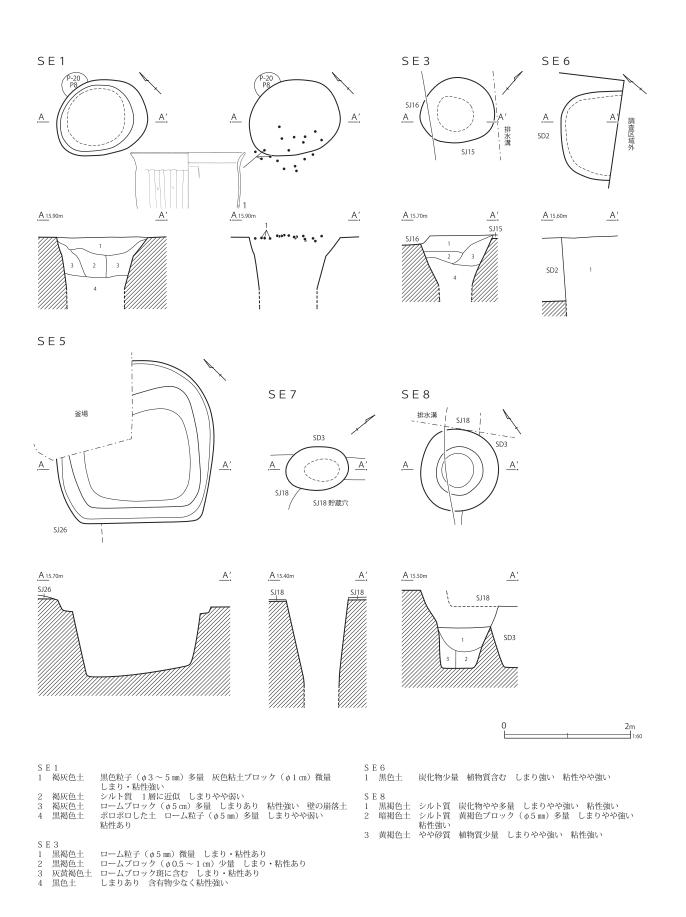
B2区南東端に位置し、第15号竪穴住居跡を壊し、第16号竪穴住居跡に壊されている。平面形は直径1m前後の楕円形で、漏斗状の断面形状を呈する。遺物は図示できるものはない。

B 区第 5 号井戸跡 (第121図)

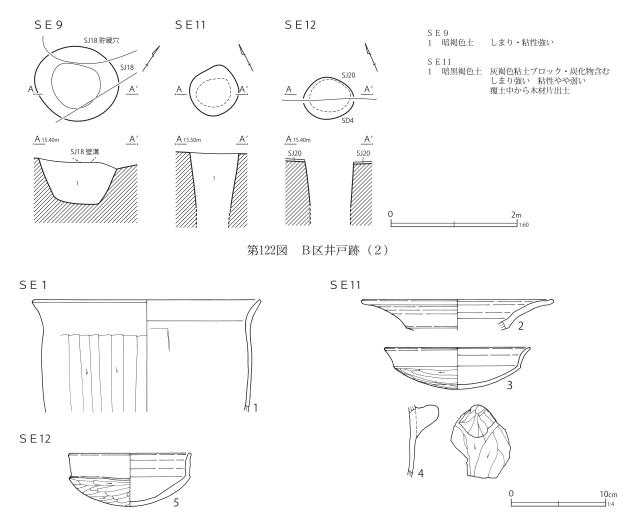
B2区の中央部に位置し、北西側に第26号竪穴 住居跡が重複している。平面形は2.5m前後の矩 形を呈する。断面形は浅く掘り込んだ中をほぼ垂 直に掘削する有段タイプである。遺物は図示でき るものはない。

B区第6号井戸跡(第121図)

B4区南東端に位置する。東半分は調査区域外にかかる。第2号溝跡が埋没した後に、埋土を掘り込んでいる。平面形は矩形に近く、ほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は黒色土の単一層で、一気



第121図 B区井戸跡(1)



第123図 B区井戸跡出土遺物

第55表 B区井戸跡出土遺物観察表(第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甑	(23.8)	[11.8]	_	ACI	20	普通	にぶい褐	SE 1 No. 3・4・11 石英多量	
2	土師器	高坏	(19.7)	[3.2]	_	CHIK	10	良好	にぶい橙	SE11フク土	
3	土師器	坏	15.2	4.3	_	CHIK	55	普通	にぶい赤褐	SE11フク土 蓋模倣坏	110-1
4	土師器	魱	_	[7.7]	_	EIK	5	普通	灰白	SE11フク土	110-1
5	土師器	坏	12.6	5.5	_	CEHIK	70	普通	にぶい橙	SE12フク土	110-1

に埋没したことが分かる。遺物は図示できるもの はない。

B区第7号井戸跡(第121図)

B3区南東部に位置する。第18号竪穴住居跡を切り、これより新しい。第3号溝跡の肩部に接するように掘り込まれている。平面形は直径1m前後の楕円形で、下に向かって先細りとなる断面形状である。遺物は図示できるものはない。

B区第8号井戸跡(第121図)

B3区東南部に位置する。第3号溝跡の肩部に 斜めに対峙するように第8号井戸跡が掘削されて いる。重複関係は、第3号溝跡が埋没した後に掘 り込み、第18号竪穴住居跡に壊されている。

平面形は、直径1.3m前後の円形を呈する。断面形状は逆台形に掘り込んでいる。遺物は図示できるものはない。

第56表 B区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複	遺構
1	P-20	楕円形	上1.42 下0.91	上1.18 下0.80	[1.50]	P-20P8	7	Y-28	楕円形	上1.00 下0.51	上0.70 下0.36	[1.60]	SJ18	SD3
2			2	火番			8	X • Y-28	円形	上1.31 下0.63	上1.23 下0.55	[1.38]	SJ18	SD3
3	R-21	楕円形	上1.15 下0.58	上1.03 下0.55	[0.60]	SJ15 SJ16	9	Y-28	略円形	上1.35 下0.69	上1.20 下0.70	[0.88]	SJ18	
5	O•P-19	矩形	上2.57 下1.68	上2.49 下1.37	[1.30]	SJ26	11	Y-28	円形	上0.82 下0.48	上0.76 下0.45	[0.70]		
6	AA-31	矩形	上(1.42)	下(1.25)	[1.00]	SD2	12	Y-28•29	楕円形	上0.71 下0.64	上0.67 下0.55	[0.75]	SJ20	SD4

B区第9号井戸跡 (第122図)

B3区東南部に位置する。第18号竪穴住居跡に壊されている。平面形は直径1.35mの略円形を呈し、断面形状は逆台形に掘り込まれている。覆土は暗褐色土の単一層である。遺物は図示できるものはない。

B 区第11号井戸跡 (第122図)

B3区南東部に位置し、第18号竪穴住居跡と第20号竪穴住居跡に挟まれている。平面形は、直径0.80m前後の円形で、下に向かって先細りとなる円錐形に近い断面形状である。覆土は、暗黒褐色土の単一層である。土師器高坏・坏・甑とともに木材片などが出土した。

B 区第12号井戸跡 (第122図)

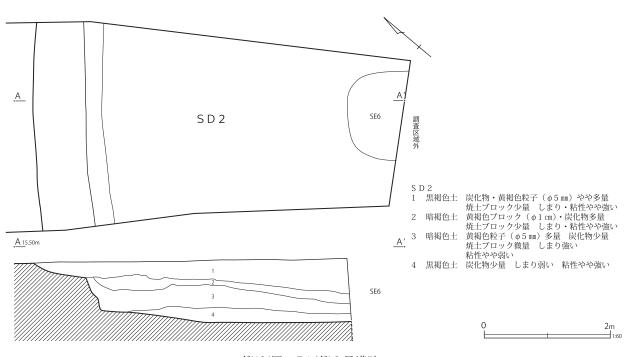
B3区の東南端部に位置する第20号竪穴住居跡の内部に重複し、南半分を第4号溝跡によって壊される。平面形は、直径0.70m前後の楕円形と推定される。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。遺物は典型的な模倣坏が出土した。

(3)溝跡

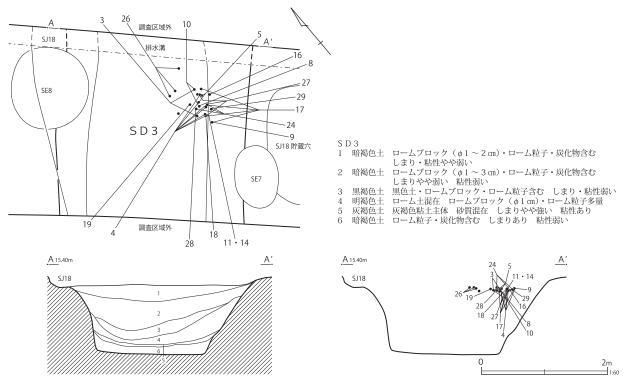
B区において古墳時代・飛鳥時代に位置付けられる溝跡は2条検出された。

B 区第 2 号溝跡 (第124図)

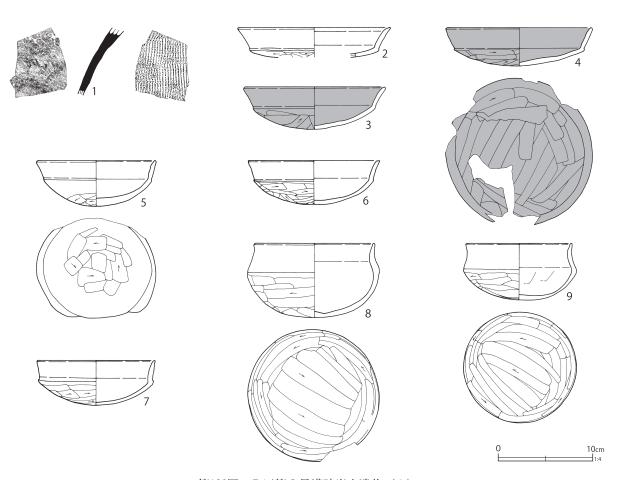
B区の第2号溝跡は調査区の南端B4区のAA-30・31グリッドに位置する。重複する第6号井戸跡に壊されている。南西から北東へ延び、走行



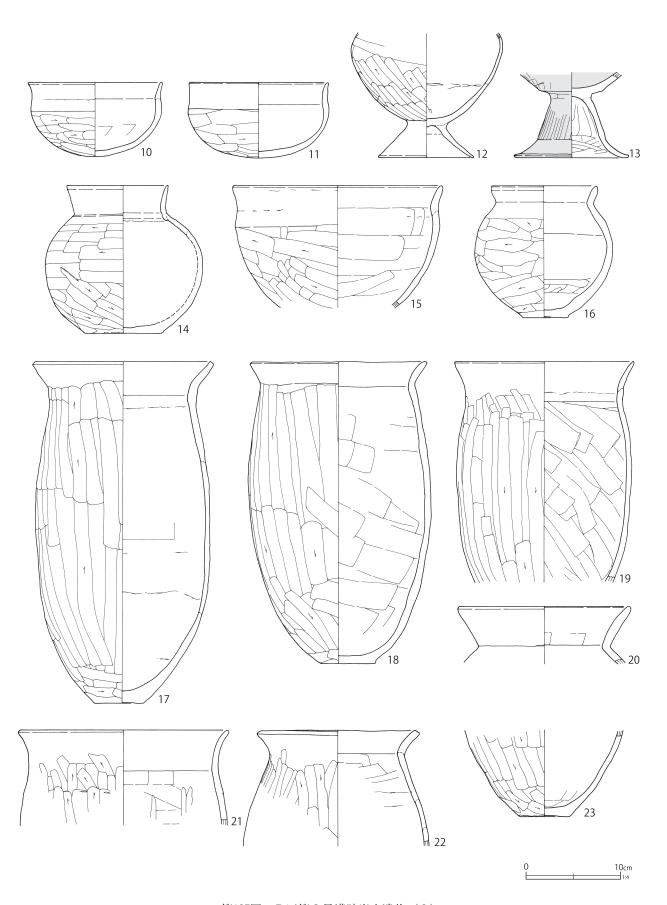
第124図 B区第2号溝跡



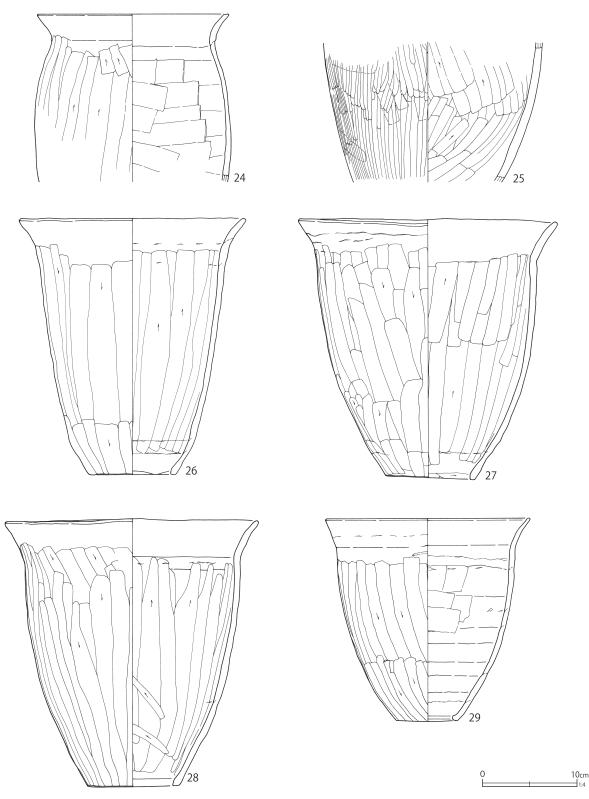
第125図 B区第3号溝跡



第126図 B区第3号溝跡出土遺物(1)



第127図 B区第3号溝跡出土遺物(2)



第128回 B区第3号溝跡出土遺物(3)

方位はN−50°−Eを指す。両端及び南東側は調査区域外へ延びる。

検出された長さ3.50m、幅5.00m、深さ1.00m

である。上端から0.30mほど中心側へ進んだ地点で中端がみられ、0.80mほど落ち込み下端となる。遺物は出土していない。

第57表 B区第3号溝跡出土遺物観察表(第126~128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[7.0]	_	IK	5	良好	黄灰	外面平行叩き	
2	土師器	坏	(15.9)	[3.1]	_	CEIK	20	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	14.7	4.4	_	CHIK	80	普通	灰褐	SJ18 a・b・No.92・98 蓋模倣坏 黒色処理	110-2
4	土師器	坏	15.0	4.0	_	EIK	80	普通	にぶい赤褐	SJ18·SJ18No85·99·100·101·102·103 蓋模 倣坏 内外面黑色処理	110-2
5	土師器	坏	12.3	4.8	_	CHIK	85	普通	明赤褐	SJ18No.76·100 蓋模倣坏	110-2
6	土師器	坏	(13.8)	4.5	_	CHIK	45	普通	にぶい褐		
7	土師器	坏	12.2	4.7	_	HIK	75	普通	橙		110-2
8	土師器	埦	12.6	7.8	_	CEHIK	90	普通	橙	SJ18·SJ18 a ·No.52·90·97	110-2
9	土師器	埦	10.9	6.0	_	CEHIK	95	普通	橙	SJ18No.88	110-2
10	土師器	埦	14.0	7.7	_	CHIK	70	普通	橙	SJ18 • No.50 • 92 • 97 • Y-29	110-2
11	土師器	埦	(14.5)	7.9	_	CEHIK	45	普通	橙	SJ18No.78·85 外面煤	
12	土師器	台付甕	_	[13.0]	(10.0)	CHIK	50	普通	褐灰		
13	土師器	高坏	_	[9.0]	(11.4)	HIK	30	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩	110-2
14	土師器	壺	(10.5)	15.5	8.0	CEGHI	90	普通	橙	No.85 底部ヘラケズリ	110-3
15	土師器	鉢	(21.6)	[12.8]	_	ВСЕНІК	30	普通	明赤褐	No.50 • 63 • 68 • 105	
16	土師器	甕	11.0	13.8	4.7	CHIK	100	普通	にぶい橙	SJ18No.80	110-3
17	土師器	甕	(18.4)	35.7	5.2	BCEIK	55	普通	にぶい赤褐	SJ18 a · No. 2 · 4 · 5 · 46 · 48 · 51 · 56 · 59 · 73 · 87 · 88 · 91 · 99 · 102 · Y – 29	110-3
18	土師器	甕	18.0	31.5	5.7	CEHIK	70	普通	にぶい褐	SJ18a · b · No.43 · 48 · 54 · 70 · 99 · Y - 29	110-3
19	土師器	甕	(18.6)	[23.1]	_	CEHI	30	良好	明褐	No.33 • 56 • 82 • Y-29	
20	土師器	甕	(17.8)	[6.0]	_	ВСЕНІК	10	普通	にぶい橙		
21	土師器	甑	(21.8)	[10.0]	_	CIK	5	普通	橙		
22	土師器	甕	16.3	[12.1]	_	BEHIK	25	普通	にぶい赤褐		
23	土師器	甕	_	[9.0]	5.3	BIK	20	普通	にぶい赤褐		
24	土師器	甕	20.0	[17.5]	_	CDEGHIK	40	普通	にぶい黄橙	a ·No.62 ·83 ·89 ·90 ·102	
25	土師器	甕	_	[14.6]	_	IK	30	普通	にぶい黄橙		
26	土師器	甑	(13.5)	26.7	(9.1)	CEHIK	25	普通	橙	SJ18 a •No.94•95•106•108	111-4
27	土師器	甑	26.8	27.0	(9.4)	CEHIK	70	普通	橙	SJ18 a · No.49 · 56 · 59 · 65 · 66 · 93 · 99 · 101 · 102 · 104 · Y – 29	111-4
28	土師器	甑	26.4	28.1	9.6	CHIK	85	普通	橙	SJ18 a •No.48•49•56•58•65•66•83•Y-29	111-4
29	土師器	魱	21.4	21.2	6.4	CHIK	95	良好	明黄褐	SJ18·SJ18No.79·89·90·93	111-4

第58表 B区溝跡一覧表

No.	ゲリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)	深さ	(m)	重複遺構
IVO.	999F	77114	刀亚	Re(III)	最大	最小	最大	最小	里 後 退 円
2	AA-30·31	N-50° -E	_	3.50	(5.00)	(4.60)	1.00	_	SE6
3	X•Y-28	N-44° -E	_	2.80	3.10	2.92	1.10	_	SJ18 SE7 SE8

B 区第 3 号溝跡 (第125図)

B区の第3号溝跡は、B3区南端X・Y-28グリッドに位置する。重複する第18号竪穴住居跡、第7・8号井戸跡に壊されている。両側は、調査区域外に延びる。

遺物は土師器を中心に多量に出土している。出土地点の多くが、東側の上層から中層にかけてであり、溝跡が埋没の過程で流れ込んだか、上面につくられた第18号竪穴住居跡に伴うものが混入した可能性がある。

3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

B区において検出された奈良時代・平安時代の 遺構数は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、 井戸跡1基、溝跡3条、土壙4基が検出されてい る。

調査区の北西側からは竪穴住居跡は1軒検出されているが、他の遺構は調査区域内の中央から南東側に多く分布する傾向にある。

(1) 竪穴住居跡

B区第3号竪穴住居跡(第129図)

B区の第3号竪穴住居跡は $T \cdot U - 24$ グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複するT - 24 P1 に壊されている。西側は調査区域外へと延びる。

覆土はロームブロック、炭化物を含む黒褐色土を主体とする。平面形は横長の隅丸方形になるとみられる。規模は長軸長2.55m、検出された短軸長は2.40m、深さ0.40mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

カマドは北辺に設置され、長さ1.50m、幅0.76m、深さ0.50mである。燃焼部が竪穴住居跡の外側へ張り出している。壁溝は南辺で検出された。幅0.25m、深さ0.05~0.07mである。貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第130 図1と2は須恵器の坏である。それぞれ口縁部と 底部であるが、同一個体とみられるが接合はしな い。口縁端部が玉縁となる。底部は右回転糸切り 無調整である。焼成は良くない。産地は末野窯の 製品とみられる。3は須恵器の高台付埦である。 底部は右回転糸切り後高台が貼り付けられる。破 片の一部がカマドから出土している。産地は末野 窯の製品とみられる。4は須恵器の壺底部であ る。外面にわずかに自然釉がかかる。

5は土師器の黒色土器である。内面に横方向の ミガキが口縁部付近まで施されている。外面下半 及び底部にヘラケズリがみられる。6と7は土師 器の甕である。口縁部が「コ」の字型を呈する北 武蔵型甕である。時期は9世紀後半頃に位置付け られる。

B区第4号竪穴住居跡(第131図)

B区の第4号竪穴住居跡はU-25グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。他遺構との重複はない。南辺と東辺、西辺の一部のみ検出された。北側は調査区域外へ延びる。平面形は検出範囲からは判然としない。

規模は検出された範囲で長軸長2.70m、短軸長は1.05m、深さ0.45mである。長軸方位はN-45°-Wを指す。

壁溝は南辺中央から西辺にかけてと、東辺に沿って検出された。幅0.20~0.60m、深さ0.05~0.08mである。カマド、貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。

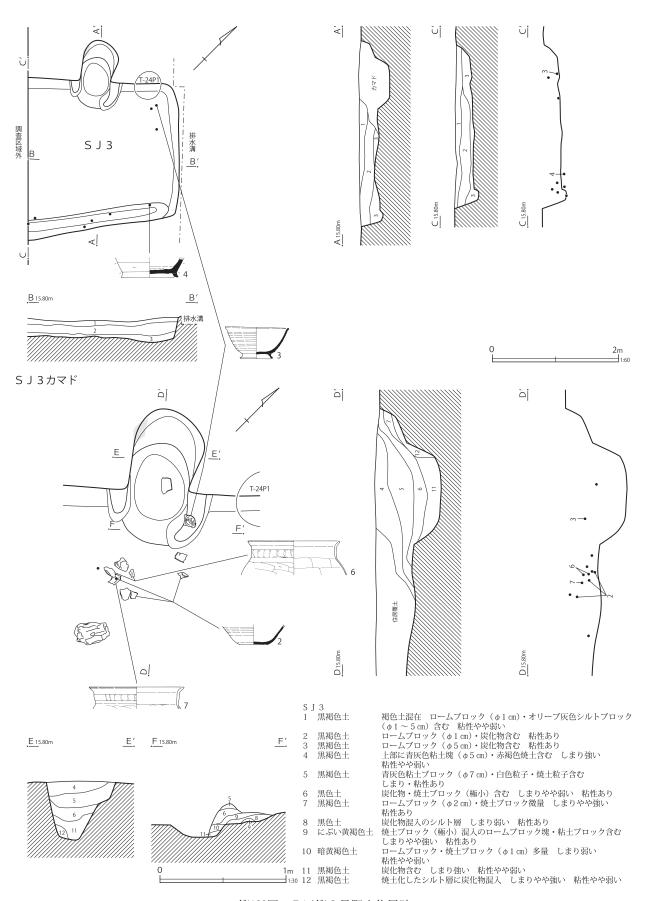
遺物は須恵器と土師器が出土している。第131 図1は須恵器の蓋である。つまみ部分のみ残存し ている。焼成が甘く赤焼けである。2は坏の底部 である。底部回転糸切り無調整である。胎土に白 色針状物質を多量に含む。南比企窯の製品であ る。3は須恵器甕の底部片である。外面に平行夕 タキ痕が多方向から叩かれた痕が残り、内面無文 アテ具痕がみられる。

4は土師器甕の口縁部片である。口縁部が「コ」の字型を呈する北武蔵型甕である。時期は 9世紀後半頃に位置付けられる。

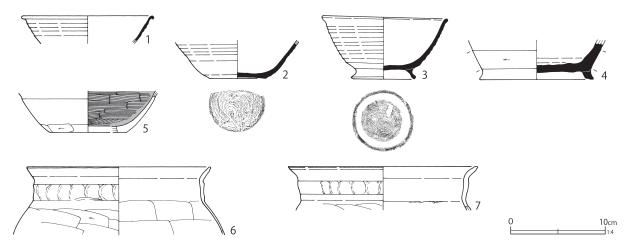
B区第7号竪穴住居跡(第132図)

B区の第7号竪穴住居跡はV-25・26グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複する第6・17号竪穴住居跡を壊し、V-26P1に壊されている。北東コーナー部分と南側は調査区域外へ延びる。平面形は検出された範囲から推定すると隅丸方形とみられる。

規模は検出された範囲で長軸長5.15m、短軸長2.50m、深さ0.10mである。長軸方位はN-80°-



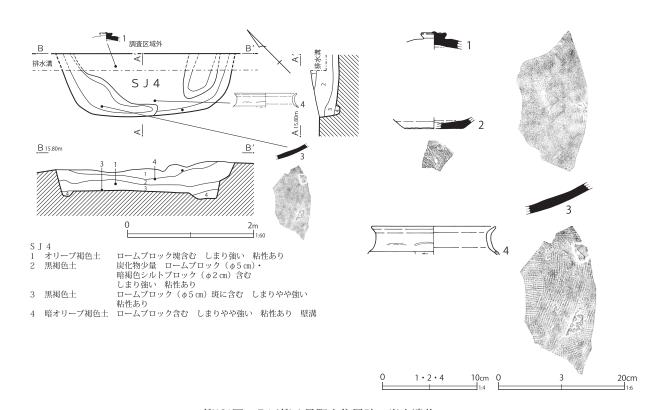
第129図 B区第3号竪穴住居跡



第130回 B区第3号竪穴住居跡出土遺物

第59表 B区第3号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第130図)

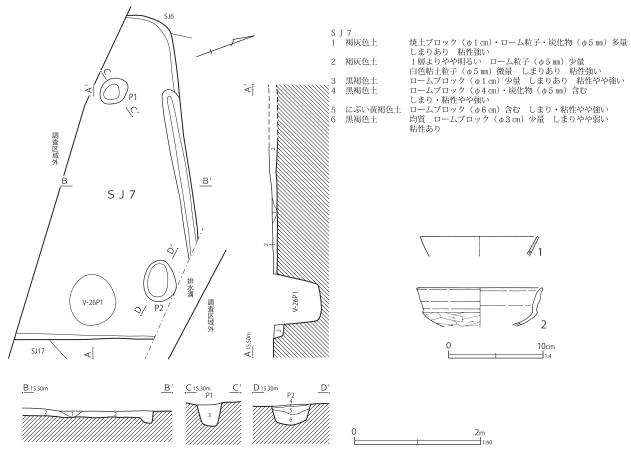
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.7)	[2.9]	_	AEH	20	不良	黄褐	a·b 末野窯産	
2	須恵器	坏	_	[4.0]	6.0	EG	40	不良	灰褐	カマドNo.4・8・11 底部回転糸切り	111-5
3	須恵器	高台付埦	13.1	6.5	6.4	BEI	70	良好	灰	a・カマド・No.1・2 末野窯産 底部回転 糸切り	111-5
4	須恵器	壺	_	[4.2]	(11.9)	EIK	5	良好	灰	No. 4	111-5
5	土師器	坏	_	[4.4]	(8.0)	AI	20	普通	褐灰	黒色土器 ミガキ後黒色処理	
6	土師器	甕	(19.2)	[7.1]	_	CHI	10	良好	にぶい赤褐	b・カマドNo.7・9 北武蔵型甕	
7	土師器	甕	(19.8)	[4.5]	_	AHI	10	良好	にぶい赤褐	カマドNo.10 北武蔵型甕	
1	I	I	1	1	1	1	1	1	1	I .	1 1



第131図 B区第4号竪穴住居跡・出土遺物

第60表 B区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	_	[1.8]	_	IJ	10	普通	にぶい橙	No. 2	111-3
2	須恵器	坏	_	[1.2]	(6.0)	IJ	10	良好	灰	d 南比企窯産 底部回転糸切り	111-3
3	須恵器	甕	_	[4.9]	_	EIK	20	良好	灰	No.1 外面平行叩き 内面無文当て具 内底面自然釉 丸底大甕底部破片	
4	土師器	台付甕	(13.0)	[3.0]	_	ACK	10	良好	にぶい褐	No. 3 北武蔵型甕	



第132図 B区第7号竪穴住居跡·出土遺物

第61表 B区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表(第132図)

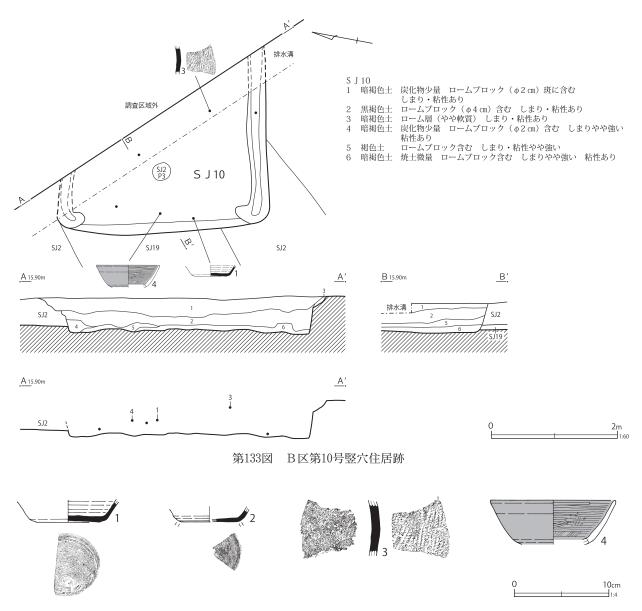
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	緑釉陶器	埦	(12.2)	[2.0]	_	I	10	良好	灰黄	K-90号窯式 猿投窯産	
2	土師器	坏	(13.0)	[4.0]	_	GHIK	20	良好	にぶい赤褐	a 蓋模倣坏	

Wを指す。覆土の残存状況は良くなく、上層は削 平されている。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。主柱穴は 2基検出された。壁溝は北辺の北西コーナーを除 いた部分から検出された。幅0.20~0.30m、深さ 0.02~0.10mである。

遺物は緑釉陶器と土師器が出土している。第

132図1は緑釉陶器の境で口縁部の破片である。 内外面に施釉され、淡緑色に発色する。猿投窯産で9世紀後半頃とみられる。2は土師器の蓋模倣坏である。緑釉陶器と土師器で時期に齟齬があるが、第6・17号竪穴住居跡より新しいことから、破片だが緑釉陶器の時期に機能していた竪穴住居跡と推定される。



第134図 B区第10号竪穴住居跡出土遺物

第62表 B区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表(第134図)

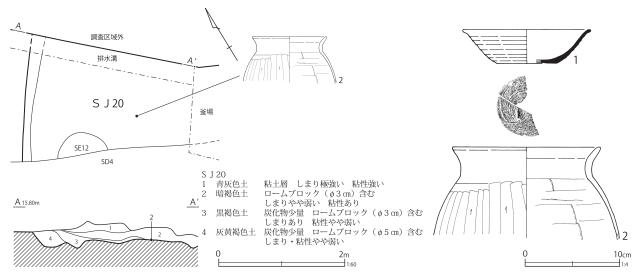
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	_	[2.3]	6.6	AEI	40	良好	灰	No.3 末野窯産 底部回転糸切り	112-1
2	須恵器	坏	_	[1.6]	(6.0)	IJ	20	良好	灰	a 南比企窯産 底部糸切り外周ヘラケ ズリ	
3	須恵器	甕	_	[5.8]	-	AIK	5	普通	灰白	No.5 外面縄叩き 内面無文当て具	
4	土師器	坏	(13.0)	[4.6]	-	CI	20	普通	黒褐	No.2 黒色土器 内面ミガキ内外面黒色 処理	112-1

B区第10号竪穴住居跡 (第133図)

B区の第10号竪穴住居跡はT-24グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複する第2・19号竪穴住居跡を壊している。

西辺、南辺の一部と北西コーナー部を検出したが、北辺、東辺は調査区域外に延びる。平面形は 検出された範囲から隅丸方形とみられる。

規模は検出された範囲で長軸長3.35m、短軸長



第135図 B区第20号竪穴住居跡・出土遺物

第63表 B区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表(第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		
1	須恵器	坏	(13.4)	3.6	6.3	ABK	40	普通	灰	末野窯産	底部回転糸切り	112-2
2	土師器	甕	15.6	[9.7]	_	AI	30	普通	にぶい橙	No. 1		112-2

2.75m、深さ0.60mである。長軸方位はN-12°-Wを指す。壁溝は南辺と北西コーナー部のみ検出された。幅0.22~0.30mである。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第134 図1と2は須恵器の坏である。1は底部右回転糸 切り無調整、2は底部回転糸切り後外周ヘラケズ リがみられる。3は須恵器の甕である。4は土師 器の黒色土器である。内面口縁部付近まで横方向 にミガキが施されている。時期は8世紀後半から 9世紀初頭頃とみられる。

B 区第20号竪穴住居跡 (第135図)

B区の第20号竪穴住居跡はY-28・29グリッド、調査区の南側、B3区の南側に位置する。 重複する第12号井戸跡と第4号溝跡に壊されている。

西辺の一部のみ検出され、北側は調査区域外に 延び、南側は第4号溝跡に壊され、東側は排水用 釜場で壊されている。検出された範囲での規模 は長軸長2.60m、短軸長2.00m、深さ0.32mであ る。長軸方位はN-57°-Wを指す。カマド、主 柱穴、壁溝は検出されなかった。残存状況が悪く 上層は削平されている。

遺物は須恵器坏と土師器甕が出土している。時期は9世紀後半頃とみられる。

B区第21号竪穴住居跡 (第136図)

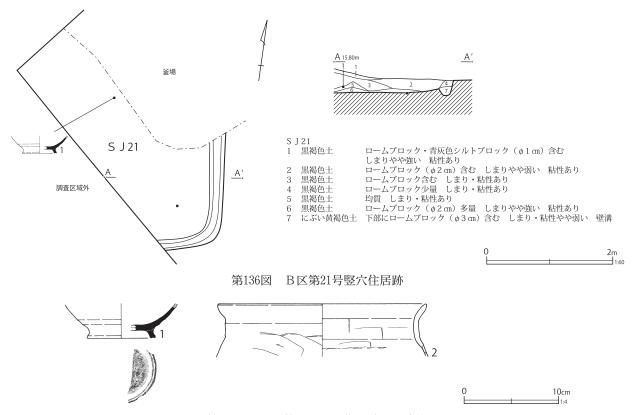
B区の第21号竪穴住居跡はS-22・23グリッド、調査区の中央付近、B3区に位置する。重複する遺構はないが、北東側を排水用釜場に壊され、東辺と南辺の一部のみを検出した。検出された規模は長軸長2.25m、短軸長1.60m、深さ0.35mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。

壁溝は東辺、南辺から検出され、幅0.15~0.24m、深さ0.10mである。カマド、主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は須恵器と土師器が出土している。第137 図1は高台付坏である。底部に回転糸切り痕がみ られる。2は土師器甕の口縁部片である。時期は 9世紀後半とみられる。

B区第27号竪穴住居跡(第138図)

B区の第27号竪穴住居跡はN-17グリッド、調



第137図 B区第21号竪穴住居跡出土遺物

第64表 B区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表(第137図)

番	号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考			図版
	1	須恵器	高台付坏	_	[3.6]	(7.0)	AIK	20	普通	灰	No. 2	末野窯産	底部回転糸切り	
4	2	土師器	甕	(21.8)	[5.5]	_	CI	5	良好	にぶい橙	S-23	北武蔵型甕	Series Series	

査区北側、B 2 区に位置する。重複する遺構はない。東辺と北辺の一部を検出した。南辺、西辺は調査区域外に延びる。検出された範囲での規模は長軸長2.85m、短軸長2.00m、深さ0.40mである。長軸方位はN-13°-Wを指す。壁溝は東辺、北辺で一部が検出された。規模は幅0.19~0.22m、深さ0.04~0.05mである。カマド、貯蔵穴、主柱穴は検出されなかった。

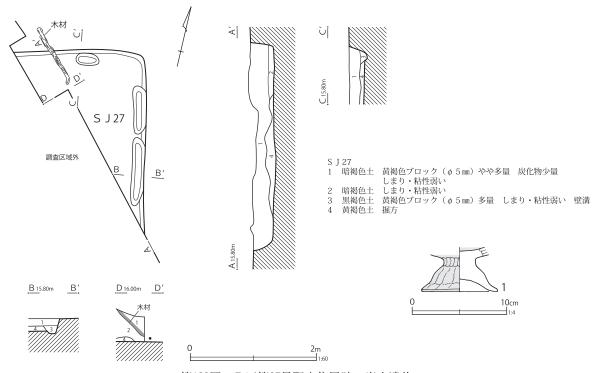
遺物は土師器の高坏脚部が1点出土しているが、混入したものとみられる。第27号竪穴住居跡からは木材が出土している。樹種はケヤキである。この木材はL字状で一辺は床面直上でもう一辺が斜めに第2層上層にかかっていた。屋根材などの建築部材であった可能性がある。この木材は放射性炭素年代測定を実施している。その結果、

暦年代は8世紀後半から10世紀中頃までに収まる との結果が得られた。詳細は「Ⅷ 自然科学分析」を参照のこと。

B 区第29·30号竪穴住居跡 (第139図)

B区の第29号竪穴住居跡はAA-30グリッド、調査区南端のB4区に位置する。重複するAA-30P2に北東コーナー部分を壊され、西側を第30号竪穴住居跡に壊されている。南側は調査区域外へと延びる。検出された範囲での規模は長軸長2.45m、短軸長2.10m、深さ0.24mである。長軸方位は $N-30^\circ-E$ を指す。壁溝は東辺、北辺で検出された。幅 $0.17\sim0.26$ m、深さ $0.03\sim0.12$ mである。

B区の第30号竪穴住居跡はZ・AA −30グリッド、調査区南端のB4区に位置する。重複する第



第138図 B区第27号竪穴住居跡・出土遺物

第65表 B区第27号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	_	[4.6]	(8.0)	ACHI	30	良好	赤褐	赤彩	

29号竪穴住居跡とAA-30P3を壊し、第7号溝跡に壊されている。検出された範囲での規模 は長軸長3.87m、短軸長3.29m、深さ0.60mであ る。長軸方位はN-45° -Wを指す。カマド、主 柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は第30号竪穴住居跡からのみ出土している。第140図 $1 \sim 4$ は須恵器の坏で 1 は底部回転糸切り、 $2 \geq 3$ は底部回転糸切り後外周へラケズリがみられる。5 は土師器の坏である。底部手持ちヘラケズリで、やや煤けている。底部に「善」と書かれた墨書土器である。

時期は8世紀中頃~後半頃とみられる。

(2) 掘立柱建物跡

B区第1号掘立柱建物跡(第141図)

B区の第1号掘立柱建物跡はX-27グリッド、調査区南寄り、B3区に位置する。

重複する第8・9号竪穴住居跡を壊している。 柱列は西側の調査区域外に延びているとみられ る。建物形態は三間×二間以上で桁行4.80m、梁 行1.50m以上の建物である。主軸方位はN-42° -Wを指す。柱穴は5基検出され、全てで柱痕跡 を確認した。

(3) 井戸跡

B 区第 4 号井戸跡 (第142図)

B区の第4号井戸跡はR-22グリッド、調査区の中央付近、B2区に位置する。平面形は円形で深さ0.65mでは底面に到達していない。

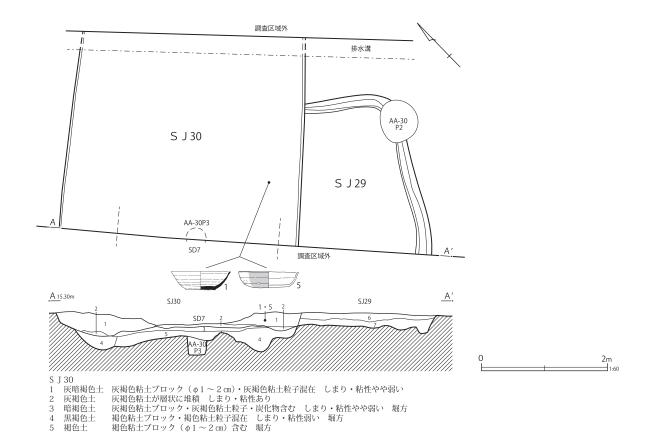
遺物は須恵器坏と土師器が出土している。土師器はいずれも古墳時代のものとみられるが、須恵器は底部回転糸切りの製品であり、9世紀代の製品とみられる。

(4) 溝跡

B 区第 4 号溝跡 (第143図)

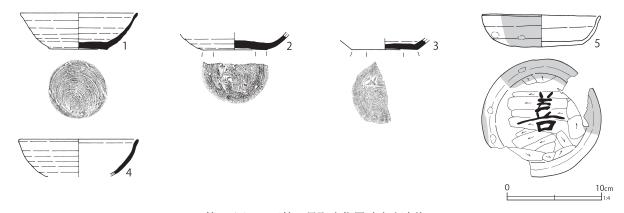
B区の第4号溝跡は調査区南端で検出した。北 西から南東に走り、両側は調査区域外に延びる。

遺物は底部回転糸切りの須恵器坏や土師器の坏



第139図 B区第29·30号竪穴住居跡

灰褐色粘土ブロック・ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い ローム粒子・粘土粒子含む 炭化物混在 しまり・粘性あり

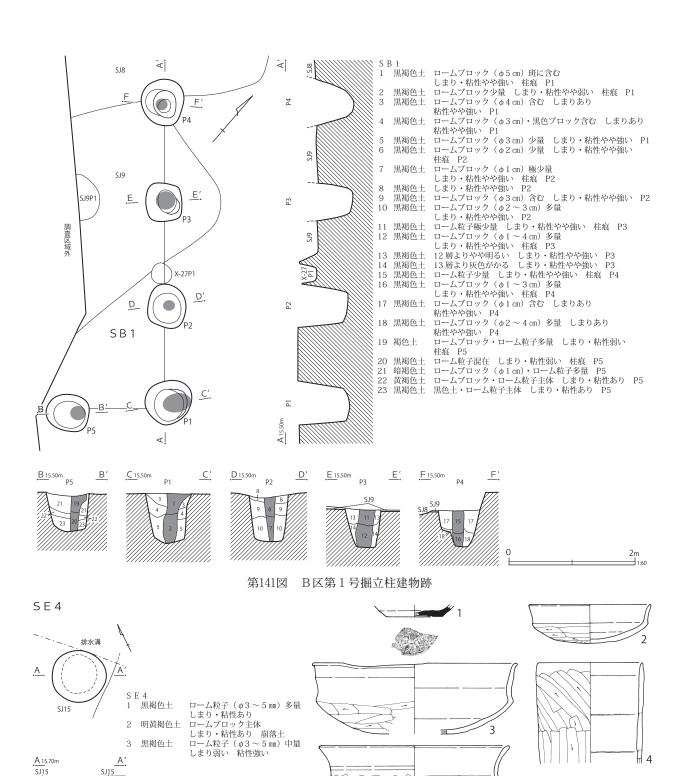


第140図 B区第30号竪穴住居跡出土遺物

第66表 B区第30号竪穴住居跡出土遺物観察表(第140図)

S J 29 6 暗褐色土 7 暗褐色土

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.2	3.8	6.1	IJ	80	良好	灰	SX 2 No. 1 南比企窯産 底部回転糸切り	112-3
2	須恵器	坏	_	[1.8]	6.7	IJ	30	良好	灰	SX2 南比企窯産 底部回転糸切り外周 ヘラケズリ	112-3
3	須恵器	坏	_	[1.2]	(6.8)	IJ	20	良好	灰	SX2 南比企窯産 底部回転糸切り外周 ヘラケズリ	
4	須恵器	坏	(12.4)	[3.9]	_	IJ	30	普通	黄灰	SX 2 南比企窯産	
5	土師器	坏	12.3	3.4	7.6	С	80	普通	にぶい褐	SX 2 No. 1 煤 墨書「善」 底部手持ちへ ラケズリ	112-3



第142図 B区第4号井戸跡・出土遺物

や甕の他に平瓦が2枚出土している。

B 区第 5 号溝跡 (第145図)

B区の第5号溝跡は調査区中央北寄りで検出さ

れた。南西から北東に走り、両側は調査区域外に 延びる。上端は大きく削平され、中端で検出され た。

10cm

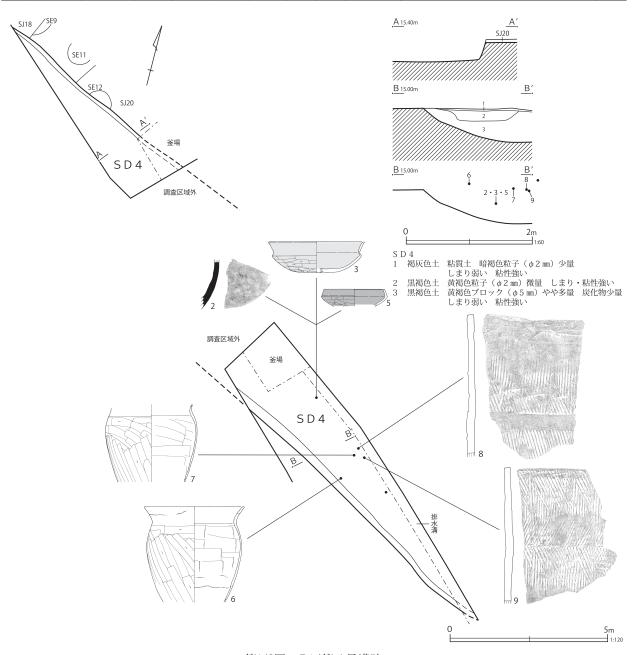
遺物は灰釉陶器の埦と須恵器の坏が出土している。第145図1の灰釉陶器埦は断面形がほぼ四角な角高台を持つ。内面に施釉はない。猿投窯の製品と思われる。

第67表 B区第4号井戸跡出土遺物観察表(第142図)

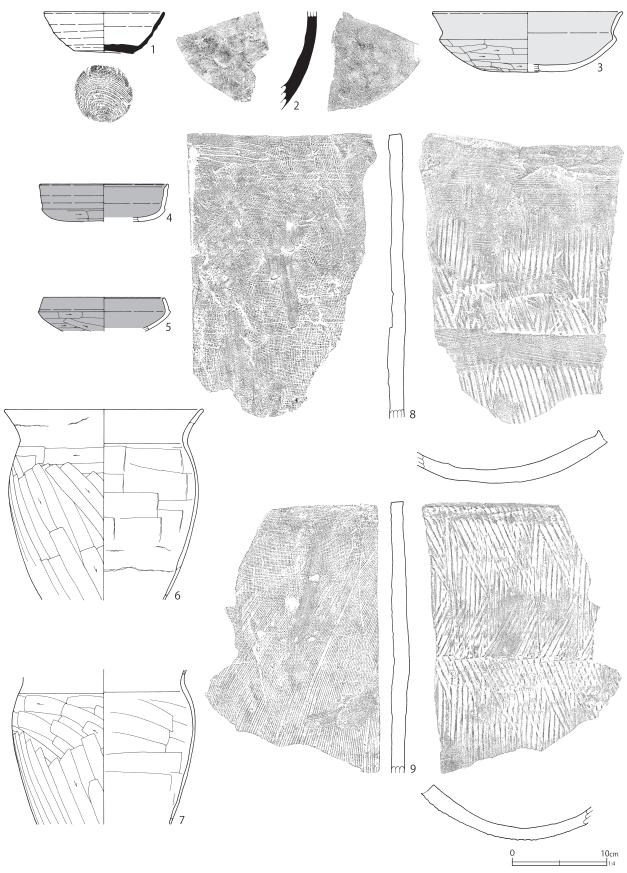
B 区第 7 号溝跡 (第146図)

B区の第7号溝跡は調査区南端で検出された。 溝の長さ、走行方位は不明である。遺物は須恵器 の壺底部が出土している。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	_	[1.2]	(5.8)	AIK	20	普通	灰	末野窯産 底部回転糸切り	113-1
2	土師器	坏	12.7	4.0	_	ACHIK	80	普通	にぶい橙	蓋模倣坏	113-1
3	土師器	坏	(21.2)	[7.4]	_	AHI	40	普通	明赤褐	蓋模倣坏	113-1
4	土師器	鉢	(11.0)	[10.6]	_	CHI	30	良好	にぶい橙	角閃石多量	113-1
5	土師器	獲	(19.8)	[6.6]	_	CGI	20	普通	にぶい橙		



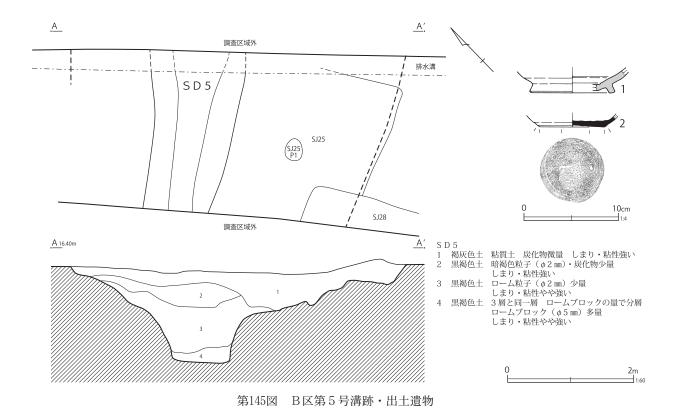
第143図 B区第4号溝跡



第144図 B区第4号溝跡出土遺物

第68表 B区第4号溝跡出土遺物観察表 (第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	12.6	4.2	6.1	EIJ	70	良好	灰	南比企窯産 底部回転糸切り	113-2
2	須恵器	甕	_	[10.3]	_	BEI	5	良好	灰	No.1 外面ロクロナデ 内面無文当て具	113-2
3	土師器	坏	(19.6)	6.4	_	HI	50	良好	赤褐	No.1 蓋模倣坏 赤彩	113-2
4	土師器	坏	(13.4)	[3.9]	_	AI	20	普通	黄灰	黒色処理	113-2
5	土師器	坏	(12.6)	[3.5]	_	IK	20	良好	黒褐	No.1 身模倣坏 黑色処理	113-2
6	土師器	甕	(20.7)	[20.1]	_	ACHIK	40	良好	橙	No.2 「く」の字状口縁甕	113-2
7	土師器	甕	_	[16.2]	_	ACI	30	良好	橙	No.5 「く」の字状口縁甕	
8	瓦	平瓦	長さ[29.7] 幅[9.8] 厚さ1.3~1.7			EGI	70	普通	にぶい橙	No. 3	113-3
9	瓦	平瓦	長さ[28.6] 幅[17.6] 厚さ1.2~1.6		EGI	70	良好	灰	No. 4	113-4	



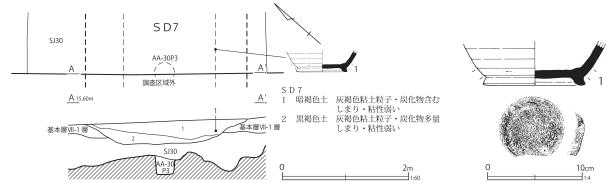
第69表 B区第5号溝跡出土遺物観察表(第145図)

1	番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	
	1	灰釉陶器	埦	_	[2.6]	(9.0)	I	5	良好	灰白	猿投窯産	
	2	須恵器	坏	_	[1.5]	6.8	ABK	20	普通	灰	底部回転糸切り外周ヘラケズリ	

(5) 土壙 (第147・149図)

土壙は5基検出された。その中で第1号土壙は 検出面が高く、奈良・平安時代ではなく、中世頃 の土壙となる。いずれの土壙も浅く、不整形のも のが多い。遺物は第2号土壙から須恵器の坏が出 土している。底部に回転ヘラケズリがみられる。 また、第3号土壙から灰釉陶器の長頸瓶口縁部片 と須恵器甕の胴部片が出土している。

他の遺物を伴わない土壙は覆土の様相の類似性 などから、奈良・平安時代の土壙と推定される。



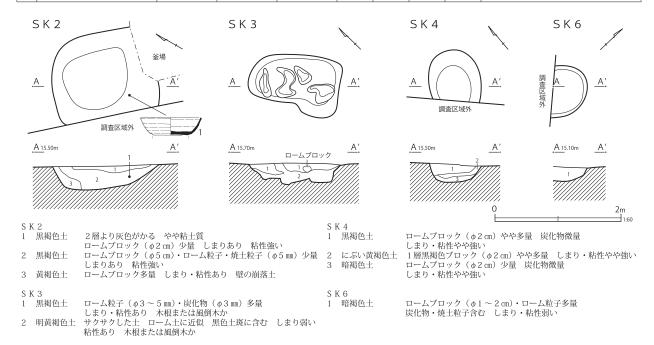
第146図 B区第7号溝跡・出土遺物

第70表 B区第7号溝跡出土遺物観察表 (第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	_	[4.6]	(10.6)	Ι	20	良好	黒灰	SX 2 No. 2 内面自然釉	

第71表 B区溝跡一覧表

No.	ゲリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)	深さ	(m)	重複遺構
INO.	/ 299F	刀业	刀业	及る(III)	最大	最小	最大	最小	里恢退牌
4	Y-28•29 Z-29•30	N-59° -W	_	24.50	(1.25)	_	0.43	_	SJ18 SJ20 SE12
5	O-19 P-19·20	N-50° -E	_	2.20	1.55	1.05	0.85	_	SJ25 SJ28
7	AA-30	-	-	-	2.58	_	0.39	_	SJ30 AA-30 P 3



第147図 B区土壙

B 区第 2 号土壙 (第147図)

B区W-26グリッドに位置する。方形の形状を有するが、一部が調査区域外へ至る。覆土にロームブロックや焼土を含む。遺物は須恵器の坏が1点出土している。底部全面へラケズリされた南比企窯の製品である。

B 区第 3 号土壙 (第147図)

B区Q-21グリッドに位置する。不整形の形状を有し、底面もがたついている。木根または風倒木痕とみられる。遺物は、灰釉陶器長頸壷の口縁部片と須恵器甕の胴部片が出土している。









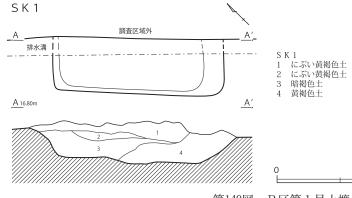
第148図 B区土壙出土遺物

第72表 B区土壙出土遺物観察表(第148図)

番片	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考			
1	須恵器	坏	(12.6)	3.5	7.4	EI	50	良好	灰	No.1 SK 2 南比企窯産 底部全面回転 ヘラケズリ			
2	灰釉陶器	長頸瓶	_	[2.0]	_		5	良好	灰白	SK 3			
3	須恵器	甕	_	[5.5]	_	Ι	5	良好	暗灰	SK3 外面平行叩き・カキ目・擬格子叩き 内面無文当て具			

第73表 B区土壙一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
2	W-26	方形	N-40° -W	1.67	[1.50]	0.42	5	欠番					
3	Q-21	不整形	N-36° -W	1.42	0.94	0.36	6	Z-30	不明	N-49° -E	(0.53)	0.81	0.23
4	N-18	楕円形	N-35° -E	[1.06]	0.82	0.30	7	欠番					



第149図 B区第1号土壙

第74表 B区土壙一覧表

遺構名	名 グリッド 平面		長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1	N-18	不明	N-45° -W	2.79	(0.88)	0.67

B 区第 4 号土壙 (第147図)

B区N-18グリッドに位置する。楕円形の形状 を有するが、一部が調査区域外へ至る。覆土に炭 化物を含む。遺物は出土していない。

B 区第 6 号土壙 (第147図)

B区Z-30グリッドに位置する。形状は大部分 が調査区域外へ至るため不明である。

B 区第 1 号土壙 (第149図)

B区N-18グリッドに位置する。調査区壁面で 検出した。形状は不明であるが、長方形状になる

可能性がある。基本層第IV層から掘削され、遺構 検出面には達していない。基本層第IV層は中世か ら近世に位置付けられるため、中世か近世の土壙 である。

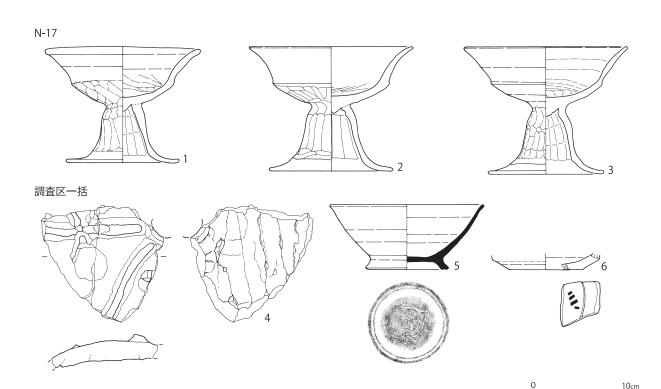
しまりやや強い 粘性やや弱い 黄褐色ブロック多量 しまり・粘性やや弱い 暗褐色ブロックやや多量 しまり弱い 粘性やや弱い

(6) ピット・グリッド検出面出土遺物

2m

遺構に伴わず遺構検出面から出土した遺物の中 で特徴的なものとしては、土師器の高坏が3点 出土している。いずれもN-17グリッドから出土 し、遺物集中から離れて出土している。

B区において検出されたピットは遺物集中に伴 うもののみ「WI 遺物集中の調査」で記載した。 その他のピットは第76表に長径、短径、深さを掲 載した。



第150図 B区グリッド・一括出土遺物

第75表 B区グリッド出土遺物観察表 (第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	(16.0)	12.2	11.2	HIK	70	良好	明赤褐	N-17No. 1 • 3	113-5
2	土師器	高坏	(17.0)	13.1	(12.6)	HIK	60	良好	橙	N-17No. 2	113-5
3	土師器	高坏	(16.8)	13.4	11.9	HIK	65	良好	明赤褐	N-17No. 2	113-5
4	埴輪	馬形埴輪	長さ12.	3 幅12.5	9 厚さ2	1.1 残存	5	I	B区一括 尻繋部分 焼成普通 色調橙 胎土DEGH		
5	須恵器	高台付埦	(16.0)	6.8	8.4	ACE	70	普通	灰白	古代面No.1・2・3 底部回転糸切り	
6	陶器	埦	_	[1.7]	(7.8)	HK	5	良好	灰白	B3一括 肥前系か 墨書「ロ」不明	

第76表 B区ピット計測表

WIND DECYTHING														
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
N-18	P 1	25	22	22	P-20	P 6	20	20	27	S-23	Р3	58	49	58
	P 2	53	44	8		P 7	31	28	18		P 4	欠番		
	Р3	40	24	8		P 8	44	34	_		P 5	25	25	37
O-19	P 1	54	35	21	Q-20	P 1	45	37	34	T-23	P 1	52	(29)	26
	P 2	47	40	88		P 2	41	[36]	28	T-24	P 1	45	40	18
	Р3	66	60	60		Р3	54	48	52	V-26	P 1	80	75	68
	P 4	43	32	22		P 4	33	32	23	X-26	P 1		欠番	
	P 5	32	31	42		P 5	53	38	26	X-27	P 1	38	35	23
	P 6	43	38	60		P 6	37	35	22	X-28	P 1	60	60	82
P-19	P 1	33	29	11		P 7	57	(40)	90	AA-30	P 1	[38]	34	66
P-20	P 1	[18]	[16]	14	Q-21	P 1	58	55	96		P 2	67	60	87
	P 2	45	39	13	R-21	P 1	73	70	97		Р3	_	_	27
	Р3	39	33	10		P 2	62	62	29					
	P 4	48	39	34	S-23	P 1	55	53	55					
	P 5	31	29	12		P 2	86	56	43					

VI C区の調査

1 C区の概要

C区は、現道の拡幅に伴う発掘調査である。 第18次調査では、A区、B区、C区の3地点を調査した。C区は北西側に位置し、幅約6 m、長さ165mで直線的に掘削した調査区である。調査面積は765m である。遺構検出面は現地表面から $1.9m\sim2.4$ m掘り下げた位置で、地山のローム土(X-1 層)が遺構確認面である。

検出された遺構の主な時代は、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代である。また、検出された遺構の種類と遺構数は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡8基、溝跡7条、土壙7基、柱穴列2条である。

調査区の北端部と南端部は、検出された遺構が 希薄である。北端部ではピットを中心に検出され た。また、南端部はほとんど遺構の検出が認めら れなかった。北端部はB区で検出された祭祀関連 の第1~3号遺物集中に隣接する。このため、C 区の集落は遺物集中との間に空間的な距離が保た れていたと推測できる。

一方、南端部の空白は集落域が途切れるのか、 あるいは、A区で検出された旧河川跡がC区の南 側に東西方向に延びている可能性もある。

古墳時代、飛鳥時代の遺構は、竪穴住居跡18 軒、井戸跡8基、溝跡4条、土壙7基で、調査区 の中央部を中心に検出された。北端側の第2号溝 跡を境に、北側はピット、井戸跡が検出され、南 側には竪穴住居跡が検出された。また、南端側の 第5号溝跡を境に、南側には古墳時代の遺構は検 出されなかった。古墳時代、飛鳥時代の集落は、 両溝跡に挟まれた範囲に形成されたと考えられる。

C区で検出された最も古い遺構は、6世紀前半の第3・5号井戸跡である。井戸跡の覆土中より出土した土師器で、第175図3は内面に放射状の暗文が施された坏である。蓋模倣坏は口縁部が上

方に直線的に立ち上がるタイプで、第175図4~6や11~14、第176図15・16である。6世紀中・後半には、竪穴住居跡が確認できる。第5~7・20号竪穴住居跡などである。7世紀前半には、第8・11号竪穴住居跡、7世紀末には、第14・17号竪穴住居跡などである。

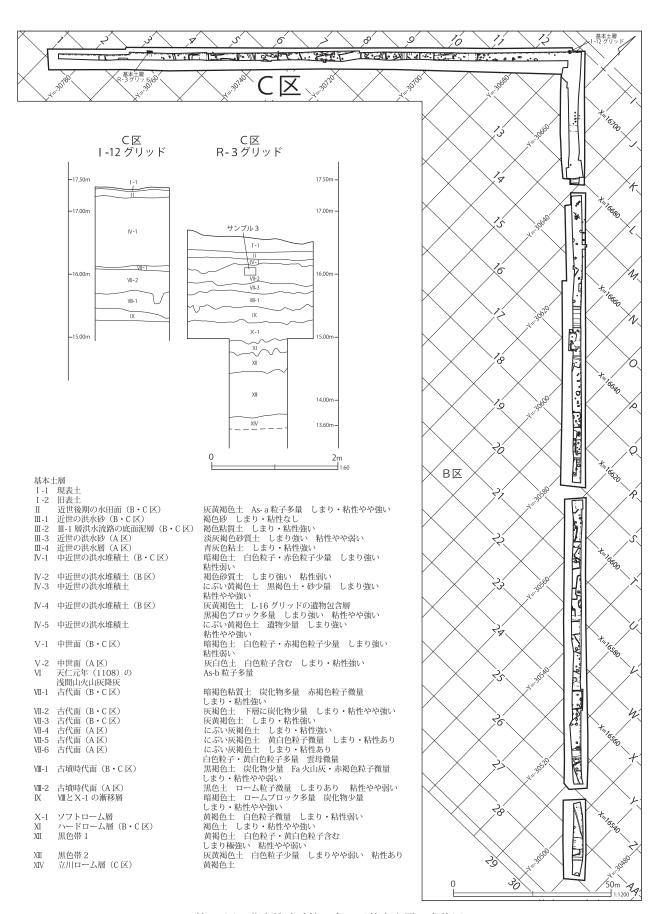
奈良時代、平安時代の遺構は、竪穴住居跡2 軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴列2条、溝跡3条で ある。掘立柱建物跡と柱穴列は、調査区中央部で 検出され、竪穴住居跡は第5号溝跡の南側で検出 された。

奈良時代の遺構は、8世紀前半にあたる第15号竪穴住居跡、第1号掘立柱建物跡、第1・2号柱穴列である。第1号掘立柱建物跡は、三間×三間と推定される総柱建物跡である。平安時代の遺構は、9世紀前半にあたる第16号竪穴住居跡が確認された。

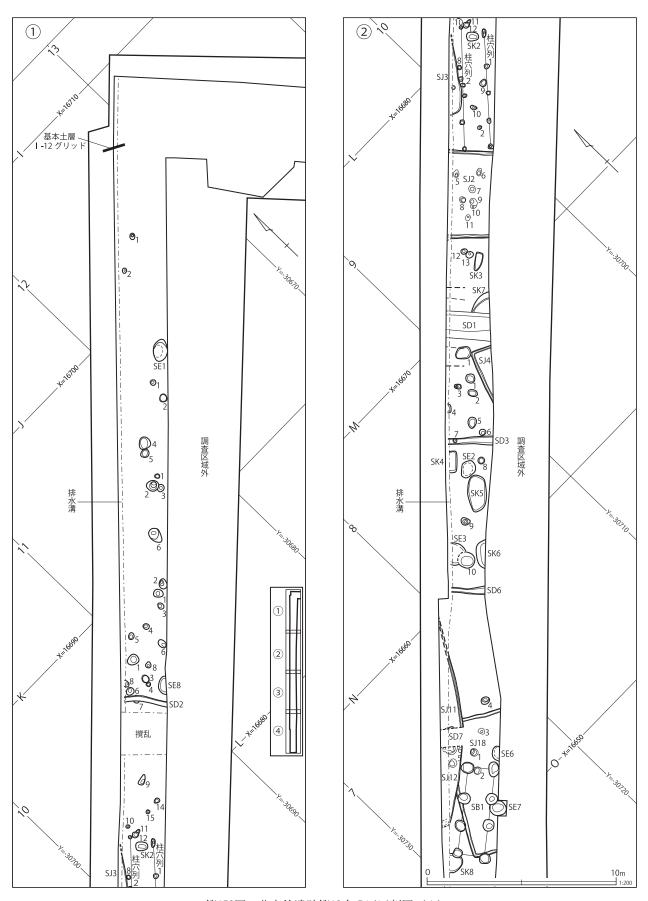
C区は、細長く幅の狭い調査区であることから、集落の全体像は掴めないが、古墳時代、飛鳥時代の集落と奈良時代、平安時代の集落構成に違いが認められる。

地形的には、C区の基本土層は北側のI-12グリッドと南側のR-3グリッドで観察した。その結果、地山の基盤となる第X-1層のソフトローム面は、北端側も南端側もほぼ同じレベルで確認でき、概ね、標高15.20m前後である。

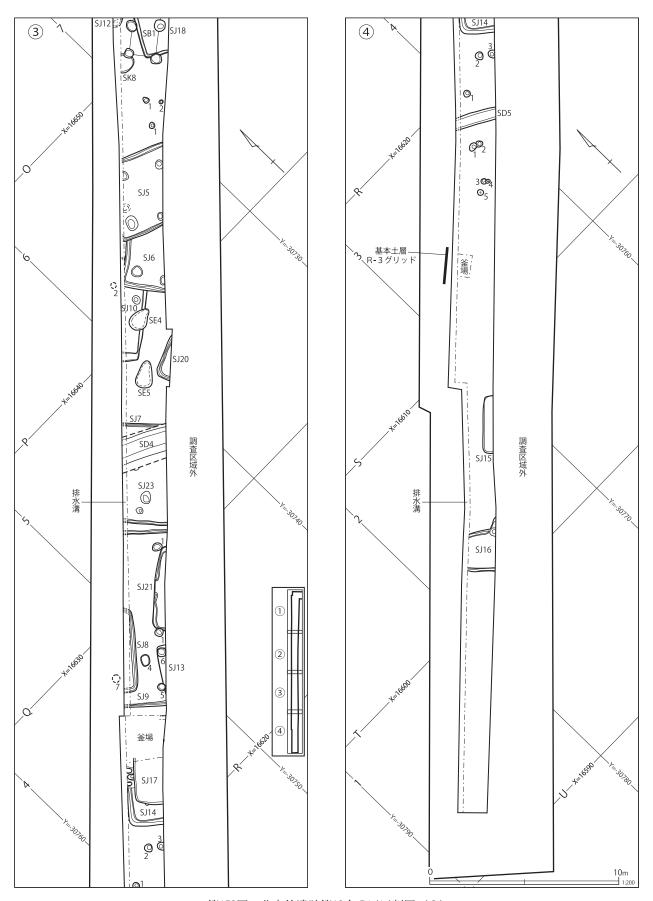
基本土層の第I-1層は表土である。Ⅲ層は近世の洪水堆積土、Ⅳ層は中近世の洪水堆積層、V層は中世面、Ⅵ層は天仁元年(1108)の浅間山火山灰層、Ⅷ層は古代面、Ⅷ層は古墳時代面、Ⅸ層は漸移層、X-1層はソフトローム、Ⅺ層はハードローム、Ⅷ層は黒色帯1、Ⅷ層は黒色帯2、Ⅷ層は立川ローム層を確認した。



第151図 北大竹遺跡第18次C区基本土層·全体図



第152図 北大竹遺跡第18次C区区割図(1)



第153図 北大竹遺跡第18次C区区割図(2)

2 古墳時代・飛鳥時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

C区において古墳時代・飛鳥時代の竪穴住居跡は18軒検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。

C区第2号竪穴住居跡(第154図)

C区の第2号竪穴住居跡は、L-9グリッド、調査区の北東部に位置する。

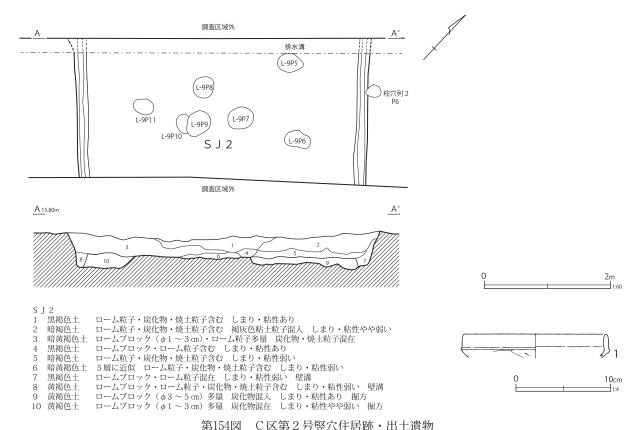
他の遺構との重複関係は、第2号柱穴列のP2に北東側の壁面が壊されている。また、グリッドピットL-9P5~11の7基が本竪穴住居跡と重複している。竪穴住居跡の北壁と南壁は確認できたものの、調査区域外に延びていることから、全体の長さは不明である。平面形は不明であ

る。残存規模は長軸長4.60m、短軸長2.20m、深 さ0.45mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。

覆土は中央部に黒褐色土がレンズ状に堆積し、 周囲にロームブロック・ローム粒子を多く含む暗 褐色土や暗黄褐色土が堆積している。北東側の床 面には炭化粒子を含む暗褐色土が薄く堆積し、床 面中央部は地山を残し、ドーナツ状の掘方にロー ムブロックを多く含む黄褐色土が充填されている。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁 溝は、北壁と南壁に検出され幅0.18m~0.20m、 深さ0.20m前後である。

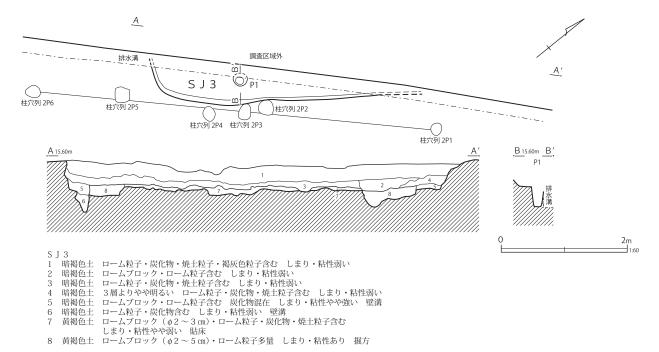
出土遺物は第154図1の推定口径15.0cm、浅身で、口縁部が短く体部との境に稜をもつ身模倣坏である。時期は7世紀前半と推定される。



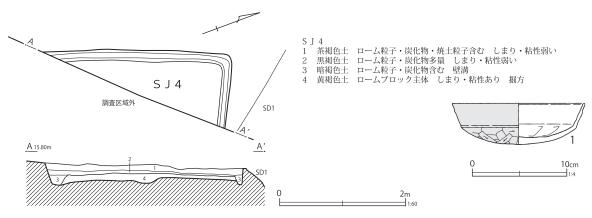
为1040 C区为2万至八压应购。田工。

第77表 C区第2号竪穴住居跡出土遺物観察表(第154図)

番	号 種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(15.0)	[2.5]	_	AH	10	普通	にぶい黄褐	身模倣坏	



第155図 C区第3号竪穴住居跡



第156図 C 区第 4 号竪穴住居跡・出土遺物

第78表 C区第4号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番片	番別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	4.3	_	CGI	20	普通	明赤褐	蓋模倣坏 赤彩	

C区第3号竪穴住居跡(第155図)

C区の第3号竪穴住居跡は、K-10、L-9・10グリッド、調査区の北東部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第2号柱穴列が東側 に位置し、本竪穴住居跡内にP1とした同規模の 柱穴が存在する。竪穴住居跡は東壁と南壁の一部 を確認したのみで、竪穴住居跡の主体は調査区域 外に延びている。このため、全体の規模や平面形 は不明である。残存規模は長軸長4.00m、短軸長 0.70m、深さ0.40mである。長軸方位はN-38° Eを指す。

覆土は全体に第1層の暗褐色土が堆積し、その 下層に第3層の炭化粒子を含む暗褐色土が堆積し ていた。床面直上には貼床と考えられる第7層の ロームブロック・ローム粒子を多く含む黄褐色土 が充填されていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。 南壁の断面では壁溝が確認され、幅0.20m、深さ 0.20mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C区第4号竪穴住居跡(第156図)

C区の第4号竪穴住居跡は、M−8・9グリッド、調査区の北東部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第1号溝跡が北東側に位置する。竪穴住居跡は北壁と西壁の一部を確認したのみで、竪穴住居跡の主体は調査区域外に延びている。このため、全体の規模や平面形は不明である。残存規模は長軸長2.90m、短軸長1.05m、深さ0.25mである。長軸方位はN-20°-Eを指す。

覆土は全体に第1層の茶褐色土が堆積し、その下層に第2層の炭化粒子を多く含む黒褐色土が堆積していた。床面は第4層の掘方埋土でロームブロックを主体とする黄褐色土が充填されていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。 壁溝が確認され、幅0.14m~0.20m、深さ0.10~ 0.15mである。

出土遺物は第156図1の推定口径14.0cm、体部に丸味をもつ赤彩が施された蓋模倣坏である。時期は6世紀末葉と推定される。

C区第5号竪穴住居跡(第157図)

C区の第5号竪穴住居跡は、○-6グリッド、 調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、南西側に位置する第6号竪穴住居跡を壊している。竪穴住居跡の北壁と南壁から西壁コーナーは確認できたものの、東壁及び西壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形はほぼ方形である。規模は長軸長4.10m、残存短軸長2.50m、深さ0.35mである。主軸方位はN-65°-Wを指す。

覆土は全体に第2・4層の暗褐色土による自然 堆積である。床面は地山のローム土で踏み固めら れている。

カマドは西壁辺やや南側に設けられているが、 調査区域外に延びるため焚口部分のみ残存して いる。残存規模は長さ0.60m、幅0.54m、深さ0.12mである。西壁の断面観察では、両袖は白灰色粘土で構築されている。カマド覆土は、上層に白灰色粘土ブロックと焼土粒子を多量に含む。下層には灰が堆積している。貯蔵穴は、カマドの南側、南西コーナー部分で検出された。規模は長軸長0.75m、短軸長0.55m、深さ0.40mである。柱穴は3基検出された。規模はP1が長径0.50m、深さ0.20m、P2が長径0.45m、深さ0.15m、P3が長径0.50m、深さ0.27mである。壁溝は北壁と南壁で検出され、幅0.17m~0.25m、深さ0.10m~0.15mである。

出土遺物はいずれも土師器で第158図 1~16に 図示した。 1 は黒色処理された身模倣坏で、内面 に放射状暗文が施されている。 4 も黒色処理され た身模倣坏である。 2・3・6 は口縁部が外反す る蓋模倣坏、 7 は赤彩が施された比企型坏であ る。11はカマド左袖内に倒立した状態で出土した 甕である。12は胴部がやや下膨れした甕である。 貯蔵穴の直上から検出された。 15はカマド付近か ら出土した大型甑である。時期は 6 世紀後半に位 置付けられる。

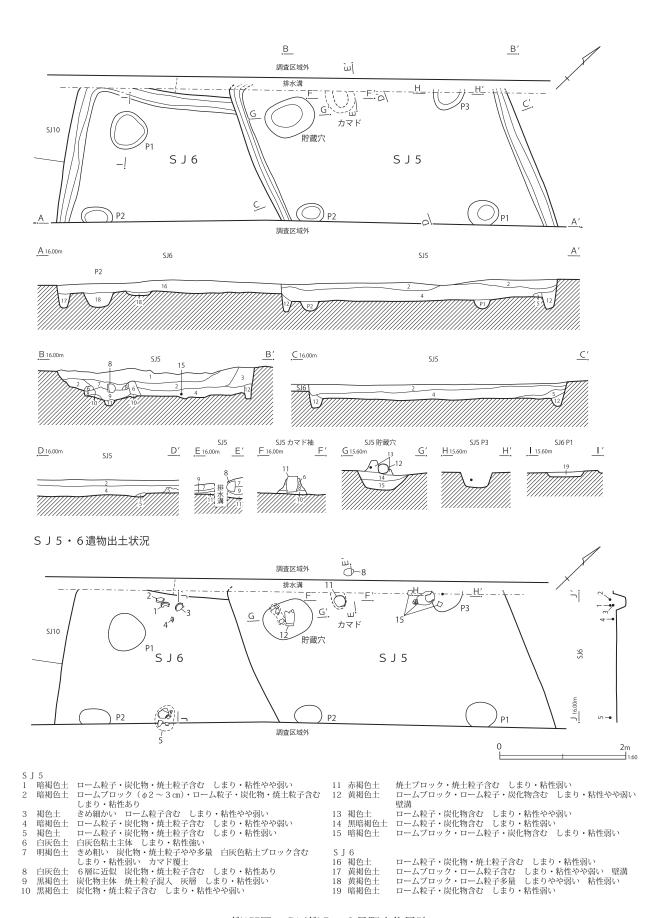
C区第6号竪穴住居跡(第157図)

C区の第6号竪穴住居跡は、○-6グリッド、 調査区の中央部に位置する。

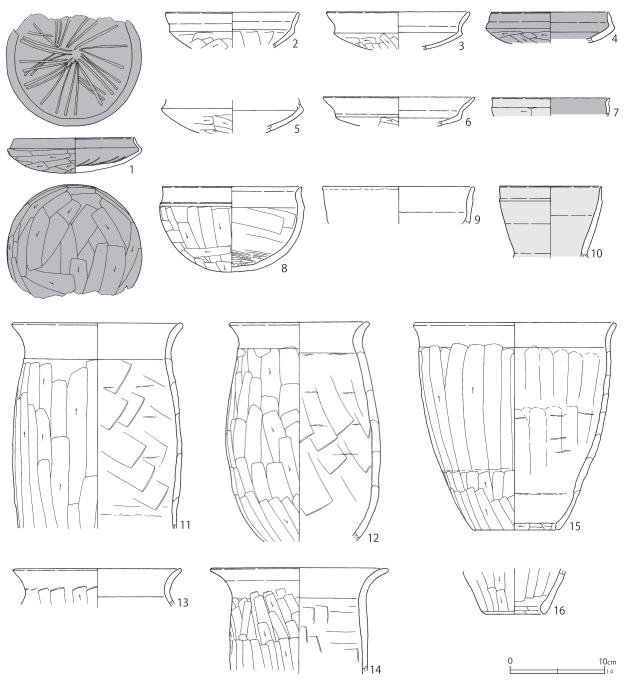
他の遺構との重複関係は、南西側に位置する第10号竪穴住居跡を壊し、北西側に位置する第5号竪穴住居跡に壊されている。竪穴住居跡の西壁と南壁の一部は確認できたものの、西壁の一部と北壁は第5号竪穴住居跡に壊され、東壁及び南壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形はほぼ方形である。残存規模は長軸長3.50m、短軸長2.00m、深さ0.20mである。長軸方位はN-53°-Eを指す。

覆土は全体に第16層の褐色土が堆積する。床面 は地山のローム土で踏み固められている。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は



第157図 C区第5・6号竪穴住居跡



第158図 C区第5号竪穴住居跡出土遺物

2 基検出された。規模はP 1 が長径0.60m、深さ0.10m、P 2 が長径0.50m、深さ0.25mである。周溝は西壁と南壁で検出され、幅0.20m~0.30m、深さ0.15m~0.20mである。

出土遺物はいずれも土師器で第159図 $1 \sim 5$ に図示した。 $1 \cdot 4$ は蓋模倣坏、 $2 \cdot 3$ は有段口縁坏で 3 は黒色処理されている。 5 は胴部が球形状

に張る丸甕である。時期は6世紀後半に位置付け られる。

C区第7号竪穴住居跡 (第160図)

C区の第7号竪穴住居跡は、P-5グリッド、 調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、南北方向に走る第4 号溝跡が本竪穴住居跡の北側を壊している。また、

第79表 C区第5号竪穴住居跡出土遺物観察表(第158図)

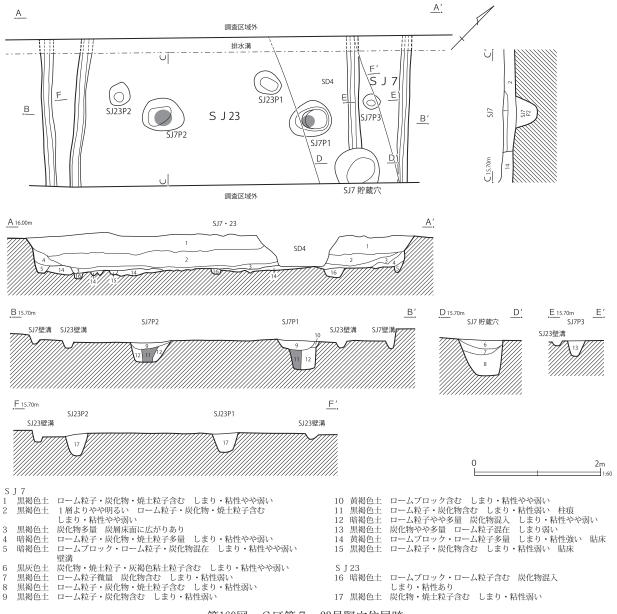
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.7	3.7	_	I	80	普通	明褐	P3No.1 身模倣坏 放射状暗文 内外面黑色処理	114-1
2	土師器	坏	(14.0)	[3.8]	_	AI	20	普通	橙	蓋模倣坏	
3	土師器	坏	(15.0)	[4.0]	_	AHI	20	普通	にぶい黄褐	蓋模倣坏	
4	土師器	坏	(12.2)	[3.2]	_	AI	15	普通	にぶい黄褐	貯蔵穴 身模倣坏 内外面黒色処理	
5	土師器	坏	_	[3.6]	_	CGI	10	普通	明褐		
6	土師器	坏	(16.0)	[3.0]	_	AHI	10	普通	明赤褐	蓋模倣坏	
7	土師器	坏	(12.4)	[1.9]	-	HI	5	良好	赤褐	b·c 比企型坏 外面赤彩 内面黑色処理	
8	土師器	鉢	14.7	9.0	_	DG	100	普通	暗褐	No. 3	114-1
9	土師器	鉢	(15.8)	[3.9]	_	AGHI	5	普通	明赤褐	b·c	
10	土師器	壺	(10.7)	[7.6]	_	ACI	20	普通	赤褐	c 角閃石多量 赤彩	
11	土師器	甕	18.0	[21.8]	_	AG	80	普通	にぶい黄褐	No. 2	114-1
12	土師器	甕	14.6	[23.4]	_	GI	80	普通	にぶい黄橙	No.1 胴部下端外面被熱 油煙付着	114-1
13	土師器	甕	(17.4)	[4.2]	_	AHI	5	普通	にぶい褐		
14	土師器	甕	(18.4)	[11.2]	_	CHI	10	普通	暗褐	O-6 b 角閃石多量	
15	土師器	甑	(20.9)	22.0	9.1	ACGH	50	良好	にぶい黄橙	No. 4	114-1
16	土師器	甑	_	[4.8]	(6.0)	AG	5	普通	暗褐	b·c	



第80表 C区第6号竪穴住居跡出土遺物観察表(第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考	図版
ш.,	7至/J·J	1117134	中压	10011111	及江	/10	/2(1)	NUNA	L 11/HJ		nui., 2	
1	土師器	坏	(14.8)	[4.1]	_	CI	30	普通	橙	No. 2	蓋模倣坏	
2	土師器	坏	(13.8)	3.5	_	CDI	45	普通	橙	No. 3	有段口縁坏	
3	土師器	坏	(15.0)	3.2	_	CI	55	普通	にぶい赤褐	No. 1	有段口縁坏 内外面黒色処理	
4	土師器	坏	_	[3.4]	_	ACI	10	普通	にぶい褐	No. 4	蓋模倣坏	
5	土師器	甕	_	[10.1]	(7.5)	AI	10	普通	にぶい橙	No. 5 •	6 体部一部被熱	

長軸方向を同じくする第23号竪穴住居跡を壊して 構築されていて、第23号竪穴住居跡を拡張した可 能性が考えられる。平面形は方形または、長方形 と推定される。残存規模は長軸長5.80m、短軸長 2.10m、深さ0.50mである。長軸方位はN-46° - Eを指す。東壁及び西壁は調査区域外のため確 認できなかった。覆土は全体に第1・2層の黒褐色土が堆積し、床面直上に炭化物・炭化粒子を多く含む第3層の黒褐色土が薄く堆積していた。竪穴住居跡床面は第23号竪穴住居跡の床面の一部のロームブロック・ローム粒子を主体とする黄褐色土を貼り込んでいる。

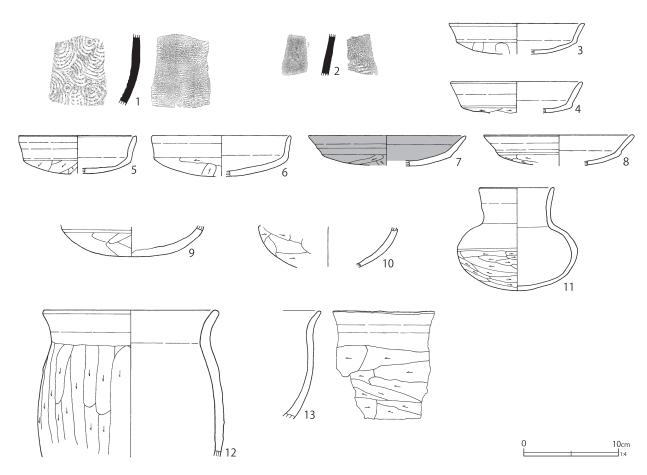


第160図 C区第7·23号竪穴住居跡

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は、北東部分で検出された。平面形は円形で、底面はやや狭く平坦である。規模は径0.68m、深さ0.55mである。柱穴は3基検出された。規模はP1が長径0.68m、短径0.55m、深さ0.50m、P2が長径0.65m、短径0.50m、深さ0.30m、P3が長径0.27m、短径0.24m、深さ0.27mである。周溝は北壁と南壁に検出され幅0.15m~0.21m、深さ0.20m~0.30mである。

出土遺物は第161図1~13で、1・2は須恵器

甕の胴部破片で、1は胴部外面に細かな平行夕夕 キ、内面は同心円文アテ具痕が明瞭に残る。3~ 6は蓋模倣坏、7・8は口縁部が大きく外反する 有段口縁坏で、7は黒色処理が施されている。 11は頸部が上方にやや開いて立ち上がる小型丸底 壺である。12は縦方向にヘラケズリが施されたや や胴部に膨らみをもつ甕である。13は破片である が、横方向にケズリが施され、口縁部が緩やかに 外反して立ち上がる。胴部は底部に向かって傾斜 する鉢型の甑である。時期は6世紀後半と推定さ



第161図 C区第7号竪穴住居跡出土遺物

第81表 C区第7号竪穴住居跡出土遺物観察表(第161図)

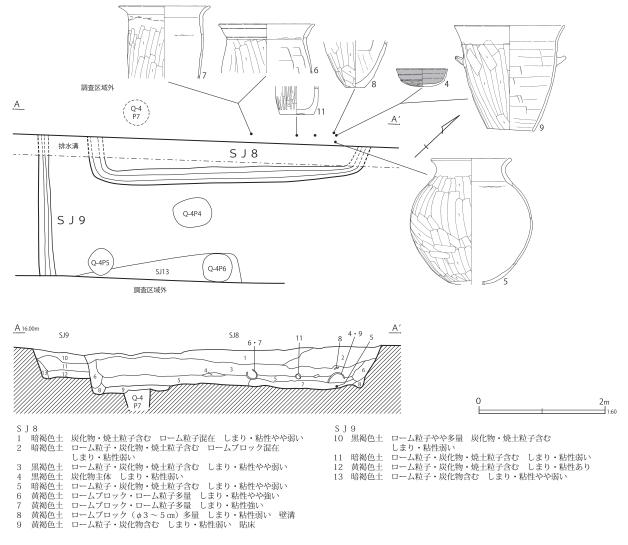
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	-	[7.5]	_	Ι	5	普通	褐灰	外面平行叩き 内面同心円文	114-2
2	須恵器	甕	_	[4.4]	_	Ι	5	普通	灰黄褐	外面自然釉	114-2
3	土師器	坏	(14.1)	[3.3]	_	CI	15	普通	にぶい褐	蓋模倣坏	
4	土師器	坏	(13.6)	[3.3]	_	CI	10	普通	明赤褐	蓋模倣坏	
5	土師器	坏	(12.3)	[4.0]	_	CI	25	普通	明赤褐	蓋模倣坏	114-2
6	土師器	坏	(14.5)	[4.3]	_	CI	25	普通	灰黄褐	蓋模倣坏	114-2
7	土師器	坏	(16.4)	[3.2]	_	Ι	10	普通	灰褐	有段口緣坏 内外面黑色処理	
8	土師器	坏	(15.6)	[3.3]	_	CI	10	普通	にぶい褐	有段口縁坏	
9	土師器	坏	-	[3.3]	_	CI	10	普通	にぶい褐		
10	土師器	坏	_	[4.2]	_	CI	10	普通	にぶい赤褐		
11	土師器	壺	7.7	11.0	-	CI	85	普通	橙		114-2
12	土師器	甕	18.0	[15.6]	_	CD	20	普通	浅黄橙		
13	土師器	甑	_	[11.5]	_	CHIK	5	普通	にぶい赤褐	貯蔵穴	

れる。

C区第23号竪穴住居跡(第160図)

C区の第23号竪穴住居跡は、P-5グリッド、

調査区の中央部に位置する。他の遺構との重複関係は、第7号竪穴住居跡に壊されている。平面 形は方形か、長方形である。残存規模は長軸長



第162図 C区第8·9号竪穴住居跡

4.50m、短軸長2.28m、深さ0.58mである。長軸 方位はN-46°-Eを指す。東壁及び西壁は調査 区域外のため確認できなかった。覆土は第7号竪 穴住居跡に壊されているため残存せず、壁溝部分 のみ残存する。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は2基検出された。規模はP1が長径0.45m、短径0.38m、深さ0.20m、P2が長径0.38m、短径0.32m、深さ0.40mである。壁溝は北壁と南壁に検出され、幅0.17m~0.20m、深さ0.05m~0.10mである。

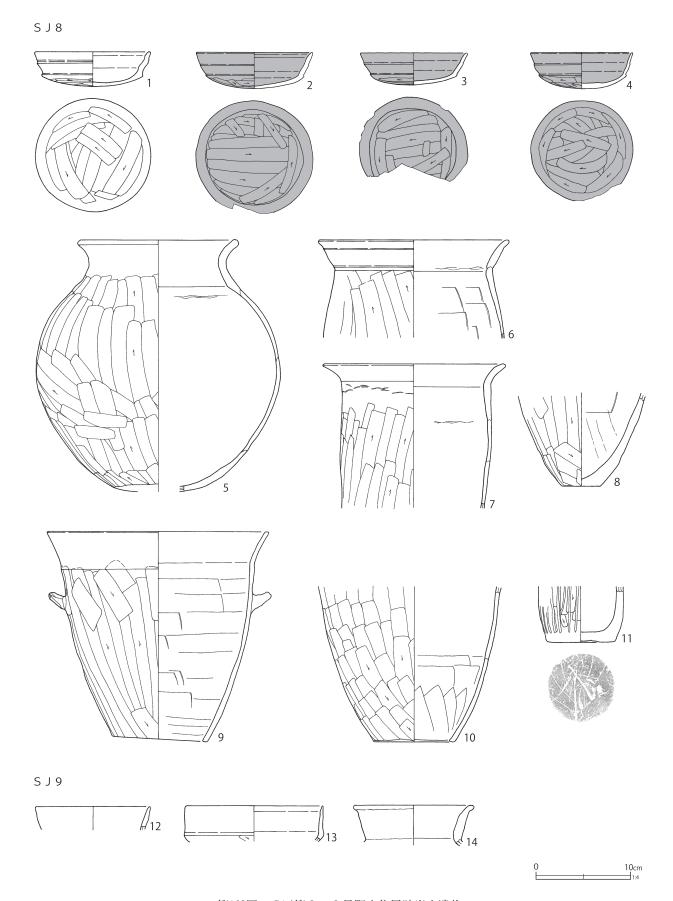
出土遺物はなく、時期は、重複関係から第7号 竪穴住居跡よりも古い。

C区第8号竪穴住居跡(第162図)

C区の第8号竪穴住居跡は、P-5、Q-4・5グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第9号竪穴住居跡を壊している。また、東壁及び北壁、南壁は調査区外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長4.55m、短軸長0.70m、深さ0.55mである。長軸方位はN-44°-Eを指す。

覆土は全体に第1・2層の暗褐色土が堆積し、 第3層の黒褐色土、第5層の暗褐色土が堆積していた。壁際には第6層のロームブロック・ローム 粒子を多く含む黄褐色土が柱状に堆積し、壁溝を 覆う第8層に続く。床面はローム土を基調とする



第163図 C区第8・9号竪穴住居跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.0	3.7	_	EH	100	普通	明赤褐	SJ8 有段口縁坏	115-2
2	土師器	坏	12.2	3.8		HI	95	普通	黒	SJ 8 有段口縁坏 内外面黒色処理	115-2
3	土師器	坏	11.3	3.4	_	CI	80	普通	黒	SJ 8 有段口縁坏 内外面黒色処理	115-2
4	土師器	坏	10.7	3.8	_	HI	95	普通	橙	SJ 8 No. 6 有段口縁坏 内外面黒色処理	115-2
5	土師器	甕	(16.4)	26.9	-	AI	50	普通	浅黄橙	SJ 8 No. 4 黒斑	115-1
6	土師器	甕	(20.0)	[10.3]	_	ACI	10	普通	にぶい黄橙	SJ 8 No. 1	
7	土師器	甕	19.0	[15.2]	_	AH	40	普通	明黄褐	SJ 8 No. 1	115-1
8	土師器	甕	_	[9.9]	(4.0)	AGH	20	普通	褐	SJ 8 No. 3	
9	土師器	甑	23.2	22.0	10.0	GHI	95	良好	浅黄橙	SJ 8 No. 6 突手付甑 黒斑	115-1
10	土師器	甑	_	[16.4]	8.4	AHI	40	普通	にぶい橙	SJ 8	115-1
11	土師器	甕	_	[5.9]	7.0	AGHI	10	不良	黒褐	SJ 8 No. 2 木葉痕	115-2
12	土師器	坏	(12.0)	[2.5]	_	CI	5	普通	橙	SJ 9	
13	土師器	坏	(14.4)	[3.7]	_	HI	5	普通	橙	SJ9 蓋模倣坏	
14	土師器	甕	(12.5)	[4.2]	_	GI	5	普通	橙	SJ 9	

第82表 C区第8·9号竪穴住居跡出土遺物観察表(第163図)

が、南側はローム粒子を含む貼床が確認された。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は 東壁と南・北壁のコーナー部分で検出され、幅 0.25m、深さ0.20mである。

出土遺物は第163図1~11、いずれも土師器で 1~4はやや丸底で口径の小さな有段口縁坏、5 は胴部球形で大型の丸甕、6・7は長甕、9・10 は大型甑、11は底部外面に木葉痕の残る小型の甕 である。時期は7世紀前半と推定される。

C区第9号竪穴住居跡 (第162図)

C区の第9号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、 調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第8号竪穴住居跡に壊されている。南壁の一部を確認したが、東壁及び西壁は調査区域外のため確認できなかった。また、確認面では、北壁も確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長2.23m、短軸長不明、深さ0.40mである。長軸方位はN-35°-Eを指す。

覆土は全体に第10~12層が堆積し、壁際には第 13層が柱状に堆積する。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。壁 溝は南壁で検出され、幅0.25m、深さ0.02mであ る。出土遺物は第163図12~14、いずれも土師器で13は口縁部が上方に立ち上がる土師器蓋模倣坏である。時期は6世紀前半と推定される。

C区第10号竪穴住居跡 (第164図)

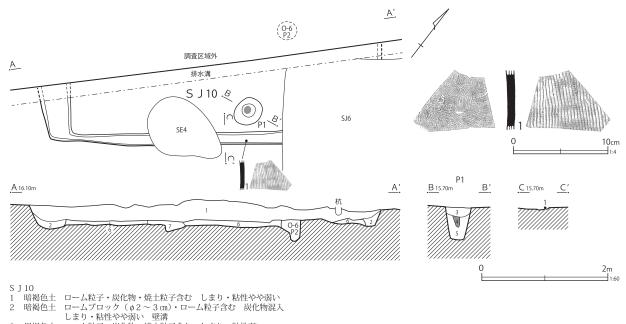
C区の第10号竪穴住居跡は、O-6、P-5・6グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、北側を第6号竪穴住居跡に壊され、東壁が第4号井戸跡に壊されている。また、南壁と西壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形または、長方形と推定される。残存規模は長軸長5.55m、短軸長1.06m、深さ0.40mである。長軸方位はN-46°-Eを指す。

覆土は全体に第1層の暗褐色土が堆積し、床面は第6・7層のロームブロック・ローム粒子を主体とする黄褐色土を張り込んでいる貼床を確認した。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴は 東壁寄り中央に1基検出された。規模は長径 0.48m、短径0.40m、深さ0.44mである。壁溝は 南壁と東壁に検出され、幅0.11m~0.53m、深さ 0.02m~0.10mで、南壁側はかなり広く浅い。

出土遺物は第164図1の須恵器甕の胴部破片を



黒褐色土 ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む 黒褐色土 ローム粒子・炭化物 しまり・粘性 しまり・粘性弱い

- 無褐巴土 ローム粒子・炭化物・焼工粒子さび しまり・粘性物い 黒褐色土 ローム粒子・炭化物 しまり・粘性弱い 柱痕 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物混入 しまり・粘性やや弱い 黄褐色土 ロームブロック(φ1~3cm)・ローム粒子多量 しまり・粘性強い 貼床 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 炭化物混入 しまり・粘性やや強い 貼床

第164図 C区第10号竪穴住居跡・出土遺物

第83表 C区第10号竪穴住居跡出土遺物観察表(第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	_	[6.3]	_	GI	5	良好	灰	No.1 外面平行叩き 内面同心円文	

壁溝内から検出した。時期は6世紀後半と推定さ れる。

C区第11号竪穴住居跡 (第165図)

C区の第11号竪穴住居跡は、N-7グリッド、 調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第12号竪穴住居跡、 第18号竪穴住居跡を壊している。また、南壁は第 7号溝跡によって壊されている。 東壁から南壁 の一部を検出したが、北壁から西壁、南壁に亘っ て調査区域外のため確認できなかった。平面形 は不明である。残存規模は長軸長6.95m、短軸長 1.22m、深さ0.48mである。長軸方位はN-35° Eを指す。

全体に第1層の暗褐色土及び第2層の黒褐色土 が堆積し、床面直上に炭化物・炭化粒子を多く含 む第7層の黒褐色土が薄く堆積していた。また、 第5・6・8層は掘方であり、ロームブロック・ ローム粒子を含んでいる。

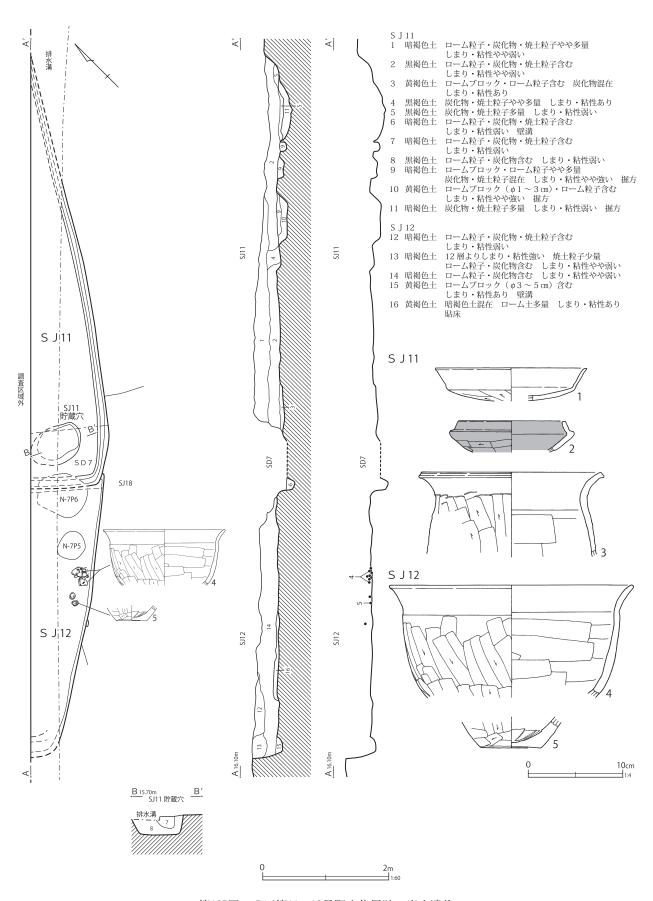
カマド、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、 南東コーナー部分で検出された。規模は長軸長 0.83m、短軸長0.60m、深さ0.30mである。壁溝 は東壁と南壁に検出され、幅0.15m~0.18m、深 さ0.01m~0.06mである。

出土遺物は第165図1~3で、いずれも土師器 である。1は蓋模倣坏、2は推定口径11.2cmとや や小型の黒色処理された身模倣坏である。3の甕 は、口唇部に面を持ちやや窪む作りである。時期 は7世紀前半と推定される。

C区第12号竪穴住居跡(第165図)

C区の第12号竪穴住居跡は、N-7グリッド、 調査区の中央部に位置する。

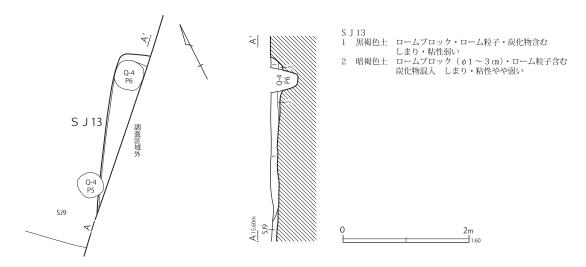
他の遺構との重複関係は、第11号竪穴住居跡に 壊され、第18号竪穴住居跡を壊している。東壁か ら南壁の一部を検出したが、北壁から西壁、南壁 に亘って調査区域外のため確認できなかった。平 面形は不明である。残存規模は長軸長4.50m、短



第165図 C区第11・12号竪穴住居跡・出土遺物

第84表	C 区第11 ·	12号竪穴住居跡出土遺物観察表	(第165図)
770711			(2710000)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(16.0)	[3.5]	_	AHI	20	普通	黄橙	SJ11 貯蔵穴 蓋模倣坏	
2	土師器	坏	(11.2)	[2.9]	_	AHI	20	普通	橙	SJ11 貯蔵穴 身模倣坏 内外面黒色処理	
3	土師器	甕	(19.0)	[9.0]	_	AG	10	普通	浅黄橙	SJ12No. 9 • SJ11 • 12	
4	土師器	鉢	(25.8)	[11.8]	_	CI	30	普通	黄橙	SJ12No. 1 · 2	
5	土師器	甕	_	[3.2]	6.4	AH	10	普通	浅黄橙	No. 9 底部未調整	



第166図 С区第13号竪穴住居跡

軸長1.07m、深さ0.38mである。長軸方位はN-51°-Eを指す。

全体に第12~14層の暗褐色土が堆積し、床面直上に第16層のロームブロック・ローム粒子を多量に含む貼床が確認された。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。 壁溝は西壁の断面で確認できた。幅0.25m、深さ 0.08mである。

出土遺物は第165図4・5で、いずれも土師器である。4は推定口径25.8cmの大型の鉢である。 時期は6世紀後半と推定される。

C区第13号竪穴住居跡(第166図)

C区の第13号竪穴住居跡は、Q-4・5グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第9号竪穴住居跡を壊し、グリッドピットに壊されている。北壁から西壁の一部を検出したが、北壁から東壁、南壁、西壁に亘って調査区域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長

2.50m、短軸長0.43m、深さ0.20mである。長軸方位は $N-34^{\circ}-E$ を指す。

覆土は浅く全体に第1層の黒褐色土が堆積し、 北壁際に第2層の三角堆積土が見られた。カマ ド、貯蔵穴、柱穴、壁溝は検出されなかった。

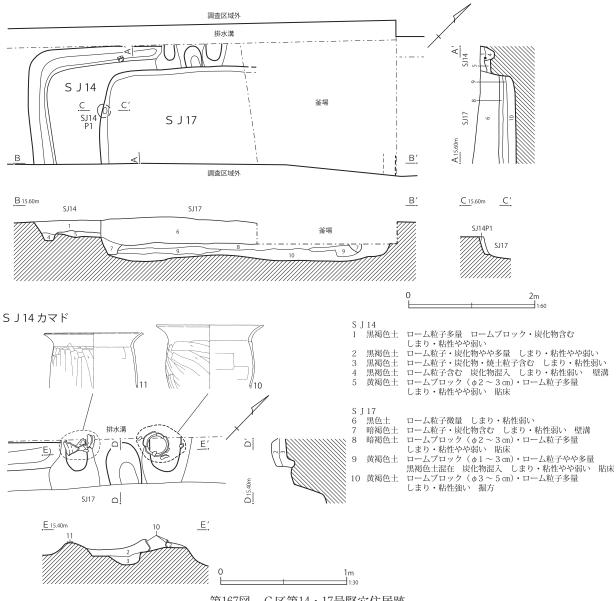
出土遺物はなく、時期は第9号竪穴住居跡より 新しい。

C区第14号竪穴住居跡(第167図)

C区の第14号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、 調査区の南西部に位置する。

他の遺構との重複関係は、第17号竪穴住居跡に壊され、調査時に設けた排水のための釜場に壊されている。南壁からカマドのある西壁の一部を検出したが、北寄りの西壁から北壁、東壁、さらに南壁の一部は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形と推測できる。残存規模は長軸長3.40m、短軸長1.78m、深さ0.25mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。

覆土は第17号竪穴住居跡に壊されているため、

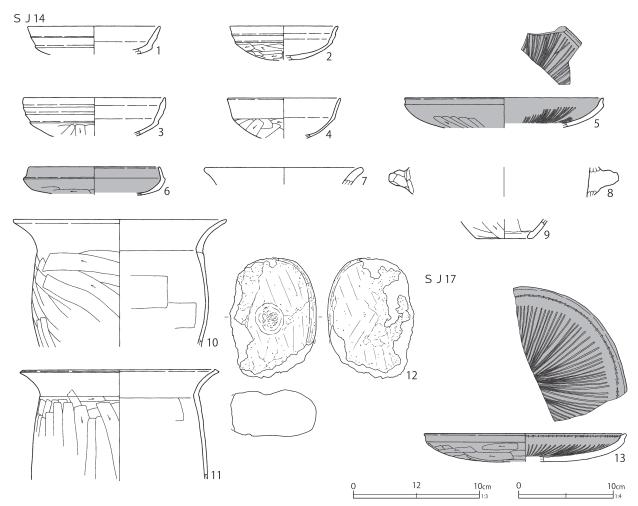


第167図 C区第14·17号竪穴住居跡

南壁側で検出され、第1層の黒褐色土が堆積し、 床面は第2層のロームブロック・ローム粒子を多 量に含む貼床が確認された。

カマドは、西壁中央に検出され、焚口側は第 17号竪穴住居跡に壊され、煙道は調査区域外に延 びる。両袖部分と焚口の一部は残存していた。 カマドの規模は焚口幅0.40m、残存長0.48mであ る。青灰色粘土の両袖には土師器甕が逆位の状態 で芯材として使われていた。貯蔵穴、柱穴は検出 されなかった。壁溝は南壁と西壁に検出され、幅 0.22m~0.35m、深さ0.12m~0.19mである。

出土遺物は第168図1~12で、1~11は土師器 である。1~3は有段口縁坏、4は蓋模倣坏、5 は黒色処理された暗文皿、6は黒色処理された身 模倣坏である。8・9は甑、10はカマド右袖の芯 材として使われていた甕である。口縁部が外傾に 開き、胴部がやや膨らむ。胴部外面は斜めのヘラ ケズリが施されている。11はカマド左袖の芯材と して使われていた甕である。10の形態とは異なり 口唇部に面を持ちやや窪む作りで、胴部外面は縦 方向のヘラケズリが施されている。時期は7世紀 末から8世紀初頭と推定される。



第168図 C区第14·17号竪穴住居跡出土遺物

第85表 C区第14·17号竪穴住居跡出土遺物観察表(第168図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	[2.9]	_	AEHI	10	普通	にぶい黄褐	SJ14a 有段口縁坏	
2	土師器	坏	(11.2)	[3.6]	-	HI	30	普通	橙	SJ14c 有段口縁坏	116-1
3	土師器	坏	(15.0)	[3.0]	-	GI	10	普通	にぶい黄褐	SJ14d 有段口縁坏	
4	土師器	坏	(11.8)	[4.2]	_	HI	20	普通	にぶい黄橙	SJ14b·c 蓋模倣坏	
5	土師器	Ш	(20.8)	[3.2]	-	ACI	10	普通	黒褐	SJ14 c 暗文皿 内外面黒色処理	
6	土師器	坏	(13.7)	[3.0]	-	GHI	20	普通	明赤褐	SJ14d 身模倣坏 内外面黑色処理	116-1
7	土師器	甕	(16.7)	[1.8]	-	GI	5	普通	明赤褐	SJ14カマド	
8	土師器	甑	_	[3.1]	-	HI	5	普通	にぶい黄橙	SJ14	
9	土師器	甑	_	[2.0]	(6.0)	AG	5	普通	にぶい黄橙	SJ14 c	
10	土師器	甕	12.4	[13.5]	-	ACI	15	普通	にぶい褐	C • Q - 4 SJ14 b • No. 1	116-1
11	土師器	甕	(20.3)	[11.7]	-	AHI	20	普通	にぶい黄褐	SJ14 c • No. 2	
12	石製品	凹石	長さ[9.	6] 幅[6	.9] 厚さ	≥3.9 重	さ380.3			SJ14 b	
13	土師器	Ш	(21.2)	[3.0]	_	AI	30	良好	黒褐	SJ17 放射状暗文 黒色処理	116-1

C区第17号竪穴住居跡(第167図)

調査区の南西部に位置する。

C区の第17号竪穴住居跡は、Q-4グリッド、

他の遺構との重複関係は、第14号竪穴住居跡を

壊し、北側は調査時に設けた排水のための釜場に 壊されている。南壁から西壁の一部が検出された が、北寄りの西壁から北壁、東壁、さらに南壁 の一部は調査区域外のため確認できなかった。 平面形は方形と推測できる。残存規模は長軸長 4.70m、短軸長1.54m、深さ0.71mである。長軸 方位はN-46°-Eを指す。

覆土は全体に第6層の黒色土が堆積し、床面は 第8層のロームブロック・ローム粒子を多量に含 む暗褐色土による貼床が確認され、さらに、北側 と南側には第10層の掘方埋土の上に黄褐色土によ る貼床が検出された。カマド、貯蔵穴、柱穴は検 出されなかった。壁溝は南壁と西壁に検出され、 幅0.25m、深さ0.20mである。

出土遺物は第168図13の黒色処理された土師器 暗文皿である。時期は7世紀末と推定される。

C区第18号竪穴住居跡 (第169図)

C区の第18号竪穴住居跡は、 $N \cdot O - 7$ グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係は、西壁から北壁側を第

11・12号竪穴住居跡に壊されている。また、本竪穴住居跡の中央から西側を第1号掘立柱建物、第6・7号井戸跡に壊されている。北壁から東壁、南壁に亘って調査区域外のため確認できなかった。平面形は長方形と推測される。残存規模は長軸長7.25m、短軸長2.30m、深さ0.05mである。長軸方位はN-32°-Eを指す。

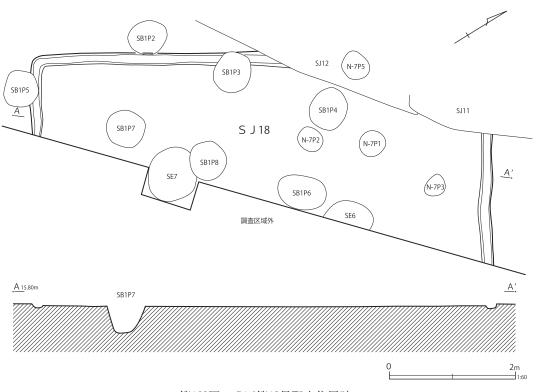
壁溝のみ検出され、確認面の地山ローム土が 床面である。壁溝は、幅0.14m~0.22m、深さ 0.03m~0.09mである。出土遺物は検出されな かった。

C区第20号竪穴住居跡(第170図)

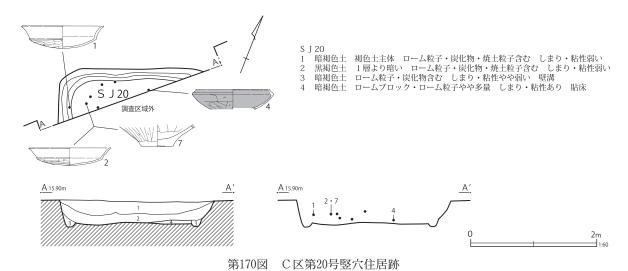
C区の第20号竪穴住居跡は、P-6グリッド、 調査区の中央部に位置する。

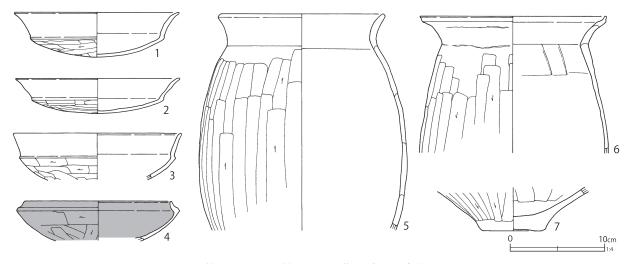
他の遺構との重複関係はなく、南壁と西壁の一部を確認した。残存規模は長軸長2.20m、短軸長0.74m、深さ0.40mである。長軸方位はN70°-Eを指す。

出土遺物は第171図 1 ~ 7 の土師器である。 1・2 は口径17.2cmと推定口径17.4cmの口縁部逆



第169図 C区第18号竪穴住居跡





第171図 C区第20号竪穴住居跡出土遺物

第86表 C区第20号竪穴住居跡出土遺物観察表(第171図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	17.2	4.7	_	AI	100	良好	にぶい褐	SK 9 No. 1 蓋模倣坏	116-2
2	土師器	坏	(17.4)	3.7	_	AI	50	普通	暗褐	SK 9 No. 2 蓋模倣坏	116-2
3	土師器	坏	(17.6)	[4.9]	_	AI	20	普通	にぶい褐	蓋模倣坏	
4	土師器	坏	(15.5)	[3.2]	_	HI	20	普通	黒褐	No.6 内外面黑色処理 身模倣坏	
5	土師器	甕	17.1	[23.0]	_	GH	60	良好	にぶい褐		116-2
6	土師器	甕	19.6	[14.6]	_	GHI	50	普通	褐		116-2
7	土師器	甕	_	[4.6]	_	ACHI	10	普通	にぶい橙	SK 9 No. 2	116-2

「ハ」の字に大きく開く蓋模倣坏、3は推定口径 17.6cmの口縁部直線的に開く蓋模倣坏、4は推定 口径15.5cmの黒色処理を施された身模倣坏であ

る。いずれも口径が大きく体部に丸味をもつ。5 ~7は甕である。

時期は6世紀中葉と推定される。

C区第21号竪穴住居跡 (第172図)

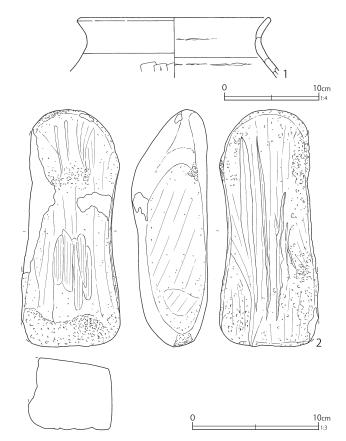
C区の第21号竪穴住居跡は、 $P \cdot Q - 5$ グリッド、調査区の中央部に位置する。

他の遺構との重複関係はなく、南壁から西壁、 北壁の一部を確認し、竪穴住居跡の主体は東側調 査区域外に延びている。このため、全体の規模や 平面形は不明である。残存規模は長軸長4.45m、 短軸長0.57m、深さ0.15mである。長軸方位はN -48°-Eを指す。

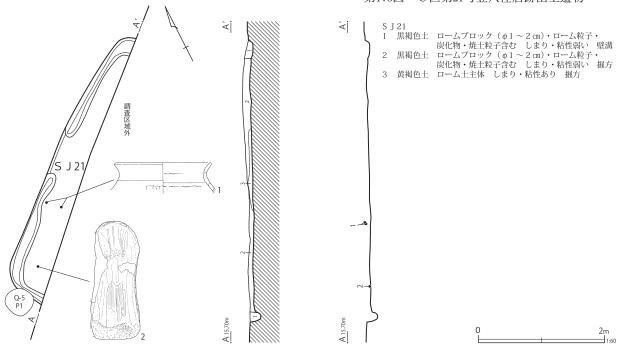
覆土はほとんどなく掘方埋土の第2層黒褐色土 と第3層のロームブロック・ローム粒子を多く含 む掘方が確認された。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。周 溝は南壁から西壁、北壁で確認され、幅0.12m~ 0.20m、深さ0.06m~0.12mである。

出土遺物は第173図1土師器の丸甕、2は砥石 である。時期は6世紀後半と推定される。



第173図 C区第21号竪穴住居跡出土遺物



第87表 C区第21号竪穴住居跡出土遺物観察表(第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(20.0)	[6.4]	_	AGH	普通	10	明赤褐	SJ13No. 1 • 2	
2	石製品	砥石	長さ18.	長さ18.9 幅[7.9] 厚さ[6.1] 重さ1192.9						SJ13No.3 砂岩 置砥 使用面3面	

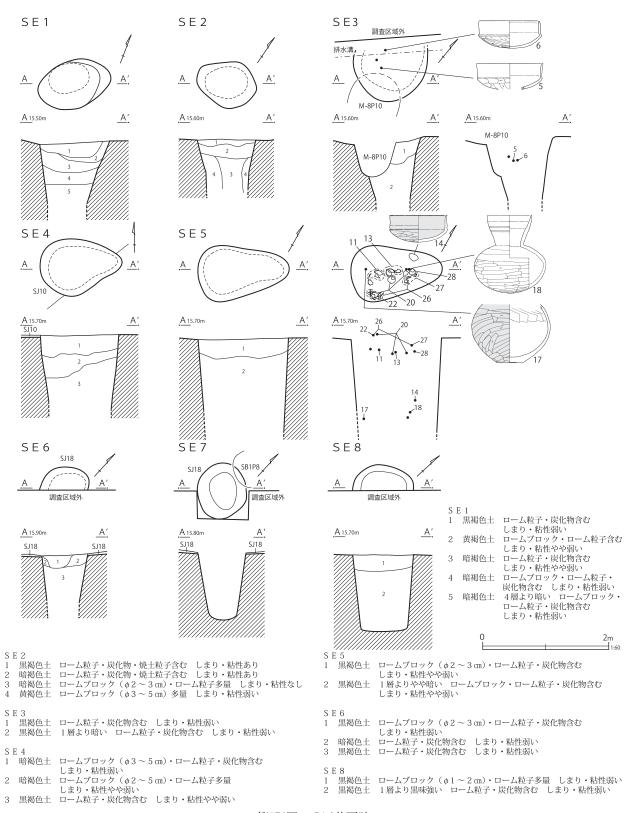
第172図 C区第21号竪穴住居跡

(2) 井戸跡

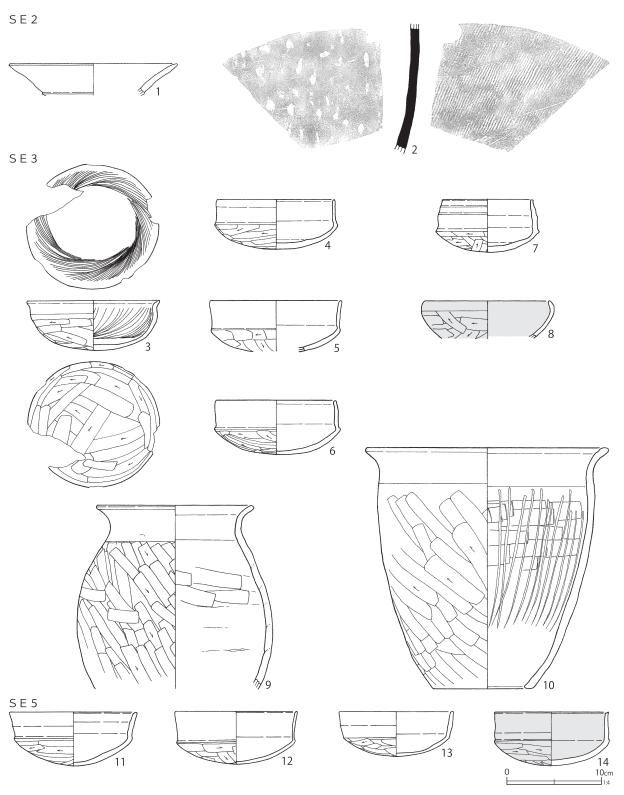
C区において古墳時代・飛鳥時代の井戸跡は8 基検出された。第89表に平面形や規模を示した。

C区第1号井戸跡(第174図)

調査区の北端部で検出した。平面形は楕円形である。底面に向かって狭くなる。



第174図 C区井戸跡



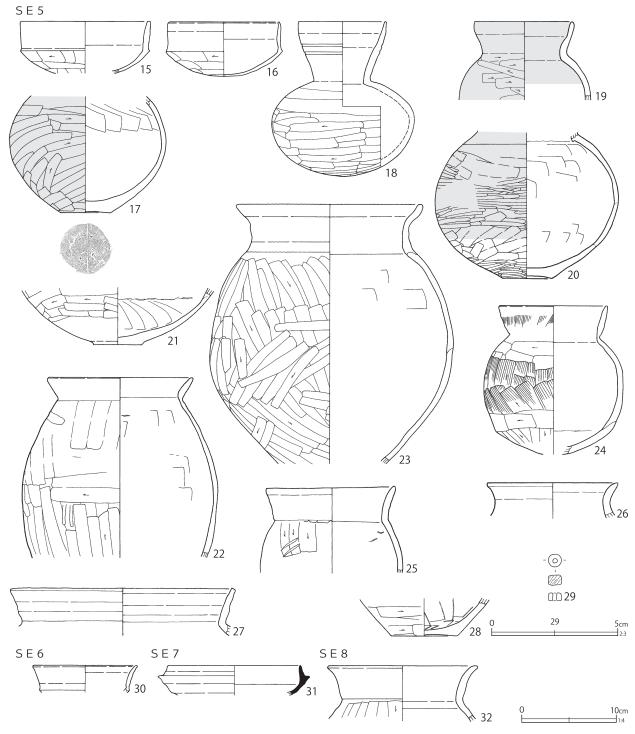
第175図 C区井戸跡出土遺物(1)

C区第2号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。南側4m付近に第 3号井戸跡を検出した。平面形は不整形である。 に延びる。北側4m付近に第2号井戸跡を検出し

C区第3号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外



第176図 С区井戸跡出土遺物 (2)

た。グリッドピットM-8 P10に壊されている。 平面形は円形である。出土遺物は第175図 3 ~10 で、いずれも土師器である。 3 は内面に放射状の 暗文が施された坏である。 $4 \sim 6$ は口径12.3cm~ 13.6cmの口縁部が上方に直線的に立ち上がる蓋模 倣坏、 7 は推定口径9.3cmとやや小型で、口縁部 上半に段をもつ身模倣坏である。8は体部が内湾 気味に立ち上がる丸底坏である。この他、9は胴 部に膨らみをもつ甕、10は大型甑である。時期は 6世紀前半である。

C区第4号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。第10号竪穴住居跡

第88表 C区井戸跡出土遺物観察表(第175·176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	(17.5)	[3.3]	_	ACHI	5	良好	赤褐	SE 2 小針型坏	
2	須恵器	甕	_	[13.8]	_	EI	5	良好	紫灰	SE 2 外面平行叩き後カキ目 内面無文 当て具	
3	土師器	坏	13.9	5.3	-	HI	90	良好	赤褐	SE 3 放射状暗文	117-1
4	土師器	坏	12.3	5.3	-	AHI	80	良好	赤褐	SE 3 蓋模倣坏	117-1
5	土師器	坏	(13.6)	[5.4]	-	AHI	30	普通	橙	SE 3 No. 3 蓋模倣坏	
6	土師器	坏	12.6	5.8	-	AHI	90	良好	橙	SE 3 No. 1 蓋模倣坏	117-1
7	土師器	坏	(9.3)	5.6	-	AI	40	良好	赤褐	SE 3 身模倣坏	117-1
8	土師器	坏	(13.3)	[4.0]	-	AI	20	普通	赤褐	SE 3 内外面赤彩	
9	土師器	甕	16.2	[19.5]	-	AI	60	普通	にぶい黄褐	SE 3 No. 2 · 3	117-1
10	土師器	餌	(25.4)	25.5	(10.5)	GI	70	普通	にぶい黄褐	SE 3 No. 3	117-1
11	土師器	坏	13.4	5.7	-	AHI	90	良好	赤褐	SE 5 No. 5 蓋模倣坏	117-2
12	土師器	坏	12.7	5.6	-	ACHI	80	良好	橙	SE 5 蓋模倣坏	117-2
13	土師器	坏	12.2	4.8	-	HI	100	良好	橙	SE 5 No. 6 蓋模倣坏	117-2
14	土師器	坏	12.0	5.7	-	HI	100	良好	赤褐	SE 5 No.10 蓋模倣坏 内外面赤彩	117-2
15	土師器	坏	13.7	[5.5]	_	ACI	40	普通	明赤褐	SE 5 蓋模倣坏	
16	土師器	坏	(11.7)	5.7	-	AI	40	普通	赤褐	SE 5 蓋模倣坏	
17	土師器	壺	_	[12.3]	-	AHI	50	良好	赤褐	SE 5 No.13 外面赤彩 木葉痕	117-3
18	土師器	壺	9.2	16.4	-	AHI	95	良好	橙	SE 5 No.11	117-2
19	土師器	壺	10.2	[8.3]	-	HI	30	普通	にぶい橙	SE 5 最下層 内外面赤彩	117-4
20	土師器	壺	_	[15.5]	5.3	IK	40	良好	明赤褐	SE 5 No. 1・3・8 外面赤彩	117-3
21	土師器	壺	_	[6.0]	5.0	AHI	20	良好	赤褐	SE 5 No.12 輪積痕	117-3
22	土師器	甕	(15.0)	[19.0]	-	AEHI	30	普通	にぶい橙	SE 5 No. 2	117-5
23	土師器	甕	19.4	[27.5]	-	AHI	50	普通	にぶい褐	SE 5 最下層 丸甕	117-5
24	土師器	甕	11.3	[15.8]	_	ACHI	90	普通	褐	SE 5 最下層	117-5
25	土師器	甕	13.4	[9.1]	_	HIK	20	普通	褐	SE 5 煤多量	117-4
26	土師器	甕	(13.6)	[3.7]	-	CI	10	普通	浅黄橙	SE 5 No. 2 • 7	117-4
27	土師器	甕	(23.2)	[5.0]	-	ACI	15	普通	にぶい橙	SE 5 No. 7 輪積痕	117-4
28	土師器	甕	_	[4.0]	7.0	AI	10	普通	黒褐	SE 5 No. 9	117-3
29	石製品	白玉	長0.5	短0.5 孔	上径0.2	厚0.4 重	[0.2 列	表存100		SE 5 滑石 小D 2 c II	
30	土師器	坏	(11.0)	[3.8]	_	AI	5	普通	赤褐	SE 6 蓋模倣坏	
31	須恵器	坏	(14.0)	[3.1]	-	IK	15	良好	青灰	SE 7 外面自然釉	
32	土師器	甕	(15.8)	[5.8]	_	ABG	10	不良	にぶい黄褐	K-10 P 5 雲母片岩多量	

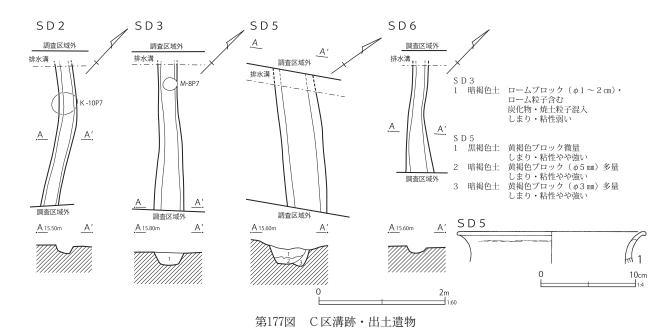
第89表 C区井戸跡一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構	遺構名	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複遺構
1	J-12	楕円形	上1.18 下0.65	上0.75 下0.45	[0.95]		5	P-5 • 6	不整形	上1.45 下1.25	上0.80 下0.55	[1.50]	
2	M-8	不整形	上0.95 下0.65	上0.72 下0.50	[1.05]		6	N-7	円形	上(0.87) 下(0.55)	_	[0.70]	SJ18
3	M-8	円形	上(1.20) 下(0.98)	_	[1.00]	M-8 P10	7	N-7	円形	上0.90 下0.55	上0.78 下0.45	[1.10]	SJ18 SB11P8
4	O•P-6	不整形	上1.30 下1.00	上0.90 下0.65	[1.00]	SJ10	8	K-10•11	円形	上(0.95) 下(0.70)	_	[1.27]	

を壊している。南側1.8m付近に類似する第5号 **C区第5号井戸跡**(第174図) 井戸跡を検出した。

平面形は不整形である。

調査区の中央部で検出した。北側1.8m付近に 類似する第4号井戸跡を検出した。平面形は不整



第90表 C区第5号溝跡出土遺物観察表(第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.6)	[3.4]	_	AHI	5	普通	橙		

第91表 C区溝跡一覧表

No.	グリッド	方位	方位	長さ(m)	幅(m)	深さ	(m)	重複遺構
INO.	/ 299F	刀业	刀业	及さ(111)	最大	最小	最大	最小	里恢退傳
2	K-10	N-40° -W	_	2.25	0.27	_	0.10	_	K-10 P 7
3	M-8	N-45° -W	_	2.30	0.47	0.30	0.20	_	M-8 P 7
5	R-3 • 4	N-55° -W	_	1.90	0.65	_	0.25	_	
6	M•N-8	N-50° -W	_	1.70	0.43	0.24	0.10	_	

形で、底面に向かってやや狭くなる。井戸跡の上層及び中層から遺物がまとまって出土し、井戸の廃絶後に一括投棄された可能性が考えられる。

出土遺物は第175・176図11~29で、29は臼玉、他は土師器である。11~16は口縁部が上方に立ち上がる蓋模倣坏、17~20は小型壺である。17・20は赤彩が施され、底部やや上げ底気味である。22は口縁部が短く外反し、胴部に張をもつ甕、23は口縁部が「コ」の字状に立ち上がり、胴部が球形の甕である。24は小型甕で胴部外面に粗い刷毛目調整が見られる。時期はC区の中で最も古い段階の6世紀前半である。

C区第6号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。平面形は円形で、

底面に向かって狭くなる。出土遺物は第176図30 の土師器坏の破片である。

C区第7号井戸跡(第174図)

調査区の中央部で検出した。平面形は円形で、 底面に向かってやや狭くなる。出土遺物は第176 図31の須恵器坏身の破片である。時期は6世紀末 と推定される。

C区第8号井戸跡(第174図)

調査区の北側部分で検出した。東側は調査区域外に延びる。平面形は円形で、底面に向かってやや狭くなる。出土遺物は第176図32の土師器甕の口縁部破片である。

(3) 溝跡

C区において古墳時代・飛鳥時代に位置づけ

られる溝跡は、4条検出された。第91表に検出グリッド、主軸方位、規模を示した。

C区第2号溝跡(第177図)

調査区の北側部分で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。 グリッドピットK-10P7に壊されている。

周囲にはピットが多く、近接して北側に第8号 井戸跡が位置する。

C区第3号溝跡(第177図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。グリッドピットM-8P7に壊されている。

周囲にはピットが多く、近接して南側に第2号 井戸跡や第4・5号土壙が位置する。

C区第5号溝跡(第177図)

調査区の南側部分で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。 重複する遺構は存在しない。

周囲にはピットが多く位置する。出土遺物は、 覆土中から第177図1に図示した土師器甕の破片 である。

C区第6号溝跡(第177図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向 に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。重 複する遺構は存在しない。

周囲には近接して北側に第3号井戸跡や第6号 土壙が位置する。

本溝跡は第3号溝跡と対峙していることから、 竪穴住居跡の壁溝と考えていたが、ここでは、溝 跡とした。

第92表 C区土壙一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1			欠番				6	M•N-8	楕円形	N-41° -E	1.45	0.50	0.40
2	K •L−10	楕円形	N-45° -W	0.64	0.46	0.16	7	M-9	不明	N-45° -E	(1.23)	(0.90)	0.42
3	L-9	楕円形	N-60° -E	1.00	0.40	0.06	8	N•O-7	円形	N-45° -E	1.00	(0.70)	0.25
4	M-8	方形	N-46° -E	1.15	(0.40)	0.35	9	欠番					
5	M-8	楕円形	N-47° -E	1.94	1.00	0.25	10	0 欠番					

(4) 土壙

C区において古墳時代・飛鳥時代の土壙は7基 検出された。第92表に検出グリッド、平面形、主 軸方位、規模を示した。

C区第2号土壙 (第178図)

調査区の北側部分で検出した。第1号柱穴列と 第2号柱穴列の中間に位置する。

C区第3号土擴(第178図)

調査区の中央部で検出した。北側に第2号竪穴 住居跡、南側に第7号土壙が位置する。

C区第4号土壙(第178図)

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外に延びる。北側に第3号溝跡、東側に第2号井戸跡、第5号土壙が位置する。

C区第5号土壙(第178図)

調査区の中央部で検出した。北側に第4号土 壙、第2号井戸跡が位置し、南側に第3号井戸 跡、第6号土壙が位置する。

C区第6号土壙(第178図)

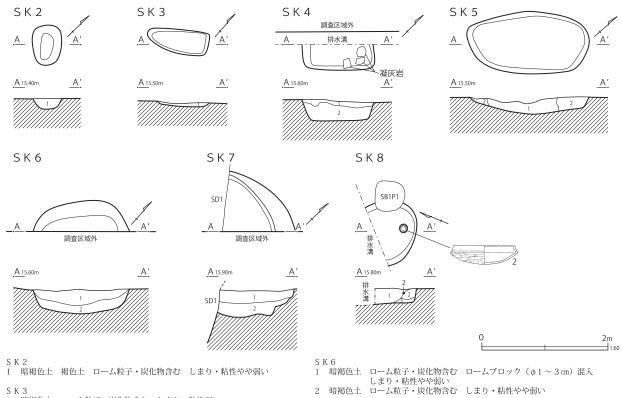
調査区の中央部で検出した。東側は調査区域外に延びる。北側に第5号土壙、西側に第3号井戸跡が位置する。

C区第7号土塘 (第178図)

調査区の中央部で検出した。東側は調査区域外 に延びる。南側は第1号溝跡に壊されている。北 側に第3号土壙が位置する。

C区第8号土塘 (第178図)

調査区の中央部で検出した。西側は調査区域外 に延びる。第1号掘立柱建物跡の柱穴に壊されて いる。東側に第18号竪穴住居跡が位置する。



1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い

S K 4 1 暗

1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い 2 暗褐色土 砂質凝灰岩のブロック・ロームブロック・炭化物含む しまり・粘性やや弱い 角丸方形を呈し覆土に凝灰岩出土

S K 5

横褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む しまり・粘性弱い 褐色土 ロームブロック (φ3~5 cm)・ローム粒子多量 しまりやや強い 粘性あり

SK7 1 暗褐色土 ロームブロック(ϕ 1~3 cm)・ローム粒子やや多量 炭化物混在しまり・粘性弱い 2 暗褐色土 ロームブロック(ϕ 1~3 cm)・ローム粒子含む 炭化物混在しまり・粘性弱い

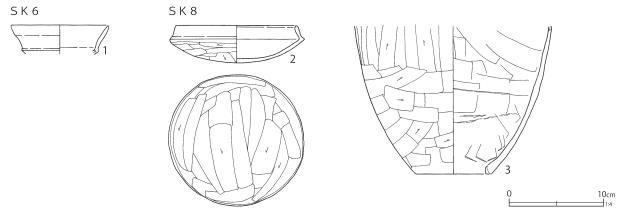
 SK8

 1 黒褐色土
 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い

 2 黒褐色土
 ロームブロック・ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性弱い

 3 暗褐色土
 ロームブロック・ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い

第178図 C区土壙



第179図 C区第6·8号土壙出土遺物

第93表 C区土壙出土遺物観察表(第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(10.2)	[3.1]	_	СН	5	普通	にぶい黄褐	SK 6 蓋模倣坏	
2	土師器	坏	12.6	4.0	_	AHI	100	良好	にぶい褐	SK 8 No. 1 身模倣坏 重ね焼き痕あり	
3	土師器	甑	_	[15.7]	8.0	AGI	20	普通	にぶい褐	SK 8	

3 奈良時代・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

C区において奈良時代・平安時代の竪穴住居跡は2軒検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、平面形、規模、覆土の状況、付帯施設、出土遺物について記す。

C区第15号竪穴住居跡(第180図)

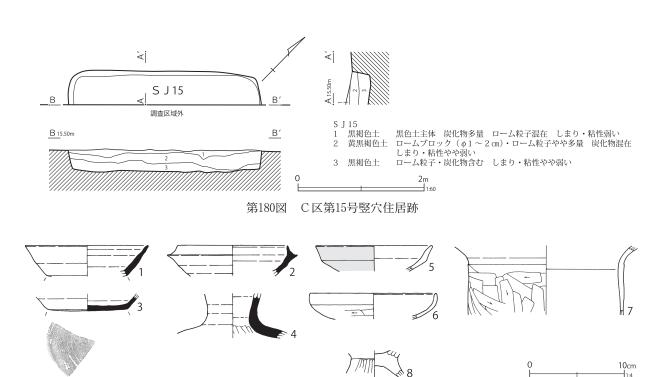
C区の第15号竪穴住居跡は、S-2グリッド、 調査区の南端部に位置する。

他の遺構との重複関係はなく、竪穴住居跡の 西壁と北西コーナー部及び南西コーナー部壁は 確認できたものの、北壁、東壁、南壁は調査区 域外のため確認できなかった。平面形は不明である。残存規模は長軸長3.06m、短軸長0.52m、深さ0.33mである。長軸方位はN-45°-Eを指す。

覆土は、第1層が黒褐色土、第2層がロームブロックの多い黄褐色土、第3層が黒褐色土で、第2層が厚く堆積している点で古墳時代の竪穴住居跡の覆土とは異なっていた。

カマド、貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。また、壁溝は設けられていない。

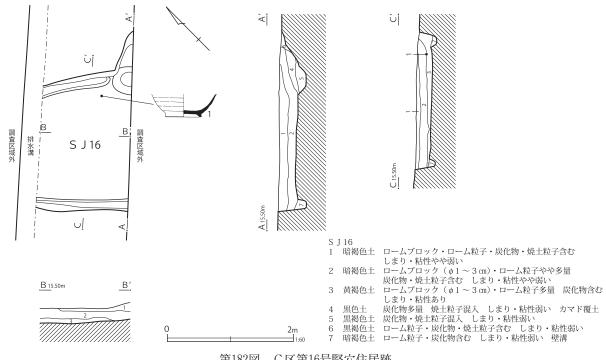
出土遺物は第181図1・3が須恵器坏である。 底部回転ヘラケズリを施す。胎土に片岩粒を含む



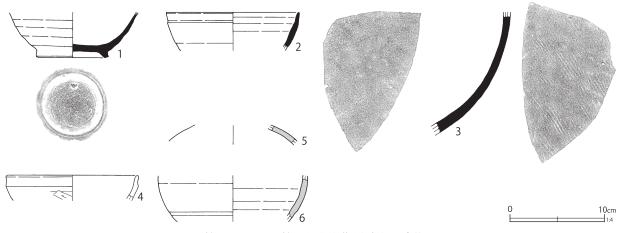
第181図 C区第15号竪穴住居跡出土遺物

第94表 C区第15号竪穴住居跡出土遺物観察表(第181図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.0)	[3.3]	(8.5)	G	10	普通	灰白	末野窯産 底部回転ヘラケズリ 3と同一か	
2	須恵器	坏	(11.7)	[3.2]	_	IK	5	良好	灰	自然釉	
3	須恵器	坏	_	[1.8]	(8.5)	G	10	普通	灰白	末野窯産 1と同一か 底部回転ヘラケ ズリ	
4	須恵器	壺	_	[4.7]	_	I	5	良好	浅黄橙		
5	土師器	坏	(12.3)	[2.7]	_	CIK	10	普通	赤褐	b 蓋模倣坏 外面赤彩	
6	土師器	坏	(13.3)	[2.7]	_	ACEI	5	普通	にぶい黄褐	a 北武蔵型坏	
7	土師器	甕	_	[7.1]	_	ACI	20	普通	にぶい黄褐		
8	土師器	台付甕	_	[2.8]	_	GI	5	普通	明赤褐		



第182図 C区第16号竪穴住居跡



第183図 C区第16号竪穴住居跡出土遺物

第95表 C区第16号竪穴住居跡出土遺物観察表(第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付坏	_	[4.7]	7.7	EIK	70	普通	灰	No.1 末野窯産	
2	須恵器	坏	(14.0)	[4.0]	_	Ι	5	普通	灰	a 末野窯産 外面自然釉	
3	須恵器	甕	_	[13.1]	_	IJ	5	普通	灰	c 南比企窯産 外面平行叩き 内面無 文当て具	
4	土師器	坏	(13.8)	[2.7]	_	AI	5	普通	明褐	a·b	
5	灰釉陶器	瓶	_	[2.0]	_	K	5	良好	灰白	b 内面から破面に付着物 6と同一か	
6	灰釉陶器	瓶	_	[4.7]	_	K	5	良好	灰白	b 5と同一か	

ことから末野窯産である。6が北武蔵型の土師器 坏である。口縁部が上方に立ち上がり、体部丸底 で器高がやや浅い。推定口径13.3cmとやや大振り である。時期は8世紀前半と推定される。2・

4・5は本竪穴住居跡から出土したが、混入品であると考えられる。

C区第16号竪穴住居跡(第182図)

C区の第16号竪穴住居跡は、S-2グリッド、 調査区の南端部に位置する。

他の遺構との重複関係はなく、竪穴住居跡の北壁と南壁は確認できたものの、東壁、西壁は調査区域外のため確認できなかった。平面形は方形である。残存規模は長軸長2.21m、短軸長1.46m、深さ0.30mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

覆土は、第1・2層が暗褐色土、第3層が黄褐色土で、いずれの覆土もロームブロックを多く含む点で古墳時代の竪穴住居跡の覆土とは異なっていた。

カマドは北壁に設けられ、カマド西側半分が検出された。東側は調査区域外に延びている。カマドの規模は残存する焚口幅0.29m、煙道部長さ1.10mである。カマド袖は残存していなかった。壁溝は北壁及び南壁で検出され、規模は幅0.15m~0.23m、深さ0.09m~0.12mである。貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。

出土遺物は第183図1~6で、1は末野窯産の 須恵器高台付坏、2は末野窯産の須恵器坏、3は 白色針状物質を胎土に含むことから、南比企窯産 の須恵器甕である。4は土師器坏、5・6は灰釉 陶器の長頸瓶である。時期は9世紀前半である。

(2) 掘立柱建物跡

C区において奈良時代・平安時代の掘立柱建物 跡は1棟検出された。以下、検出グリッド、重複 遺構、規模、覆土の状況、出土遺物について記す。

C区第1号掘立柱建物跡 (第184図)

C区の第1号掘立柱建物跡は、N・O-7グリッド、調査区の中央部に位置する。また、南側約50mの位置に本建物跡と同時期と考えられる竪穴住居跡が2軒存在している。

他の遺構との重複関係は、第18号竪穴住居跡、

第7号井戸跡、第8号土壙を壊している。また、 柱列は西側の調査区域外に延びていると考えられる。建物形態は三間×三間以上の総柱建物跡 と推測される。規模は桁行4.69m、残存する梁行 1.44mである。南北棟の建物跡で主軸方位はN-51°-Eを指す。

柱穴は8基検出した。P1~P4の柱間は1.50m、P1とP5の柱間は1.40mである。8基の柱穴の内、P4、P6~8で柱痕を確認した。各柱穴の規模は、P1が最大径0.49m、深さ0.37m。P2が最大径0.63m、深さ0.37m。P3が最大径0.65m、深さ0.32m。P4が最大径0.67m、深さ0.31m。P5が最大径0.55m、深さ0.24m。P6が最大径0.80m、深さ0.59m。P7が最大径0.62m、深さ0.40m。P8が最大径0.63m、深さ0.31mである。

出土遺物は第185図1の須恵器坏である。底部回転ヘラケズリを施す。胎土に片岩粒を含むことから末野窯産である。5は「く」の字状口縁甕である。時期は8世紀前半と推定される。2~4は本竪穴住居跡から出土したが、混入品であると考えられる。

(3) 柱穴列

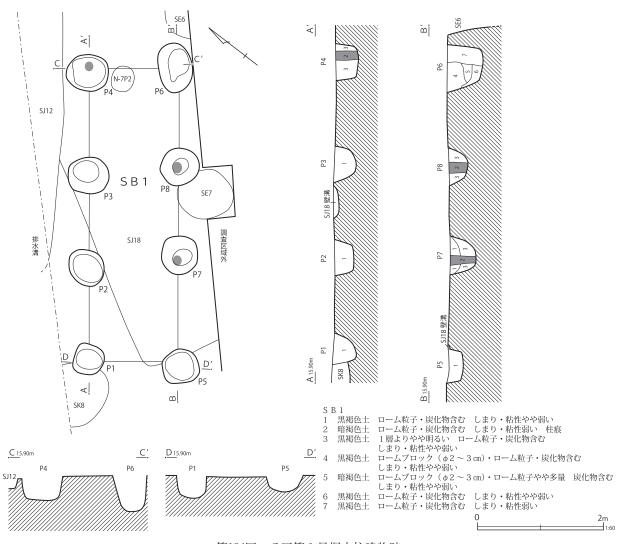
C区において奈良時代・平安時代の柱穴列は2 条検出された。以下、検出グリッド、重複遺構、 規模、覆土の状況、出土遺物について記す。

C区第1号柱穴列(第186図)

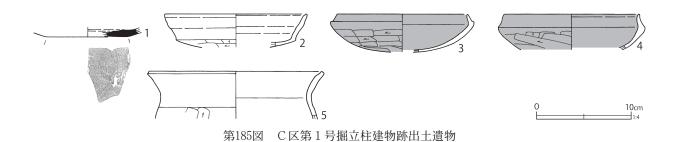
C区の第1号柱穴列は、L-9・10グリッド、調査区の中央部やや南側に位置する。本柱穴列は第1号柱穴列と第2号柱穴列の2条からなる。両柱穴列はほぼ並行していて、柱穴列の間隔は1.30mである。

他の遺構との重複関係はみられない。北側及び南側には、直線的な並びは認められないが、同規模のピットが検出されている。規模は全長6.15m、主軸方位はN-41°-Eを指す。

柱穴は5基検出された。P1~5の柱間は全

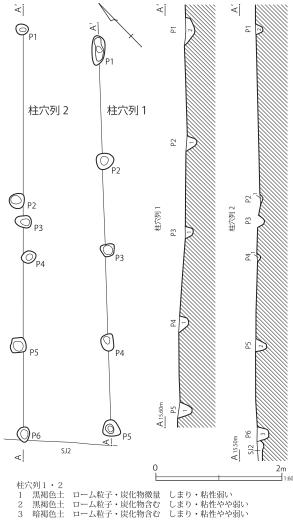


第184図 C区第1号掘立柱建物跡



第96表 C区第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第185図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調		備考		図版
1	須恵器	坏	_	[1.0]	(8.0)	Ι	10	良好	灰	末野窯産 紫灰	底部回転ヘラケズリ	内面暗	
2	土師器	坏	(15.0)	[3.5]	-	CHI	20	良好	橙	蓋模倣坏			
3	土師器	坏	(13.8)	[4.0]	-	ACI	30	普通	橙	身模倣坏	内外面黑色処理		
4	土師器	坏	(14.2)	[3.7]	-	Ι	20	普通	黒褐	身模倣坏	内外面黑色処理		
5	土師器	甕	(18.3)	[5.0]	_	AHI	5	普通	浅黄橙				



議 ローム粒子・炭化物含む しまり・粘性やや弱い 第186図 C区第1・2号柱穴列

長6.15m、P1とP2の柱間は1.80m、P2とP3の柱間は1.45m、P3とP4の柱間は1.45m、P4とP5の柱間は1.45mである。各柱穴の規模は、P1が最大径0.47m、深さ0.15m。P2が最大径0.27m、深さ0.16m。P3が最大径0.23m、深さ0.14m。P4が最大径0.27m、深さ0.17m。P5が最大径0.30m、深さ0.32mである。出土遺物は検出されなかった。

C区第2号柱穴列(第186図)

C区の第2号柱穴列は、K-10、L-9・10グ リッド、調査区の中央部やや南側に位置する。本 柱穴列は第1号柱穴列の西側に並行して検出され た。第1号柱穴列との間隔は1.30mである。

他の遺構との重複関係はみられない。北側及 び南側には、直線的な並びは認められないが、 同規模のピットが検出されている。規模は全長 6.60m、主軸方位はN-44°-Eを指す。

柱穴は6基検出されたが柱間間隔は不規則である。P1~6の柱間は全長6.50m、P1とP2の柱間は2.70m、P2とP3の柱間は0.35m、P3とP4の柱間は0.55m、P4とP5の柱間は1.45mである。各柱穴の規模は、P1が最大径0.19m、深さ0.08m。P2が最大径0.24m、深さ0.05m。P3が最大径0.26m、深さ0.18m。P4が最大径0.24m、深さ0.15m、P6が最大径0.24m、深さ0.16mである。出土遺物は検出されなかった。

(4) 溝跡

C区において奈良時代・平安時代に位置づけられる溝跡は3条検出された。第97表に検出グリッド、主軸方位、規模を示した。

C区第1号溝跡(第187図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側はいずれも調査区域外に延びる。第7号土壙を壊している。覆土の第1層にB軽石が含まれていることから、この段階には機能を停止していたと考えられる。

C区第4号溝跡(第187図)

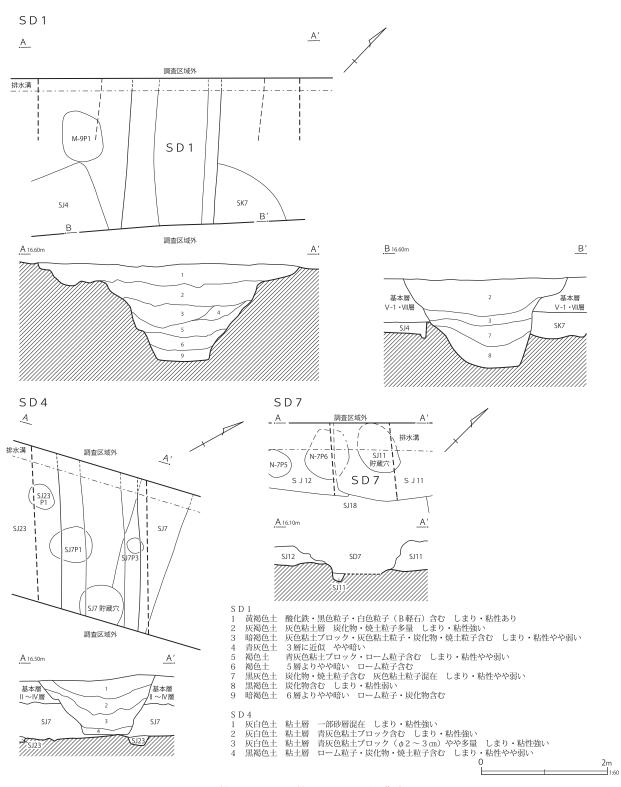
調査区の中央部で検出した。北西から南東方向に走り、両側は調査区域外に延びる。第7号竪穴住居跡を壊している。覆土の第1~3層は中近世の洪水堆積土による灰白色土とみられる。

C区第7号溝跡(第187図)

調査区の中央部で検出した。北西から南東方向 に走り、両側は調査区域外に延びる。第11・12号 竪穴住居跡を壊している。

(5) ピット・グリッド検出面出土遺物

C区においてグリッドピットは、77基検出された。分布状況は第152・153図に示した。第98表に検出グリッド、規模を示した。遺物は図示できるものがない。グリッド検出面及び調査区域内から

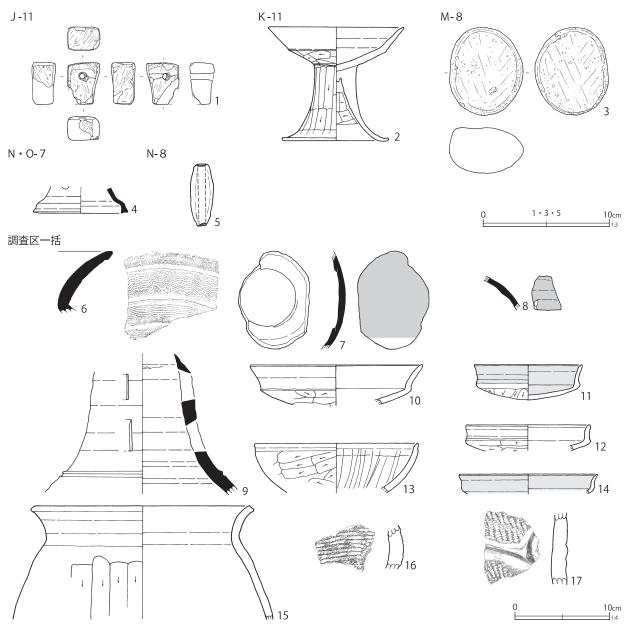


第187図 C区第1・4・7号溝跡

第97表 C区溝跡一覧表

No.	グリッド	方位	走行方位	長さ(m)	幅(m)	深さ	(m)	重複遺構
INO.	/ J J J P	刀址	走行力位	女ら(III)	最大	最小	最大	最小	里 後退 博
1	L-9 M-8·9	N-40° -W	_	2.15	4.15	2.55	1.50	1.40	SJ 4 SK 7 M-9 P 1
4	P- 5	N-60° -W	_	2.15	1.85	_	0.85	_	SJ 7 SJ23
7	N-7	N-50° -W	_	(1.25)	1.70	_	0.50	_	SJ11 SJ12 SJ18 N-7 P 6

出土した主な遺物は、第188図に図示した。 4 は 湖西窯産の須恵器瓶の脚部である。 9 は北関東系 の脚付き長頸瓶の脚部で三段三方透かしである。 16・17は縄文土器の破片である。



第188図 C区グリッド・調査区一括出土遺物

第98表 C区ピット計測表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
I-12	P 1	35	26	20	J-12	P 1	30	30	8	K-10	P 7	42	35	42
	P 2	28	22	12		P 2	42	37	12		P 8	32	(18)	41
J-11	P 1	26	23	5	K-10	P 1	62	53	40		P 9	58	30	46
	P 2	65	57	70		P 2		欠番			P10	22	18	20
	Р3	39	[35]	60		Р3	44	36	6		P11	(18)	17	17
	P 4	70	60	6		P 4	25	26	4		P12	35	32	33
	P 5	43	43	7		P 5		欠番			P13		欠番	
	P 6	86	60	83		P 6	44	38	27		P14	31	25	4

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
K-10	P 15	21	20	12	L-10	P 1		欠番		N-7	P 4	47	37	30
K-11	P 1	52	41	37		P 2		欠番			P 5	45	40	20
	P 2	55	42	65		Р3		欠番			P 6	80	65	32
	Р3	37	29	45		P 4		欠番		0-6	P 1	33	29	50
	P 4	33	30	17		P 5		欠番			P 2	[30]	[30]	35
	P 5	37	27	41		P 6		欠番		0-7	P 1	35	30	34
	P 6	49	33	25		P 7		欠番			P 2	22	20	23
	P 7		欠番			P 8	24	21	4	P- 5	P 1	54	42	22
	P 8	34	29	17		P 9	41	33	12	Q-4	P 1		欠番	
L-9	P 1		欠番			P10	35	20	20		P 2	43	40	40
	P 2	24	19	13	M-8	P 1	50	48	22		Р3	40	[35]	20
	Р3		欠番			P 2	50	35	15		P 4	59	45	15
	P 4		欠番			Р3	35	25	50		P 5	42	40	13
	P 5	42	30	18		P 4	45	(12)	20		P 6	45	43	43
	P 6	42	26	18		P 5	58	45	9		P 7	[40]	[40]	[33]
	P 7	40	34	33		P 6	35	32	50	Q-5	P 1	45	43	21
	P 8	47	33	23		P 7	25	20	30	R-3	P 1	47	35	36
	P 9	45	36	2		P 8	35	35	75		P 2	[38]	33	48
	P10	31	(17)	7		P 9	48	37	67		Р3	[29]	28	12
	P11	34	25	9		P10	[90]	83	75		P 4	24	20	12
	P 12	33	30	18	M-9	P 1	80	63	17		P 5	31	31	25
	P13	40	35	30	N-7	P 1	42	38	20	R-4	P 1	37	36	34
	P14	欠番			P 2	43	40	70						
	P 15		欠番			Р3	37	30	28					

第99表 C区グリッド出土遺物観察表 (第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考
1	石製品	砥石	長さ3.3	幅2.6	厚さ1.9	重さ21.	.8			J-11 流紋岩 堤砥 使用面6面
2	土師器	高坏	(14.3)	12.0	(11.0)	ACHI	70	普通	橙	K-11No. 1
3	石製品	磨石	長さ7.0	幅5.9	厚さ3.8	重さ70.	.3			M-8 P 6 軽石か
4	須恵器	高坏	_	[2.7]	(10.0)	I	5	良好	灰	N・O-7 湖西窯産 円型三方透かし孔 径0.7
5	土製品	土錘	長さ4.9 幅1.8 孔径0.6 重さ16.52		GI	100	普通	黒褐	N-8	
6	須恵器	甕		[6.6]	_	I	5	普通	灰	
7	須恵器	フラスコ瓶	_	[10.2]	_	K	5	良好	褐灰	湖西窯産 自然釉
8	須恵器	フラスコ瓶	_	[3.5]	_	K	5	良好	褐灰	湖西窯産 自然釉
9	須恵器	脚付壺	_	[14.7]	_	EI	10	普通	褐灰	北関東系 三段三方透かし
10	土師器	坏	(11.2)	3.7	_	DIL	50	普通	にぶい赤褐	蓋模倣坏
11	土師器	坏	(11.2)	3.7	_	DIL	50	普通	にぶい赤褐	礫 内外面赤彩
12	土師器	坏	(13.0)	[2.8]	_	CI	5	普通	にぶい黄褐	表採
13	土師器	坏	(17.1)	[5.3]	_	CI	20	普通	橙	暗文坏
14	土師器	坏	(14.3)	[2.1]	_	I	5	普通	にぶい黄褐	比企型坏 内外面赤彩
15	土師器	甕	(22.4)	[12.0]	_	CG	5	普通	にぶい黄褐	
16	縄文土器		_	[4.7]	_	CI	5	普通	にぶい黄褐	
17	縄文土器		_	[7.7]	_	ACI	5	普通	にぶい黄褐	

報告書抄録

ふりがな	きたななナ	シけいせき											
	きたおおたけいせき												
書 名	北大竹遺跡												
副 書 名	行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告												
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書												
シリーズ番号	第 477 集												
編著者名	渡邊 理伊知 赤熊 浩一												
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団												
所 在 地	〒 369-0108 埼玉県熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1 TEL 0493-39-3955												
発行年月日													
新収遺跡	がな 一		市町	コード		北緯。,,,,,		東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因		
*** *** *** ** ** *** ** ** ** ** ** **	th t		112			36° 08′ 48″		139° 29′ 37″	20191015 ~ 20201031	5,280	工業団地用地開発		
所収遺跡	種別	主な時	な時代		主な遺構			主な遺物	特記事項				
北大竹遺跡(第18次)	集落跡	古墳時代 ・ 飛鳥時代		井戸溝上土造物	竪穴住居跡 57 軒 井戸跡 32 基 溝跡 12 条 土壙 21 基 遺物集中 3 箇所		須恵器 土師器 石製品 子持勾玉 石製模造品 臼玉 玉類 金属製品		45 点を数える子持勾玉や石製模造品、臼玉、残存率の高い製を始めとした須恵器や大型高好など大量の土師器類、単鳳環頭大刀柄頭、海獣葡萄鏡、大量の鉄鏃や鉄製模造品、瑪瑙や琥珀、碧玉製の玉類などの遺物が出土している。				
		奈良時代 ・ 平安時代		竪穴住居跡 14 軒 掘立柱建物跡 2 棟 柱穴列 2 条 井戸跡 6 基 溝跡 9 条 土壙 5 基 鍛冶関連遺構 1 基 旧河川跡 1 条			須恵器 土師器 石製品 金属製品 瓦						
要約													

北大竹遺跡は、埼玉県行田市藤原町・若小玉に所在する。現在はほぼ平坦な地形で加須低地に属するが、北に流れる利根川による河川堆積と関東造盆地運動によって形成された埋没台地となっている。

本事業に伴う発掘調査によって、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての祭祀関連とみられる遺物が集中した地点が、3箇所確認された。遅くとも6世紀中頃から祭祀行為が開始された可能性があるが、6世紀後半にピークを迎える。主に甕を中心とした須恵器と、大量の土師器や鉄製品とともに、多数の子持勾玉を用いる点が大きな特徴といえる。なお、これらとともに単鳳環頭大刀が出土している点も特徴として挙げられる。

7世紀代にも継続して祭祀行為が執り行われている。遺物量がやや減少する点や土器類の器種組成に変化がみられるが、子持勾玉と須恵器甕を用いる点は、一貫している。このことから、本遺跡で執り行われた祭祀は子持勾玉と須恵器甕が重視されていたことがうかがえる。

周辺に展開する若小玉古墳群において前方後円墳が造営される時期と重なり、7世紀代に八幡山古墳や地蔵塚古墳が造営される頃まで、継続することから、若小玉古墳群との関連性が想定される。埼玉古墳群の将軍山古墳や鉄砲山古墳に副葬された遺物と類似した遺物が出土していることから、埼玉古墳群との関連性も想定される。

また、これらの遺物と同じ古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が検出された。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 477 集

北大竹遺跡

行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業 埋蔵文化財発掘調査

(第1分冊)

令和4年3月11日 印刷 令和4年3月23日 発行

発行/公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 〒 369-0108 熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1 0493 (39) 3955

https://www.saimaibun.or.jp 印刷/朝日印刷工業株式会社